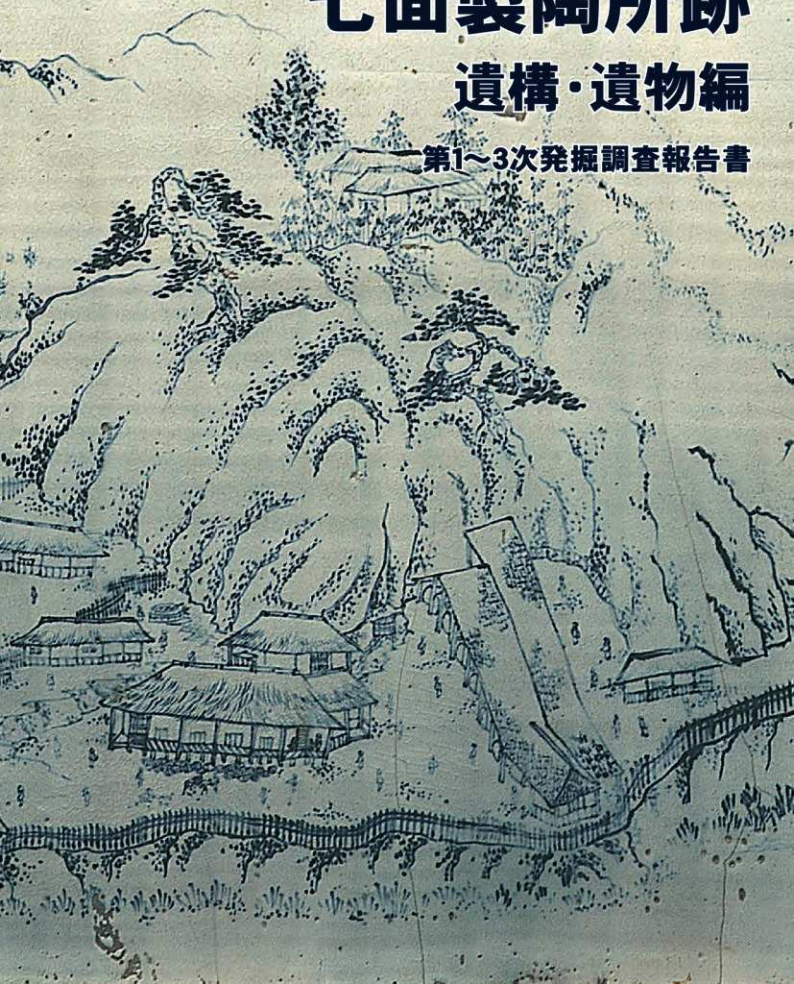


水戸市埋蔵文化財調査報告 第100集

# 七面製陶所跡

## 遺構・遺物編

第1～3次発掘調査報告書



# 七面製陶所跡

## 遺構・遺物編

— 第1～3次発掘調査報告書 —



2017

水戸市教育委員会



## 序

水戸市のほぼ中央に位置する借楽園及び千波湖一帯は、本市のシンボリックな空間であり、市街地における豊かな自然景観の軸を形成しています。

天保13(1842)年、水戸藩第9代藩主徳川斉昭は、この自然景観を借景として大胆に取り込み、借楽園を開設しました。斉昭は藩校・弘道館を修学の間、庭園・借楽園を修学の休養の場として位置づけました。こうした斉昭の独創的な教育構想は、園内に建つ借楽園石碑に刻まれた「一張一弛」（緊張とリラックス）という言葉に凝集されています。

斉昭の独創性は教育分野のみにとどまりませんでした。斉昭は一連の藩政改革の中で、教育、軍事、宗教、農業、産業等、多方面においてその才覚を遺憾なく発揮していきます。

そして斉昭が実施した産業改革の中でも特に著名な業績が、藩独自の製陶事業でした。

七面製陶所は、天保9(1838)年に水戸城郊外の神崎七面堂の南側に創設された窯及び陶器販売所です。この時期、すでに町田窯（常陸太田市）や小砂窯（栃木県那珂川町）等において相当の製陶技術を得ていたことから、斉昭は製陶所と販売所を併設する形で七面製陶所を開設し、陶器による殖産興業の一大センターとしたのです。しかしながら、幕末維新期に巻き起こった藩内外の動乱により七面製陶所も廃れていき、近代化の中で実態はベールに包まれた状態になってしまいました。

こうした中、本市は七面製陶所の実態とそこで焼成された焼き物である「七面焼」を検証するため、平成17～19年度にかけて、七面製陶所跡の発掘調査を実施いたしました。調査の結果、数万点に及ぶ七面焼が出土するとともに、窯跡の痕跡も発見され、大きな話題を呼んだところです。特に、多種多様な出土品は、斉昭が並々ならぬ熱意で取り組んだ製陶事業の遺品そのものであり、高い資料的価値を有するものと考えられます。

本書は、このような七面製陶所跡の第1次～第3次発掘調査成果のうち、遺構・遺物の事実記載についてまとめたもので、七面製陶所跡の初の発掘調査報告書となります。本市教育委員会といたしましては、発掘調査によって得た成果を踏まえ、本市の貴重な歴史的資源である七面製陶所跡の遺構・遺物の価値を、より多くの市民の皆様にご伝えるとともに、郷土教育や展示等を通じて、公開活用を図ってまいりたいと考えております。

調査の実現にあたっては、水戸藩の陶芸を調査・研究されていた陶芸家の伊藤瓢堂先生をはじめ、七面焼の復興に向けて取り組まれている関係者の方々の熱意ある御要望や多大な御協力なくしてはなし得ませんでした。関係各位に衷心より感謝の意を表します。同時に、本書の刊行を契機として、先人の偉業を再発見し、市民の皆様が文化財の大切さと郷土の歴史の豊かさに御理解を寄せていただくことを期待し、序といたします。

平成29年9月

水戸市教育委員会教育長 本多清峰



## 例 言

- 1 本書は、周知の埋蔵文化財包蔵地「七面製陶所跡」の保存活用を目的として、水戸市教育委員会が国庫補助金と県費補助金を受けて実施した第1・2・3次調査のうち、遺構・遺物の事実記載についてまとめた発掘調査報告書である。なお、範囲確認調査の総括編（補遺を含む。）は、別途刊行する。
- 2 調査は水戸市教育委員会が主体となって実施した。出土品の整理事業は埋蔵文化財センターで行った。
- 3 遺跡の名称、所在地は以下のとおりである。  
遺跡名 七面製陶所跡（遺跡番号：201-287）  
所在地 茨城県水戸市常磐町1丁目6015-4・5
- 5 調査面積、調査期間、調査組織、調査・整理参加者は第1章第2節を参照されたい。
- 6 本書の編集及び執筆は、関口慶久・渥美賢吾・米川暢敬が担当し、関口が統括した。執筆分担はそれぞれ文末に明記した。
- 7 本書に関わる資料は、水戸市教育委員会が保管している。
- 8 発掘調査から本書刊行に至るまで、下記の方々・諸機関より御指導・御協力を賜った。記して謝意を表したい（敬称略・順不同）。

【個人】伊藤瓢堂、川崎純徳、河野一也、瓦吹 堅、小坪のり子、田口米蔵、堀内秀樹、三井 猛、水野順敏

【機関】文化庁文化財部記念物課、茨城県教育庁文化課、日本窯業史研究所、七面会、町田焼研究会、江戸遺跡研究会

## 凡 例

- 1 測量平面図及び遺構平面図は、国家標準直角座標IX系に基づく座標値を示し、方位は真北を基準としている。
- 2 遺構平面図や断面図、遺物実測図や遺物写真図版の縮尺については各挿図・図版にスケール等で示した。また断面図や土層堆積図の標高についても、その都度図中に示してある。
- 3 色調表現は、新版標準土色帳（農林水産技術会事務局監修 2000年版）に従った。
- 4 引用・参考文献は、文末に一括して示した。

# 目 次

序

例言・凡例・目次

<b>第I章 調査の経緯と経過</b> .....	<b>1</b>
<b>第1節 調査に至る経緯</b> .....	1
<b>第2節 調査の経過と方法</b> .....	3
<b>第II章 遺跡の立地と環境</b> .....	<b>8</b>
<b>第1節 地理的環境</b> .....	8
第1項 市域の概観 (8) / 第2項 市域の地形区分 (8) / 第3項 台地の地質 (8) / 第4項 遺跡の周辺 (11)	
<b>第2節 歴史的環境</b> .....	11
第1項 先土器時代～縄文時代草創期 (11) / 第2項 縄文時代 (11) / 第3項 弥生時代 (12) / 第4項 古墳時代 (12) / 第5項 奈良・平安時代 (13) / 第6項 中世・近世 (13)	
<b>第3節 七面製陶所における既往の調査研究</b> .....	14
第1項 七面製陶所の沿革 (14) / 第2項 七面製陶所及び七面焼研究の歩み (17)	
<b>第III章 発見された遺構</b> .....	<b>20</b>
<b>第1節 概要</b> .....	20
<b>第2節 第1次調査—A・B地点の調査—</b> .....	20
第1項 調査区1の調査 (20) / 第2項 調査区2の調査 (25) / 第3項 調査区3の調査 (26) / 第4項 調査区4の調査 (26) / 第5項 調査区5の調査 (26) / 第6項 調査区6の調査 (25) / 第7項 調査区7の調査 (25) / 第8項 調査区8の調査 (27) / 第9項 調査区9の調査 (27) / 第10項 調査区10の調査 (27) / 第11項 調査区11の調査 (27) / 第12項 調査区12の調査 (27) / 第13項 調査区13の調査 (28) / 第14項 調査区14の調査 (28) / 第15項 調査区15の調査 (28)	
<b>第3節 第2・3次調査—C・D地点の調査—</b> .....	29
第1項 調査区16の調査 (29) / 第2項 調査区20の調査 (30) / 第3項 調査区21の調査 (37)	
<b>第IV章 出土した遺物</b> .....	<b>39</b>
<b>第1節 概要</b> .....	39
<b>第2節 第1次調査(A・B地点)出土の遺物</b> .....	40
第1項 調査区1出土の遺物 (40) / 第2項 調査区2出土の遺物 (59) / 第3項 調査区4出土の遺物 (59) / 第4項 調査区6出土の遺物 (59) / 第5項 調査区9出土の遺物 (59) / 第6項 調査区13出土の遺物 (63) / 第7項 調査区14出土の遺物 (65) / 第8項 調査区15出土の遺物 (65)	

第3節 第2・3次調査(C・D地点)出土の遺物 .....(関口) 72

第1項 調査区16・20出土の遺物(72) / 第2項 調査区21出土の遺物(107)

おわりに .....(関口) 132

引用・参考文献一覧 .....	135
写真図版 .....	137
報告書抄録 .....	197

## 図版目次

挿図写真 七面製陶所古写真 .....	15	第36図 調査区13出土遺物実測図(2) .....	62
第1図 好文亭四季模様之図 .....	1	第37図 調査区14・15出土遺物実測図 .....	64
第2図 『庶物會要』・窯場之図 .....	2	第38図 調査区16出土遺物実測図(1) .....	73
第3図 調査地点の位置 .....	2	第39図 調査区16出土遺物実測図(2) .....	74
第4図 地形測量図と調査区の位置 .....	4	第40図 調査区16出土遺物実測図(3) .....	76
第5図 遺跡の位置 .....	9	第41図 調査区16出土遺物実測図(4) .....	78
第6図 モース・コレクションの七面焼 .....	18	第42図 調査区16出土遺物実測図(5) .....	80
第7図 調査区1～15平面図 .....	21	第43図 調査区16出土遺物実測図(6) .....	82
第8図 調査区1～6・11・15平面図 .....	22	第44図 調査区20出土遺物実測図(1) .....	83
第9図 1号遺構(調査区1南区)土層断面図 ..	24	第45図 調査区20出土遺物実測図(2) .....	84
第10図 調査区16・20・21配置図 .....	29	第46図 調査区20出土遺物実測図(3) .....	86
第11図 調査区16平面図 .....	30	第47図 調査区20出土遺物実測図(4) .....	88
第12図 調査区20平面図 .....	31	第48図 調査区20出土遺物実測図(5) .....	90
第13図 調査区20土層断面図(1) .....	32	第49図 調査区20出土遺物実測図(6) .....	92
第14図 調査区20土層断面図(2) .....	33	第50図 調査区20出土遺物実測図(7) .....	93
第15図 調査区20エレベーション図 .....	34	第51図 調査区20出土遺物実測図(8) .....	94
第16図 調査区21平面図・土層断面図(1) ..	36	第52図 調査区20出土遺物実測図(9) .....	95
第17図 調査区21土層断面図(2) .....	38	第53図 調査区20出土遺物実測図(10) .....	96
第18図 調査区1出土遺物実測図(1) .....	41	第54図 調査区20出土遺物実測図(11) .....	97
第19図 調査区1出土遺物実測図(2) .....	42	第55図 調査区20出土遺物実測図(12) .....	98
第20図 調査区1出土遺物実測図(3) .....	44	第56図 調査区20出土遺物実測図(13) .....	99
第21図 調査区1出土遺物実測図(4) .....	45	第57図 調査区20出土遺物実測図(14) .....	100
第22図 調査区1出土遺物実測図(5) .....	46	第58図 調査区20出土遺物実測図(15) .....	101
第23図 調査区1出土遺物実測図(6) .....	47	第59図 調査区20出土遺物実測図(16) .....	102
第24図 調査区1出土遺物実測図(7) .....	48	第60図 調査区20出土遺物実測図(17) .....	103
第25図 調査区1出土遺物実測図(8) .....	49	第61図 調査区20出土遺物実測図(18) .....	104
第26図 調査区1出土遺物実測図(9) .....	50	第62図 調査区20出土遺物実測図(19) .....	105
第27図 調査区1出土遺物実測図(10) .....	51	第63図 調査区20出土遺物実測図(20) .....	106
第28図 調査区1出土遺物実測図(11) .....	52	第64図 調査区20出土遺物実測図(21) .....	108
第29図 調査区1出土遺物実測図(12) .....	53	第65図 調査区21出土遺物実測図(1) .....	109
第30図 調査区1出土遺物実測図(13) .....	54	第66図 調査区21出土遺物実測図(2) .....	110
第31図 調査区1出土遺物実測図(14) .....	55	第67図 調査区21出土遺物実測図(3) .....	112
第32図 調査区1出土遺物実測図(15) .....	56	第68図 調査区21出土遺物実測図(4) .....	113
第33図 調査区2・4出土遺物実測図 .....	58	第69図 調査区21出土遺物実測図(5) .....	114
第34図 調査区6・9出土遺物実測図 .....	60	第70図 調査区21出土遺物実測図(6) .....	115
第35図 調査区13出土遺物実測図(1) .....	61	第71図 調査区21出土遺物実測図(7) .....	116
		第72図 調査区21出土遺物実測図(8) .....	117



## 表目次

第1表	周辺の遺跡一覧	10	第5表	C・D地点出土遺物観察表 (陶磁器・土器・窯道具類)	118
第2表	七面製陶所関連年表	16	第6表	C・D地点出土遺物観察表 (土製品・型・窯体・煉瓦・石製品・ 金属製品・瓦)	131
第3表	A・B地点出土遺物観察表 (陶磁器・土器・窯道具類)	65			
第4表	A・B地点出土遺物観察表 (窯体・煉瓦・石製品・金属製品)	71			

## 写真図版目次

写真図版 1	遺跡の現況	138	写真図版 31	調査区 16 出土遺物写真 (1)	168
写真図版 2	調査区及び遺構写真 (1)	139	写真図版 32	調査区 16 出土遺物写真 (2)	169
写真図版 3	調査区及び遺構写真 (2)	140	写真図版 33	調査区 16 出土遺物写真 (3)	170
写真図版 4	調査区及び遺構写真 (3)	141	写真図版 34	調査区 16 出土遺物写真 (4)	171
写真図版 5	調査区及び遺構写真 (4)	142	写真図版 35	調査区 16 出土遺物写真 (5)	172
写真図版 6	調査区及び遺構写真 (5)	143	写真図版 36	調査区 20 出土遺物写真 (1)	173
写真図版 7	調査区及び遺構写真 (6)	144	写真図版 37	調査区 20 出土遺物写真 (2)	174
写真図版 8	調査区及び遺構写真 (7)	145	写真図版 38	調査区 20 出土遺物写真 (3)	175
写真図版 9	調査区及び遺構写真 (8)	146	写真図版 39	調査区 20 出土遺物写真 (4)	176
写真図版 10	調査区及び遺構写真 (9)	147	写真図版 40	調査区 20 出土遺物写真 (5)	177
写真図版 11	調査区及び遺構写真 (10)	148	写真図版 41	調査区 20 出土遺物写真 (6)	178
写真図版 12	調査区及び遺構写真 (11)	149	写真図版 42	調査区 20 出土遺物写真 (7)	179
写真図版 13	調査区 1 出土遺物写真 (1)	150	写真図版 43	調査区 20 出土遺物写真 (8)	180
写真図版 14	調査区 1 出土遺物写真 (2)	151	写真図版 44	調査区 20 出土遺物写真 (9)	181
写真図版 15	調査区 1 出土遺物写真 (3)	152	写真図版 45	調査区 20 出土遺物写真 (10)	182
写真図版 16	調査区 1 出土遺物写真 (4)	153	写真図版 46	調査区 20 出土遺物写真 (11)	183
写真図版 17	調査区 1 出土遺物写真 (5)	154	写真図版 47	調査区 20 出土遺物写真 (12)	184
写真図版 18	調査区 1 出土遺物写真 (6)	155	写真図版 48	調査区 20 出土遺物写真 (13)	185
写真図版 19	調査区 1 出土遺物写真 (7)	156	写真図版 49	調査区 20 出土遺物写真 (14)	186
写真図版 20	調査区 1 出土遺物写真 (8)	157	写真図版 50	調査区 20 出土遺物写真 (15)	187
写真図版 21	調査区 1 出土遺物写真 (9)	158	写真図版 51	調査区 20 出土遺物写真 (16)	188
写真図版 22	調査区 1 出土遺物写真 (10)	159	写真図版 52	調査区 20 出土遺物写真 (17)	189
写真図版 23	調査区 1 出土遺物写真 (11)	160	写真図版 53	調査区 20 出土遺物写真 (18)	190
写真図版 24	調査区 1 出土遺物写真 (12)	161	写真図版 54	調査区 20 出土遺物写真 (19)	191
写真図版 25	調査区 1 出土遺物写真 (13)	162	写真図版 55	調査区 21 出土遺物写真 (1)	192
写真図版 26	調査区 2・4 出土遺物写真	163	写真図版 56	調査区 21 出土遺物写真 (2)	193
写真図版 27	調査区 6・9 出土遺物写真	164	写真図版 57	調査区 21 出土遺物写真 (3)	194
写真図版 28	調査区 13 出土遺物写真 (1)	165	写真図版 58	調査区 21 出土遺物写真 (4)	195
写真図版 29	調査区 13 出土遺物写真 (2)	166	写真図版 59	調査区 21 出土遺物写真 (5)	196
写真図版 30	調査区 14・15 出土遺物写真	167			

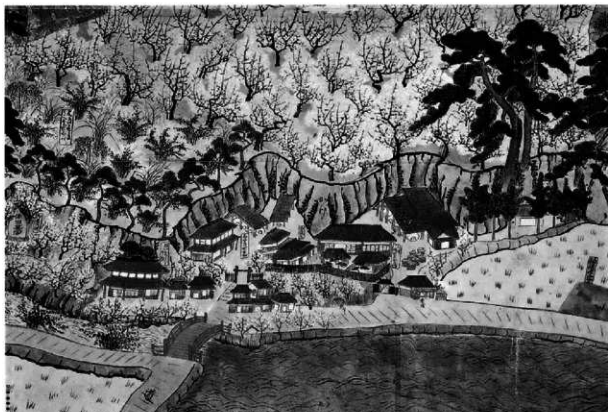
# 第I章 調査の経緯と経過

## 第1節 調査に至る経緯

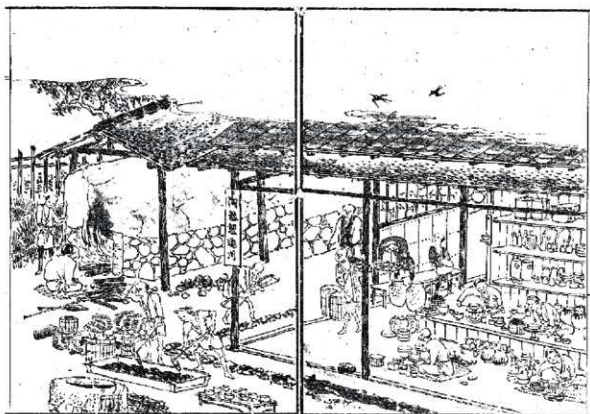
近年、近世陶磁器研究の進展は目覚ましいものがある。九州近世陶磁学会や江戸遺跡研究会等による編年の提示やアセンブリッジの検討を通じて様式論にまで深化する一方で、窯跡の調査や実験考古学的手法を通じて、今は失われてしまった伝統技術の一部を復元するなど、多様な成果をみせている。

茨城県域に目を移すと、陶芸美術館や窯業指導所等が立地し、窯業中心地の一つとして知られている笠間においては、採集資料や紀年銘のある伝世資料の分析を通じて笠間焼の編年作成に向けた研究が進められている（茨城県陶芸美術館 2010、田原 2005ab・2007、吹野 2005ab）。また北茨城市域ほかの窯跡の踏査を通じて、いわゆる松岡焼系陶器を紹介し、水戸藩領や棚倉藩領における窯業形態を解明する研究の蓄積も分厚い（瓦吹 1986・1991・1992・1993・1994・1995ab・1997・2003・2006・2007・2010・2013・2014・2015）。

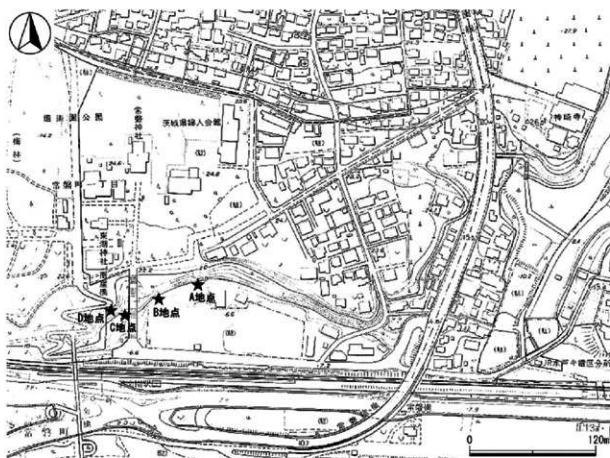
七面製陶所跡は、天保9（1838）年に水戸藩第9代藩主徳川斉昭によって開設された陶磁器窯である。窯場は偕楽園（常磐公園）の南側斜面に展開していた。このことは『水戸藩史料』別記下、亘遷幽画「好文亭四季模様之図」（第1図）及び伝萩谷僊画「偕楽園図」や松平俊雄（雪江）著『庶物會要』（第2図）などの文字資料や絵画資料に記されていることから、識者の間では知られて



第1図 好文亭四季模様之図（大洗町立幕末と明治の博物館寄託）



第2図 『庶物會要』(常磐公園撰勝図誌稿本)・窯場之図(水戸市立中央図書館所蔵)



第3図 調査地点の位置

いたものの、製品としては伝世品や採集品がわずかに知られるのみで、長らく幻の焼き物とされていた。

こうした中、水戸市では第5次総合計画（計画期間：平成17年度～平成26年度）以降、新たな観光資源の創出と伝統的技術を活用した新たな産業の創出を図る取組を進めるなかで、陶芸家の伊藤瓢堂氏が七面製陶所で生産された焼物を「七面焼」と命名し、その復興を図ろうという機運が高まった。

七面焼の復興にあたっては、当時の製品の学術的解明が必須となる。そこで、水戸市及び水戸市教育委員会は、七面焼の調査研究を進めるため、七面製陶所の所在確認はもとより、その操業形態や窯業技術の解明を目的とした確認調査を実施することとなったのである。

（渥美・関口）

## 第2節 調査の経過と方法

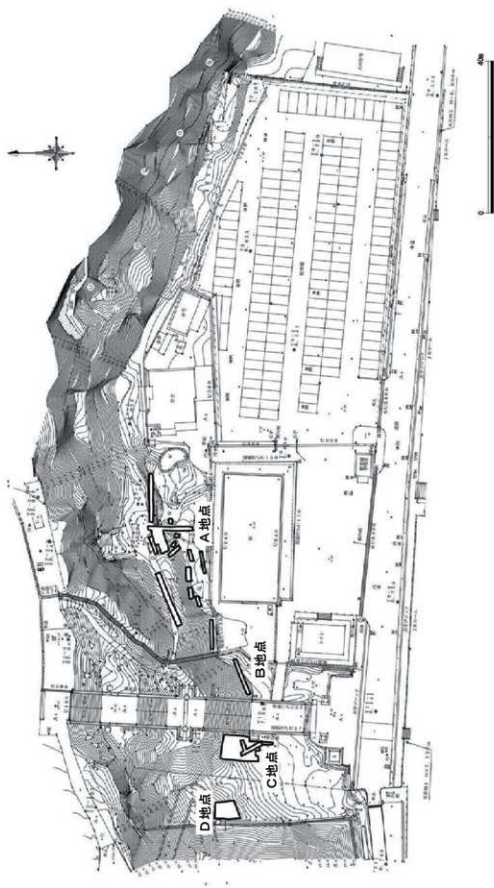
七面製陶所跡における所在及び内容確認のための発掘調査は、「好文亭四季模様之図」「借楽園図」「庶物會要」などの資料を元に、連房式登窯の存在が想定される3地点を選定した。

すなわち、常磐神社境内地の南側斜面のうち、最も東に位置し、緑色フェンスに囲まれた防空壕状の凹地周辺（A地点）、常磐神社南参道石段の東側（B地点）、同じく石段の西側（C・D地点）である（第3・4図）。「好文亭四季模様之図」によれば、A地点は「諸事御せ戸やき場」、B地点は「白やきせ戸や」の東側1基周辺、C・D地点は「白やきせ戸や」の西側1基の周辺に該当する。各地点においてトレンチを設定し、随時拡張及び部分的な掘り下げ（サブトレンチの設定）を行いながら調査を進めた。

調査の対象とした遺構は、七面製陶所跡を構成する連房式登窯とその付帯施設である。付帯施設には、窯に伴う排水路や工房、捨て場（いわゆる灰原、物原と呼ばれる遺構）などを想定した。『庶物會要』では、登窯とそれを見守る職人の様子のほか、陶土を作る職人やロクロを回す職人の様子が描かれるとともに、掘立柱建物とみられる工房が描かれており、こうした諸施設の存在を裏付ける遺構の存在が期待された。一方、窯に関わる遺構以外のものについては、本遺跡の性格や土地利用の経過等を十分に勘案した上で、必要と認められる範囲において適宜記録していくものとした。

調査における現地作業の方法については、確認のための発掘調査であること、調査対象地が斜面地で狭小であることから、全ての工程において人力によって行うものとした。

確認した遺構については、確認状況を写真、図面によって記録するとともに、性格や内容を詳らかにするため、一部においてサブトレンチ掘削による掘り下げを行い、遺構埋土の掘削は最小限に止めることとした。遺構の確認状況を記録する図面は、平面図のほかトレンチ壁を利用した断面図を作成し、遺構の埋没過程等を明らかにするよう努めた。出土した遺物は、その後調査を進めるために必要な分に限って、できるだけ出土した平面的位置や層位を記録しながら取り上げた。



第4図 地形測量図と調査区の位置

調査にあたっては、地形測量を実施し、窠跡の築かれた地形を微細に読み解くことのできるように努めるとともに、調査対象地域を公共座標（第IX系）において把握できるようにした。また第3次調査においては、調査区内で検出した遺構等を3次元測量において記録した。これらの成果との整合性を図りながら、1/100縮尺を基本としたトレンチ配置図、全体図を作成し、遺跡全体の把握に努めた。

現地作業終了後の整理業務については、全ての出土遺物の洗浄、注記と基礎的な分類を行った後、その膨大な出土量を勘案し、実測及び製図、分析作業に関する一部の業務について、委託業務により行った。

各年度の調査及びその関係者の概要は以下の通りである。なお以下に示す担当者等の所属は調査時のものである。

## 各年度の調査概要

### 調査主体

水戸市教育委員会（教育長 鯨岡 武；平成24年10月4日まで）  
（ 本多 清峰；平成24年10月5日から）

### 2005（平成17）年度

#### ○七面製陶所跡第1次発掘調査

調査期間：平成17年10月3日 から 平成17年11月10日 まで

調査面積：90㎡

調査内容：A及びB地点における所在及び内容確認調査

調査担当者：川口 武彦（水戸市教育委員会事務局生涯学習課文化振興係文化財主事）

調査員：関口 慶久（水戸市教育委員会事務局生涯学習課文化振興係文化財主事）

新垣 清貴（水戸市教育委員会事務局生涯学習課文化振興係嘱託員）

現場作業員：石川 勉、小野瀬 智工、小山 司農夫、加藤 利男、河原井 俊吉郎、久保木 きよ子、栗原 芳子、  
部 ヨシ、鈴木 潤一、高柳 悦子、花田 繁二郎、皆川 幸子

### 2006（平成18）年度

#### ○七面製陶所跡第2次発掘調査

調査期間：平成19年2月5日 から 平成19年2月16日 まで

調査面積：9㎡

調査内容：C地点における所在及び内容確認調査及び地形測量調査等

調査担当者：川口 武彦（水戸市教育委員会事務局生涯学習課文化財係文化財主事）

調査員：新垣 清貴（水戸市教育委員会事務局生涯学習課文化財係嘱託員）

現場作業員：石川 勉、小山司農夫、鈴木 潤一

室内作業員：渥美 賢吾、安島 町子、大内 恵子、鬼澤 規子、田上 雪枝、橋本 祥子

測量調査業務受託者：片岡測量設計株式会社

### 2007（平成19）年度

#### ○七面製陶所跡第3次発掘調査

調査期間：平成19年7月9日 から 平成19年8月20日 まで

調査面積：71.5㎡

調査内容：C・D地点における所在及び内容確認調査

調査担当者：川口 武彦（水戸市教育委員会事務局文化振興課文化財係文化財主事）

調査員：木本 翠岡（水戸市教育委員会事務局文化振興課文化財係嘱託員）  
現場作業員：石川 勉、石崎 寿子、石崎 洋子、小山 司農夫、加藤 利男、  
川又 恵美子、河原井 俊吉郎、久保田 馨、栗原 芳子、黒須 秀昭、鈴木 潤一、高柳 悦子、  
野原 猛、福原 雅美、三浦 健太、村上 巧見、山崎 武司、渡辺 恵子  
室内作業員：安島 町子、飯田 貴代子、小澤 弥代、柏 千枝子、杉崎 明美、鈴木 加代子、須藤 裕美、  
田上 雪枝、橋本 祥子、人見 よね子、平根 真由美、広瀬 文子、深澤 貞子、三浦 悦子  
遺構計測業務受託者：有限会社三井考測

#### 2008（平成20）年度

##### ○七面製陶所跡発掘出土品整理事業

調査内容：A・B・C・D各地点における発掘出土品の洗浄・注記・分類・実測等  
調査担当者：関口 慶久（水戸市教育委員会事務局文化振興課文化財係文化財主事）  
調査員：川口 武彦（水戸市教育委員会事務局文化振興課大車貝塚ふれあい公園文化財主事）  
渥美 賢吾（水戸市教育委員会事務局文化振興課文化財係文化財主事）  
室内作業員：安島 町子、飯田 貴代子、小澤 弥代、柏 千枝子、杉崎 明美、鈴木 加代子、須藤 裕美、  
田上 雪枝、橋本 祥子、人見 よね子、平根 真由美、広瀬 文子、深澤 貞子、三浦 悦子  
実測及び製図業務受託者：有限会社文化財コム

#### 2009（平成21）年度

##### ○七面製陶所跡発掘出土品整理事業

調査内容：A・B・C・D各地点における発掘出土品の分類・実測等  
調査担当者：関口 慶久（水戸市教育委員会事務局文化振興課文化財係文化財主事）  
調査員：川口 武彦（水戸市教育委員会事務局文化振興課大車貝塚ふれあい公園文化財主事）  
渥美 賢吾（水戸市教育委員会事務局文化振興課文化財係文化財主事）  
室内作業員：安島 町子、飯田 貴代子、小澤 弥代、柏 千枝子、斉藤 千左乃、杉崎 明美、鈴木 加代子、  
須藤 裕美、田上 雪枝、橋本 祥子、人見 よね子、平根 真由美、広瀬 文子、深澤 貞子、  
三浦 悦子  
実測及び製図業務受託者：考古学研究所 株式会社アルカ

#### 2010（平成22）年度

##### ○七面製陶所跡発掘出土品整理事業

調査内容：A・B・C・D各地点における発掘出土品の分類・実測等  
調査担当者：渥美 賢吾（水戸市教育委員会事務局文化課文化財係文化財主事）  
調査員：関口 慶久（水戸市教育委員会事務局文化課世界遺産推進室世界遺産係長）  
川口 武彦（水戸市教育委員会事務局文化課埋蔵文化財センター主幹）  
室内作業員：安島 町子、飯田 貴代子、小澤 弥代、柏 千枝子、斉藤 千左乃、杉崎 明美、鈴木 加代子、  
須藤 裕美、田上 雪枝、橋本 祥子、人見 よね子、平根 真由美、広瀬 文子、深澤 貞子、  
三浦 悦子  
実測及び製図業務受託者：有限会社文化財コム

#### 2011（平成23）年度

##### ○七面製陶所跡発掘出土品整理事業

調査内容：A・B・C・D各地点における発掘出土品の分類・実測等  
調査担当者：渥美 賢吾（水戸市教育委員会事務局文化課埋蔵文化財センター文化財主事）  
室内作業員：安島 町子、飯田 貴代子、小澤 弥代、柏 千枝子、斉藤 千左乃、杉崎 明美、鈴木 加代子、  
橋本 祥子、人見 よね子、平根 真由美、広瀬 文子、深澤 貞子、三浦 悦子

## 2012（平成24）年度

## ○七面製陶所跡発掘出土品整理事業

調査内容：A・B・C・D各地点における発掘出土品の分類・実測等

調査担当者：渥美 賢吾（水戸市教育委員会事務局文化課埋蔵文化財センター文化財主事）

室内作業員：安島 町子、飯田 貴代子、小澤 弥代、柏 千枝子、斉藤 千左乃、杉崎 明美、鈴木 加代子、  
橋本 祥子、人見 よね子、平根 真由美、広瀬 文子、深澤 貞子

## 2013（平成25）年度

## ○七面製陶所跡発掘出土品整理事業

調査内容：A・B・C・D各地点における発掘出土品の分類・分析及び報告書執筆

調査担当者：渥美 賢吾（水戸市教育委員会事務局文化課埋蔵文化財センター主幹）

調査員：米川 暢敬（水戸市教育委員会事務局文化課埋蔵文化財センター文化財主事）

室内作業員：安島 町子、飯田 貴代子、小澤 弥代、柏 千枝子、斉藤 千左乃、杉崎 明美、鈴木 加代子、  
橋本 祥子、人見 よね子、平根 真由美、広瀬 文子、深澤 貞子

出土品分析業務受託者：大成エンジニアリング株式会社

## 2014（平成26）年度

## ○七面製陶所跡発掘出土品整理事業

調査内容：A・B・C・D各地点における発掘出土品の分類・分析及び報告書執筆

調査担当者：米川 暢敬（水戸市教育委員会事務局文化課埋蔵文化財センター文化財主事）

調査員：渥美 賢吾（水戸市教育委員会事務局文化課文化財係長）

調査補助員：坂本 幸子、人見 よね子、米川 理恵

出土品分析業務受託者：大成エンジニアリング株式会社

## 2015（平成27）年度

## ○七面製陶所跡発掘出土品整理事業

調査内容：A・B・C・D各地点における発掘出土品の分類・分析及び報告書執筆

調査担当者：米川 暢敬（水戸市教育委員会事務局教育歴史文化課埋蔵文化財センター文化財主事）

調査補助員：坂本 幸子、杉崎 明美、鈴木 加代子、人見 よね子

## 2016（平成28）年度

## ○七面製陶所跡発掘出土品整理事業

調査内容：A・B・C・D各地点における発掘出土品の分類・分析及び報告書執筆

調査担当者：米川 暢敬（水戸市教育委員会事務局教育歴史文化課埋蔵文化財センター文化財主事）

## 2017（平成29）年度

## ○七面製陶所跡発掘出土品整理事業

調査内容：A・B・C・D各地点における発掘出土品の分類・分析及び報告書執筆

調査担当者：関口 慶久（水戸市教育委員会事務局教育部歴史文化課埋蔵文化財センター所長）

調査員：米川 暢敬（水戸市教育委員会事務局教育部歴史文化課埋蔵文化財センター主幹）

（渥美・米川・関口）



## 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

七面製陶所跡は、茨城県水戸市常磐町1丁目6015番外、北緯36度22分26秒、東経140度27分21秒（世界測地系）に位置する。

#### 第1項 市城の概観

水戸市は、日本最大を誇る関東平野の北東部に位置する。八溝山地を横切って鷺子山塊と鶴足山塊を南北に分ち、市城の北部に西から東へ流れる那珂川とその支流とによって沖積低地が太平洋に向かって広がっている。これに沿うようにして東茨城台地が太平洋に向かって突き出している。東茨城台地はその西端で八溝山地の外縁にあたる丘陵へと続き、市城西部を構成している。

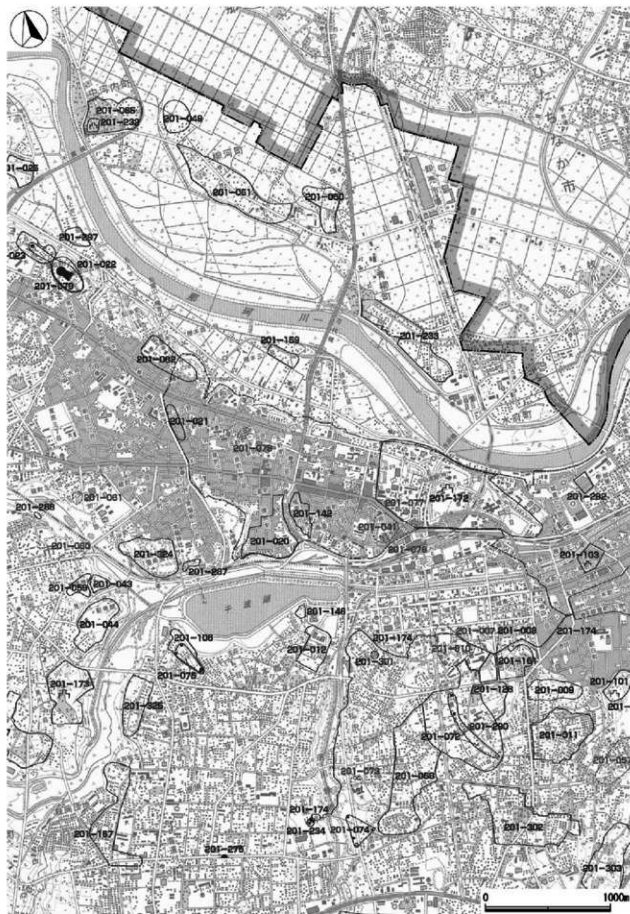
その下流域右岸の大半を水戸市域とする那珂川は、栃木県的那須連山を源流として、八溝山地の西縁を南へ流れた後、烏山の南から方向を東へ変えて八溝山地を横断し、今度は御前山を背にして南東へ方向を変えて那珂台地と東茨城台地との間を太平洋に向かって流れ出る。この那珂川が存在により、栃木県域に広がる那須野原や喜連川丘陵などの内陸部と太平洋沿岸部とが、水上交通により結ばれることから、歴史的に水戸市域が交通の要衝となることが多かった。

#### 第2項 市城の地形区分

市城の西部では、標高300m以下の低く起伏の小さい丘陵地帯が続く。これらは幅広で丸みを帯びた尾根と谷津田が谷奥まで認められる谷が樹枝状に入り込むのが特徴的で、良好な里山の景観を残している。縄文時代前期から中期にかけてのいわゆるキャンプ・サイトと古代～近世の生産遺跡が分布するのが特徴的である。他方、市城の東部では、沖積低地の右岸は左岸に比べて面積が狭小である一方、左岸是那珂川氾濫原の幅が広く、標高10m以下の低地帯が広がっており、古くから集落が営まれて現在に至る。これら低地帯に面した台地は、那珂川とその支流によって開析された樹枝状の支谷が深く入り込み、複雑な様相を呈しており、起伏の豊かな地形をなす。東茨城台地のうち水戸市域にあたる部分をとくに水戸台地と呼ぶことがあるが、この支谷によって主に四つに細分され、北西からそれぞれ上市台地、見和台地、千波台地、吉田台地と呼称される。

#### 第3項 台地の地質

水戸台地の地質は、しばしば水戸層と呼ばれる第三紀層（凝灰質泥岩層）を基盤岩とし、その上部に、砂、礫、シルトで構成される見和層、上市礫層が続く。上市礫層は、約12.5万年前の最終間氷期最盛期（ステージ5e）におけるいわゆる下末吉海進からの離水過程で堆積したも



第5図 遺跡の位置

第1表 周辺の遺跡一覧

遺跡番号	遺跡名	所在地	種類	現況	時代・時期							備考
					旧石	縄文	弥生	古墳	奈良	中世	近世	
201-007	水戸南高校遺跡	白梅2丁目	集落跡	校地		○	○	○				酒蔵
201-008	吉田貝塚	元吉田町井坂	貝塚	道路		○						
201-009	安楽寺遺跡	元吉田町安楽寺	集落跡	境内		○						
201-010	お下屋敷遺跡	白梅2丁目	集落跡	校地		○	○	○	○			酒蔵
201-011	大新町遺跡	元吉田町	集落跡	宅地		○	○	○	○			
201-012	下本郷遺跡	千波町下本郷	集落跡	宅地		○						
201-020	釜神町遺跡	備前町	集落跡	宅地		○						
201-021	並松町遺跡	栄町1丁目	集落跡	宅地		○						
201-022	愛宕町遺跡	愛宕町愛宕	集落跡	宅地		○	○	○				
201-023	文京1丁目遺跡	文京1丁目	集落跡	宅地		○	○	○				
201-025	上杉遺跡	渡里町上杉	包蔵地	畑地								新規発見
201-041	東照宮境内遺跡	宮町2丁目	集落跡	境内			○					酒蔵
201-043	楳松遺跡	見川1丁目	集落跡	境内		○	○					
201-044	見川屋敷遺跡	見川1丁目塚原	集落跡	宅地		○	○					
201-049	中河内上坪遺跡	柳河内上坪	集落跡	宅地			○	○	○			名称変更
201-050	反町遺跡	柳河内反町	集落跡	畑地			○	○				
201-051	柳河内遺跡	柳河内下河内	集落跡	宅地			○	○	○			
201-057	横宿遺跡	元吉田古宿	集落跡	畑地		○	○	○				酒蔵
201-058	米沢町遺跡	元吉田町荒谷	集落跡	宅地			○	○				
201-059	横西遺跡	見川1丁目横西	集落跡	宅地			○	○				
201-060	坂上遺跡	見和1丁目坂上	集落跡	道路				○				酒蔵
201-061	東町遺跡	緑町2丁目	集落跡	運動公園				○	○			酒蔵
201-062	茨城高等学校校遺跡	八幡町	集落跡	境内			○		○			
201-065	中河内遺跡	中河内町中坪	集落跡	畑地				○	○			
201-072	吉田古墳群	元吉田町東組	古墳群	宅地		○		○				
201-073	弘沢古墳群	千波町弘沢	古墳群	宅地				○				酒蔵
201-074	福沢古墳群	米沢町福沢	古墳群	境内				○				
201-075	千波山古墳群	千波町千波山	古墳群	公園				○				
201-076	東照宮境内古墳群	宮町2丁目	古墳群	境内				○				酒蔵
201-077	三の丸古墳	三の丸1丁目	古墳	宅地				○				名称変更, 酒蔵
201-078	五郎町古墳群	五郎町2丁目	古墳群	校地				○	○			酒蔵
201-079	愛宕山古墳群	愛宕町愛宕	古墳群	宅地				○				
201-101	吉田城跡	元吉田町	城郭跡	境内					○			
201-103	横竹岡遺跡	柳町2丁目	城郭跡	宅地					○			名称変更
201-106	千波山遺跡	千波町千波山	集落跡	宅地		○						
201-128	薬王院東遺跡	元吉田町東組	集落跡	宅地		○	○	○				
201-142	鷹匠町遺跡	梅香2丁目	火葬場	宅地				○				名称変更
201-146	柳崎貝塚	千波町柳崎	貝塚	宅地		○						
201-159	根本町遺跡	備前町4丁目	包蔵地	宅地		○						新規発見
201-161	吉田神社遺跡	宮内町	集落跡	境内				○	○			
201-167	青掛遺跡	見川町青掛	集落跡	宅地				○				
201-172	水戸城跡	三の丸1丁目	城郭跡	学校					○	○		
201-173	見川城跡	見川3丁目	城郭跡	宅地					○			
201-174	笠原水道	笠原町	水道跡	境内						○		
201-232	中河内遺跡	中河内町中坪	城郭跡	宅地					○			
201-233	青柳町遺跡	青柳町	集落跡	宅地						○		
201-234	笠原古墳群	笠原町	古墳群	山林								
201-275	笠原南塚	笠原町	塚	竹林								
201-287	七面製紙所跡	常盤町1丁目	生産遺跡	山林							○	
201-288	開興窯跡	見和1丁目	生産遺跡	山林							○	
201-290	東組遺跡	元吉田町東組	集落跡	宅地		○	○	○	○			
201-292	三ノ町遺跡	城東3丁目	包蔵地	宅地						○		新規発見
201-297	ちとせ2丁目遺跡	ちとせ2丁目	包蔵地	宅地								新規発見
201-301	舟付遺跡	千波町舟付	包蔵地	宅地								新規発見
201-302	元吉田坂遺跡	元吉田町原	包蔵地	宅地			○	○				新規発見
201-303	宿前遺跡	元吉田町宿前	包蔵地	宅地								新規発見
201-324	旧音楽園	常盤町1丁目	庭園跡	公園						○		新規発見
201-325	御茶園遺跡	千波町御茶園	包蔵地	宅地								新規発見

のである。これらを最下部に赤城水沼テフラ群を伴う火山灰で構成されたいわゆる関東ローム層が被覆し、現在の台地が形成された。

#### 第4項 遺跡の周辺

七面製陶所跡は、上市台地の東端に近い南側急斜面に位置している（写真図版1）。接する台地平坦面には、水戸藩第9代藩主徳川斉昭によって天保13(1842)年に、「一張一弛」の理念に基づいて藩校弘道館の対の施設として開園した借楽園（常磐公園）がある。この南側急斜面がほぼ崖状を呈しており、水戸層が露出している地点が多い。水戸層は、第三紀中新世末期に堆積した多賀層群の一部で、有孔虫、放散虫、海綿の小骨片や珪藻などの有機質を多く含む軟質な岩石である。本来は青灰色を呈しているが、風化乾燥すると黄味がかった灰白色となって脆くなり、板状に剥離していく。

水戸層から切り出された岩石は、このように常に湿気を帯びた状態であれば固く、しかし本来凝灰質泥岩であるので軟質で加工しやすい特徴をもつことから、近世においては、「神崎石」と呼ばれて、第2代藩主徳川光圀が寛文2(1662)年に布設した笠原水道の岩樋や、水戸城内の暗渠排水路の部材として利用された。このときの採掘坑とみられる洞穴が製陶所跡の東西に多くみられる。最も大きい洞穴は、製陶所跡西側の借楽園南崖下に存在するが、その洞穴は長く、借楽園本園直下に樹枝状に複雑に張り巡らされている。危険なため現在は立入禁止区域である。

このいわゆる「神崎石」は、近世のみならず古代以前からも積極的に利用されていたようで、横穴式石室古墳の板石部材やカマドの構築材としてもしばしばみられ、とりわけ水戸市域においては、史跡吉田古墳（吉田古墳群第1号墳）やニガサワ1号墳などの横穴式石室の部材に同種の凝灰質泥岩が採用されたことが知られている。

## 第2節 歴史的環境

七面製陶所跡が立地する上市台地における既往の遺跡調査の成果から、その歴史的環境について、時系列に整理しておきたい。

### 第1項 先土器時代～縄文時代草創期

上市台地における最初の土地利用は、現在確認されている限りで更新世後半に遡る。具体的資料としては、台地北端に位置する台渡里官衙遺跡群の下層出土のものが知られるが、このほかに、上市台地における先土器時代から縄文時代草創期にかけての資料は発見されていないから、更新世後半から最終水期にかけての人類の土地利用は専ら台地北端に限られていたことが知られる。

### 第2項 縄文時代

縄文時代の遺跡は台地上の各所で確認されているが、これらのうち発掘調査が行われ、形成

時期等が明らかとなっているのは、台地北端に位置するアラヤ遺跡、渡里町遺跡、台渡里官衙遺跡（下層）である。アラヤ遺跡（現在の分布地図では、アラヤ遺跡から台渡里官衙遺跡長者山地区下層にかけての範囲に相当する。）では、早期～前期前半、中期、後期～晩期と断続的な集落形成が認められることが知られている（大森 1952、水戸市アラヤ遺跡発掘調査会 1992）。近隣の渡里町遺跡では、中期後半の土坑群が多く確認されており、これらが環状に配列することが想定されることから、当該期の大規模な環状集落の存在が想定されたところである（水戸市教育委員会 2008）。

ところで、今回調査においても縄文土器出土の報告があり、水戸城跡の立地する上市台地南西端付近において縄文時代の集落が形成・展開するのは想定される場所であるが、今のところ釜神町遺跡第4地点における試掘・確認調査にて後期中葉や晩期の土器を見出した程度にすぎない（水戸市教育委員会 2011b）。城下町として江戸時代以来連続した人々の営みを想起すれば、湮滅した縄文時代遺跡の数は推して知るべしというところであろう。

### 第3項 弥生時代

弥生時代の遺跡は、踏査により愛宕町周辺や渡里町周辺で若干知られているに過ぎない。いずれも弥生時代後期に比定されるものであり、中期以前における台地上の集落形成は低調であるといえ、弥生時代における地域社会の大きな特徴である。これを集落形成における立地の差異とみるべきか、人口の増減とみるべきなのか、なお慎重な議論が必要だが、いずれにせよその背景には生活様式の変化や気候変動などの内的もしくは外的要因を念頭に置く必要があろう。

### 第4項 古墳時代

水戸城に接して所在する東照宮境内には、かつて古墳群が所在したという。水戸市埋蔵文化財センターで保管している寄贈資料のうちの宮町出土とされる土師器壺は、近年の所蔵資料の再整理でいわゆる二重口縁壺であることが判明しており、湮滅した古墳に伴うものであるとすれば、この上市台地の南西端に前期古墳が存在したということになる。それ以外の前期古墳となると、同台地では、明治大学が測量調査を行った西原1号墳（方方）、昭和40年代に宅地造成で湮滅したという愛宕町地内の姫塚古墳（方方カ）などがある（佐々木・鶴見 2011、井・小宮山 1999）。

中期では、国指定史跡である愛宕山古墳（方方）が知られる。全長が136mを超える大型前方後円墳で、黒斑をもつ円筒埴輪片が採集されている。この時期を相前後する古墳は、この周辺から隣接する文京1丁目地内にかけて分布していたらしく、墳丘が削平されてしまっているが、同様の埴輪片が近年の試掘・確認調査で出土した点が注目される。

後期・終末期でいうと、上市台地上における造墓活動は再び西原古墳群に戻る。古墳規模自体は、中期の愛宕山古墳に比べると著しく縮小しているが、それは単純に被葬者の権力の縮小を示すものとは限らない。上市台地から外へ目を広げると、元吉田町地内の多角形墳や方墳を含む吉田古墳群、田谷町地内の官衙遺跡に近い白石古墳群などが目立ち、基数自体は増加していることに留意しなければならないだろう。

集落形成は、前期において台渡里官衙遺跡群下層や堀遺跡、渡里町遺跡などで始まっている

ことが近年わかってきた。これらで確認された堅穴建物跡出土土器群のうち、一部は十王台式最末期の壺と土師器の器台や甕などが共伴することが判明した。弥生時代と古墳時代の交における生活様式の変化に注意が必要であろう。これらの遺跡の一部では、中期前半のものも含まれているようで、連続的に営まれたのか、あるいは断続的なのか、さらなる調査が必要である。

上市台地において中期後半に該当する遺跡は、これまで調査で明らかになっていない。ただし台地に南面して流れる桜川を挟んだ対岸の吉田台地上では、TK208～TK23 型式の古式須恵器が出土した大鋸町遺跡のほか（水戸市大鋸町遺跡発掘調査会 1988、水戸市教育委員会 2005）、後期前半に帰属するとみられる集落が吉田神社遺跡にもみられる（水戸市教育委員会 2013）。他方、後期後半以降は、渡里町や田谷町など官衙遺跡が形成される地域に集中するようになり、奈良・平安時代と連続した土地利用をよみとることができるのは興味深い。

### 第5項 奈良・平安時代

上市台地上で、奈良・平安時代の遺跡というと、最も特筆されるのが、台渡里官衙遺跡群とそれに関連する集落とみられる堀遺跡・渡里町遺跡である。緩やかに蛇行する那珂川に面した台地上に形成されたこれらの古代遺跡群は質・量ともに、他例を圧倒する（水戸市教育委員会 2011a に詳述した）。少なくとも 10 世紀以前の政治的・宗教的中心地はここにあったということがいえる。水戸城周辺では、奈良・平安時代の集落展開を想定しえるものの、不時発見による梅香火葬墓跡が知られる程度で、詳らかではない。

### 第6項 中世・近世

中世前期の資料に欠けるが、中世後期に至ると、水戸市域各所で城館の造営が活発に行われたことが知られる。直近では、台渡里官衙遺跡上層の長者山城跡及びその周辺の関連遺跡が、現在も法灯を伝える勝幢寺とともにその様相の一端を示してくれる。曲輪そのものの調査はないが、井戸・土坑やその出土遺物からみて、15 世紀後半から 16 世紀にかけての時期を中心に営まれたようである。勝幢寺棟札に「大檀那」とみえる江戸氏家臣の春秋駿河守の居城と推定される。

なお近世については、現在の市街地が江戸時代後期の城下町そのものを受け継いでおり、釜神町遺跡第 4 地点出土の黒地蒔絵箱物や近代日本画壇の巨匠横山大観の生家のあった三ノ町遺跡第 1 地点（酒井家屋敷跡）の調査成果は、当時の城下町の様相を知る上で貴重な資料である。今後こうした資料が蓄積されることを望む。

また七面製陶所跡から、J R 常磐線に沿って千波湖に注ぐ沢渡川を上流へ辿っていったところに囲裏窯跡という遺跡がある（川口・関口 2006）。沢渡川沿いの斜面地を利用して登窯が構築されたと考えられる。確認される範囲からして中小規模の窯場であったと想定することができるだろう。採集資料から知られる生産器種の組成としては、折縁鉢、播鉢、土瓶、植木鉢などの大型製品が多くを占め、これらの生産器種の特徴と、あわせて採集された肥前系筒茶碗の特徴から、その操業年代は 19 世紀以降とみられる。七面製陶所跡と同時代性をもつ窯業生産遺跡として注意しておきたい。

### 第3節 七面製陶所跡における既往の調査研究

#### 第1項 七面製陶所跡の沿革

**藩政改革としての窯業生産の開始** 七面製陶所は、第9代藩主徳川斉昭によって開かれた製陶所である。『水戸藩史料』(別記巻21)によると、天保元(1830)年に藩領内の陶土の調査を実施し、久慈郡町田村(茨城県常陸太田市)と下野国那須郡小砂村(栃木県那珂川町)で陶土を発見している。斉昭は前年の文政12(1829)年に30歳で藩主となっており、藩政改革に尽力した斉昭が、殖産興業の一環として窯業をはじめとして手工業生産の拡大に大きな力を注いでいたことがうかがうことができ興味深い。そして天保4(1833)年には陶土産出地である町田と小砂に窯を築こうとしたが、藩内事情から実現できなかったため、第1回目の就封(帰国)の時、お手もと金で、水戸城下の下町瓦屋(瓦谷)に陶器製造所を開設したという。

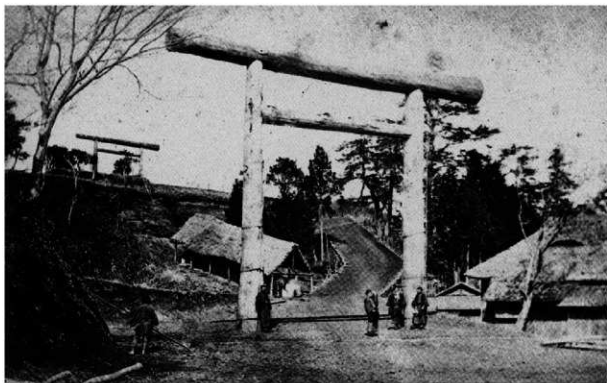
瓦屋の陶器製造所では天保5(1834)年から陶器焼成が軌道に乗りはじめ、翌6年には磁器焼成に成功したらしい。そして、天保9(1838)年に神崎七面堂の直下に製陶所を設置し、瓦屋製陶所もここへ合併された。天保12(1841)年には肥前唐津の陶工傳五郎を雇い、製陶所の拡張準備を行うが、藩政事情から拡大政策は進展しなかったという。こうした動きと並行して、天保13(1842)年には製陶所の北側台地上に借楽園が開園する(このとき、七面堂は見川2丁目所在の日蓮宗寺院である妙雲寺境内に移転している)。

**操業停止年代の問題** 斉昭は、藩政改革と並行して、外交問題等における幕政への発言(いわゆる「戊戌の封事」など)や追鳥狩等の軍事訓練を積極的に展開していた。しかし、当時幕府の中樞にいた指導者たちの反感と嫌疑を招き、天保15(1844)年に江戸駒込の水戸藩別邸に隠居・謹慎させられることとなって、水戸藩における「天保改革」は大きく挫折する。七面製陶所は、その後も操業を続けていたようであるが、明治4(1871)年の廃藩置県に伴って後ろ盾であった藩からの資金的援助を失い、一気に衰退、閉鎖された可能性が考えられた。

ところで、小砂において現も操業を続ける藤田製陶所の墓地内にある「小砂陶藤田翁碑」によれば、明治2(1869)年に水戸藩最後の藩主である第11代昭武の巡幸を受け、製陶所の諸器を下賜されたという。河野一也は、この記録を七面製陶所で製作されていた諸道具が下賜されたものと理解し、七面製陶所跡は同年までに操業を終えていたと理解した(日本窯業史研究所2004)。

**駐日伊公使秘蔵の一枚の写真** ところが、明治10(1877)年から明治14(1881)年まで駐日イタリア公使を務めたラッファエーレ・ウリッセ・バルボラーニが本国に持ち帰った日本全国に及ぶ名所旧跡等を写した写真集を完全復刻した『大日本全国名所一覽』(ディルツッ・石黒監修2001)には、借楽園に隣接して鎮座する常磐神社の一の鳥居の背後に連房式登窯1基が写る写真が収められている。

常磐神社は明治初年に徳川光圀、斉昭両藩主の徳を称えて藩士により借楽園内に祠堂を建立したのが始まりとされ、社号が与えられ、祭神の神号が勅旨により定められたのが明治6(1873)年、現在地に社殿が造営されたのは明治7年のことであるという。また復刻監修者の一人である石黒敬章によれば、この写真集に掲載された各写真の撮影時期は明治4年頃から明治12年ま



挿図写真 七面製陶所古写真（『大日本全国名所一覽』所収）

でに限定され、写真集自体の編集時期は明治12年後半から明治13年初頭頃までの間にあたるという（石黒2001）。すると、この写真の撮影年代はかなり限定されてくる。すなわち、常磐神社が造営された明治7年から明治12年までの間に撮影されたものなのであり、このころまで七面製陶所の連房式登窯が存在していたことが知られるのである。

また、この登窯には作業に従事する人物がかすかに写っており、撮影段階で操業を続けていたことが知られる。

さらに、一の鳥居と台地上にある二の鳥居とを結ぶ参道は、不自然に逆「く」の字状に屈曲しており、あえて登窯を避けて造成されているように見えることも、この窯が操業を続けていることの傍証になろうかと思う。なおこの旧参道は、現在も石段参道の脇にけもの道状にその痕跡を残している。

神社関係者によれば、この木製の一の鳥居は現在の借楽園駅（臨時駅）前の常磐神社参道石段下にある石灯籠付近に建てられていたとされ、写真に写りこむ登窯は、「好文亭四季模様之図」の「白やきせ戸や」で発掘調査時におけるC地点に該当することはほぼ間違いがない。そしてその「白やきせ戸や」には連房式登窯が2基描かれていたが、写真には1基のみとなっているので、うち1基は明治6年以前に操業を停止し、廃絶、取り壊しあっていたとみられ、明治期にはその規模を縮小していたと考えられよう。

以上のことから、七面製陶所は明治4年の廃藩置県後、藩窯（官窯）としての役割を終え、規模を縮小させたが、明治7年の段階においても、なお民窯として操業を継続させていたと考えられるのである。



第2表 七面製陶所関連年表

西暦	和暦	出来事
1829	文政12	斉昭、第9代水戸藩主となる(30歳)
1830	文政13 天保元	斉昭、藩内の陶土の調査を実施 町田(美城町常陸太田市)と小砂(栃木県那珂川町)で陶土を採石
1831	天保2	斉昭、伊藤友寿を陶業研究のために京都へ派遣
1833	天保4	斉昭、就村(第1回目) 水戸城下の下町瓦屋(瓦谷)に陶器製造所を開設
1834	天保5	瓦屋の陶器製造所で磁器の焼成に成功
1835	天保6	瓦屋の陶器製造所で磁器の焼成に成功
1838	天保9	斉昭、神崎七面堂下に陶器製造所及び陶器展示所を設置(七面製陶所の前身) 後に瓦屋製陶所も合併
1840	天保11	斉昭、就村(第2回目)
1841	天保12	斉昭、肥前青津の陶工藤五郎を招く 藩校弘道館、仮開館
1842	天保13	斉昭、七面製陶所の北側の台地上に信楽園を開園 神崎陶器場(七面製陶所)の陶器入札の布達が出される
1843	天保14	斉昭、就村(第3回目)
1844	天保15 弘化元	斉昭が幕府から就村御賞を命ぜられる 嗣子慶篤、第10代藩主となる(13歳) 斉昭、御賞を解かれるが藩政関与不許
1849	嘉永2	幕府、斉昭の藩政関与を許す
1851	嘉永4	大金三郎の難い出により、小砂に御用窯戸の空場を築窯(小砂焼の起こり)
1853	嘉永6	アメリカ東インデ艦隊司令長官ペリー、浦賀沖来航 斉昭、幕府の南防参与となる
1854	嘉永7 安政元	日米和親条約調印 斉昭、幕府の軍制参与となる 水戸・南部両藩士が、那珂南反射炉に用いる耐火煉瓦用陶土検分のため小砂御用 那珂南に反射炉起工 異論鎮圧の太政官首下る
1855	安政2	斉昭、幕政参与となる 反射炉建設のため、那珂川経由で1043駄にあたる小砂産陶土を那珂南へ搬出 那珂南の反射炉一号が工事完成 モルチール砲(仁保)4基製造して幕府に献上
1856	安政3	藩館内蔵校を新設
1857	安政4	藩校弘道館、本開館 斉昭、軍制及び幕政参与を免ぜられる 那珂南に一号炉を改良を加えた反射炉二号炉が完成
1858	安政5	井伊直弼、大老就任 日米修好通商条約調印 斉昭、急遽賞を命ぜられ、駒込藩邸(江戸中區豊)に幽居の身となる 水戸藩に密勅が下賜される(戊午の密勅)
1859	安政6	斉昭、永樂居を命ぜられる
1860	安政7 万延元	桜田門外の變 斉昭没
1864	文久4 元治元	元治甲子の乱(天狗党の乱) 第一次長州征伐
1867	慶応3	大政奉還、王政復古の大号令
1868	慶応4 明治元	鳥羽伏見の戦い 江戸城開城、皇居として東京城に改称
1869	明治2	版籍奉還、各藩主が藩知事に任命 昭武、小砂村巡覧
1871	明治4	廃藩置県
1872	明治5	藩校弘道館、閉館
1873	明治6	常磐神社の社号を定める勅旨。(3月) 常磐神社の祭神神号を定める勅旨。(10月)
1874	明治7	常磐神社、信楽園東隣に造営。
1881	明治14	駐日伊公使バルボラーニ機関 ※ここまでに常磐神社大鳥居とともに七面製陶所が写真に記録される

## 第2項 七面製陶所跡及び七面焼研究の歩み

**幻の製陶所** 七面製陶所跡については、『水戸藩史料』等の文献資料や「好文亭四季模様之図」「偕楽園図」（大洗町幕末と明治の博物館蔵）や『庶物會要』等の絵画資料にみられることから、その存在は古くから知られていた（木戸田 1976、松崎 1978）。

当該製陶所跡が考古学的にはじめて認知されたのは、1984年に水戸市立博物館が開催した特別展示「水戸藩のやきもの」において担当芸員が採集した製品と窯道具の破片と採集地点の写真を公表したことであった（水戸市立博物館 1984）。この表面採集資料は、その後1997年に茨城県立歴史館で開催された特別展示「笠間焼 200年のあゆみ」や1998年に窯業史博物館で開催された小砂焼の特別展示、2000年に飯能市郷土館で開催された飯能焼の特別展示にも出品された（茨城県立歴史館 1997、窯業史博物館 1998、飯能市郷土館 2001）。しかしながら、その後は近藤京嗣による現地踏査が行われたものの（近藤 1988）、窯跡の所在や内容確認を目的とした発掘調査は行われず、長らくその実体が不明であったことから、「幻の製陶所」とも呼ばれてきた。

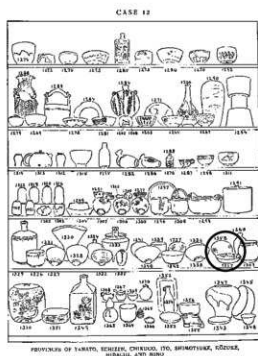
**モース・コレクションの銘款** 七面焼が初めて文献で紹介されたのは、ボストン美術館（Museum of Fine Arts, Boston）に所蔵されているエドワード・S・モースの陶磁器コレクションのカタログである（Morse 1901）。本書には、篆書体の「偕楽」という2文字がみられる瓢箪形の銘款をもつ焼物が2点掲載されている（Case No. 12 の 1357 と 1358）。しかしながら、七面焼という名称は用いられておらず、常陸国（HIDACHI [HITACHI の誤記か]）における焼物の名称として、笠間焼（KASANA [KASAMA] の誤記か）とともに「KAIRAKU」と記載されている。

また同書には、篆書体の「偕楽園」の3文字がみられる瓢箪形の銘款をもつ焼物が2点掲載されているが（Case No. 15 の 1577 と 1578）、これらは、紀州藩の御庭焼である偕楽園焼として分類されている（Morse 同書）。

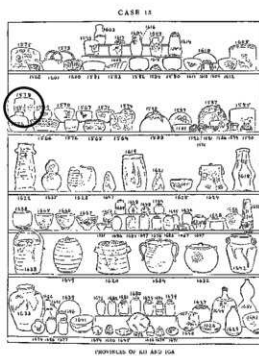
コレクション・カタログ巻末の解説によれば、モースは、明治13(1880)年から同24(1891)年まで日本の貿易会社の礎ともいわれる起立工商会社に勤め、ニューヨーク支店長をも経験した執行弘道からの教示により、Case No. 15 の 1578 番（鉄袖筒花生）は水戸製ではないかと認識していたようである。一方で、目の粗い暖灰色の胎土をもつ鉄軸壺である 1577 番については、Case No. 12 の 1357 番、1358 番と同じ「偕楽」の銘款とともに 1578 番と同じ「偕楽園」の銘款の双方があることが記載されているにも拘わらず、本資料にも水戸製の可能性がある点にまでは認識が及ばなかったようである。

その後、大正9(1920)年に大西林五郎と藤井理白によって編集された『陶器全書』の続編（日本陶工傳）には、水戸後楽園焼の名称で、モース・コレクションのカタログに掲載された篆書体の「偕楽」の2文字がみられる瓢箪形銘款が掲載されているが、「文化前後に於て、國主徳川侯の庭焼として、交趾風に倣える楽焼を出し、國主落款、偕楽園と印したるものにて、極めて上好のものなれども、世に伝はれるもの少し、創始の年月も亦明かならず」とあるように江戸の水戸藩邸内で生産された御庭焼である後楽園焼と混同されていたようである（大西・藤井編 1920）。

また、昭和15(1940)年陶器全集発行会によって編さんされた『日本古陶銘款集』（近畿編）では、「チ 瓢形隸書体の「偕楽園」モールス蒐集」（陶器全集発行会 1940）とあるように、モース・



Case No.12



Case No.15

**KAIRAKU** (Case 12 and Plate VII. 1357)

A pottery was started in the town of Mito in 1830. The pieces, consisting of utensils for the tea ceremony, were signed with the impressed mark *Kairaku*, and are of great rarity. The two specimens in the collection are so remotely unlike in clay, glaze, and design that they might have been made at the two extremities of the empire.

**I357. CAKE-PLATE.** D.  $5\frac{3}{4}$  in. Moulded. Fine light brownish clay, thick olive-green lustreless glaze. Inside, design of a flower in high relief. Within, five spur-marks. Cloth-mark impression on bottom, which shows five or six parallel gouges. *Kairaku* (imp.). 1835



**I358. SHALLOW CUP.** D.  $5\frac{1}{8}$  in. Light yellowish clay, thick yellowish-white glaze. Inside, Tokugawa crest, large and small, in brown. *Kairaku* (imp.). 1835



**I577. JAR.** H.  $13\frac{3}{4}$  in. Thick and heavy. Lathe-marks strongly showing. Coarse warm gray clay, roughened surface, thick very dark purplish glaze. *Kairakuyen* and *Kairaku* (imp.). 1850

On top of Case 15.

**I578. CYLINDRICAL FLOWER-VASE.** H.  $8\frac{1}{2}$  in. Strongly turned. Hard fine light gray clay, light golden-brown underglaze, deep brown overglaze running. Long streams of light blue glaze flecked and running. Coarse thread-mark. *Kairakuyen*, in double gourd (imp.). A rare form of mark. 1850

Gift of Frederick S. Dickson.



1578

**KAIRAKUYEN RAKU** (Case 15)

Records from the Raku family show that Riyōniu (ninth Raku) accompanied Zengoro Hōzen when he was invited to Kii. From the same source I gathered the additional information that the prince of Kii gave to Tanniu (tenth Raku) a stamp with one form of Raku engraved upon it. The Raku signed *Seinei* is said to have been made by Tanniu. The question arises as to which member of the Raku family made Raku pottery in the castle of Wakayama.

1357・1358・1577・1578の解説文

第6図 モース・コレクションの七面焼

コレクションの「借楽園」の3文字がみられる瓢箪形銘款をもつものが掲載されて、紀州藩の御庭焼である借楽園焼と混同していた。

ちなみに、この紀州藩の御庭焼にみられる銘款は、二重圏線に囲まれた縦書き二行印（篆書体で2種）、圏線をもたない縦書き二行印（楷書体で1種）、圏線をもたない縦書き一行印（楷書体で1種）、圏線をもたない横書き一行印（楷書体で1種）の5種があるものの、いずれも「借楽園製」と刻印されているほか、圏線をもたない縦書き一行印「借楽」及び「園製」（楷書体で1種）などの銘款が知られるが、瓢箪形の外径線の中に「借楽園」又は「借楽」の字をあしらった銘款は知られていない。

以上のように、戦前の先行研究では、未だ七面焼の名称は用いられておらず、水戸藩や紀州藩のお庭焼である後楽園焼や借楽園焼と混同されていた。七面焼の名称がいつごろ登場したのかは定かではないが、1984年に水戸市立博物館が企画開催した特別展示「水戸藩のやきもの」展で出品された土瓶（現在は市指定有形文化財〔工芸品〕「七面焼土瓶（蓋付）・土鍋」に指定）のキャプションや列品解説に「七面焼」の語があり、この時期には七面焼と呼称されていたことが分かる。

こうした銘款の研究とは別に注目すべき研究としては、出羽国長瀬藩の藩窯で生産されていた銀山上の畑焼を復興させた伊藤瓢堂氏が、陶芸家としての経験則を生かしつつ、理化学的分析も踏まえた研究を進めている。すなわち山形県工業技術センターの協力を得て、七面製陶所跡採集資料（陶器）の蛍光X線半定量分析を行い、自ら入手した小砂産、町田産の陶石、町田産陶石を水籤したもの、町田焼や小砂焼の採集資料、復元製作を試みた平成町田焼との比較検討を行った。伊藤氏は、その結果として七面焼が小砂産陶石と類似する元素組成をもつことを指摘した（伊藤2003）。斉昭の命により調査し発見された水戸藩領内の小砂や町田の原料やその製品と七面の製品とを同じ方法において比較分析した点で極めて興味深い先駆的な研究成果であるといえる。

また伊藤氏は、分析対象の試料をさらに加えて、①町田焼と七面焼及び小砂焼との間にはナトリウムの数値に大きな違いがあること、②小砂の単独水籤粘土ではシリカ分が多く、轆轤挽きによる薄作りが困難であることからアルミナ分などの粘土質の多い原料を7：3程度の割合で加える必要があること、③出土品に焼締陶器が多く、とりわけ直接火にかけることが想定される土瓶には、そうした原料が望ましいこと、④イッチン（白泥による筒描き）による下絵や染付文様の類似性から飯能焼系の熟練した職人や肥前古伊万里系の絵付師の存在が想定されること、など陶芸家ならではの視点から七面焼の特徴について重要な指摘を行っている（伊藤2008）。

（渥美・川口・関口）

## 第三章 発見された遺構

### 第1節 概要

第1次～第3次調査では、18の調査区（調査区1～21。17～19は欠番）を掘削し、9基の遺構と5つの近世～近代盛土層が検出された。これらの遺構や盛土層の状況と、調査区や絵面資料の位置関係を踏まえ、本書ではA～Dまでの地点名を付している。

調査回数、調査区、地点名、遺構、盛土層の相関関係は次の通りである。

#### 第1次調査

A地点：調査区1～12・15を設定。第1号遺構～第7号遺構を確認。

B地点：調査区13・14を設定。第8号遺構を確認。

#### 第2次調査

C地点：調査区16を設定。第9号遺構を確認。

#### 第3次調査

C地点：調査区20を設定。第9号遺構を確認。盛土層①～③を確認。

D地点：調査区21を設定。遺構は確認されず。盛土層④、近代盛土層を確認。

次に、出土した遺構の性格と確認数は次のとおりである。

- ・ 物原：第1号遺構、第6号遺構、第7号遺構、第8号遺構
- ・ 窯跡（焼成室の砂床）：第2号遺構、第3号遺構
- ・ 石組水路：第4号遺構、第5号遺構

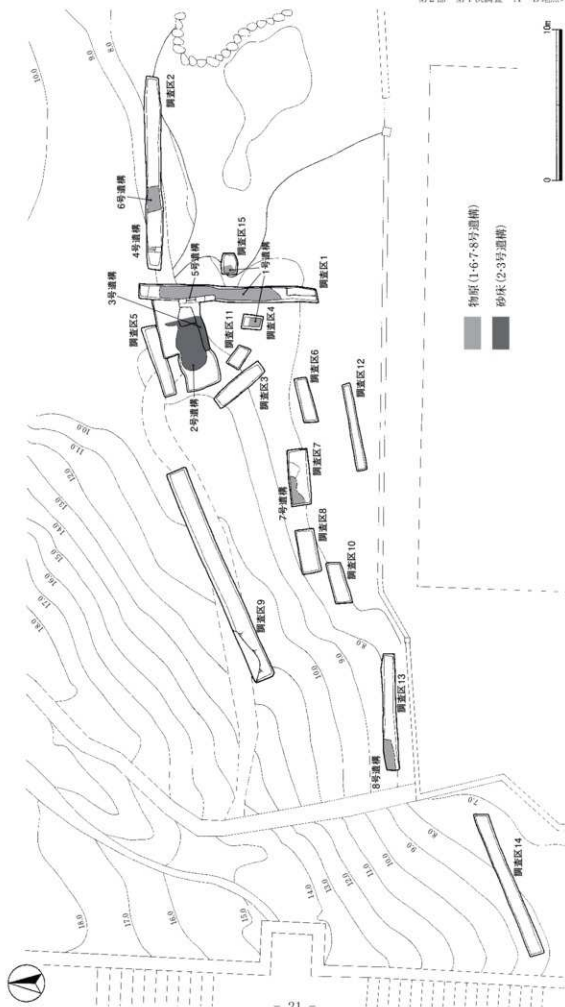
各調査区、遺構、盛土層からは、膨大な数の七面焼や窯道具が出土した。その主要な遺物については次章を参照されたい。なお、本章で報告する遺構・盛土層等の所見と、次章で報告する遺物の相関については、今後刊行予定の総括編で纏めることとしたい。

### 第2節 第1次調査—A・B地点の調査—

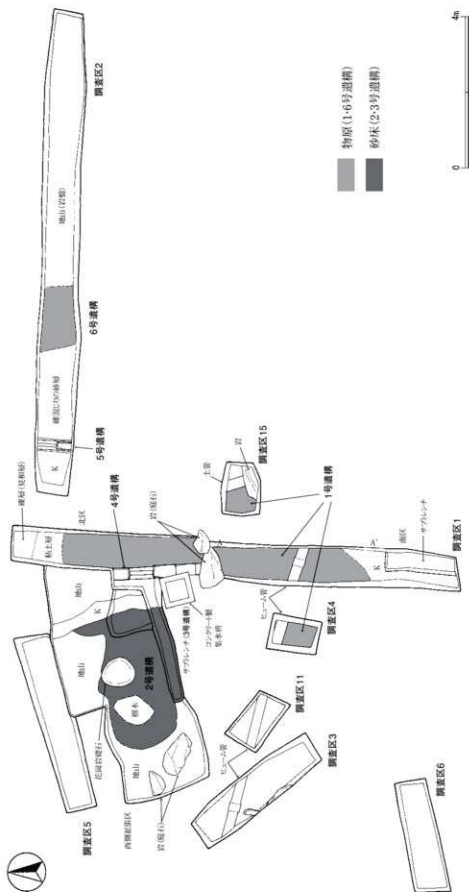
第1次調査の対象地域は、常磐神社境内地の南側斜面のうち、最も東に位置し、緑色フェンスに囲まれた防空壕状の凹地周辺（A地点、1～12・15区、調査時はトレンチ1～12・15と呼称）、常磐神社南参道石段の東側（B地点、13・14区、調査時はトレンチ13・14と呼称）である。「好文亭四季模様之図」と照合すれば、「諸事御せ戸やき場」という注釈が付された東側の2基の登窯近傍に該当する。

#### 第1項 1区の調査（第7・8図、写真図版2）

本調査区は、緑色のフェンスに囲まれた防空壕状に掘られた穴が崩落した場所の南側にある緩やかな斜面に、南北方向に長さ12.0m、幅1.0mの規模で設定したものである。中央にある大



第7図 調査区1～15平面図



第8図 調査区1～6・11・15平面図

きな岩を挟んで北側と南側とに区分した。表土内からは多量の焼台・焼締陶器類の破片が出土した。陶磁器類は焼成後製品と素焼製品が混在している。

調査区中央よりやや南側に寄った箇所にヒューム管が東西方向に埋設されている状況が確認され、その北側には焼土を含む土器や焼台の堆積層が検出された。ヒューム管の南側においては焼台や焼締陶器を含む焼けた砂層が検出された。また、調査区南東端にサブトレンチを設けて掘り下げたところ、大量の窯道具や陶磁器類が出土した。

さらに北区西側に拡張区を設定し、東西方向に6.5m、南北方向に2.5～3.0mの範囲で調査区を広げた（西側拡張区）。

本調査区で発見された遺構としては、北区・南区で第1号遺構（物原）、西側拡張区で第2号遺構（窯の燃焼室の砂床か）、第3号遺構（第2号遺構の下層に分布する物原か）、第4号遺構（石組水路）が検出された。

### 第1号遺構（第7・8・9図、写真図版2）

**位置・重複関係等** 本遺構は調査区1、4、15で確認されている遺物集中区である。調査区1北区で第4号遺構に切られる。

**形態** 七面焼が集中して検出されたエリアを第1号遺構と命名した。第1次～第3次調査においては計5か所の遺物集中区が確認されているが（第1・6・7・8・9号遺構）、本遺構が最も広範囲に展開する。検出された範囲は東西方向で4.2m、南北方向で8.2mを測る。南北方向の広がり8.2mで収まるが、東西方向はさらに延伸していく。七面焼は表土下20～80cmの60cmの層厚で堆積する。

**時期** 1838年（七面製陶所開設年）～1871年（廃藩置県）。

**遺構の性格** 物原。堆積層は約60cmに及び、大量の陶磁器類や窯道具が出土した。

本遺構が第2号遺構に伴う物原か、その下層に展開する第3号遺構に伴う物原かは不詳である。第4号遺構が本遺構を切っていることから、七面製陶所開設から廃窯に至るまでの間に少なくとも1回は土地利用の変更が行われたことが窺われる。

### 第2号遺構（第7・8図、写真図版3）

**位置・重複関係等** 調査区1西側拡張区で確認された。第3号遺構の上層に構築され、東側は攪乱に切られる。中央に花崗岩製の礎石が検出されているが、これは近現代の所産である。

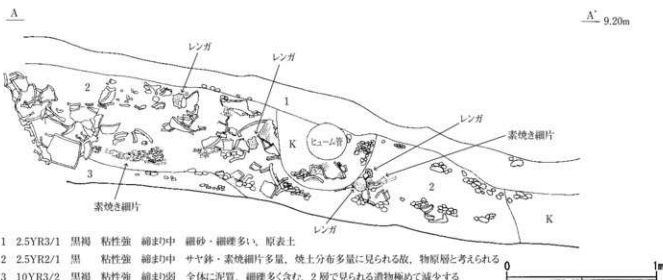
**形態** 表土下約20cmで検出される砂層の広がりを第2号遺構と命名した。砂層は東西方向に3.7m、南北方向に2.1mの範囲で検出され、南側は調査区外に延びていく。

**時期** 1838年（七面製陶所開設年）～1871年（廃藩置県）。

**遺構の性格** 窯関連遺構で砂が一定範囲に展開する状況としては、連房式登窯における燃焼室の砂床の可能性を指摘できる。本遺構を砂床とした場合、幅3.7m、奥行2.1m以上の燃焼室を有する窯が想定できる。七面製陶所と同様、水戸藩窯であった常陸太田市町田焼窯跡の発掘調査では、燃焼室の規模は幅約3m、奥行約130cmであるから、七面製陶所は町田焼窯より一回り大規模な燃焼室を有していたということになる。

「好文亭四季模様之図」「借楽園図」では、登窯が4室描かれている。本遺構がどの焼成室に





第9図 1号遺構（調査区1南区）土層断面図

該当するのかは定かではないが、本遺構より北側は急傾斜地で連房式登窯を構築するには適していないため、南側に展開していた可能性が高い。従って本遺構は、登窯最上段の焼成室の砂床を窺うことができよう。

### 第3号遺構（第7・8図、写真図版3）

**位置・重複関係等** 調査区1西側拡張区で確認された。第2号遺構の下層に構築されている。  
**形態** 西側拡張区南側に設定したL字状のサブトレンチ（幅30cm）を設定し、第2号遺構（砂床）を掘り下げたところ、20～25cm下層から七面焼の堆積層が、50cm下からは砂床とみられる砂層が検出された。今般の調査では第2号遺構の保護を優先し、第3号遺構についてはサブトレンチの土層堆積状況のみで確認するに止めたため、平面的な広がりには確認していない。  
**時期** 1838年（七面製陶所開設年）～1871年（廃藩置県）。  
**遺構の性格** 2号遺構と同様、連房式登窯の焼成室の砂床の可能性がある。2号遺構の下層に存在する状況が確認されたことから、2号遺構の前身となる窯が本遺構であったことが窺える。砂床の上層に堆積している多量の七面焼は、窯の作り替えに伴い、廃棄されたものと考えられる。  
 このことは七面製陶所の操業の来歴を復元するうえで重要な知見であるが、幅30cmのサブトレンチのみで得たわずかな所見に基づく考察であることは留意すべきであり、下層遺構の調査は今後の重要な課題として指摘しておきたい。

### 第4号遺構（第7・8図、写真図版3）

**位置・重複関係等** 調査区1北区と西側拡張区の間付近で確認された。遺構確認レベルは第3号遺構と同深度である。第1号遺構を切る。  
**形態** 凝灰質泥岩の切石を組み合わせた石組水路である。凹形に削り抜いた本体の上に蓋石を載せた状態で検出された。蓋石の残存状況は3枚分で、中央部分の蓋石1枚分は既に失われていた。蓋石1枚の寸法は長軸約60cm（2尺）、短軸約30cm（1尺）である。  
 規模は現況で長軸230cm、短軸30cmを測る。長軸は調査区外に南北方向に延伸していく。主

軸方位はN-3° -Wである。

**時期** 近世か。

**遺構の性格** 石組水路。規模、構造ともに第5号遺構（第2項参照）と同様であり、製陶所内に設置された暗渠構造の排水路と考えられる。連房式登窯（第2号遺構又は第3号遺構）の東側に設置された排水溝の可能性がある。一方、主軸方位が第3号遺構と大きく異なっていることは注視すべきである。すなわち第4号遺構が北西-南東軸であるが、第5号遺構は北東-南西軸を向き、対称をなしている。この事実は、第4号遺構と第5号遺構が同施設の排水路ではなく、別の窯や施設等に伴う排水路であることを示唆している。

## 第2項 調査区2の調査（第7・8図、写真図版3）

本調査区は、調査区1の北東側に約1m離れて、長さ14.0m、幅1.0mの範囲で東西方向に設定したものである。

発見された遺構としては、調査区西端で第5号遺構（凝灰質泥岩製の石組水路〔岩樋〕）が確認されるとともに、中央部で第6号遺構（遺物集中区）が検出された。

### 第5号遺構（第7・8図、写真図版4）

**位置・重複関係等** 調査区2で確認された。遺構確認レベルは地表下約20cmである。

**形態** 凝灰質泥岩の切石を組み合わせた石組水路である。凹形に削り抜いた本体の上に蓋石を載せた状態で検出された。蓋石の残存状況は一部のみで、北半分の蓋石は既に失われていた。

規模は現況で長軸90cm、短軸30cmを測る。長軸は調査区外に南北方向に延伸していく。主軸方位はN-1° -Eである。

**時期** 近世か。

**遺構の性格** 石組水路。規模、構造ともに第4号遺構（第1項参照）と同様であり、製陶所内に設置された暗渠構造の排水路と考えられる。一方、主軸方位が第3号遺構と大きく異なっていることは注視すべきである。すなわち第4号遺構が北西-南東軸であるが、第5号遺構は北東-南西軸を向き、対称をなしている。この事実は、第4号遺構と第5号遺構が同施設の排水路ではなく、別の窯や施設等に伴う排水路であることを示唆している。

### 第6号遺構（第7・8図、写真図版4）

**位置・重複関係等** 調査区2で確認された。

**形態** 第5号遺構の東側において、七面焼が集中して検出されたエリアを第6号遺構と命名した。遺物集中区の範囲は東西方向で1.7m、南北方向で1.0mである。南北方向は調査区外に延伸していく。

**時期** 1838年（七面製陶所開設年）～1871年（廃藩置県）。

**遺構の性格** 物原の一部か。本遺構の性格を窺ううえで注視すべきは第5号遺構の存在である。第5号遺構は窯や施設等に伴う排水路、すなわち境界施設である可能性が高い。第5号遺構の西には第1～3号遺構といった一連の窯関連遺構が検出されていることから、第5号遺構に伴う窯や施設は東側に展開していた可能性が高い。そして本遺構が窯製品の集中区であることを

鑑みると、第5号遺構の東側に窯が存在し、本遺構はその窯に伴う物原の一部と性格付けることができよう。

### 第3項 調査区3の調査 (第7・8図)

本調査区は、調査区1西側拡張区の南西端から約50cm離れて、長さ3.8m、幅1mの範囲で北西-南東方向に設定したものである。

表土除去時に近世瓦片が出土した。北側にヒューム管が横断している状況が確認されたが、遺構は確認されなかった。

### 第4項 調査区4の調査 (第7・8図)

本調査区は、調査区1南区の西側から約80cm離れて、長さ1.3m、幅1mの範囲で南北方向に設定したものである。

北側にヒューム管が横断している状況が確認された。遺構は第1号遺構(物原)が確認された。第1号遺構については第1項で一括記載している。

### 第5項 調査区5の調査 (第7・8図、写真図版4)

本調査区は、調査区1西側拡張区の北側に接する形で、長さ4.9m、幅1mの範囲で東西方向に設定したものである。

本調査区からは遺物はわずかに出土したものの、遺構は検出されなかった。

### 第6項 調査区6の調査 (第7・8図、写真図版4)

本調査区は、調査区3から南側に約2m離れた平坦部に、長さ3.0m、幅1mの範囲で東西方向に設定したものである。表土中からは七面焼片が多数出土し、本調査区直下に窯関連の遺構が包蔵されていることを期待していたが、後世の人為的な埋め戻し土が下層まで堆積しており、遺構は検出されなかった。表土下1mまで掘削している。

なお、覆土中からは第4号遺構・第5号遺構と同様の凝灰質泥岩製の切石が出土している。第4・5号遺構は窯に伴う排水溝と考えられることから、本調査区付近に同様の排水溝が設置されていた可能性を示唆している。

### 第7項 調査区7の調査 (第7図、写真図版4)

本調査区は、調査区6から西側に約1m離れた平坦部に、長さ3.7m、幅1.4mの範囲で東西方向に設定したものである。

調査区の過半が攪乱を受けていたものの、北西側から第7号遺構が検出された。

### 第7号遺構 (第7図、写真図版4)

**位置・重複関係等** 本遺構は調査区7の北西側で確認された遺物集中区である。東側及び南側は攪乱に切られる。

**形態** 表土下36cmのレベルにおいて、七面焼が集中して検出されたエリアを第7号遺構と命名した。第1次～第3次調査においては計5か所の遺物集中区が確認されているが（第1・6・7・8・9号遺構）、本遺構は1号遺構と8号遺構の中間地点に位置する。検出された範囲は東西方向で2m、南北方向で0.8mを測る。北西方向にさらに延伸していく。

**時期** 1838年（七面製陶所開設年）～1871年（廃藩置県）。

**遺構の性格** 物原か、多量の七面焼や窯道具が検出されたため、物原等の可能性が窺えるものの、西に隣接する調査区8では物原が検出されていないため、遺物集中区の広がりについては不明な点が多い。物原かどうかの確定に向けては、慎重を期す必要がある。

#### 第8項 調査区8の調査（第7図、写真図版4）

本調査区は、調査区7から西側に約1.5m離れた緩やかな斜面地に、長さ3.7m、幅1.4mの範囲で東西方向に設定したものである。

表土中からは近現代の陶磁器類、七面焼、窯道具等の破片が多数出土し、窯関連遺構の包蔵が期待されたが、表土下55～75cmで岩盤（凝灰岩）に当たり、遺構は検出されなかった。

#### 第9項 調査区9の調査（第7図、写真図版5）

本調査区は、調査区7・8から4～6m北側の斜面地に、長さ15m、幅1.5mの範囲で東西方向に設定したものである。

調査区西側では表土下約60～80cmまで掘削したところ、調査区西側では関東ローム層が検出されたが、中央部から東側にかけては礫混じりの土層が堆積していた。覆土中からは七面焼や窯道具と混じって近現代の遺物が出土したが、遺構は確認されなかった。

#### 第10項 調査区10の調査（第7図）

本調査区は、調査区8から南西側に約30cm離れた緩やかな斜面地に、長さ3m、幅1mの範囲で東西方向に設定したものである。

表土下約30cmまで掘削したところ、黒色粘質土に礫が混じる無遺物層に到達した。覆土中からは七面焼、窯道具等の破片が出土したが、遺構は検出されなかった。

#### 第11項 調査区11の調査（第7・8図、写真図版5）

本調査区は、調査区1西側拡張区・調査区3・調査区4のほぼ中間に、長さ1.5m、幅1mの範囲で北西～南東方向に設定したものである。

本調査区は1号遺構（物原）の広がりを確認するために設定した。中央にヒューム管が走っている。表土下50cmまで掘削した結果、礫混じりの砂層（地山）が検出されたのみで、遺構は検出されなかった。

#### 第12項 調査区12の調査（第7図、写真図版5）

本調査区は、調査区6・7の南方約2～3mの平坦地に、長さ約6m、幅約50cmの範囲で東

西方向に設定したものである。

表土下約60～90cmまで掘削し、覆土中から七面焼や窯道具が出土したものの、遺構は確認されなかった。地山は礫混じりの砂層である。

### 第13項 調査区13の調査（第7図、写真図版5）

本調査区は、調査区10の西方約4mの斜面地に、長さ7.8m、幅1mの範囲で東西方向に設定したものである。

調査区中央～東側にかけては、現代のごみによる攪乱が著しい。西側については、表土直下から多量の窯道具とともに、素焼きの七面焼製品が出土した。さらに掘削を進めた結果、素焼きの遺物を中心とする物原層（第8号遺構）が確認された。

調査区南側にサブトレンチを設定し、表土下160cmまで掘り下げたところ、礫層の広がりが検出されるとともに、湧水が確認された。

### 第8号遺構（第7図、写真図版5）

**位置・重複関係等** 本遺構は調査区13の北西側で確認された遺物集中区である。

**形態** 表土下約60～70cmのレベルにおいて、七面焼が集中して検出されたエリアを第8号遺構と命名した。第1次～第3次調査においては計5か所の遺物集中区が確認されているが（第1・6・7・8・9号遺構）、本遺構は7号遺構と9号遺構の中間地点に位置する。検出された範囲は東西方向で2m、南北方向で0.7mを測る。北西方向にさらに延伸していく。

**時期** 1838年（七面焼陶所開設年）～1871年（廃藩置県）。

**遺構の性格** 物原か。多量の七面焼や窯道具が検出された。本遺構から検出された七面焼は素焼製品が多く、他の物原との顕著な偏差が認められる。

### 第14項 調査区14の調査（第7図、写真図版6）

本調査区は、常磐神社の階段東脇の斜面地に、長さ10m、幅1mの範囲で東西方向に設定したものである。

表土下40cmまで掘削したところ、地山である礫混じりの砂層が検出された。七面焼は全く検出されず、近現代の時期類が出土したに止まった。遺構も検出されなかった。

### 第15項 調査区15の調査（第7・8図）

本調査区は、調査区1中央部の東方約70cmに、長さ1.4m、幅1.1mの範囲で東西方向に設定したものである。

中央に土管が走り、土管東側で物原（第1号遺構）が検出された。検出レベルは表土下約40～50cmである。

第1号遺構については第1項で一括記載している。

### 第3節 第2・3次調査—C・D地点の調査—

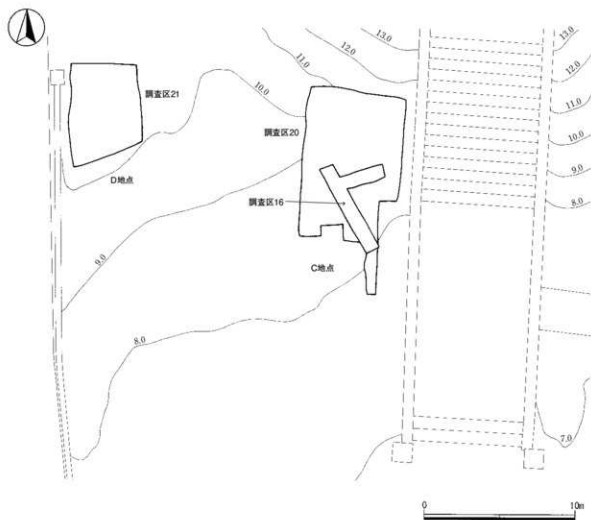
第2・3次調査は、「好文亭四季模様之図」「借楽園図」に描かれた4基の登窯のうち、「白やきせ戸や」という注釈が付された西側の2基が存すると思われる地点、すなわち常磐神社南参道階段の西側の2地点を調査対象とした。0.5～7mのエリアをC地点（調査区16・20）、階段西側約18～23mのエリアをD地点（調査区21）と呼称している。

第2次調査では調査区16（調査時はトレンチ16と呼称）、第3次調査では調査区20・21（調査時は20・21区と呼称）を調査した。調査区16と20は調査範囲が重複する。

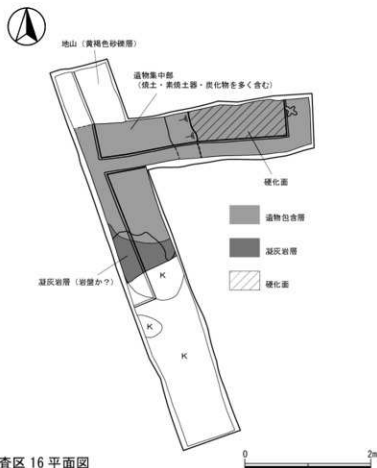
なお、調査区17・18・19は欠番である。

#### 第1項 調査区16の調査（第10・11図、写真図版6・7）

本調査区は、西側の登窯の所在を確認するため、常磐神社階段の西側斜面に、幅1mで、東西約2.1m、南北約6.3mの範囲でT字形に設定したものである。



第10図 調査区16・20・21配置図



第11図 調査区16平面図

掘削の結果、表土下50～60cmのレベルで、多量の遺物を包含している物原（第9号遺構、遺構の記載は第2項を参照）を検出した。物原からは、焼締陶器や素焼製品とともに、磁器の破片や窯道具が多数出土した。出土遺物の総量は遺物収納箱3箱分程度であったが、うち磁器の破片が30点以上出土しており、磁器の出土率はA・B両地点の出土率より高いことが窺えた。

しかし、第2次調査は所与の事情から調査区16のみの調査で、部分的な確認調査に止まったため、登窯の有無及び遺存状況を把握するためには、面的な調査が必要と判断された。

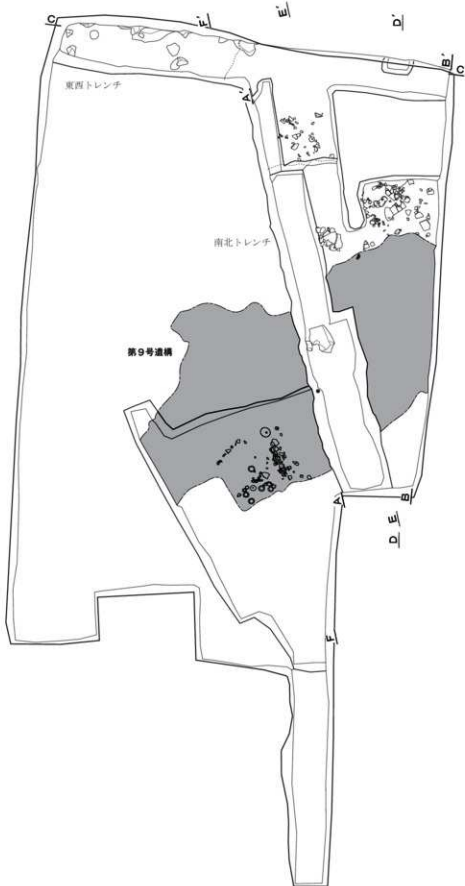
そのため、第3次調査においては、調査区16をほぼ包み込むような形で調査区20を設定し、面的な把握を試みた。

## 第2項 調査区20の調査（第10・12～14図、写真図版7～10）

本調査区は前述のように、第2次調査（調査区16）の結果を踏まえ、調査区16で検出された遺物集中区の広がりやさらに把握するとともに、周辺の状況を確認するために設定したものである。第1次・第2次調査の調査法がトレンチ調査であったのに対し、第3次調査（調査区20・21）では面的な把握を試みるため、広範囲の調査区を設定する調査法に切り替えることとした。

本調査区の規模は東西約7m、南北約10mで、南側にサブトレンチを一部突出させている。南北の高低差は約2m強である。

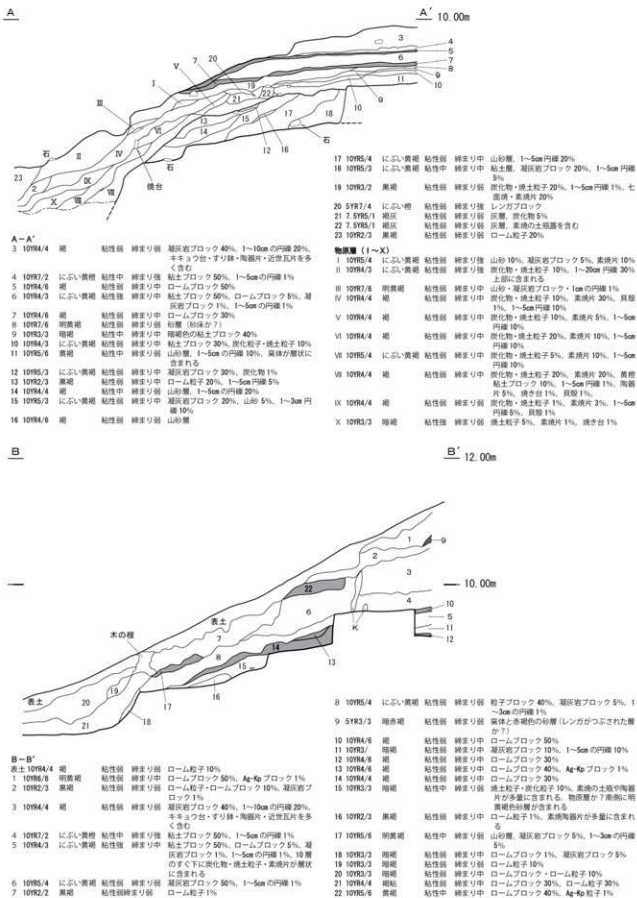
遺構としては、調査区中央部で物原（第9号遺構）を確認している。



第12図 調査区20平面図





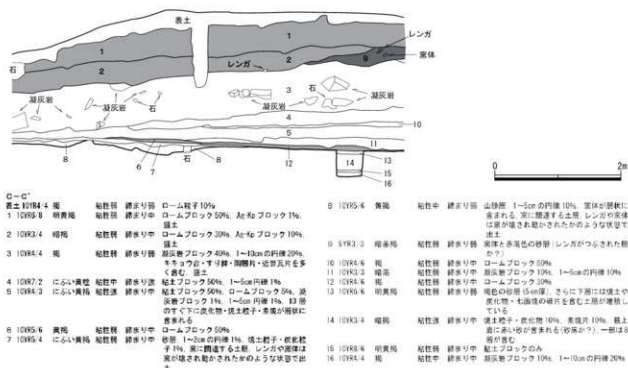


第13図 調査区20土層断面図(1)



C

C' 12.00m



第14図 調査区20土層断面図(2)

さらに本調査区の土層堆積状況を確認するため、長さ6m、幅1~0.4mのサブトレッチ(南北トレッチと呼称)を1本、調査区北壁に沿って幅0.9mのサブトレッチ(東西トレッチと呼称)をそれぞれ1本設定し、人為堆積層はもとより、地山層も一部掘削した。この2本のサブトレッチ及び調査区東壁の3本のセクション図については、七面製陶所の土地利用を窺う上で注視すべき情報があるため、本項の中でその様相を説明する。

### 東西トレッチの様相 (C-C' ライン/第14図、写真図版8・9)

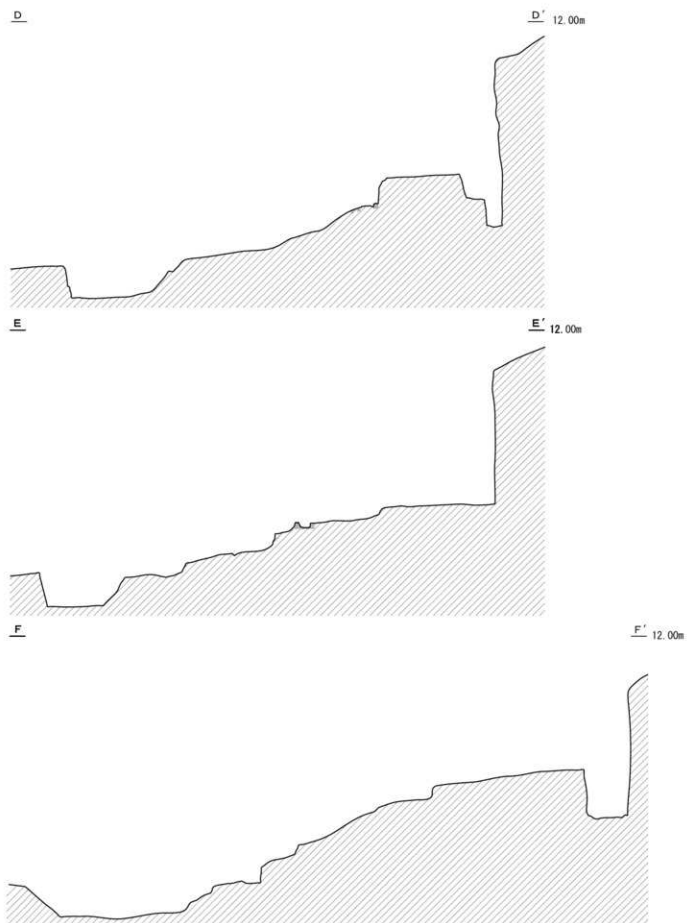
表土下約20cmで分厚い盛土層(1~4・9層、以下「盛土層①」と呼称する)が確認された。凝灰質泥岩の破片や七面焼、煉瓦などが含まれている。層厚は140~110cmである。本調査区ではこの盛土層を全面的に掘削し、その下層はサブトレッチにより適宜掘削する調査法を採用している。

盛土層①の下層には、さらに盛土層(5・10~12層、以下「盛土層②」と呼称する)が堆積する。東から西に向かって薄く堆積しており、層厚は東側が約40cm、西側は約10cmである。

盛土層②の下層には、さらに盛土層(7・8・13~16層、以下「盛土層③」と呼称する)が堆積する。層厚は50cm以上である。

盛土層③のうち、7・8層は窯体や七面焼が集中して堆積している層であり、物原の一部の可能性もある。13~16層は東西トレッチ東側に幅40cmのサブトレッチを設定して土層確認をしたのみで、具体的な堆積状況は明かではなく、さらに下層に盛土層③が続く可能性もある。

以上のように、本トレッチでは表土下20cmから2m50cm以上、近世以降の盛土層が堆積する



第15図 調査区20 エレベーション図



ことが明らかとなった。この分厚い盛土層は一時期に堆積したのではなく、相応の時期差があるものと思われる。本トレンチでは一部遺物の層位上げを実施していることから、盛土の年代観を考察することが可能である。この点については次書（総括編）で報告することとした。

### 南北トレンチの様相 (A-A' ライン/第13図上、写真図版8・9)

本トレンチは、調査区20に堆積する盛土層①の一部を掘削後、調査区中央を縦断するように設定したものである。

なお、本書では東西トレンチ・南北トレンチ・調査区東壁の3本のセクション図を図示しているが、各セクション図で土層No.の統一が図られていない。本来ならば現場又は整理段階で統一のうえ報告すべきであったが、所与の事情により統一が困難な状況となったことを断っておきたい。一方、各セクション図間の整合性を図る作業は必須であることから、東西トレンチにおいて整理した盛土層①・②・③という大別を南北トレンチ及び、調査区東側のセクション図にも適用した。煩雑であることは否めないが、本文と図版とを突合することにより3本の土層堆積の関連性を窺うことは可能であり、ひとまずの責を塞ぎたいと思う。

さて、南北トレンチでは、3・4層が盛土層①に相当する。前述のように盛土層①の一部は既に掘削された後であるため、本トレンチでは盛土層①の確認は北側の一部に止まっている。

盛土層②に相当する土層は、5・6・7・19層である。盛土層②が物原層I～X（第9号遺構）をバックしていることが窺える。層厚は約40cmである。

盛土層③に相当する土層は、8～11である。11層は南北トレンチで窠体や七面焼が多量に包含される8層に相当する。東西トレンチにおいても窠体が包含される。本盛土層は物原層（第9号遺構）に切られていることから、窠が少なくとも1回以上作り替えられている可能性が指摘できる。こうした窠の作り替えの痕跡は、第1次調査A地点の調査区1でも確認されているところである（前節第1項参照）。

20～22層は、盛土層③と物原層（第9号遺構）の中間に位置しているが、堆積状況がやや荒れており、盛土層③と物原層のどちらに帰属するかは明確ではない。

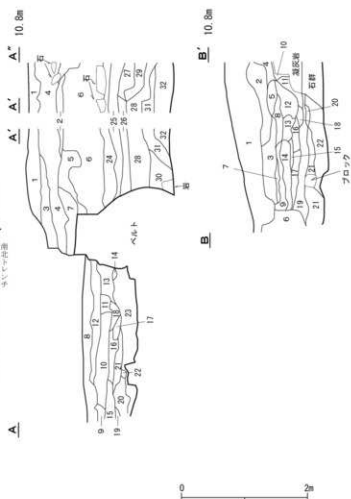
盛土層③層の下に堆積するのが13～18層である。本層が人為堆積であるのか、自然堆積であるのかは判然としない。本調査区は傾斜地であり、自然流土の可能性もある。遺物は確認されていない。

### 東壁セクションの様相 (B-B' ライン/第13図下)

表土下約20cmで、盛土層①（1～4・6～8・17～20層が相当）が堆積する。層厚は最大130cmである。

盛土層②は、5・10～14層が相当する。掘削が一部のため層厚は不詳だが、15層直上では約10cmしかなく、調査区中央付近で盛土が途切れていく。こうした様相は南北トレンチでも同様である。

盛土層②の下に堆積する15・16層は、第9号遺構の物原層である。盛土層②にバックされている状況が窺える。



**A-A'**

1 10YR5/6 黄褐色	粘性弱	締まり中	ロームブロック40%, Ag-6pブロック10%, 5-15cm礫1%
2 10YR2/3 暗褐色	粘性弱	締まり中	凝灰岩ブロック1%, 1cm礫5%
3 10YR2/4 暗褐色	粘性弱	締まり強	ローム粒子・ロームブロック30%, 凝灰岩ブロック1%, 1-5cm礫10%
4 10YR2/3 暗褐色	粘性弱	締まり強	ローム粒子1%, 凝灰岩ブロック20%, 1-5cm礫1%, 炭化物1%
5 10YR4/3 にぶい黄褐色	粘性弱	締まり中	ローム粒子1%, 1-5cm礫10%, 白色粒子5%
6 10YR2/2 黒褐色	粘性弱	締まり中	ローム粒子10%
7 10YR4/4 黄褐色	粘性弱	締まり中	1-10cm礫20%, 七面洗少量含む
8 10YR6/6 明黄褐色	粘性弱	締まり中	ロームブロック50%, Ag-6pブロック1%
9 10YR2/4 暗褐色	粘性弱	締まり中	ローム粒子・ロームブロック1%, 1cm礫1%
10 10YR4/6 黄褐色	粘性弱	締まり弱	山砂, ロームブロック10%, 1-5cm礫20%
11 10YR2/3 暗褐色	粘性弱	締まり中	ローム粒子1%
12 10YR2/2 黒褐色	粘性弱	締まり中	ローム粒子1%
13 10YR2/4 暗褐色	粘性弱	締まり弱	ローム粒子・ロームブロック30%, Ag-6pブロック1%
14 10YR4/4 黄褐色	粘性弱	締まり中	山砂, 炭化物1%
15 10YR2/4 暗褐色	粘性弱	締まり中	ロームブロック20%
16 10YR4/4 黄褐色	粘性弱	締まり強	かたい土状態
17 10YR5/6 黄褐色	粘性弱	締まり強	ロームブロック50%
18 10YR2/4 暗褐色	粘性弱	締まり強	ロームブロック30%, 上に1-5cm礫が散らされている状態
19 10YR2/3 暗褐色	粘性弱	締まり強	ロームブロック1%, 炭化物1%
20 10YR5/8 黄褐色	粘性弱	締まり強	ロームブロック40%
21 10YR4/4 黄褐色	粘性弱	締まり中	ローム粒子・ロームブロック30%
22 10YR5/8 黄褐色	粘性弱	締まり強	ロームブロック50%
23 10YR4/4 黄褐色	粘性弱	締まり中	山砂, 凝灰岩ブロック30%, 1-10cm礫20%
24 10YR2/4 暗褐色	粘性中	締まり中	凝灰岩ブロック5%, 凝灰岩切り石1%, 1-10cm礫5%, 炭化物1%
25 10YR6/3 にぶい黄褐色	粘性弱	締まり弱	凝灰岩ブロック40%, 1-5cm礫5%
26 10YR2/3 暗褐色	粘性中	締まり弱	山砂, 1-2cm礫1%, 炭化物1%
27 10YR2/3 暗褐色	粘性中	締まり弱	凝灰岩ブロック20%, 1-5cm礫10%
28 10YR2/3 暗褐色(磁器)	粘性強	締まり強	1-20cm礫50%
29 10YR2/3 暗褐色	粘性強	締まり強	1-5cm礫50%
30 10YR2/3 黒褐色	粘性中	締まり弱	白色粒子1%
31 10YR2/3 黒褐色	粘性強	締まり中	0.5-5cm礫10%
32 10YR2/2 黒褐色	粘性強	締まり強	凝灰岩ブロック20%, 1-5cm礫10%

**B-B'**

1 10YR2/2 黒褐色	粘性弱	締まり弱	黄土
2 10YR2/2 黒褐色	粘性弱	締まり弱	ローム粒子1%
3 10YR4/4 黄褐色	粘性弱	締まり弱	砂まじり土
4 10YR2/3 暗褐色	粘性弱	締まり中	ローム粒子1%
5 7.5YR4/3 暗褐色	粘性中	締まり中	ロームブロック25%, ローム粒子25%
6 10YR3/3 暗褐色	粘性弱	締まり中	擾乱
7 10YR3/4 暗褐色	粘性弱	締まり弱	ローム粒子2%
8 10YR3/4 暗褐色	粘性弱	締まり中	ローム粒子3%
9 7.5YR4/4 暗褐色	粘性弱	締まり弱	砂質土
10 7.5YR2/2 黒褐色	粘性中	締まり中	ローム粒子1%, 石組織成土
11 7.5YR2/1 黒褐色	粘性弱	締まり中	ローム粒子5%, 砂まじり土
12 7.5YR2/2 黒褐色	粘性弱	締まり中	ロームブロック・ローム粒子5%, 砂まじり土
13 7.5YR2/2 暗褐色	粘性弱	締まり中	ローム粒子1%
14 7.5YR4/4 黄褐色	粘性弱	締まり中	砂質土
15 7.5YR1/1 黒褐色	粘性中	締まり中	ローム粒子1%
16 7.5YR4/6 黄褐色	粘性中	締まり中	ローム粒子・ロームブロック7%, 砂まじり土
17 7.5YR4/4 黄褐色	粘性強	締まり中	ロームブロック40%
18 7.5YR2/2 暗褐色	粘性中	締まり中	ローム粒子2%
19 7.5YR2/2 暗褐色	粘性中	締まり中	ロームブロック・ローム粒子10%
20 10YR2/3 暗褐色	粘性中	締まり中	ローム粒子1%, 粘質土
21 7.5YR2/3 暗褐色	粘性中	締まり中	ロームブロック・ローム粒子3%
22 7.5YR4/3 暗褐色	粘性弱	締まり弱	礫層

第16図 調査区21平面図・土層断面図(1)

### 第9号遺構 (第12図、写真図版10)

**位置・重複関係等** 本遺構は調査区20の中央付近で確認された遺物集中区である。盛土層③を切り、盛土層②にバックされている。

**形態** 表土下約60～70cmのレベルにおいて、七面焼が集中して検出されたエリアを第9号遺構と命名した。第1次～第3次調査においては計5か所の遺物集中区が確認されているが(第1・6・7・8・9号遺構)、本遺構は最も西側の遺物集中区である。検出された範囲は東西方向で5.3m、南北方向で3.2mを測る。東方向(常磐神社階段下方向)にさらに延伸していく。

**時期** 1838年(七面製陶所開設年)以降。

**遺構の性格** 物原。第1号遺構は西側に焼成室の砂床と思しき遺構(第2号遺構)が検出されていたが、本遺構の周辺からは窯本体に係る痕跡は検出されなかった。物原が調査区東側に寄っていることから、それに伴う窯は常磐神社階段直下周辺に存していたものと考えられる。

### 第3項 調査区21の調査 (第10・16・17図、写真図版11・12)

本調査区(D地区)は、第1～3次調査で最も西側に設定した調査区である。常磐神社南側階段の西方約14m離れた場所に、東西5m、南北9mの範囲で設定した。

本調査区では表土が北側で約60cm、南側で約50cm堆積しており、表土層(B-B' 1層)を除去したところ、七面焼が検出される層(2～12層、以下「近代盛土層」と呼称する)が確認されたため、本盛土層を遺構確認面とした。更に調査区中央西側から東方向に長さ7m、幅70cmのサブトレンチ(以下「東西トレンチ」と呼称する)を1本、調査区南東側に東西1.9m、南北2.7mで、平面形状が逆三角形のサブトレンチ(以下「南北トレンチ」と呼称する。なお、現場段階では溝状プランが認められたことから、溝跡サブトレンチと呼称していた)を1本、南北トレンチの北側に基本層序を確認するための南北1.5m×東西1.2mのサブトレンチ(以下「基本層序確認トレンチ」と呼称する)を1本、それぞれ設定し、掘削を行った。

調査の結果、近世遺構は確認できなかったが、近世盛土層を確認した。また、各サブトレンチのセクション図は本遺跡の来歴を窺う重要なデータであることから、前項と同様に各サブトレンチの様相を以下に記す。

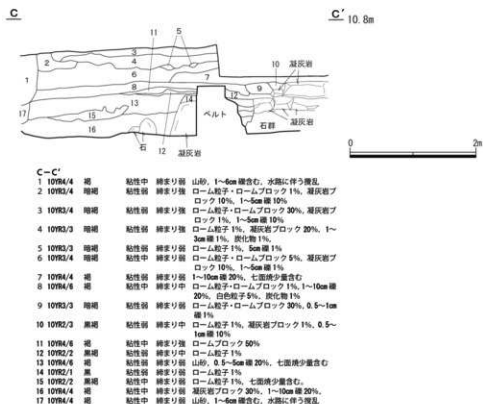
#### 東西トレンチの様相 (第15・16図、写真図版11・12)

本トレンチの様相については、第16図C-C'のうち、ベルト以西2.8m間のセクション図で示している。前述のように2～12層は近代盛土層である。その下層に堆積する盛土層(13～16層、以下「盛土層④」と呼称する)については、近世の所産である可能性が高い。近代盛土倉の層厚は約80cm、盛土層④の層厚は110cmである。

#### 南北トレンチの様相 (第15・16図、写真図版11・12)

本トレンチの様相については、第16図C-C'のうち、ベルト以東1.7m間のセクション図、第15図A-A'のうち、ベルト以南2.6m間のセクション図、第15図B-B'で示している。

表土層(B-B' 1層)を除去すると、近代盛土層(A-A' 8層、B-B' 2～9層、C-C' 2～12層が相当)が堆積する。層厚は40cmである。C-C'ラインの東側には凝灰質泥岩の切石が積み



第17図 調査区21土層断面図(2)

重ねられた状況が窺える。

この切石の性格は明かではないが、発掘調査時は七面製陶所跡廃絶後に造営された近代建物『常磐公園攬勝図誌』では、常磐神社鳥居付近の「温泉」脇に二階建の建造物がある)の基礎ではないかと想定されていた。

近代盛土層下に堆積する盛土層④は、A-A' 9~23層、B-B' 10~22層が相当する。層厚は約70cmである。

### 基本層序確認トレンチの様相 (第16・17図、写真図版12)

本トレンチの様相については、第15図A-A'のうち、ベルト以北1.3m間のセクション図とそれに続くA'-A''で示している。

表土層(1層)を除去すると、近代盛土層(1~7層が相当)が堆積する。本トレンチの近代盛土層の層厚は約1mを測る。

近代盛土層下に堆積する盛土層④は、24~27層が相当する。層厚は約50cmである。

盛土層④の下層には、砂利層(28・29層)→黒褐色土層(30・31・32層)が堆積する状況が窺えた。これらの層が人為堆積であるのか、自然堆積であるのかは判断としない。本調査区は緩やかな傾斜地形をなしており、自然流土の可能性もある。遺物は確認されていない。

(関口)

## 第IV章 出土した遺物

### 第1節 概要

第1次～第3次調査では、大量の陶磁器・土器や窯道具類が出土した。特に物原が検出された調査区では多くの遺物が検出されている。

本報告書では、これらの遺物のうち七面焼の様相を窺ううえで有用と考えられる主要な出土遺物 547 点を抽出し、実測図・観察表・写真図版を掲載した。なお、出土遺物の大半を占める未掲載遺物については、今後刊行予定の総括編で遺物集計表とともにその様相を報告することとした。

抽出遺物の概要（内訳）は次のとおりである。

#### 抽出遺物の概要（内訳）

##### 調査区 1

磁器（本焼）：3点  
磁器（素焼）：4点  
焼締陶器（本焼）：29点  
焼締陶器（素焼）：3点  
陶器（本焼）：2点  
不明（素焼）：3点  
窯道具：65点  
窯体：1点  
七面焼以外の製品：4点

##### 調査区 2

七面焼以外の製品：2点

##### 調査区 3

抽出遺物なし

##### 調査区 4

磁器（本焼）：1点  
焼締陶器（本焼）：1点  
窯道具：1点

##### 調査区 5

抽出遺物なし

##### 調査区 6

陶器（本焼）：1点  
窯道具：1点

石製品：1点

##### 調査区 7～8

抽出遺物なし

##### 調査区 9

七面焼以外の製品：1点

##### 調査区 10～11

抽出遺物なし

##### 調査区 13

焼締陶器（本焼）：5点  
焼締陶器（素焼）：8点  
土器：2点  
素焼製品：2点

窯道具：1点

窯体：1点

金属製品：5点

##### 調査区 14

窯関連資料：1点  
七面焼以外の製品：1点

##### 調査区 15

窯道具：1点

##### 調査区 16・20

磁器（本焼）：19点  
磁器（素焼）：1点

陶器（本焼）：109点

陶器（素焼）：20点

焼締陶器（本焼）：25点

焼締陶器（素焼）：18点

素焼製品：56点

土器・土製品：2点

窯道具：68点

窯体：3点

窯関連資料：7点

七面焼以外の製品：20点

金属製品（銭貨）：3点

##### 調査区 21

磁器（本焼）：4点

陶器（本焼）：2点

陶器（素焼）：10点

焼締陶器（本焼）：3点

焼締陶器（素焼）：2点

土器・土製品：1点

素焼製品：3点

窯道具：6点

窯関連資料：6点

七面焼以外の製品：9点



## 第2節 第1次調査（A・B地点）出土の遺物

### 第1項 調査区1出土の遺物（第18～32図、第3・4表、写真図版13～25）

#### 磁器（本焼）

3点を掲載した。1は口唇部がわずかに外反する本焼の端反碗である。当該時期の瀬戸・美濃産端反碗と器形が相似する。2は瓶としたが、器形から推測すると大型の鶴首徳利の可能性もある。胎土は乳白色を呈するが、肥前産や瀬戸・美濃産磁器と比べるとやや灰色がかかる。一方、胎土のキメは瀬戸・美濃産に比べて緻密で、重みがあるのが特色である。6は蓋物蓋。胎土は2よりも明るい白色を呈するが、キメは2よりも粗く、3に近い。流麗な筆致の染付である。

#### 磁器（素焼）

4点を掲載した。3～4は碗である。3は広東碗で、器形は肥前産広東碗とよく相似する。胎土はピンクがかった乳褐色を呈する。胎土のキメは比較的密である。絵付は認められていない。4は端反碗である。1より口唇部の反りが若干強く、薄手である。器形が相似する。

27は変形角皿である。内面に兵須絵付がある。3と同様、ピンクがかった乳白色を呈する。磁器素焼は白味やピンク味のある素地が特色である。

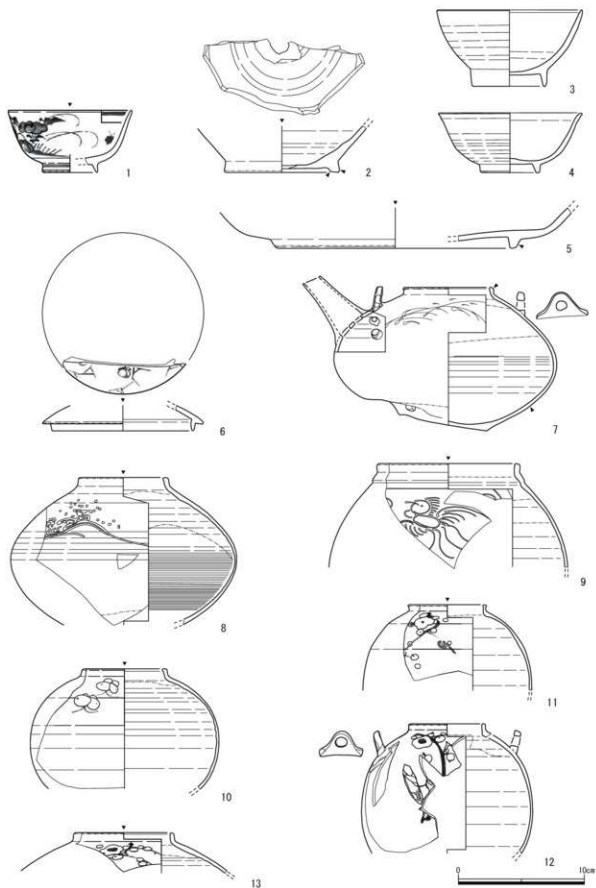
20は瓶である。「瓢箪内に借楽園」の銘款が腰部に押されている。「借楽園」の銘款は、茶器といったハレの日に使用する上質な製品に押される傾向がある。

#### 焼締陶器（本焼）

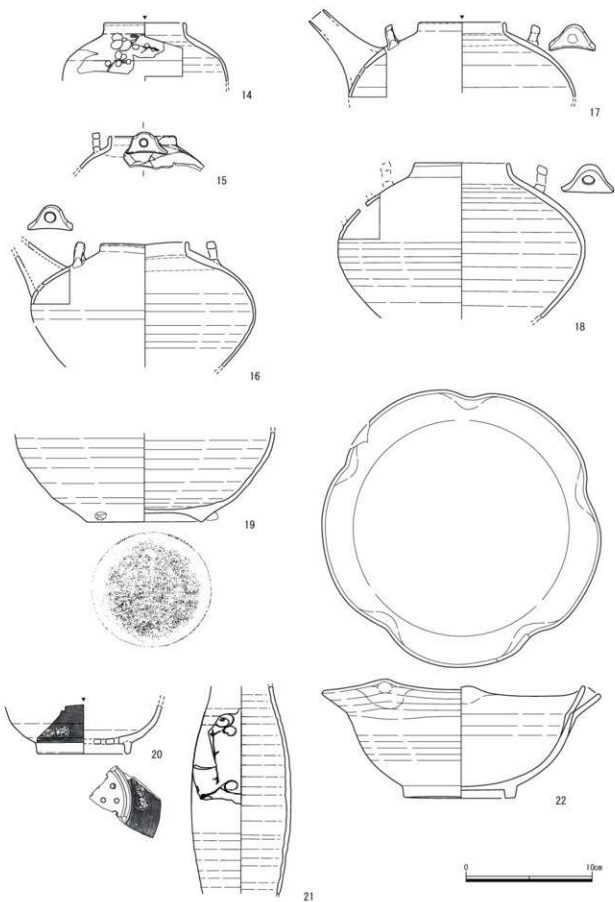
29点を掲載した。内訳は大皿1点、土瓶11点、燗徳利1点、碗3点、土瓶蓋5点、鍋1点、片口鉢1点である。

5は表土出土の大皿である。一見すると磁器のような緻密な胎土を呈する。やや緑色がかった灰釉が掛かる。貫入あり、畳付・高台内無釉。

7～17・33～38は土瓶である。7は緻密な胎土、緑色がかった灰釉、伊賀焼を想起させるような薄手で算盤玉形の器形、イッチンによる絵付という、七面焼土瓶の典型例の一つである。8はイッチンによる流麗な波千鳥文が描かれる。七面焼の絵付の特色の一つである。9は調査区一括。口縁部に段が付くのが特色である。細い筆致とイッチンによる鳥文が描かれる。10～14・34・36は梅樹文、15は氷裂梅樹文土瓶である。枝部分を鉄絵、梅花部分を白泥で描く。梅樹文土瓶は七面焼の中でも極めて多い。借楽園のシンボルともいえる梅を文様にあしらひ、借楽園ブランドを七面焼に付すという、斉昭のしたたかな戦略が窺えよう。なお、梅樹文の土瓶は算盤玉形ではなく、丸形が多いのも特色である。16は青磁釉の土瓶である。算盤玉形で注口内面は3穴。文様はなく、青磁のシンプルな上質さが表現されている。17はうのふ釉の土瓶である。注口内面は4口。胎土は灰褐色で、標準的な七面焼土瓶の胎土食（灰白色）より暗めである。キメもやや粗い。33は注口のみで、内部は3穴である。38はやや小ぶりの隠元形土瓶で、フォルムとしては比較的珍しい。青磁釉で、イッチンによる花文が描かれる。35は受部が立ち上がる変更土瓶で、肩部の張りも強い。鉄絵で梅花文と思われる絵付が描かれるが、梅花が大ぶりであり、10～14・34に見られるような七面焼の典型的な梅樹文とは異なる。38は焼成不良の土瓶だが、フォルムは七面焼土瓶の典型である。注口内側は3穴。



第18図 調査区1出土遺物実測図(1)



第19図 調査区1出土遺物実測図(2)

21は梅樹文の爛徳利である。梅花の部分に鉄釉で下絵が描かれており、本来は白泥で塗り潰したものと考えられる。梅樹文のメインは土瓶であるが、このように爛徳利や、前述(磁器)6の蓋物にも使用されるなど、幅広く採用されたモチーフであることが窺える。

23・24・25は碗である。本来陶器や磁器で焼成されることが多い器形だが、七面焼が得意とする焼締により、薄手でシンプルな碗を焼成している。24は器形としては広東碗であるが、灰釉が全面に掛かり、貫入が入った無地の製品であり、中華色は失われている。25は青磁釉で、腰張・端反のやや珍しい器形をしている。

28～32は土瓶蓋である。28は灰釉にイッチン薄文、丸形摘み。29は灰釉に梅樹文、宝珠形摘み。30は灰釉にイッチン薄文、梅花形摘み。31・32はイッチン千鳥文に五弁花形摘み。摘みや絵付に多様なバリエーションがあることが窺える。土瓶蓋は本遺跡出土の完形遺物の中で最も多い器種であり、且つバリエーションが豊かなため、七面焼の様相を窺う重要な資料といえる。

40は鍋である。焼成不良のため詳細は不明であるが、土瓶と同様の薄作りの技法で製作されている。42は片口鉢である。胎土掛けで肉厚の器厚を呈する。一見瀬戸・美濃産陶器に相似する。

### 焼締陶器(素焼)

3点を掲載した。18・19は算盤玉形を呈する土瓶で、七面焼土瓶で一般的な器形である算盤玉形を呈する。胎土は乳褐色で磁器の素焼に一見相似するが、磁器が白色味を帯びるのに対し、焼締陶器は若干黄色がかっている。キメは緻密であり、重量感がある。七面製陶所では多くの素焼製品が出土するものの、薄手のものが多いため器形が復元可能なレベルまで接合できる例は少ない。こうした中、18・19は土瓶の素焼製品として稀少な事例である。

39は土瓶注口部のみで、内側は3口。

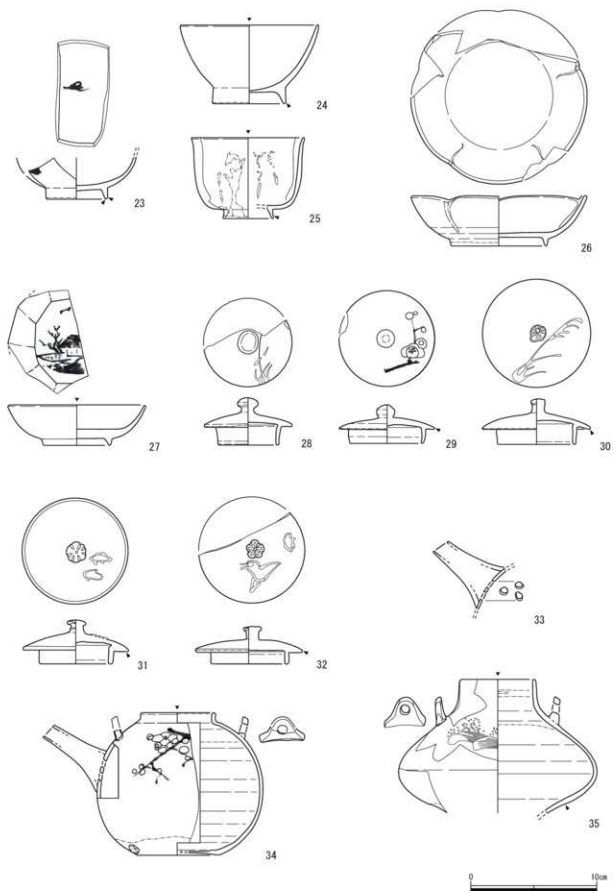
### 陶器(本焼)

2点を掲載した。41は行平鍋である。胎土は明褐色を呈し、焼締陶器の胎土より暗めで灰色がかかる。キメは密ではあるが、焼締陶器よりは粗い。底部は煤を意図的に塗っている。43は大振りの捏鉢である。銅緑釉流しで胎土は灰色がかかった灰黄褐色を呈する。

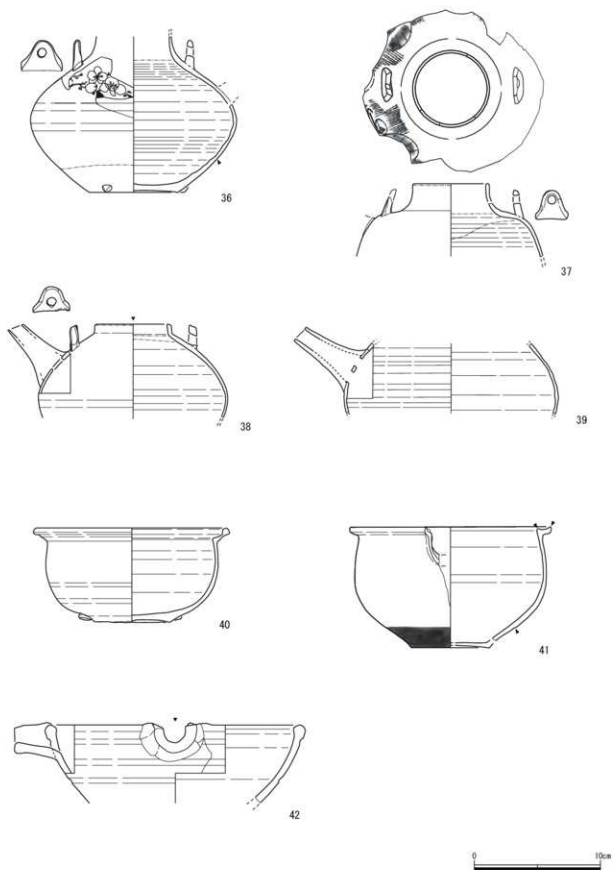
### 不明(素焼)

磁器・焼締陶器・陶器の別が不明な素焼製品を記す。3点を掲載した。22は折縁の輪花鉢、26は輪花皿である。比較的大ぶりの製品である。胎土が白味のある乳白色であり、どちらかというど磁器の胎土に近いことから、現段階では磁器を想定したい。

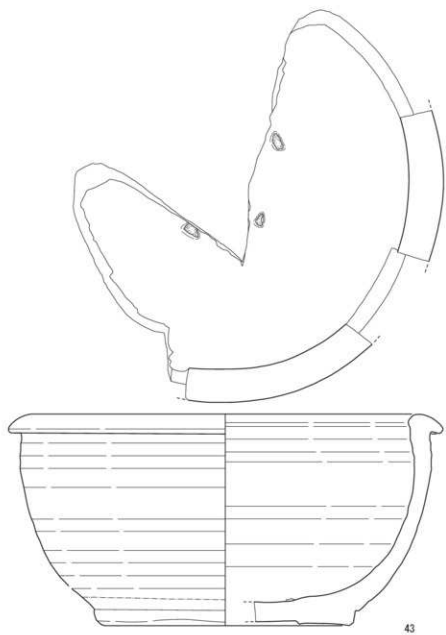
44は花生片で、20同様「瓢箪内に借楽園」の銘款が体部に押される。押印方向は斜位である。伝世品等の花生では縦位に押されている資料もあるが、工芸的嗜好の高い器種であることから、それぞれの焼物の風味により押印方向が変化するものと思われる。なお、本資料は第1次発掘調査で出土した初めての銘款である。モースコレクションで紀州借楽園焼とされていた銘款が、本資料の出土により七面焼であったことの証左となるなど(第2章第3節参照)、新聞等で大きく報道された。七面製陶所出土遺物の中でも最も著名な資料の一つである。ピンク味のある乳白色を呈する緻密な胎土であるなど、七面焼の磁器の特色をよく備えている。一方、伝世品を含め、これまで磁器の花生は七面焼製品では確認されていない。そのため、焼締陶器の素焼の可能性もある。類例として201・202を報告している。



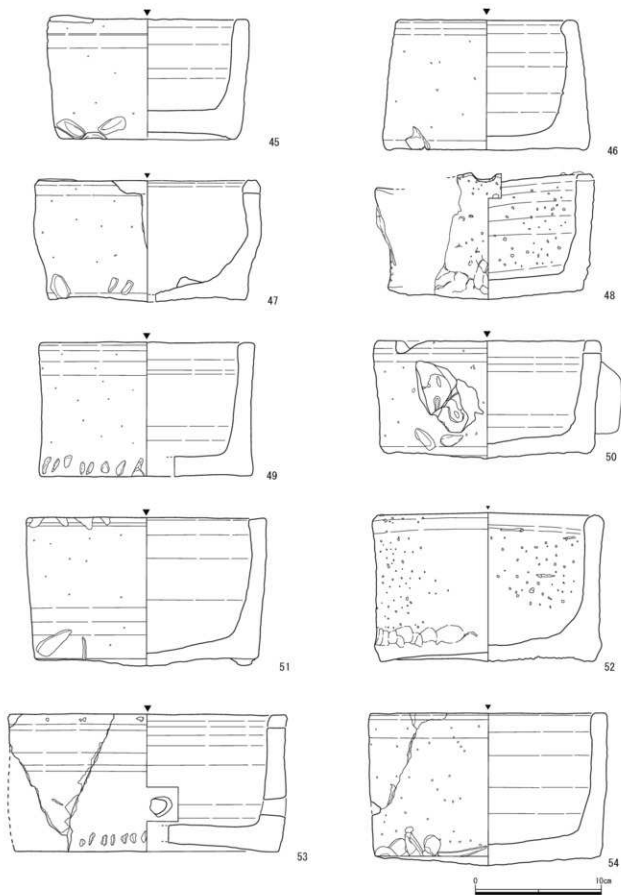
第20図 調査区1出土遺物実測図(3)



第21図 調査区1出土遺物実測図(4)

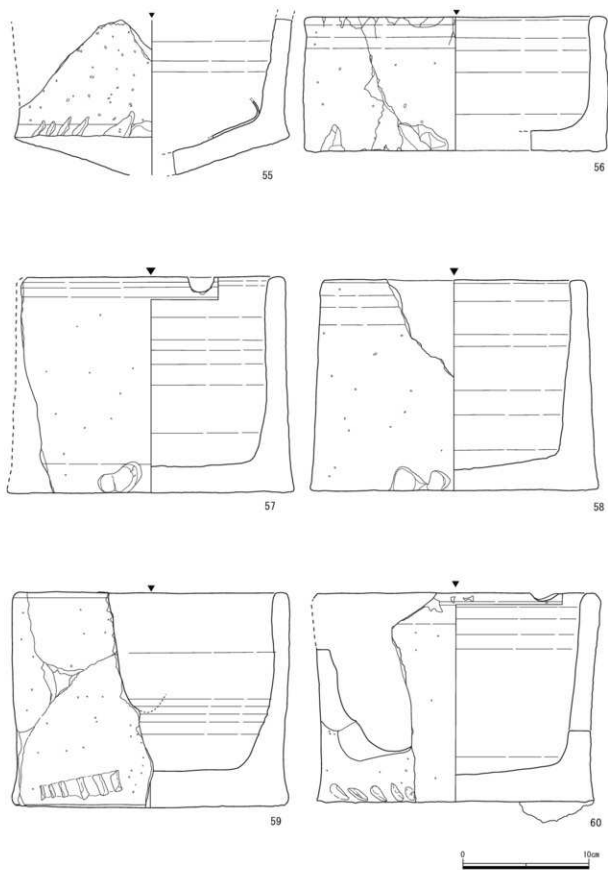


第22図 調査区1出土遺物実測図(5)

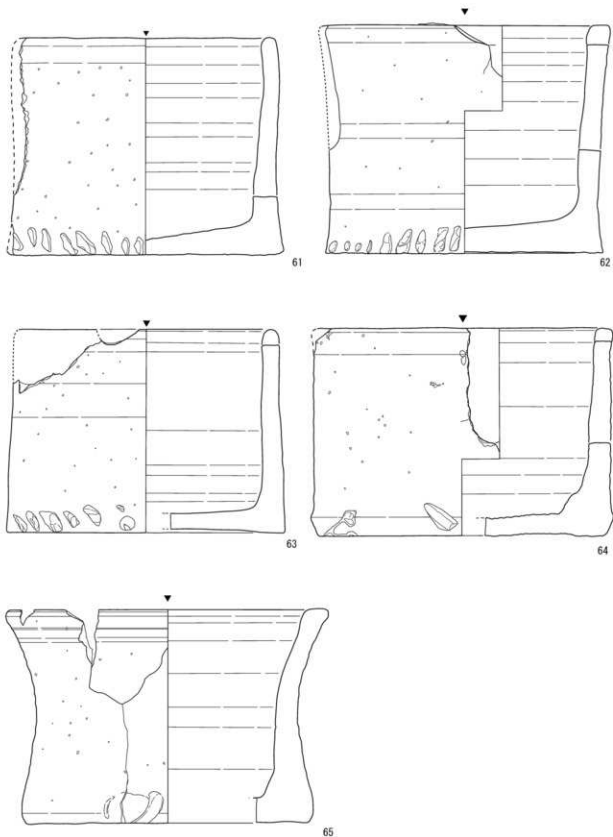


第23図 調査区1出土遺物実測図(6)

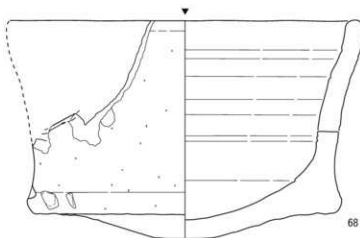
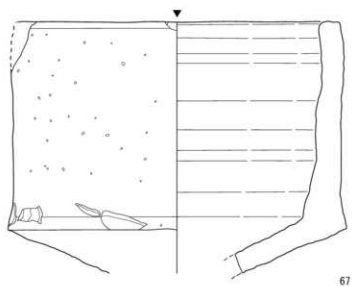




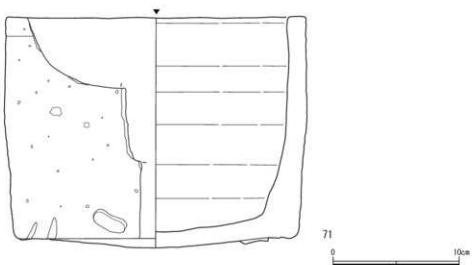
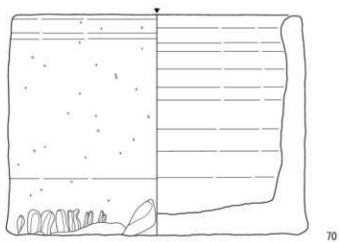
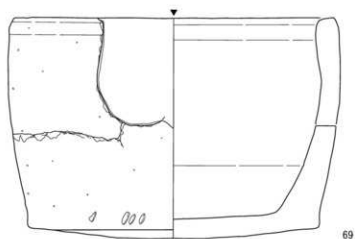
第24図 調査区1出土遺物実測図(7)



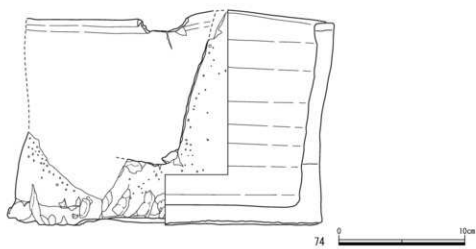
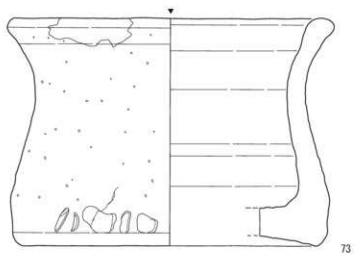
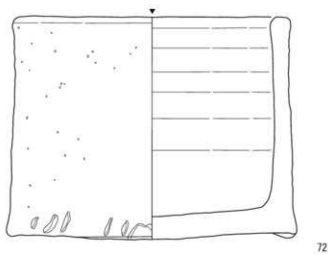
第25図 調査区1出土遺物実測図(8)



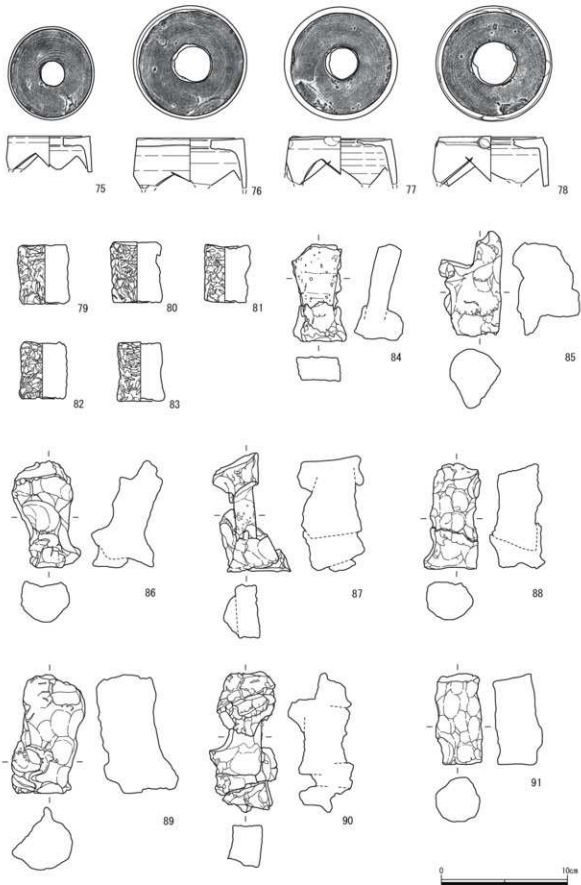
第26図 調査区1出土遺物実測図(9)



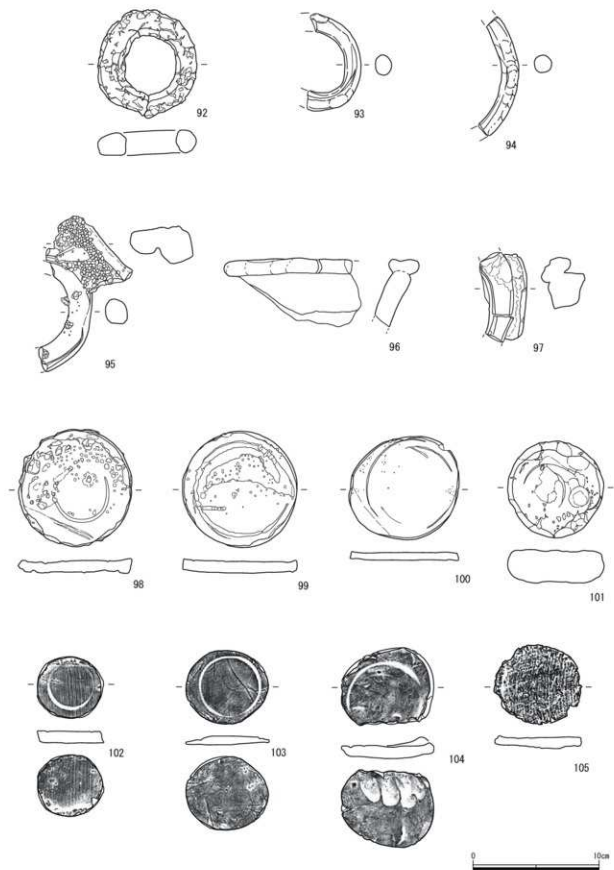
第27図 調査区1出土遺物実測図(10)



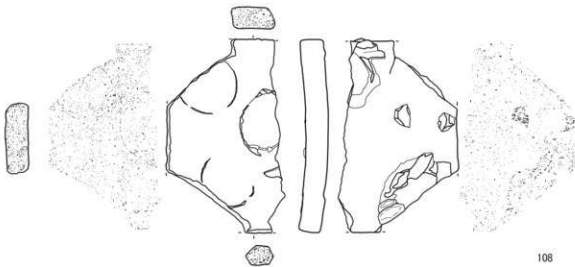
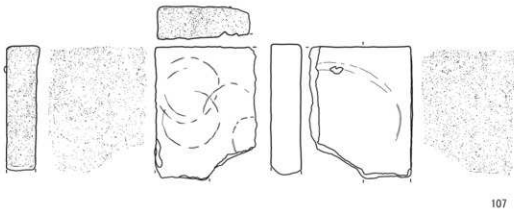
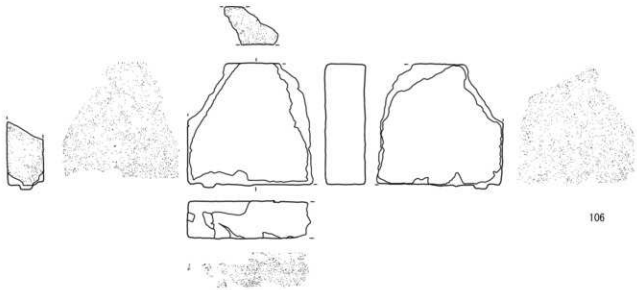
第28図 調査区1出土遺物実測図(11)



第29図 調査区1出土遺物実測図(12)

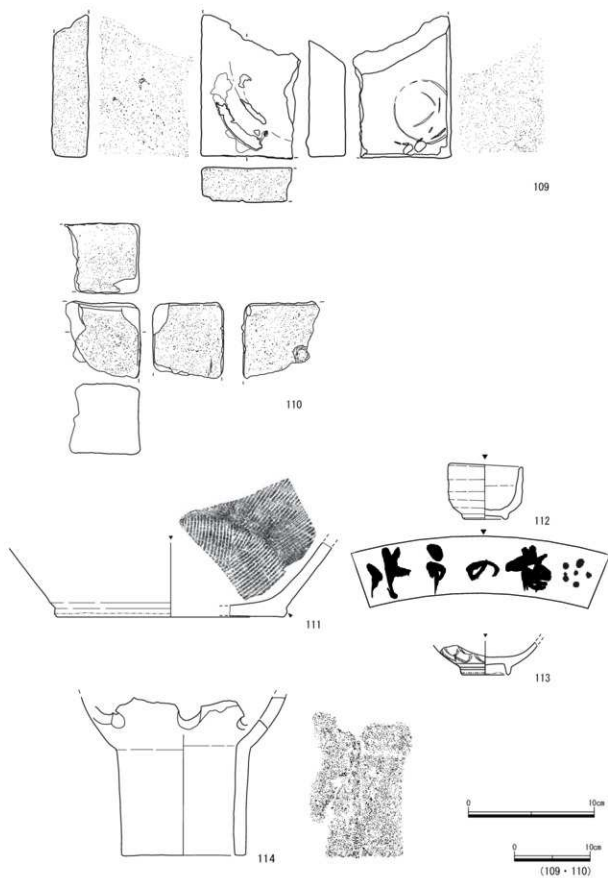


第30図 調査区1出土遺物実測図(13)



第31図 調査区1出土遺物実測図(14)





第32図 調査区1出土遺物実測図(15)

## 窯道具

65点を掲載した。内訳はサヤ鉢30点、キキョウ台4点、トチン19点、ハマ8点、棚板4点である。

45～74はサヤ鉢である。胎土は長石を多く含む。45～52・54は器高が9～12cm、口径14～19cmの小ぶりの一群である。碗や小皿等の小型製品用と思われる。底はベタ底が多いが、下方に膨らむものも若干ある。53・55～74は口径21～26cmの中～大振りの一群である。器高は10～19cmまでバリエーションがあるが、底径は21～22cm台のものが多く、器高が異なっても重ねることが可能である。立ち上がりは垂直のものが多く、65・68・73のように胴部をすぼめる器形や、69のように胴部を膨らませる器形もある。底部はベタ底が多いが、55・67・68のように下方に大きく膨らむものもある。66・74は口縁部にU字形の切込を焼成前に付している。なお、71は底部に焼締陶器の土瓶底部が軸着していた。このことは、サヤ鉢を逆位に置き、焼台としても使用していたことを示している。臨機応変な使用がなされたことが窺える。

75～78はキキョウ台である。焼締陶器製。胎土は灰白色でキメは緻密である。上面は全て右回転糸切痕が認められるとともに、中央に2～3cmの焼成前穿孔を穿つ。V字の切込みは4箇所のため、全て5足となる。76では足の先端全てを故意に打欠いている。

79～97はトチンである。俵形に整形したもの(79～83)、握りトチン(84～91)、輪トチン(92～97)の3種類に大別される。79～83は俵形のトチンである。全て高さ4cm、径4cm程度の小型のものである。窯道具としてはさほど一般的ではない類型である。84～91は握りトチン(ニギリドチ)である。その名のとおり、ロクロ粘土を握ってトチンの形にするもので、ロクロ成形等の手間をかけず、作業現場で即席で造るものである。84・87・89は胴体部にサヤ鉢の破片を使用し、上下に粘土塊を押しつけて自立させたものである。全体的に握った粘土には指頭圧痕が随所に見られ、指紋も散見される。92～97は輪トチン(ワドチ)である。いずれも焼締陶器製で、粘土紐を円形に成形したものである。握りトチンと同様、作業現場で即席で作っており、歪つた円形を呈するものが多い。指頭圧痕も随所に見られ、指紋も散見される。95～97はサヤ鉢の破片が融着しており、輪トチンの上にサヤ鉢を置き、サヤ鉢が窯体に融着しないようにしたことが窺える。

98～105はハマである。焼締陶器製のもの(99・102・103・104)と陶器製のもの(98・100・101・105)に分かれる。指頭圧痕も随所に見られ、指紋も散見される。作業現場で即席で作られたものが多いことが窺える。片面に碗・皿・鉢等の高台痕が1～4単位程度認められる。

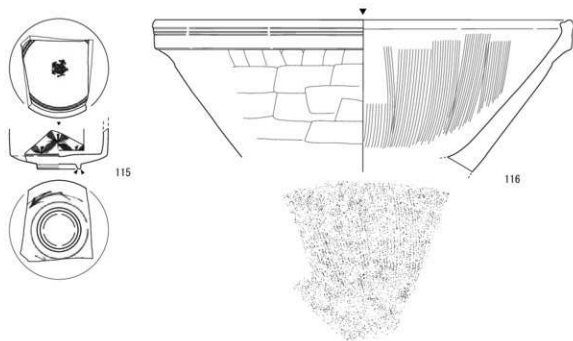
106～109は棚板である。全て陶器製。サヤ鉢と同様の胎土である。幅が判明するものは2点あり、106が16cm、108が25cm。厚さは3～5cmと幅がある。ハマと同様、製品の高台痕が残存しているものが多く、107は74mm、108は76mm、82mm、109は198mm、76mm。70～80mm台のものは碗、198mm台のものは大皿等が想定される。198mmの高台痕には緑釉が融着する。

## 窯体

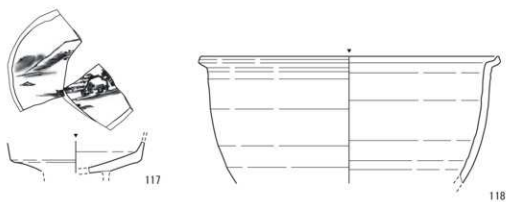
1点(110)を掲載した。レンガ状の形状で被熱している。胎土はサヤ鉢や棚板と同様である。

## 七面焼以外の製品

4点掲載した。111は陶器の在地産の挿鉢である。赤褐色の胎土で、外面全体に鉄釉を塗る。19世紀以降か。112は焼締陶器の猪口である。体部に「水戸の梅」と呉須で大書する。近現代



調査区 2



調査区 4



第 33 図 調査区 2・4 出土遺物実測図

の土製品と思われる。113は磁器の厚手碗である。肥前産で外面二重網目文。年代は18世紀後半以降。114は土器で、涼炉である。二重胴の内側部分のみ残っている。製作地・製作年代は不明。

### 第2項 調査区2出土の遺物 (第33図、第3表、写真図版26)

#### 七面焼以外の製品

2点掲載した。115は肥前産筒茶碗Aである。大振りで口径は推定8cm。年代は1740年代～1810年代。116は明石系挿鉢で、年代は18世紀後半以降である。

### 第3項 調査区4出土の遺物 (第33図、第3表、写真図版26)

#### 磁器(本焼)

1点掲載した。117は高台が付く盤皿で、内面に山水門が描かれる。こうした変形皿に風景文を描く製品は27にも見られる。七面焼の磁器皿の特徴の一つとして認識しておきたい。

#### 焼締陶器(本焼)

1点掲載した。118は鍋である。調査区1で出土した40よりも深い器形を呈し、器厚が厚めである。肥前産筒赤褐色の胎土で、外面全体に鉄軸を塗る。在地産である。

#### 窯道具

1点掲載した。119はハマである。上・下面に高台痕が残る。

### 第4項 調査区6出土の遺物 (第34図、第3・4表、写真図版27)

#### 陶器(本焼)

1点掲載した。120は太白手の陶器皿の破片である。全面に白泥掛けし、その上に呉須で絵付を描いている。全体的に瀬戸・美濃産の太白手よりはるかに灰色がかっている。

#### 窯道具

1点掲載した。121はサヤ鉢で、大型の部類に入る。胎土や器形等は調査区1出土のサヤ鉢と同様である。

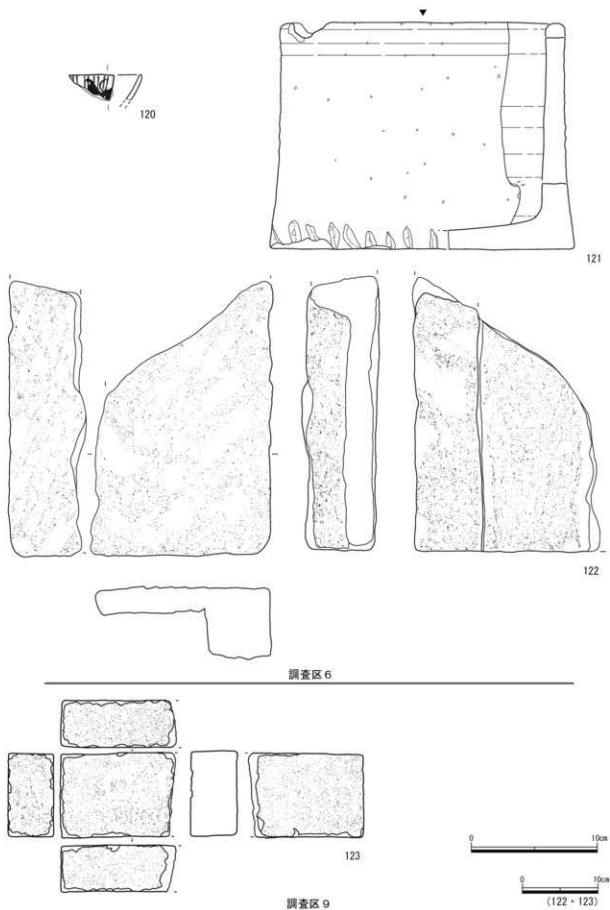
#### 石製品

1点掲載した。122は凝灰質泥岩(神崎岩)製で、用途は不明。4号・5号遺構が同石材の石組水路であるが、本資料は4号遺構・5号遺構で検出された水路とは寸法が異なる。ノミ跡が全面に見られ、近世の所産である可能性が高い。水戸城及び城下町の調査では、同石材は地中に埋設される水路や井戸等の水場遺構の構築材として使用されていることが判明しており、本資料も七面製陶所に設置された水路や井戸等の構築材と思われる。

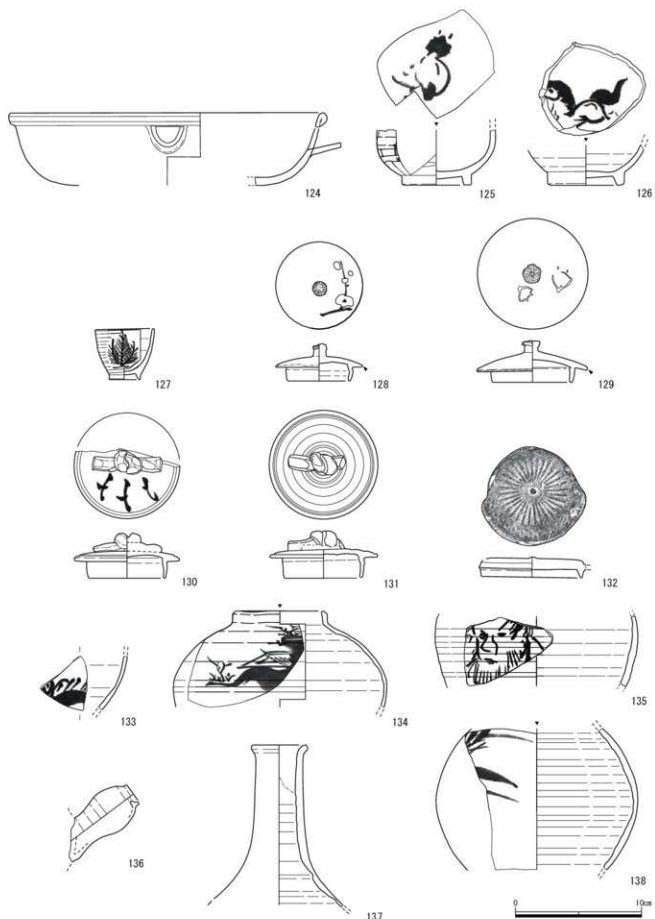
### 第5項 調査区9出土の遺物 (第34図、第3・4表、写真図版27)

#### 七面焼以外の製品

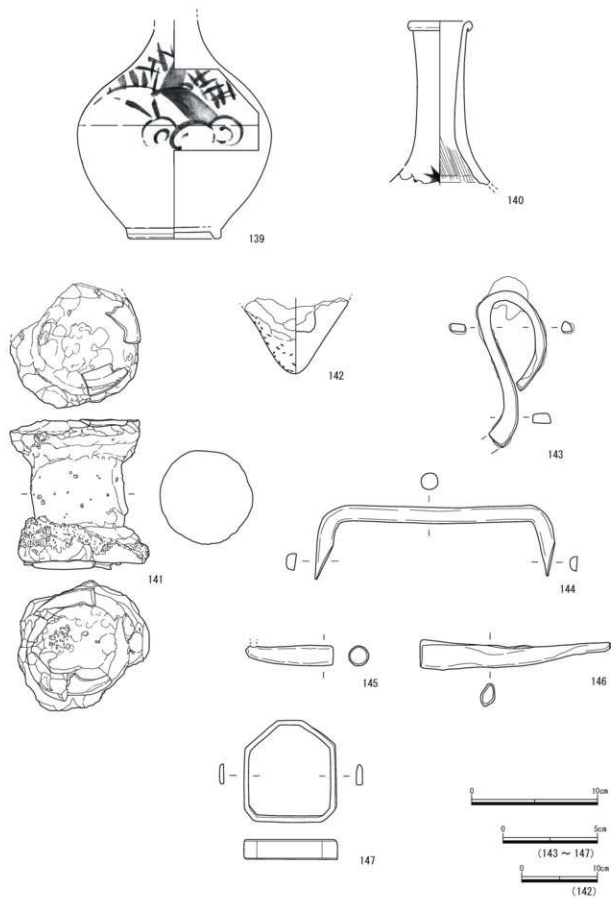
123は耐火煉瓦である。「C-□/SK 30」の刻印がある。七面製陶所産絶以降、借楽園の東半分は常磐神社の社地となるとともに、斜面地は観梅客をもてなすため、様々な遊興施設が作られた。本資料もこうした遊興施設に伴うものと理解されよう。



第34図 調査区6・9出土遺物実測図



第35図 調査区13出土遺物実測図(1)



第36図 調査区13出土遺物実測図(2)

## 第6項 調査区13出土の遺物 (第35・36図、第3・4表、写真図版28・29)

### 焼締陶器(本焼)

5点掲載した。124は行平鍋である。器高は6cmと浅いが、口径は復元値で24cmと大きい。128・129は土瓶蓋である。128は梅樹文で摘みは菊花摘み、129は千鳥文で摘みは五弁花摘みである。いずれも七面焼の土瓶蓋で多く用いられるモチーフである。137・138は大振りの徳利で、137は鶴首部分、138は胴部部分である。こうした器形の徳利は空間焼にも見られ、空間焼の影響を窺うこともできるが、138のように薄手に成形するのは七面焼の特性といえよう。鉄絵で葦文が描かれている。

### 焼締陶器(素焼)

8点掲載した。130・131は土瓶蓋で、いずれも山蓋で摘みが結び摘みが特色である。132は外面に菊花の型押が押され、摘みはない。比較的珍しいタイプの土瓶蓋である。134は土瓶で、山水楼閣文が鉄絵で描かれている。135は袋物の破片で、人物文(七福神か)が鉄絵で描かれる。こうした人物文はそれほど多くはない。136は行平の把手である。139・140は137・138と同様、大振りの徳利である。139は鶴首部分が欠損しているものの胴部はほぼ遺存する。137～140で見られる大振り・鶴首・胴部球状(逆蕉形)・鉄絵タイプの徳利は七面焼で好んで生産される形式であり、139はその標準資料である。

### 土器

2点掲載した。127は無稜杉形の小坏である。土器に白泥を掛け、その上から鉄釉で若松文を描くという、やや特異な製品である。同器種は調査区20でも出土している(158)。133は施釉土器の土瓶である。破片のため全体の器形は不詳であるが、本資料は体部の一部で、鉄絵で火焰宝珠文を描く。胎土は焼締陶器の胎土とほぼ同じで、本来であれば焼締陶器として焼成すべきであるが、試作等で素焼に施釉を施したものと思われる。

### 素焼製品

2点掲載した。125・126は碗で、内外面に鉄絵が描かれる。内面に跳ね馬や走り駒が描かれている。こうした絵付は大塚相馬焼の特徴であり、七面製陶所が大塚相馬焼の影響を受けていたことを窺う資料である。陶器または焼締陶器の素焼製品と思われる。

### 窯道具

1点掲載した。141は立鼓形のトチンである。器高は12cm。町田焼窯跡では立鼓形が多く出土しているが、七面製陶所では少ない。また、町田焼窯跡では胴部の径が2～4cm程度の細いタイプが多いが、七面製陶所では細いタイプは出土しておらず、8cm程度が一般的である。同じ水戸藩窯であるが、窯によって偏差が認められる点は注視しておきたい。

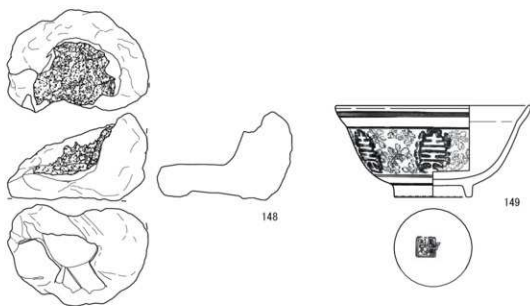
### 窯体

1点掲載した。142は色見穴の蓋である。色見穴とは窯内の焼成状況を確認するため、焼成室に設けられた小穴である。本資料は円錐形の突端を色見穴に差し込み、蓋としていたものと考えられる。窯体の具体的な構造を窺える資料の一つである。

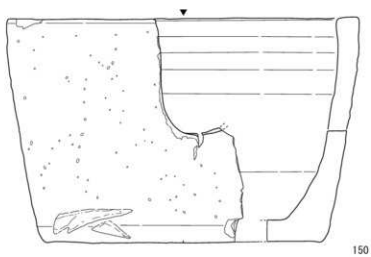
### 金属製品

5点掲載した。143は鉄製の鉢、144は鉄製の錠、145は銅・真鍮製の煙管雁首、146は銅・

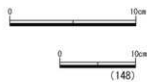




調査区 14



調査区 15



第 37 図 調査区 14・15 出土遺物実測図

真鍮製の煙管吸口、147は銅・真鍮製の金具である。いずれも8号遺構からの出土。こうした七面製陶所の役人や工人が使用したと思われる資料は相対的に少なく、稀少である。

### 第7項 調査区14出土の遺物(第37図、第3表、写真図版30)

#### 窯関連資料

1点を掲載した。148は炉の破片である。七厘形をしており、携帯して持ち運びできるタイプの炉である。工具や施設等の修繕に用いられたものと考えられる。

#### 七面焼以外の製品

1点を掲載した。149は井鉢、いわゆるどんぶり飯碗である。本資料は外面口縁部脇にクロム青磁の二重圏線、高台内に「MINO」の銘款が押された統制磁器(配給品)である。外面に上絵圏線(赤絵)を引き、ゴム印(赤・黒・緑)で文様を描き、九谷風の焼物に再生させている。高台内の「MINO」の上に「美陶園」の銘款が押される。「美陶園」については、石川県加賀市にある(株)九谷美陶園(大正11(1922)年創業)が想起されるものの関連性は不明。戦前・戦中の物資不足の時代における陶磁器生産の実情が窺える資料と言える。観梅で賑わう借家園下の遊興施設で使用されたものであろう。調査区16出土の219・220も同様の製品である。

### 第8項 調査区15出土の遺物(第37図、第3表、写真図版30)

#### 窯道具

1点を掲載した。150は中型のサヤ鉢である。胴部にU字形の窓(焼成前)が付くタイプである。窓は縦9cm×横約6cm。

第3表 A・B地点出土遺物観察表(陶磁器・土器・窯道具類)

( )は復元値、< >は残存値。

No	出土位置	材質	焼成/窯跡	器種/種類	形状特徴	寸法 (cm)			重量 (g)	成形・調整	装飾			胎土色	製作地	備考
						口径/長さ	高さ/幅	最大径/厚			絵付/胎土	文様	装飾特徴			
1	調査区I	磁器	本焼	鉢	-	(9.7)	(4.2)	5.0	-	ロタロ成形 削り高台	絵付 透明釉	内: 外:赤・黒・文	紫褐色	-	七面製陶所	-
2	調査区I	磁器	本焼	鉢	-	-	(8.0)	3.7	-	101 ロタロ成形 削り高台	内: 外:-	-	灰白色	七面製陶所	器付蓋お椀付き 磁器茶碗	
3	調査区I	磁器	本焼	鉢	広底形	11.4	5.6	6.1	-	98 ロタロ成形 削り高台	内: 外:-	-	乳白色	七面製陶所	-	
4	調査区I	磁器	本焼	鉢	扁圆形	11.2	4.5	4.8	-	42 ロタロ成形 削り高台	内: 外:-	-	乳白色	七面製陶所	-	
5	調査区I	磁器	本焼	鉢	突脚八角形	-	(18.0)	3.2	-	90 ロタロ成形 削り高台	内: 外:-	底面無釉	灰白色	七面製陶所	器付蓋お椀付き 磁器	
6	調査区I	磁器	本焼	蓋物類	弁蓋口受台	(11.0)	-	(2.0)	(12.0)	22 ロタロ成形	絵付 透明釉	内: 外:米岩梅樹文	紫褐色 口受無釉	白色	七面製陶所	-
7	調査区I	磁器	本焼	土瓶	野蠻玉形 高台無 取耳三 足	6.7	7.0	11.3	21.7	400 ロタロ成形	白土絵付 注口・耳・足 貼付・ベタ底	内: 外:赤・黒・文	イッチン 黒	灰白色	七面製陶所	注口乳孔
8	調査区I	磁器	本焼	土瓶	野蠻玉形 高台無	(6.8)	-	(11.7)	(18.0)	85 ロタロ成形	白土絵付 白泥・灰	内: 外:黒・赤・文	イッチン 黒	灰白色	七面製陶所	-
9	調査区I	磁器	本焼	土瓶	野蠻玉形 高台無	(11.0)	-	(8.2)	-	52 ロタロ成形	白土絵付 白泥・灰	内: 外:赤・黒・文	イッチン 黒	乳白色	七面製陶所	-

No.	出土位置	材質	形状・用途	器種/種類	形状特徴	寸法 (cm)				重量 (g)	成形・調整	装飾			胎土色	製作地	備考	
						口径/長さ	底径/幅	高さ/深さ	最大径/他			線付/動差	文様	装飾特徴				
10	調査区I	埴輪陶器	本埴	土類	丸形蓋受盤	6.3	-	9.5	(15.6)	92	ロタロ成形	鉄絵 白土絵付 鉄絵 白泥透明釉	内・外:梅花文	華道き	灰白色	七面製陶所	-	
11	調査区I	埴輪陶器	本埴	土類	丸形蓋受盤	6.0	-	9.6	-	39	ロタロ成形	鉄絵 白土絵付 鉄絵 白泥透明釉	内・外:折枝梅文	華道き	灰白色	七面製陶所	-	
12	調査区I	埴輪陶器	本埴	土類	丸形蓋受盤 双耳	5.8	-	10.3	(13.6)	88	ロタロ成形 耳貼付	鉄絵 白土絵付 鉄絵 白泥透明釉	内・外:折枝梅文	華道き	灰白色	七面製陶所	-	
13	調査区I	埴輪陶器	本埴	土類	蓋受盤	7.4	-	9.3	-	27	ロタロ成形	鉄絵 白土絵付 鉄絵 白泥透明釉	内・外:折枝梅文	華道き	灰白色	七面製陶所	-	
14	調査区I	埴輪陶器	本埴	土類	蓋受盤	6.0	-	8.7	-	39	ロタロ成形	鉄絵 白土絵付 鉄絵 白泥透明釉	内・外:折枝梅文	華道き	灰白色	七面製陶所	-	
15	調査区I	埴輪陶器	本埴	土類	蓋受盤 双耳	-	-	9.1	-	16	ロタロ成形 耳貼付	鉄絵 白土絵付 鉄絵 白泥透明釉	内・外:水雲梅樹文	華道き	灰白色	七面製陶所	-	
16	調査区I	埴輪陶器	本埴	土類	丸形蓋受盤 双耳	6.7	-	10.0	12.9	296	ロタロ成形 注口・耳貼付	-	内・外:-	-	灰白色	七面製陶所	「青土類」注口孔	
17	調査区I	埴輪陶器	本埴	土類	丸形蓋受盤 双耳	6.6	-	7.0	-	123	ロタロ成形 注口・耳貼付	-	内・外:-	-	灰褐色	七面製陶所	注口孔4	
18	調査区I	埴輪陶器	本埴	土類	丸形蓋受盤	7.4	-	12.4	19.6	174	ロタロ成形 注口・耳貼付	-	内・外:-	-	乳褐色	七面製陶所	-	
19	調査区I	埴輪陶器	本埴	土類	丸形ツクリ底三足	-	-	9.1	9.6	-	227	ロタロ成形 足貼付	-	内・外:-	-	乳褐色	七面製陶所	-
20	調査区I	磁器	白瓷一青磁	瓶	-	-	7.0	9.9	-	22	ロタロ成形 付蓋台 底彫孔 (7)	-	内・外:-	-	白色	七面製陶所	焼付(磁器) : 外底彫下彫に「松葉草」に口裏彫。	
21	調査区I	埴輪陶器	-	磁器類	-	-	-	16.5	(7.9)	149	ロタロ成形	薄緑き 鉄絵	内・外:梅文	華道き	灰白色	七面製陶所	朝臣に藤巻	
22	調査区I	不明	青磁	鉢	丸形 折縁 輪花	21.8	8.5	8.5	-	<584	ロタロ成形 削り高台	内・外:-	-	-	乳白色	七面製陶所	-	
23	調査区I	埴輪陶器	本埴	土類	丸形 削り高台	4.8	4.8	3.2	-	40	ロタロ成形 削り高台	鉄絵 鉄絵 鉄絵 鉄絵	内・見込不詳 外:-不詳	華道き 鉄絵	灰白色	七面製陶所	-	
24	調査区I	埴輪陶器	本埴	土類	丸形 削り高台	11.0	5.9	6.3	-	44	ロタロ成形 削り高台	鉄絵 鉄絵	内・外:-	華道き	灰白色	七面製陶所	-	
25	調査区I	埴輪陶器	本埴	土類	丸形 削り高台	9.0	4.0	6.5	-	24	ロタロ成形 削り高台	青磁 青磁	内・外:-	-	灰色	七面製陶所	高台内保付着	
26	調査区I	不明	青磁	鉢	輪花	11.0-11.9	7.5	4.9	-	-	ロタロ成形 削り高台	-	内・外:-	-	-	七面製陶所	-	
27	調査区I	磁器	黄緑一絵付	瓶	丸形 変型	11.0	5.3	3.2	-	41	ロタロ成形 削り高台	鉄絵 鉄絵 鉄絵 透明釉	内:-短葉文 外:-	華道き	乳白色	七面製陶所	-	
28	調査区I	埴輪陶器	本埴	土類	山形 丸底 口受	1.8	4.8	3.8	7.0	80	ロタロ成形	白土絵付 白泥透明釉	内・外:薄文	イッチン 施き 内 面無釉	-	七面製陶所	-	
29	調査区I	埴輪陶器	本埴	土類	山形 変型 丸底 口受	1.4	5.8	3.1	7.6	54	ロタロ成形 削り高台	鉄絵 白土絵付 鉄絵 白泥透明釉	内・外:折枝梅文	華道き 内面無釉	灰白色	七面製陶所	-	
30	調査区I	埴輪陶器	本埴	土類	山形 丸底 口受	1.1	6.0	3.6	8.5	82	ロタロ成形 削り高台	白土絵付 白泥透明釉	内・外:薄文	イッチン 施き 内 面無釉	灰黄色	七面製陶所	-	
31	調査区I	埴輪陶器	本埴 (焼成不良)	土類	山形 丸底 口受	1.6	5.8	3.5	8.4	80	ロタロ成形 削り高台	白土絵付 白泥 不明 釉 (焼成不良)	内・外:千鳥文 菖蒲 五弁花型押文	イッチン 施き 内 面無釉	乳褐色	七面製陶所	-	
32	調査区I	埴輪陶器	本埴 (焼成不良)	土類	山形 丸底 口受	1.4	6.0	3.0	8.5	49	ロタロ成形 削り高台	白土絵付 白泥 不明 釉 (焼成不良)	内・外:千鳥文 菖蒲 五弁花型押文	イッチン 施き 内 面無釉	灰白色	七面製陶所	-	
33	調査区I	埴輪陶器	本埴	土類	注口のみ	-	-	9.4	-	32	ロタロ成形 注口貼付	鉄絵	内・外:-	-	灰黄色	七面製陶所	注口孔3	
34	調査区I	埴輪陶器	本埴	土類	-	5.6	6.4	11.3	13.2	-	-	内・外:折枝梅文	華道き	-	七面製陶所	-		
35	調査区I	埴輪陶器	本埴	土類	器形不明 蓋受盤	6.0	-	10.6	15.9	188	ロタロ成形 耳貼付	白土絵付 白泥 青磁	内・外:花文	おられ文	灰白色	七面製陶所	-	
36	調査区I	埴輪陶器	本埴	土類	丸形蓋受盤 三足	-	7.9	12.4	(16.4)	306	ロタロ成形 非覆付 (足) 耳・足貼付	鉄絵 白土絵付 鉄絵 白泥透明釉	内・外:折枝梅文	華道き	明焼灰色	七面製陶所	-	
37	調査区I	埴輪陶器	本埴	土類	変型蓋受盤 双耳	5.9	-	9.0	-	114	ロタロ成形 注口・耳貼付	鉄絵 白土絵付 鉄絵 白泥透明釉	内・外:不明	華道き イッチン 施き	明焼灰色	七面製陶所	-	

No.	出土位置	材質	形状・用途	器種/種類	形状特徴	寸法 (cm)				重量 (g)	成形・調整	窯 窯			胎土色	製作地	備 考
						口径/長さ	底径/幅	底径/高さ	最大径/地			焼付/胎土	文様	裝飾特徴			
36	調査区I	磁器陶器	土瓶	丸形 蓋 受盤 双 耳	(15.6)	—	(7.6)	(15.0)	82	ロウロ成形 (注口・耳取付)	不明焼 (硬 成不良)	内・ 外:-	—	—	乳白色	七面製陶所	注口径3 (注口一部欠損)
39	調査区I	磁器陶器	酒椀	土瓶	丸形 注口口孔	—	—	96.9	21.0	45	ロウロ成形 胎付	内・ 外:-	—	—	乳白色	七面製陶所	—
40	調査区I	陶器	—	土鍋	—	15.0	6.0	7.5	—	—	内・ 外:-	—	—	—	七面製陶所	—	
41	調査区I	磁器陶器	本俵	行平	丸形	(16.6)	(6.2)	3.6	—	57	ロウロ成形 (注口胎付)	内・ 外:-	—	—	明焼灰 色	七面製陶所	底部保存者
42	調査区I	陶器	本俵	丹口	口縁切込 半切込	(20.0)	—	96.0	23.2	142	ロウロ成形 (口胎付)	内・ 外:-	—	—	灰黄色	七面製陶所	—
43	調査区I	陶器	本俵	押鉢	玉鉢形	(30.4)	19.2	16.8	—	2,270	ロウロ成形 削り高台	内・ 外:-	細線輪 葉 反輪	細線輪 上 底面 無輪	灰黄色	七面製陶所	口縁部・見込・唇付に黒い粉を各1 (見込に黒い粉は 約1/4) の一部が 磨き
44	調査区I	不明	蓋俵	花生	—	(11.3)	(7.3)	(1.3)	—	88	ロウロ成形	内・ 外:-	—	—	乳白色	七面製陶所	唇付(胎切) 外面無胎土 陶器に似 ている
45	調査区I	陶器	—	常連具 (中ヤ 鉢)	円筒形 (底い) へ字底	15.6	13.8	9.2	—	800	縄作り成形 ロウロ調整	内・ 外:-	—	—	灰黄色	七面製陶所	胴下部に取上げ 口縁・口縁・ 底面を伸ばさ ず 口縁部輪 トリチン片磨き
46	調査区I	陶器	—	常連具 (中ヤ 鉢)	円筒形 (底い) へ字底 口縁部切込	13.8	13.5	10.2	—	1,000	縄作り成形 ロウロ調整	内・ 外:-	—	—	灰黄色	七面製陶所	口縁・底面を 伸ばさず
47	調査区I	陶器	—	常連具 (中ヤ 鉢)	円筒形 胴部下方に 突出 口縁部切 込	18.7	15.4	9.4	—	500	縄作り成形 ロウロ調整	内・ 外:-	—	—	灰黄色	七面製陶所	口縁・底面を 伸ばさず 見込高台または 口縁部磨き
48	調査区I	陶器	—	常連具 (中ヤ 鉢)	円筒形 (底い) へ字底 口縁部切 込	(16.0)	(16.0)	10.0	—	1,041	縄作り成形 ロウロ調整	内・ 外:-	—	—	灰白色	七面製陶所	胴下部に取上げ 口縁・口縁・ 底面を伸ばさ ず
49	調査区I	陶器	—	常連具 (中ヤ 鉢)	円筒形 (底い) へ字底	(16.0)	16.5	10.6	—	1,000	縄作り成形 ロウロ調整	内・ 外:-	—	—	灰白色	七面製陶所	口縁・底面を 伸ばさず
50	調査区I	陶器	—	常連具 (中ヤ 鉢)	円筒形 (底い) へ字底 口縁部切 込	17.2	16.9	9.2	—	900	縄作り成形 ロウロ調整	内・ 外:-	—	—	灰白色	七面製陶所	口縁・底面を 伸ばさず 胴部磨き 胴部トリチン 片磨き
51	調査区I	陶器	—	常連具 (中ヤ 鉢)	円筒形 胴部下方に 突出	18.6	17.4	11.6	—	930	縄作り成形 ロウロ調整	内・ 外:-	—	—	灰白色	七面製陶所	口縁・底面を 伸ばさず
52	調査区I	陶器	—	常連具 (中ヤ 鉢)	円筒形 (底い) へ字底 口縁部切 込	(17.0)	(17.0)	11.6	—	1,200	縄作り成形 ロウロ調整	内・ 外:-	—	—	乳白色	七面製陶所	胴下部に取上げ 口縁・口縁・ 底面を伸ばさ ず
53	調査区I	陶器	—	常連具 (中ヤ 鉢)	円筒形 (底い) へ字底 口縁部切 込 胴部有孔 1(15×20 mm)	21.7	20.7	10.6	—	1,800	縄作り成形 ロウロ調整	内・ 外:-	—	—	灰黄色	七面製陶所	口縁・底面を 伸ばさず
54	調査区I	陶器	—	常連具 (中ヤ 鉢)	—	18.4	17.7	11.7	—	3	—	内・ 外:-	—	—	—	七面製陶所	—
55	調査区I	陶器	—	常連具 (中ヤ 鉢)	円筒形 胴部下方に 突出	—	21.7	(22.2)	—	820	縄作り成形 ロウロ調整	内・ 外:-	—	—	灰白色	七面製陶所	内面に土瓶片 磨き 底面を 伸ばさず
56	調査区I	陶器	—	常連具 (中ヤ 鉢)	円筒形 へ字底	23.4	23.7	10.5	—	1,430	縄作り成形 ロウロ調整	内・ 外:-	—	—	灰黄色	七面製陶所	胴下部に取上げ 口縁・口縁部 磨き
57	調査区I	陶器	—	常連具 (中ヤ 鉢)	円筒形 (底い) へ字底 口縁部切 込	(20.4)	(22.4)	16.9	—	2,960	縄作り成形 ロウロ調整	内・ 外:-	—	—	灰白色	七面製陶所	胴下部に取上げ 口縁 底面を 伸ばさず 見込高台(径 不明)
58	調査区I	陶器	—	常連具 (中ヤ 鉢)	円筒形 (底い) へ字底	20.5	23.5	16.3	—	1,590	縄作り成形 ロウロ調整	内・ 外:-	—	—	灰白色	七面製陶所	胴下部に取上げ 口縁・口縁部 磨き
59	調査区I	陶器	—	常連具 (中ヤ 鉢)	円筒形 (底い) へ字底 口縁部切 込	(21.4)	(21.4)	16.5	—	2,700	縄作り成形 ロウロ調整	内・ 外:-	—	—	灰白色	七面製陶所	口縁・底面を 伸ばさず
60	調査区I	陶器	—	常連具 (中ヤ 鉢)	円筒形 (底い) へ字底 胴部有孔 口縁部切 込	(22.0)	21.9	16.1	—	2,700	縄作り成形 ロウロ調整	内・ 外:-	—	—	灰白色	七面製陶所	胴下部に取上げ 口縁部 磨き 胴部トリチン 片磨き

第IV章 出土した遺物

No.	出土位置	材質	構成/素材	器種/種類	形状特徴	寸法 (cm)				重量 (g)	成形・調整	装飾			胎土色	製作地	備考	
						口縁/長さ	底径/幅	縁高/深さ	最大径/他			絵付/胎文	文様	装飾特徴				
61	調査区I	陶器	-	甕道具 (中々鉢)	円筒形 ->夕底 口縁~胴部	120.49	21.0	16.1	-	1,200	縄作り成形 ロタロ調整	-	自然釉	内・外-	-	灰白色	七面製陶所	口縁・底部重 ね焼き痕
62	調査区I	陶器	-	甕道具 (中々鉢)	円筒形 ->夕底 口縁~胴部 口縁部字切込	122.31	21.9	15.4	-	1,750	縄作り成形 ロタロ調整	-	-	内・外-	-	灰白色	七面製陶所	口縁・底部重 ね焼き痕 見 込高行痕(注 不明)
63	調査区I	陶器	-	甕道具 (中々鉢)	円筒形 ->夕底 口縁部字切込	119.43	22.0	15.8	-	1,900	縄作り成形 ロタロ調整	-	自然釉	内・外-	-	灰黄色	七面製陶所	胴下部に取上 げ痕 口縁・ 底部重ね焼き 痕
64	調査区I	陶器	-	甕道具 (中々鉢)	円筒形 胴部下方 に突出 口縁~胴 部	123.23	22.3	16.1	-	1,550	縄作り成形 ロタロ調整	-	-	内・外-	-	灰白色	七面製陶所	胴下部に取上 げ痕 口縁・ 底部重ね焼き 痕 見込高行 痕(注不明)
65	調査区I	陶器	-	甕道具 (中々鉢)	円筒形 口縁外延 ->夕底	24.9	22.1	16.5	-	2,000	縄作り成形 ロタロ調整	-	自然釉	内・外-	-	灰黄色	七面製陶所	胴下部に取上 げ痕 口縁・底 部重ね焼き 痕
66	調査区I	陶器	-	甕道具 (中々鉢)	円筒形 ->夕底 口縁~胴部 口縁部字切込	124.33	22.5	18.2	-	4,360	縄作り成形 ロタロ調整	-	自然釉	内・外-	-	灰黄色	七面製陶所	胴下部に取上 げ痕 口縁・ 底部重ね焼き 痕
67	調査区I	陶器	-	甕道具 (中々鉢)	円筒形 胴部下方 に突出	115.4	26.7	18.4	-	1,800	縄作り成形 ロタロ調整	-	自然釉	内・外-	-	灰白色	七面製陶所	胴下部に取上 げ痕 口縁・ 底部重ね焼き 痕
68	調査区I	陶器	-	甕道具 (中々鉢)	円筒形 胴部下方 に突出	127.43	23.7	17.0	-	4,400	縄作り成形 ロタロ調整	-	自然釉	内・外-	-	灰黄色	七面製陶所	胴下部に取上 げ痕 口縁・ 底部重ね焼き 痕 全体に玉 み崩着
69	調査区I	陶器	-	甕道具 (中々鉢)	円筒形 ->夕底 口縁~胴部	115.2	20.8	17.0	-	2,550	縄作り成形 ロタロ調整	-	-	内・外-	-	灰黄色	七面製陶所	口縁・底部重 ね焼き痕 見 込高行痕(注 不明)
70	調査区I	陶器	-	甕道具 (中々鉢)	円筒形 ->夕底	22.1	22.2	17.3	-	2,200	縄作り成形 ロタロ調整	-	-	内・外-	-	灰白色	七面製陶所	胴下部に取上 げ痕 底部重 ね焼き痕
71	調査区I	陶器	-	甕道具 (中々鉢)	円筒形 胴部下方 に突出	23.6	22.2	17.8	-	2,390	縄作り成形 ロタロ調整	-	自然釉	内・外-	-	灰黄色	七面製陶所	胴下部に取上 げ痕 口縁・ 底部重ね焼き 痕 底部に土 積と想われ る破片重着 見 込高行痕 4.5x7.5mm× 3、径9mm× 1)
72	調査区I	陶器	-	甕道具 (中々鉢)	円筒形 ->夕底	21.2	22.5	17.5	-	1,840	縄作り成形 ロタロ調整	-	自然釉	内・外-	-	灰白色	七面製陶所	胴下部に取上 げ痕 口縁・ 底部重ね焼き 痕
73	調査区I	陶器	-	甕道具 (中々鉢)	円筒形 口縁外延 ->夕底	24.5	23.4	17.6	-	1,300	縄作り成形 ロタロ調整	-	-	内・外-	-	灰黄色	七面製陶所	胴下部に取上 げ痕 口縁部 重ね焼き痕
74	調査区I	陶器	-	甕道具 (中々鉢)	円筒形 ->夕底 口縁~胴部 口縁部字切 込	126.43	25.0	17.4	-	3,900	縄作り成形 ロタロ調整	-	-	内・外-	-	灰白色	七面製陶所	胴下部に取上 げ痕
75	調査区I	埴輪陶器	-	甕道具 (中々鉢)	Y字切有 乳白 玉足	6.5	6.7	2.9	2.0	77	ロタロ成形 上面有同軸溝 切離し	-	-	内・外-	-	灰白色	七面製陶所	五足先端部磨 着痕 中央穿 孔(径19mm)
76	調査区I	埴輪陶器	-	甕道具 (中々鉢)	Y字切有 乳白 玉足	8.5	8.7	14.0	3.2	204	ロタロ成形 上面有同軸溝 切離し	-	-	内・外-	-	灰白色	七面製陶所	五足先端部欠 損 中央穿孔 孔(径13mm) 上 面径17.5mmの高 行痕
77	調査区I	埴輪陶器	-	甕道具 (中々鉢)	Y字切有 乳白 玉足	8.3	8.7	13.0	2.6	128	ロタロ成形 上面有同軸溝 切離し	-	-	内・外-	-	灰白色	七面製陶所	五足先端部磨 着痕 中央穿 孔(径15mm) 全 体にアールニ 字成形
78	調査区I	埴輪陶器	-	甕道具 (中々鉢)	Y字切有 乳白 玉足	8.3	8.7	4.0	3.6	156	ロタロ成形 上面有同軸溝 切離し	-	-	内・外-	-	灰白色	七面製陶所	五足先端部磨 着痕 中央穿 孔(径15mm) 全 体にアールニ 字成形
79	調査区I	陶器	-	甕道具 (トナリ)	円筒形 胴部内凹	-	4.0	4.0	4.7	102	手捏	-	-	内・外-	-	灰黄色	七面製陶所	胎土に靫殺七 邊合 全体に 磨着痕

No.	出土位置	材質	形状/用途	形制/種類	形状特徴	寸法 (cm)				重量 (g)	成形/調整	痕付/編目	装飾			加工色	製作地	備考
						口径/長さ	底径/幅	高さ/厚さ	最大径/他				文様	装飾特徴				
80	調査区	陶器	-	常道具 (トナシ)	円筒形 断面円形	-	4.0	4.2	4.8	91	手捏ね	-	内・外	-	-	灰黄色	七面製陶器	胎土に磁粒を混合し全体に投散
81	調査区	陶器	-	常道具 (トナシ)	円筒形 断面円形	-	3.6	3.6	4.6	72	手捏ね	-	内・外	-	-	灰黄色	七面製陶器	胎土に磁粒を混合し全体に投散
82	調査区	陶器	-	常道具 (トナシ)	円筒形 断面円形	-	3.7	3.6	4.5	79	手捏ね	-	内・外	-	-	灰黄色	七面製陶器	胎土に磁粒を混合し全体に投散
83	調査区	陶器	-	常道具 (トナシ)	円筒形 断面円形	-	3.8	3.8	4.7	81	手捏ね	-	内・外	-	-	灰黄色	七面製陶器	胎土に磁粒を混合し全体に投散
84	調査区	陶器	-	常道具 (鏡リトナシ)	不整形	-	4.2	4.2	7.7	99	手捏ね	-	内・外	-	-	灰白色	七面製陶器	サヤ鉢の破片を胎土で自立させ、常道具として使用
85	調査区	陶器	-	常道具 (鏡リトナシ)	不整形	-	4.9	4.9	8.3	143	手捏ね	-	内・外	-	-	灰黄色	七面製陶器	胎面圧痕 上蓋部と押圧痕 下部丸みを帯びた押圧痕
86	調査区	陶器	-	常道具 (鏡リトナシ)	不整形	-	4.8	4.9	9.5	177	手捏ね	-	内・外	-	-	灰黄色	七面製陶器	胎面圧痕 上部丸みを帯びた押圧痕
87	調査区	陶器	-	常道具 (鏡リトナシ)	不整形	-	5.0	5.3	9.4	171	手捏ね	-	内・外	-	-	灰黄色	七面製陶器	サヤ鉢の破片を胎土で自立させ、常道具として使用
88	調査区	陶器	-	常道具 (鏡リトナシ)	1字形(不整形) 断面不整形	-	4.2	4.1	8.4	148	手捏ね	-	内・外	-	-	灰黄色	七面製陶器	胎面に胎面圧痕
89	調査区	陶器	-	常道具 (鏡リトナシ)	不整形	-	4.9	5.5	9.4	291	手捏ね	-	内・外	-	-	灰白色	七面製陶器	胎面圧痕
90	調査区	陶器	-	常道具 (鏡リトナシ)	不整形	-	5.3	4.9	11.2	223	手捏ね	-	内・外	-	-	灰黄色	七面製陶器	サヤ鉢の破片を胎土で自立させ、常道具として使用
91	調査区	陶器	-	常道具 (鏡リトナシ)	1字形(不整形) 断面不整形	-	3.6	3.5	7.2	117	手捏ね	-	内・外	-	-	灰黄色	七面製陶器	胎面に胎面圧痕
92	調査区	後編陶器	-	常道具 (輪トナシ)	線状	7.6	7.9	1.9	-	107	手捏ね	-	内・外	-	-	灰白色	七面製陶器	下部に線状圧痕(横方向の溝跡あり)
93	調査区	後編陶器	-	常道具 (輪トナシ)	線状	(7.8)	1.3	1.6	-	94	手捏ね	-	内・外	-	-	灰白色	七面製陶器	上部に線状圧痕(横方向の溝跡あり)
94	調査区	後編陶器	-	常道具 (輪トナシ)	線状	(9.5)	1.4	1.4	-	28	手捏ね	-	内・外	-	-	乳白色	七面製陶器	上部砂付着 下部線状圧痕
95	調査区	後編陶器	-	常道具 (輪トナシ・サヤ鉢)	-	-	9.35	1.8	2.0	12.4	116	輪トナシ/手捏ね・サヤ鉢・線作の成形/自然輪	内・外	-	-	灰白色	七面製陶器	サヤ鉢口縁部片に砂付着 輪トナシ上部に線状圧痕
96	調査区	後編陶器	-	常道具 (輪トナシ・サヤ鉢)	-	-	10.9	1.5	0.9	129	輪トナシ/手捏ね・サヤ鉢・線作の成形/自然輪	内・外	-	-	灰白色	七面製陶器	サヤ鉢口縁部片に輪トナシ跡着 輪トナシ上部に線状圧痕	
97	調査区	後編陶器	-	常道具 (輪トナシ・サヤ鉢)	-	(7.2)	4.1	3.5	-	35	輪トナシ/手捏ね・サヤ鉢・線作の成形/自然輪	内・外	-	-	灰白色	七面製陶器	サヤ鉢口縁部片に輪トナシ跡着 輪トナシ上部に線状圧痕	
98	調査区	陶器	-	常道具 (ハツ)	円板形	9.3	9.0	1.2	-	132	上下面糸切離し	-	内・外	-	-	灰黄色	七面製陶器	上面径4mmの裏面アルミ塗布
99	調査区	後編陶器	-	常道具 (ハツ)	円板形	9.2	9.1	1.0	-	121	上下面糸切離し	-	内・外	-	-	灰白色	七面製陶器	上面径7mmの裏面アルミ塗布
100	調査区	陶器	-	常道具 (ハツ)	円板形	10.2	8.6	0.7	-	74	手捏ね	-	内・外	-	-	灰黄色	七面製陶器	上面径6mmの裏面の灰白顔料
101	調査区	陶器	-	常道具 (ハツ)	円板形	2.7	2.6	2.7	-	210	手捏ね	-	内・外	-	-	灰白色	七面製陶器	上面径41mmの裏面の灰白顔料
102	調査区	後編陶器	-	常道具 (ハツ)	円板形	5.3	4.9	3.0	-	42	上下面糸切離し	-	内・外	-	-	灰白色	七面製陶器	上面径55mmの裏面アルミ塗布
103	調査区	後編陶器	-	常道具 (ハツ)	円板形	5.9	6.6	0.7	-	22	手捏ね	-	内・外	-	-	灰黄色	七面製陶器	上面径47mmの裏面アルミ塗布
104	調査区	後編陶器	-	常道具 (ハツ)	板状(不整形)	4.2	7.3	1.2	-	76	手捏ね	-	内・外	-	-	灰白色	七面製陶器	上面径6mmの裏面の灰白顔料 下部に胎面圧痕・砂付着
105	調査区	陶器	-	常道具 (ハツ)	円板形	4.3	7.0	0.9	-	44	上下面糸切離し	-	内・外	-	-	灰黄色	七面製陶器	上面径47mmの裏面アルミ塗布

No.	出土位置	材質	構成/窯法	群像/種類	形状特徴	寸法 (cm)				質量 (g)	成形・調整	器 器			出土色	製作地	備 考	
						口径/長さ	高さ/幅	底径/厚さ	最大径/他			底付/胎土	文様	装飾特徴				
106	調査区1	陶器	-	常滑品(模範)	板状	(16.3)	16.3	3.2	-	2,300	製作り	-	内:- 外:-	-	黄褐色	七面製陶所	上・下面アルミナ着色	
107	調査区1	陶器	-	常滑品(模範)	板状	(12.6)	(17.4)	4.4	-	1,730	製作り	-	内:- 外:-	-	黄白色	七面製陶所	上面に径7mmの底付、アルミナ着色	
108	調査区1	陶器	-	常滑品(模範)	板状	(15.7)	25.5	3.2	-	1,470	製作り	-	内:- 外:-	-	黄白色	七面製陶所	上面に径7mmの高直筒4、径3mmの高直筒1、下面に径7mmの高直筒2、粘土層着4	
109	調査区1	陶器	-	常滑品(模範)	板状	(13.1)	(18.9)	3.2	-	1,660	製作り	-	内:- 外:-	-	灰白色	七面製陶所	上面に径106mmの高直筒2、径3mmの高直筒1、下面に径76mmの高直筒3	
111	調査区1	陶器	-	雑鉢	-	-	(18.0)	(5.9)	-	150	ロタウ成形 ベタ底	-	内:- 外:-	黒目	赤褐色	在地産	底面アルミナ着色 内面使用痕跡着	
112	調査区1	検結陶器	-	釜口	腰張り	5.7	3.3	4.5	6.0	83	ロタウ成形 削り高台	コバルト 白土胎付	内:- 外:-	文字文「水戸」 の横・横文	紫褐色 イッチン 着	灰青褐色	在地産	-
113	調査区1	磁器	-	碗	厚平縁	-	3.6	(2.4)	-	33	ロタウ成形 削り高台	染付 白磁 透明 胎	内:- 外:-	二重線貫文	紫褐色	白色	肥前産	-
114	調査区1	土器	-	30号	二重線式 内面五箇 部有孔・ 切込	-	9.8	(2.6)	(16.1)	313	縄作り成形 胎付	-	内:- 外:-	-	乳褐色	不明	内面五箇部内 存	
115	調査区2	磁器	-	碗	簡平縁	-	3.4	(3.2)	-	53	ロタウ成形 削り高台	染付 白磁 透明 胎	内:- 外:-	二重線貫 文に五弁花(コ ンニエヤ印付) 外・内面貫文 高 台松葉二重線 貫文	紫褐色 コンニエ ヤ印付	白色	肥前産	-
116	調査区2	陶器	-	雑鉢	口縁外周 三條 丹 口	33.6	-	(2.6)	-	379	ロタウ成形 口縁押圧	-	内:- 外:-	-	黒目	赤褐色	明石・備前 産	
117	調査区4	磁器	本埴	皿	盤形	-	(2.0)	-	72	ロタウ成形 削り高台	染付 白磁 透明 胎	内:- 外:-	貫文 外:-	紫褐色	灰白色	七面製陶所	高台欠損	
118	調査区4	検結陶器	本埴	皿	丸形 裏 受有	(24.0)	-	(10.1)	-	96	ロタウ成形	-	内:- 外:-	-	灰白色	七面製陶所	-	
119	調査区4	検結陶器	-	常滑品 (Copy)	円板形	8.3~8.9	8.9~8.7	1.2	-	141	上下面糸切 し	-	内:- 外:-	-	灰白色	七面製陶所	上面径6mm 毎の高直筒 下面径72mmの 高直筒	
120	調査区6	陶器	本埴	皿	丸形	-	(2.0)	-	4	ロタウ成形	高直筒 胎付 石 産透明胎	内:- 外:-	玉井 指花貫文 外:-	紫褐色	灰白色	七面製陶所	-	
121	調査区6	磁器質	-	常滑品 (ヤキ 鉢)	円筒形 ベタ底 口縁~胴 部部 口 縁切平 切込	(21.6)	23.7	17.4	-	2,300	縄作り成形 ロタウ調整	-	内:- 外:-	-	灰褐色	七面製陶所	胴下面に右上 切縁 口縁・ 胴部には赤 褐色 裏込高台 着 (径不明)	
124	調査区13	検結陶器	-	行平	口縁部下 口口 丸 形 玉 縁 丹 口	(24.7)	-	(5.0)	(26.2)	66	ロタウ成形 胎付	-	内:- 外:-	-	灰白色	七面製陶所	-	
125	調査区13	陶器	着焼	碗	腰張り	-	5.5	(4.4)	-	83	ロタウ成形 削り高台	胎付 灰胎	内:- 外:-	内縁丸貫文 外:-不詳	紫褐色	明褐色	七面製陶所	大塚原系
126	調査区13	陶器	着焼→ 胎付	碗	-	-	5.5	(3.3)	-	46	ロタウ成形 削り高台	胎付 灰胎	内:- 外:-	貫文 外:-不明(欠損)	紫褐色	明褐色	七面製陶所	-
127	調査区13	土器	着焼→ 白濁→ 胎付	小形	無縁丸形	4.5	2.3	4.1	-	29	ロタウ成形 削り高台	胎付 灰胎 白 胎	内:- 外:-	貫文 外:-若松文	紫褐色 底面無胎	乳褐色	七面製陶所	-
128	調査区13	検結陶器	本埴	土瓶蓋	山麓 筒 形 蓋 口受有	6.9	5.0	3.0	-	49	ロタウ成形 削り高台	胎付 白土 胎付 白胎	内:- 外:-	新伎師文	紫褐色 内面無胎	明褐色 色	七面製陶所	-
129	調査区13	陶器	本埴	土瓶蓋	山麓 筒 形 蓋 口受有	1.4	6.3	2.3	8.8	81	ロタウ成形 削り高台	胎付 白土 胎付 白胎 不明 胎 (縁成不 詳)	内:- 外:-	千鳥文 蓋 口受有 筒 形蓋	紫褐色 内面無胎	乳白色	七面製陶所	-
130	調査区13	検結陶器	着焼→ 胎付	土瓶蓋	山麓 口 受有 筒 形蓋	-	6.0	3.6	8.4	42	ロタウ成形 削り高台	胎付 灰胎	内:- 外:-	文字文	紫褐色	乳褐色	七面製陶所	-
131	調査区13	検結陶器	着焼	土瓶蓋	山麓 筒 形 蓋 口受有	6.0	-	3.7	8.6	62	ロタウ成形 削り高台	-	内:- 外:-	-	淡褐色	七面製陶所	-	
132	調査区13	検結陶器	着焼	土瓶蓋	山麓 口 受有 筒 形蓋	-	(2.0)	1.6	(8.0)	68	ロタウ成形 型押	-	内:- 外:-	若松文	淡褐色	七面製陶所	-	
133	調査区13	土器	-	土瓶	-	-	(3.5)	-	6	ロタウ成形	胎付 灰胎 透明胎	内:- 外:-	貫文 外:-	紫褐色	七面製陶所	-		

No.	出土位置	材質	構成/窯話	群像/種類	形状特徴	寸法 (cm)				重量 (g)	成形・調整	器 器			胎土色	製作地	備 考
						口径/長さ	高さ/幅	最大径/厚さ	最大径/他			底付/胎土	文様	裝飾特徴			
134	調査区13	焼結陶器	漆焼→給付	土瓶	丸形 蓋受	6.0	-	7.6	17.0	66	ロウロ成形	底給 底給	内:- 外:-山水文	華耀金	明褐色	七面製陶所	-
135	調査区13	焼結陶器	漆焼→給付	器物	-	-	-	15.4	14.0	20	ロウロ成形	底給 底給	内:- 外:-人物文	華耀金	乳白色	七面製陶所	-
136	調査区13	焼結陶器	漆焼	行平	把手・段状 中央	7.2	3.4	6.1	-	37	ロウロ成形 胎付	-	内:- 外:-	-	乳白色	七面製陶所	把手保存
137	調査区13	焼結陶器	本焼	應利	志原形 鞍部球状 口縁下縁	4.5	-	12.6	-	221	ロウロ成形	- 底給	内:- 外:-	-	灰白色	七面製陶所	-
138	調査区13	焼結陶器	本焼	應利	志原形 鞍部球状	-	-	11.3	14.0	86	ロウロ成形	底付 自然 透明釉	内:- 外:-華文	華耀金	灰白色	七面製陶所	-
139	調査区13	焼結陶器	漆焼→給付→高橋	應利	鎌倉志原形 鞍部球状 高台	-	7.0	17.0	15.4	476	ロウロ成形 削中高台	底給 透明釉	内:- 外:-華文	華耀金	乳白色	七面製陶所	-
140	調査区13	焼結陶器	漆焼	應利	鎌倉志原形	5.2	-	13.0	-	157	ロウロ成形 上下貼合せ (下部欠損)	底給 底給	内:- 外:-不詳(欠損)	華耀金	乳白色	七面製陶所	-
141	調査区13	陶器	-	常連式 (1・手 シ)	立形形 断面円形	-	10.4	11.9	10.9	1,124	手捏成	- 自然釉	内:- 外:-	-	灰褐色	七面製陶所	上下面に輪・ ホコ状痕目 胴下部磨損
148	調査区14	土器	-	型	円形 七 角形 下 皿内形の 部分	18.0	13.5	11.1	-	700	手捏成 型作 り	-	内:- 外:-	-	乳白色	不明	内部破損
149	調査区14	磁器	-	昇縁	丸形 折 溝	15.5	6.9	7.3	-	395	型押	上給付 (裏・底・ 縁) 輪下 給 (縁) 口シ(透 明釉)	内:- 外:-草花文 円形 マーク(輪下 給) 口シ(手平文 (上給付))	華耀金 びん印	白色	美濃	蓋内「蓋形 に印」(輪 下給) 丸内 「丸印」 (上給付) 蓋内一部に 白色粉質付着
150	調査区15	焼結陶器	-	常連式 (手平 縁)	円筒形 口縁・胴 部直	17.6	21.7	15.6	-	1,350	組作り成形 ロウロ調整	- 自然釉	内:- 外:-	-	灰白色	七面製陶所	胴下部に右上 折溝 口縁・ 底面直下後金 傷

第4表 A・B地点出土遺物観察表(窯体・煉瓦・石製品・金属製品)

( ) は還元値、&lt; &gt; は残存値。

No.	出土位置	材質	構成/窯話	種類	形状特徴	寸法 (cm)			重量 (g)	備考
						長さ	幅	厚さ		
110	調査区13	粘土	-	窯体 (窯壁材)	-	10.2	10.0	9.4	1,160	型作り 全体に焼結(下部顕著、窯壁内面劣) 胎土色:黄褐色
122	調査区15	石製品	-	下水溝 (排水口)	板状 断面半円状	36.3	24.9	10.3	2,730	切出し 刀幅約 20mm 丸先隅丸方形 扇状貫孔部
123	調査区15	粘土	-	耐火煉瓦	-	15.2	11.3	5.2	1,430	型作り(上面押入) 上面に刻印(捺印)「6-1」(SK30) 胎土色:黄褐色 製作地:不明
142	調査区13	粘土	-	窯体 (色見元の産)	円筒形	-	13.8	10.4	502	外面に緑釉施 胎土色:黄白色 製作地:七面製陶所
143	調査区13	金属製品 (鉄)	-	錠子	-	8.2	6.9	0.5	29	下部欠損
144	調査区13	金属製品 (鉄)	-	錠	-	12.7	6.9	0.9	57	
145	調査区13	金属製品 (銅)	-	煙管継ぎ	-	4.7	総合径 1.1	0.1	13	片蓋欠損
146	調査区13	金属製品 (銅)	-	煙管継ぎ	-	10.1	総合径 6.9-1.5	0.1	13	
147	調査区13	金属製品 (銅)	-	不明	-	5.4	4.9	1.1	27	五角形(面取り)



### 第3節 第2・3次調査(C・D地点)出土の遺物

C・D地点では、A・B地点で出土していたような精製の七面焼とは異なる粗製の七面焼が出土することが特色である。このことは七面製陶所の来歴を窺っていく上で重要な指標となるものと思われる。そこで本報告書では、こうした偏差を明確化するため、精製七面焼・粗製七面焼と仮称し、それぞれの特色を注視しながら、一々の出土遺物の様相について報告していくこととしたい。

#### 第1項 調査区16・20出土の遺物(第38～64図、第5・6表、写真図版31～54)

調査区16と20は同じ箇所(C地点)で掘削しており、接合資料も多いため、一括で報告する。

#### 磁器(本焼)

19点を掲載した。151・153・157・221・223・224・228・490・492～494は碗である。151は薄手の丸碗で山水文を描く。肥前陶磁によく似た優品である。153は厚手の小坏(仏飯具の可能性もある)、157は破片のため器種不明。153・157は胎土は灰白色であるが、やや暗めで磁器の胎土としては精製されていない。透明釉には貫入が入り、陶器に近い面もあるが、呉須で笹文を描くなど明かに磁器を志向している。221は丸碗で、151ほど胎土は精製されていないものの、肥前磁器に似た器形と絵付が施されており、七面焼で焼成されていた磁器の標準的な資料と言える。223は小振りの端反碗。呉須で蝶文を描く。山水文等の風景文・草花文とともに蝶文も七面焼の磁器や太白手陶器等で一定数描かれるモチーフである。224も端反碗であるが、223より大振りである。222・223ともに貫入あり。228は薄手の丸碗である。胎土がやや灰色がかっているため、呉須の発色が濃緑に近い。絵付の筆致は滑らかであり、七面焼磁器のパリエーションと見られる。490は丸碗で胎土は肥前産磁器によく似た白色を呈する。呉須の発色がやや緑色味を帯びる。492は端反碗。貫入が入る。493・494は坏片で、493は筒丸形、494は筒形。胎土は緻密。

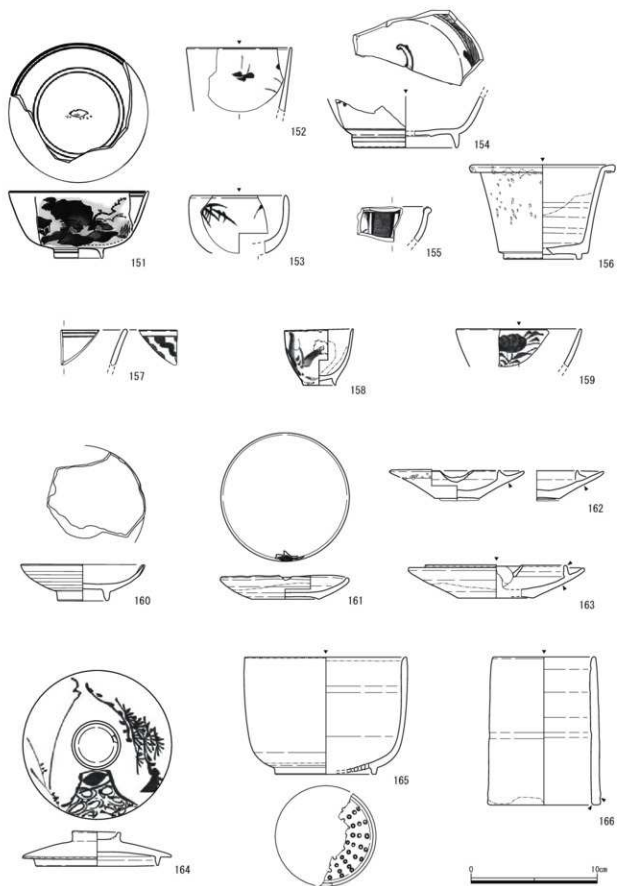
489は朝顔形碗蓋である。胎土はやや暗めの白色である。

154・155・225・226は皿である。154は蛇ノ目凹型高台皿。肥前では19世紀以降に流行する型式である。155と225は同一個体である。内面に区画文が描かれる。225は区画文間の絵付が認められるが、滲みが著しく筆致が粗雑な印象を受ける。153とよく似た胎土をしており、磁器の胎土としては精製が甘めである。226は型押成形の角皿である。梅花文が型押されている点は精製七面焼ならではといえよう。

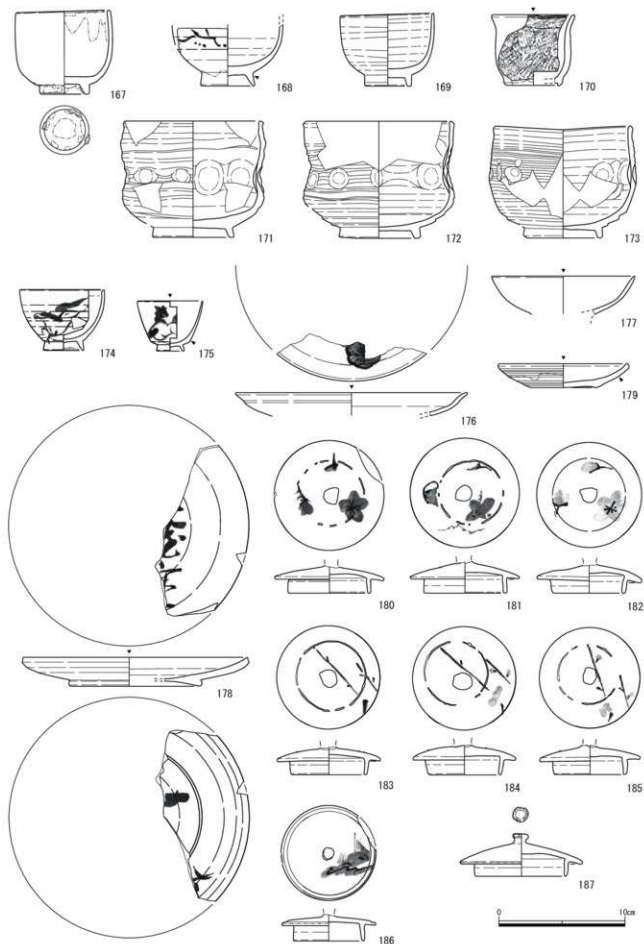
156・407は植木鉢である。156は器高が7.5cmと小型で、底部穿孔の径も3mmと極小である。器面には銅緑釉が掛かる。七面焼では珍しい器種である。407は器形としては碗であるが、底部に焼成前穿孔があり、植木鉢としたことが窺える。長石釉が掛かるものである。

198は水注である。153・157・154同様、精製が甘めな胎土であるが、呉須で桜文が描かれ、磁器を志向していたことが窺える。

C地区の磁器製品のうち、153・157・154・198はいずれも磁器としては素地が暗い粗製七面焼で、151でみられる肥前磁器と相似する製品とは技術的に大きな偏差が認められる。



第38図 調査区16出土遺物実測図（1）



第39図 調査区16出土遺物実測図(2)

## 磁器(素焼)

1点を掲載した。232は腰張碗である。肥前産半球碗のように薄造りで丁寧な成形がなされている。磁器碗の素焼は類例が少なく、稀少な資料と言える。

## 陶器(本焼)

109点を掲載した。152・159・222・267は太白手の製品である。152は猪口、159は碗、222は広東碗である。いずれも胎土は灰白色を呈するが、黄色味がかっている。器面全面に白泥を塗り、その上から呉須で文様を描いている。太白手の磁器を志向した製品は調査区6でも出土している(120)。267は把手。胎土は暗灰色を呈し、粗製七面焼の可能性がある。

167・175・246・248・250～252・261は粗製七面焼の碗である。167は筒丸碗である。外面鉄釉を厚掛けし、内面は藁灰釉を掛ける。壺付は無軸であり、その部分の素地を見ると胎土が赤みを帯びた灰黄色で、精製七面焼の胎土とは全く異なっている。175は無稜杉形の小平である。体部に跳ね馬文が鉄釉で描かれる。246・261は手捏の小碗である。販売品というよりは工人の趣味趣向で作られたものという印象を受ける。248は小振りの腰張碗で、一見すると精製七面焼のような薄手でシンプルな成形であるが、胎土の発色が赤味を帯びている点が異なる。250は大振りの平碗。胎土は長石を多く含んだ灰白色を呈する。251・252は腰張碗。251は体部に鉄釉で文字が、252は走り駒が描かれる。

176・265・266は粗製七面焼の皿である。176の胎土は暗めの灰黄色。梅花が描かれる。梅花の外郭を描く鉄絵の線は太く、民芸品のような雰囲気醸し出されている。265は土灰釉輪売皿で、2枚が融着する。266は胎釉の輪花皿である。

177も皿であるが、精製七面焼か粗製七面焼かの判別は不明。全面に青磁釉を掛けたシンプルなものである。

281・282・394は粗製七面焼の燈明受皿である。281・282の灰釉を肉厚に掛ける技法は精製七面焼の燈明受皿の系譜を引くが、油溝が1箇所である点(七面焼は2箇所)や、胎土が赤味を帯びている点が異なる。394は台皿が付き、鉄釉掛けである。油溝は1箇所。

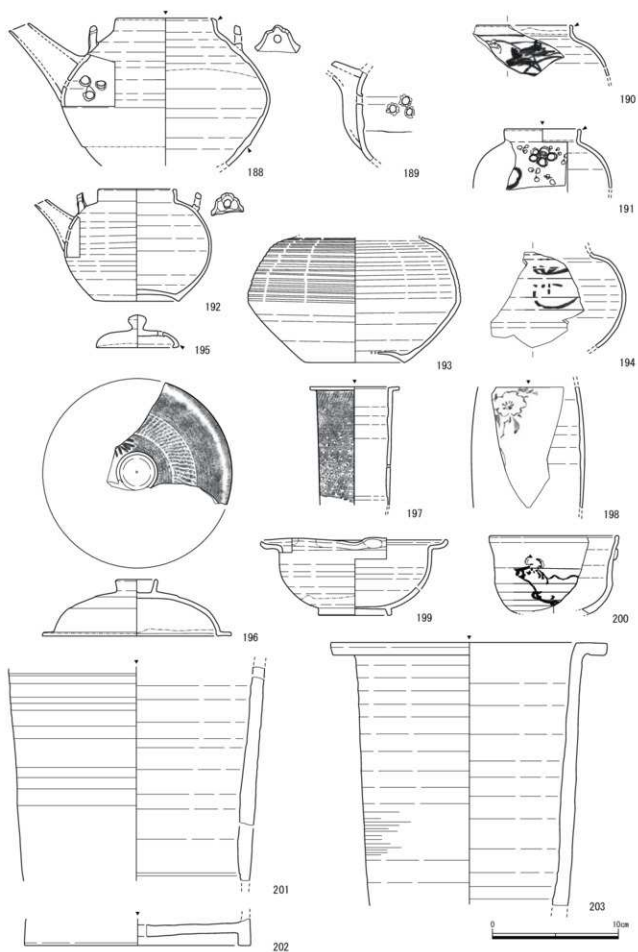
395～397は粗製七面焼の乗燭である。器高はいずれも4cm台で、台付たんころ形である。胎釉(395)と鉄釉(396・397)がある。底部回転糸切は左回転(395・396)と右回転(397)がある。

398は粗製七面焼のカンテラである。灰釉を厚掛けし、白地に見せている。信楽焼の影響を窺わせる。

199は粗製七面焼の鉢である。鉄釉掛けの上に藁灰釉を重ね掛けする。

400は粗製七面焼の植木鉢である。鱗縁腰張形で、海鼠釉を掛ける。胎土は黄色味を帯び、長石を多量に含む。

188～191・240・324～331・333～341は粗製七面焼の土瓶である。188は藁灰釉掛けで、胎土は暗味がかかる。189は注口の形状といい、内面に分厚く塗られた鉄釉といい、精製七面焼とは異なる製品である。190は土瓶で、益子焼を志向した絵付である。191の胎土は暗めの灰黄色。梅花が描かれる。梅花の外郭を描く鉄絵の線は176と同様に太い。240・339～341は青土瓶である。240の器形は精製七面焼に相似するが、胎土に長石が混じるなど、精製七面焼と全く異なる。注口は4穴。339も赤味を帯びた胎土、340・341も灰色を帯びた胎土で、長石は

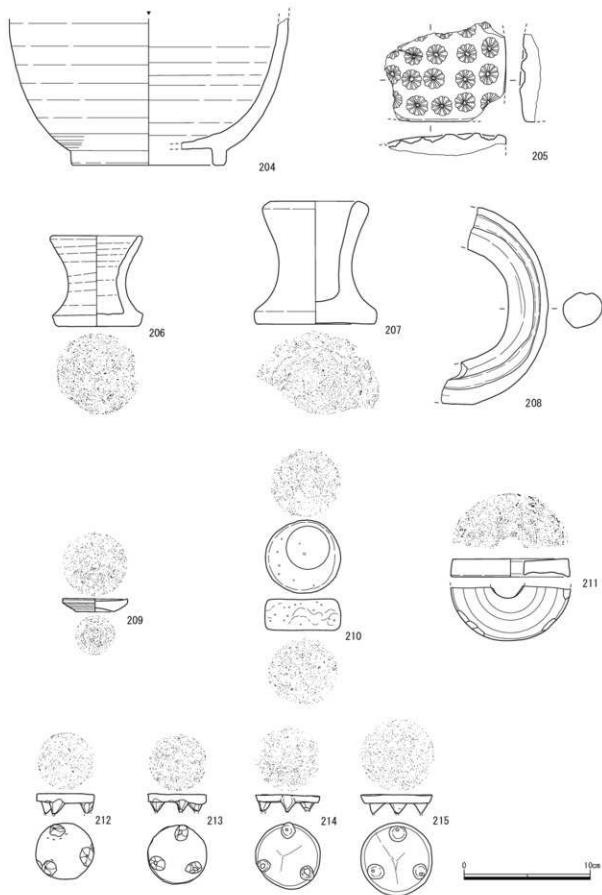


第40図 調査区16出土遺物実測図(3)

混じらないものの精製七面焼とはやや異なる。324・325は同一個体で、灰色味のある胎土でイッチンによる剣蓮弁文を描く。326はための鉄絵で富士山文を描く。肌は灰色味を帯びる。薄手。327・328は表面全面を白泥で塗り、その上に鉄軸で花唐草文(327)、鉄軸・緑軸で山水樓閣文を描く。益子焼の影響を受けているものと思われる。334も鉄絵や緑軸はないが、同様の資料である。329・331は表面全面を白泥で塗り、その上に呉須で絵付を施したものである。329は注口部分で3口。331は土瓶蓋が軸着する。330は素地に呉須で絵付し、その上から透明釉を掛けている。器形や絵付の傾向から逆無形徳利の可能性もある。333は糸目の注口で4穴。335～337はいずれも藁灰釉を掛けた丸形土瓶で、灰色の胎土で素面に黒点(黒雲母か)が全面に認められるのが特色である。一方注口は335が3穴、336が2穴、337が4穴という違いがある。粗製七面焼は注口の穴数は一定していなかったことが窺える。338は算盤玉形で、鉄軸が天目碗のように分厚く掛かる。注口内面は3穴。

187・286～293・295～309は粗製七面焼の土瓶蓋である。器形・絵付は精製七面焼の土瓶蓋(焼締陶器)に相似し、資料によっては判別し難いものもある。しかし胎土が暗味・赤味がかかること、長石が入ること、キメが粗いこと、若干肉厚なこと、絵付の線がためであること等の共通した傾向があり、粗製七面焼と判別した。187・307・308は青土瓶である。摘みは菊花摘み(187・307)、丸摘み(308)がある。308は急須蓋の可能性もある。286・287は梅花文である。精製七面焼が好んで採用したモチーフを継承している。胎土が異なるものの、判別が難しい資料である。287は上部に青土瓶が融着している。288は上部にイッチンによる線描きがなされているが、筆致が精製七面焼に比べ粗い。胎土は灰色味を帯び、発色が茶色がかっているため、一見すると胎土や鉄軸のように見えるが、灰軸掛けである。289はイッチンによる五弁花状文で、296・297は呉須による五弁花状文。いずれも288と同様の胎土である。290はイッチンによる蕨文が放射状に描かれる。摘みは菊花摘み。胎土は肌色味のある明褐色で、長石が混入しざらついている。291はイッチンによる文字文。288と同様の胎土である。292は鉄絵の松竹文を描き、線が太い。胎土は赤味を帯び、薄手である。293は鉄絵・白土で雪笹文を描く。菊花摘み。胎土は長石が多量に混入し粗い。295は橙色の素地に白泥を塗り、鉄絵で圏線を描く。丸摘み。298は銅緑軸流し・菊花摘み。胎土は灰白色で、素地の発色は褐色である。299～301は糸目土瓶蓋である。いずれも鉄軸掛け・丸平摘みであるが、299は糸目の本数が少なく、素地は暗めの灰褐色でキメは密である一方、300・301は糸目の本数が多く、素地は明るめの乳褐色又は橙色でキメは粗という差が認められる。302は鉄軸・菊花摘みのシンプルな資料である。素地は灰色味がかかり、ざらついている。303・304は胎土・菊花摘み。胎土は303が灰色味・304が赤味という違いがあるが、いずれも素地の発色は赤味がかるとともに、長石が多量に混入し、ざらついている。305は胎土・丸平摘み。胎土は明るめの黄褐色で、長石が混入しざらつく。307は海鼠軸・菊花摘み。素地の発色は305に相似する。309は無軸の丸平摘み。胎土は灰色を呈する。

319～323・362～364は粗製七面焼の落し蓋である。319～323は灰色味を帯びた灰黄褐色の胎土で、上面には糸目が付き、鉄軸で梅花を描く。320～323の胎土は共通しており、灰色がかかり、キメはやや細かいものの長石が混じり、微妙なざらつきがある。一方、320は鉄軸掛けで無文、321～323は灰軸掛けで鉄絵とイッチンで梅樹文を描くという違いもある。362～



第41図 調査区16出土遺物実測図(4)

364は赤みを帯びた褐色系の胎土で灰釉掛け。362・363は2個体が融着する。363は胎土に長石が混じる。

195・357・358は粗製七面焼の急須蓋である。195は藁灰釉が掛かる。357は鉄釉と白泥で梅樹文を描くタイプである。丸摘みで孔有り。358は落とし蓋で、イッチンによる梅花文を描く。穴有り。胎土は赤みを帯びた灰黄褐色である。

196・370は粗製七面焼の行平鍋である。196は飛び鉋を上面に施すが、精製七面焼の飛び鉋より浅い。内外面に鉄釉を掛ける。370は鉄釉掛けの袋形把手である。中空。

244は粗製七面焼の花生と思われるが、全体の器形は不詳。

263は粗製七面焼の鉄漿坏である。側面に摘みが付くタイプである(欠損)。

264は粗製七面焼の餌猪口である。

354・355・356は粗製七面焼の土鍋である。354は鉄釉掛け、355は胎釉掛け。いずれも胎土に長石が混じる。耳貼付。356は器高が浅いタイプで、胎土は明るめの灰黄色。キメは粗い。

349～352は粗製七面焼の土鍋蓋である。349は鉄釉掛けの上に、さらに鉄絵で梅花文等を描く。胎土は長石を多量に含み、ざらつきが著しい。350は内外面を白泥掛けし、その上に呉須で竹文を描く。351・352は内外面を灰釉掛けしたものである。351は軸葉の上からでも胎土に含まれる黒点(黒雲母か)が明瞭に認められる。352は上面に糸目が付く。胎土は白味を帯びた明灰褐色である。

366～368・377・378は粗製七面焼の鉢である。灰釉掛けの上からも黒点(雲母か)や長石が多量に認められる。367・378は灰釉、368は胎釉で、灰色味を帯びた胎土を呈し、長石が混じる。377は円筒形の手捏小鉢である。極めて粗雑なつくりで、販売用の製品というよりは工人の趣味趣向で製作されたものと思われる。

369は粗製七面焼の片口鉢である。鉄釉掛けの上からも長石が多量に認められる。

373は粗製七面焼の釜である。釉調や胎土は367・378とほぼ同一である。

381は粗製七面焼の水注である。全面に白泥掛けを施す。軽めの素地である。

382～384は粗製七面焼の徳利である。382は爛徳利で、長石や黒点(雲母か)が器面全面に認められる。383は薄手の胴縮形徳利、384は薄手の辣蕈形徳利で、いずれも胴部に飛び鉋が認められる。383は鉄釉、284は灰釉。

391は粗製七面焼の銚子である。瓢箪形を呈し、灰色味のある胎土に灰釉掛けし、鉄釉で絵付が描かれる。

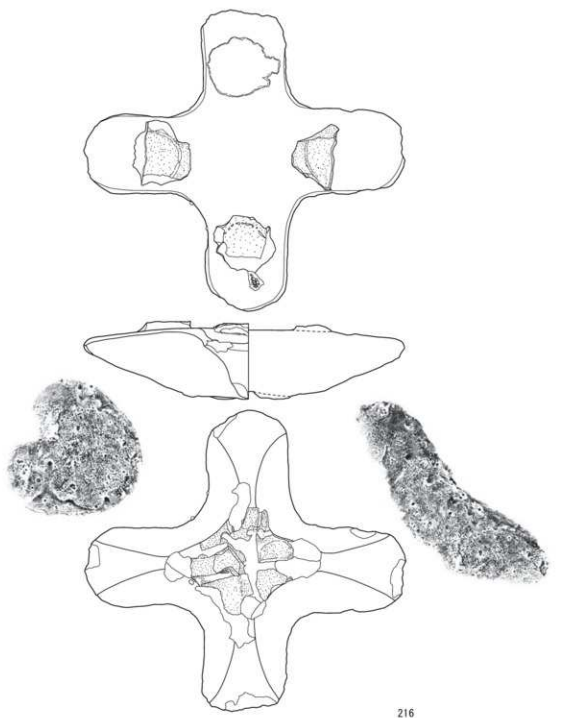
392は提子である。胎土は明るい灰黄色で、軽めである。混ざり気が少ない綺麗な素地。体部には鉄釉で火爐宝珠文が描かれる。精製七面焼と思われる。

393は粗製七面焼の水指である。灰釉の上から黒点(雲母か)や長石が全面に認められる。素地は灰色味を帯びる。

408は器種不明の陶器片である。茸形の型押製品。精製七面焼か粗製七面焼かは不明。

このように本調査区出土の陶器の多くが粗製七面焼であった。第Ⅱ章第3節で述べたように、七面製陶所は明治4(1871)年の廃藩置県によって官窯としての操業は終了するが、その後民窯として規模を縮小しながらも継続されたと思われる。C地点はまさに民窯としての登窯が操業していた場所に該当する。粗製七面焼は精製七面焼の系譜を引きつづも、精製七面焼で見





第 42 図 調査区 16 出土遺物実測図 (5)

られた上質な胎土や流麗な絵付ではなく、より廉価品に近い製品であるのが特色である。しかし、中には精製七面焼か粗製七面焼かの判別が困難なものも存在する。素焼製品になると判別はさらに困難となる。本章中の「焼締陶器（素焼）」「素焼製品」で七面焼としているものの中に、粗製七面焼が混ざっている可能性もある。精製七面焼と粗製七面焼との判別方法については、今後も検討を重ねていく必要がある。

### 陶器（素焼）

20点を掲載した。227は粗製七面焼の碗である。素焼の胎土に藁灰釉を全面に生掛けしている。そのため藁灰釉が剥がれ落ちる状態となっている。

269・270は粗製七面焼の変形型押六角皿で、雀文の型が押される。胎土は橙色。

200・203・204は粗製七面焼の鉢である。200は鉄絵で牛文が描かれる。口縁～胴部に切り込みが入り、留め具を模した粘土塊を貼り付けている。203・204いずれも胎土は粗い。204は内面黒色。

202・401・402は粗製七面焼の植木鉢である。202は203・204同様、胎土が粗い。401は額縁桶形、402は腰張形で、いずれも胎土に長石が多量に入り、キメは粗い。

180～186は粗製七面焼の土瓶蓋である。180～185は素地に梅樹文を描いた段階のもので、本来であればこれから釉掛けして焼成に入れる。摘みは全て欠損している。186は流水文で全面に白泥を掛けている。

365は粗製七面焼の蓋物蓋の摘みである。手捏によって梅花をあしらった特殊な資料である。

371・372は粗製七面焼の行平鍋の把手である。乳褐色を呈し、中空。371は九形で長石が混じる。372は山水楼閣文を陽刻し、雲母が混じる。

197は粗製七面焼の茶漉である。素地は灰色味を帯びており、七面焼の胎土とは異なる。

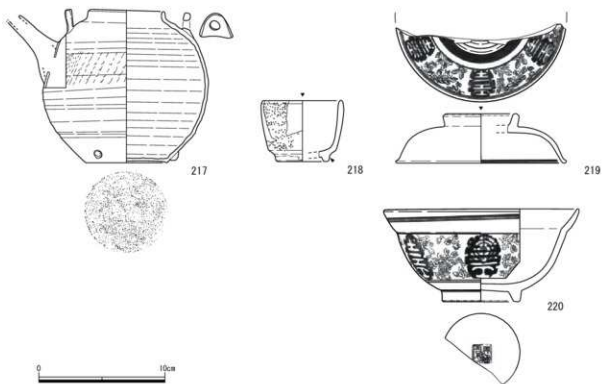
403は粗製七面焼の大型の壺である。底部回転糸切（右回転）。

### 焼締陶器（本焼）

25点を掲載した。168・245・249は碗である。168は高高台の碗で、外面に跳ね馬文が見られることから、125・126・174・175と同様、大堀相馬焼の影響が窺える。245は半球碗で、無地ながら丁寧な造りである。249は筒丸碗。同タイプの素焼製品229～231と対比できる好資料である。

233・234は皿である。いずれも中皿で、高台は付かない。技法としては燈明皿と同様である。高台がないベタ底の皿（燈明皿を含む。）は、精製七面焼の焼締陶器皿の特色の一つである。

161～163・179・237～239・273～275・280・488は燈明皿である。161・179・237・273・488は内面に鉄釉が掛かる。162・163・238・239は灰釉掛けで、受皿が付く。受皿のU字油溝はいずれも2箇所である。163は直径11cm（復元値）を測る大型の製品である。238・239は灰釉が分厚く掛かって全体が白色を帯びている。信楽産の台付燈明受皿の影響を受けているものと見られる。274・275は無釉で、底部脇に「瓢箪に借楽」の銘款が押される。274は口縁に煤が付着しており、実際に燈明皿として使用されたと見られる。「借楽」「借楽園」の銘款は、ハレ（非日常）の場で使用する高級な製品に限定して押される傾向にある中で、こうしたケ（日常）の場で使用する製品にも押されている事実は注視すべきである。本来施釉するはずの燈明皿が無



第43図 調査区16出土遺物実測図(6)

釉であることから、一見すると白カラケのようにも見える。ハレの場で使用することを目途に、あえて無釉にした可能性もある。280は鉄釉掛け・受皿付き・油溝円孔（U字油溝の有無は不明）という、他の出土資料とはやや異質な資料である。488は口径7cmと小型のカワラケである。

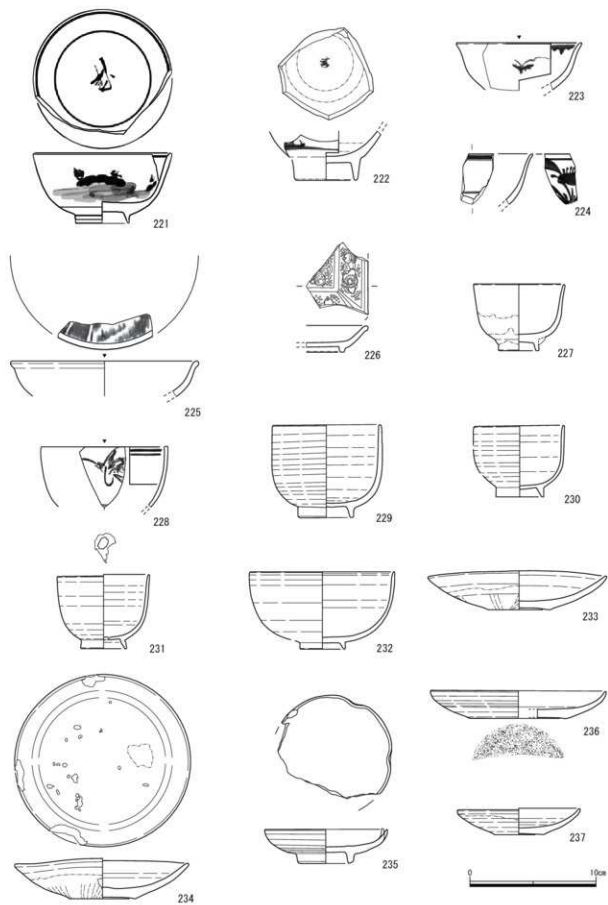
164・243は蓋物である。164は蓋物蓋で、鉄絵で松に富士山文を描く。富士山の右横に松樹の幹を大きく突き出した大胆な構図である。粗製七面焼の可能性を指摘しておきたい。243は段重である。上質な造りの精製七面焼だが、器形としては類例が少ない。

332は土瓶である。薬灰釉・太めの沈線文という釉葉や装飾は粗製七面焼に多い傾向があるものの、胎土は硬質で精製七面焼の特色を備える。

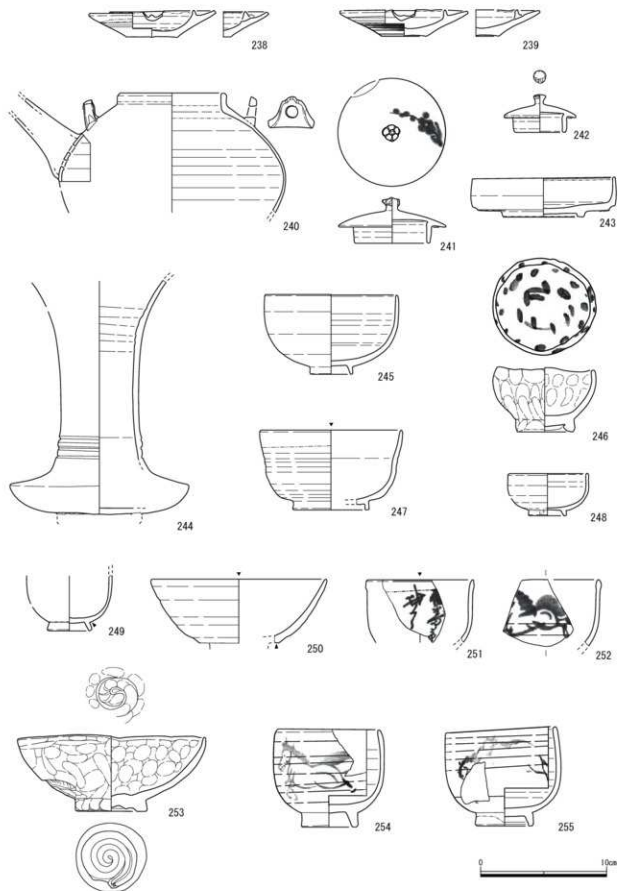
241・242・294は土瓶蓋である。241は灰釉に梅花文・梅花摘み。242は青土瓶で菊花摘みである（粗製七面焼の可能性あり）。294は宝珠文。本調査区の土瓶蓋は粗製七面焼が多く（陶器（本焼）の項を参照）、判別し難いものも多いが、本資料は胎土や発色ともに精製七面焼の典型である。

165は瓶である。瓶は調査区1出土で「瓢箪に偕楽園」の銘款が押された20があり、精製七面焼の中でも上質品として志向・製作された器種である。本資料に銘款はないが、全体の器形が判明する稀少な例である。口縁部は無釉。

166は不明製品である。円筒形を呈するが、底が抜けている。上質な作りであり、茶の湯等のハレの場で使用するものとみられる。底部無釉。



第44図 調査区20出土遺物実測図（1）



第45図 調査区20出土遺物実測図(2)

## 焼締陶器(素焼)

18点を掲載した。229～231、254～258は碗である。229・231は腰張碗、230は筒丸碗。いずれも水箪を重ねた綺麗な胎土であり、成形も薄型で丁寧である。254～258は体部に走り駒が描かれ、大塚相馬焼の影響が窺える製品である。器種は254・255が筒丸碗、256・258が腰張碗、257が体部に糸目が回るタイプである。

236・271・272・277～279は皿である。236と272は底裏に「瓢箪に借楽」の銘款が押される(236は「楽」の一部、271は「借」のみ残存)。白色味のある綺麗な胎土で、精製七面焼の優品の一つである。272は折縁の大皿。口径が24cmに対し、器高が2.7cmと極めて低い特色ある器形である。277～279は内面上部に描目を交差させたものである。器形は燈明皿と似ているが、若干口径が大きく、立ち上がりの角度が低い。描目の単位は7本である。

276は燈明皿である。乳褐色を呈する綺麗な胎土である。

283～285は土瓶蓋の摘みである。283・284は獅子形、285は亀形である。

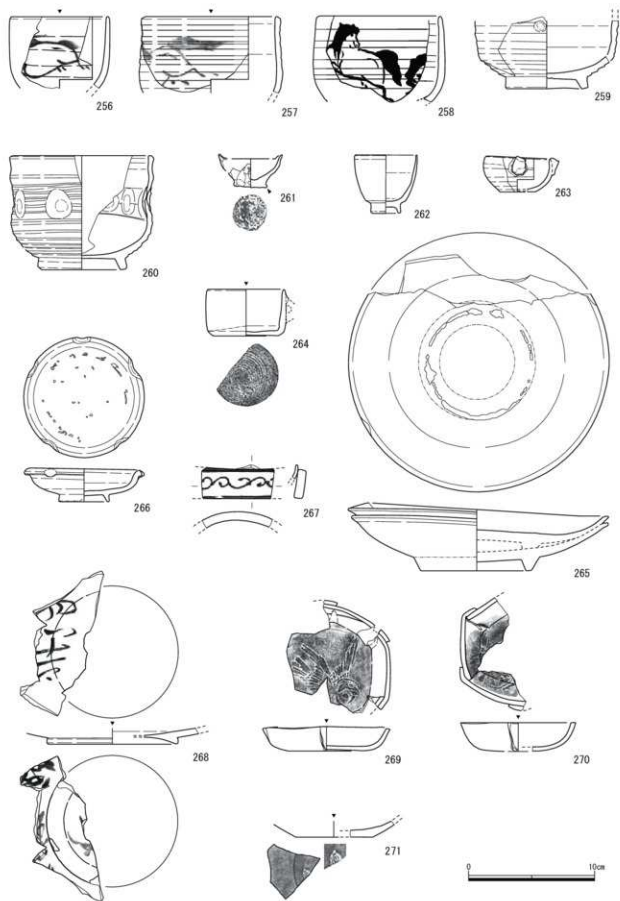
## 素焼製品

56点を掲載した。158・169～174・259・260は碗である。158・262は無稜杉形の小坏である。158は素地に白泥を生掛けし、その上から鉄釉で筋文を描いている。同器種は調査区13でも出土している(127)。169は筒丸碗である。陶器または焼締陶器と思われる。170は手捏の小碗で、口縁から底部までS字形の屈曲を描く。体部は畳目文が型押されている。171～173・259・260は拳骨碗である。いずれも口径が10cm以上ある大振りの製品であるが、薄手で上質さが感じられる。七面焼で一定量認められる器種である。174は小坏である。体部に走り駒が鉄絵で描かれる。大塚相馬焼の影響が窺える。

160・235・410～413は皿である。160は輪花皿で、胎土は乳褐色を呈し、磁器の胎土に近いもの、焼締陶器の可能性もある。235も輪花皿であるが、胎土は橙色を呈し、160とは質が異なる。粗製七面焼(陶器)の可能性が高い。410～413は「瓢箪に借楽」の銘款が押された素焼皿片である。いずれも底部に銘款が押される。他の銘款が胴部に押される中、この3点が底部に押されていることは注視すべきである。調査区21出土の505も同様である。410は他の2片よりも橙色が濃い。

379は鉢である。手捏の変形鉢で、菊花の型押が内面に施される。胎土に長石が多く混入する。粗製七面焼。

192～194・342～348・353は土瓶である。いずれも精製七面焼か粗製七面焼かは不明。192・194は小型土瓶で、胎土は赤味を帯びている。焼締陶器か陶器の素焼と思われる。192の注口は3穴。194は鉄絵で巾着文が描かれ、内面は灰色。193は茶釜形土瓶で、上半部分に糸目が付く。底面と内面は黒色。342は胎土が乳白色を呈する。外面に鉄絵で文様が描かれる。注口内部は3穴。343は外面全面に白泥を塗り、その上に鉄絵で幾何学文を描く。筆致は太い。344は小型の丸土瓶。胎土は乳褐色で、わずかに長石が入る。345は木瓜形土瓶で、下半が残る。若干厚手である。344同様の胎土で、長石の混入率は本資料のほうが高い。三足が付く。346は土瓶の下半で、胎土は灰色味を帯びた淡橙色で、他の資料と若干質感が異なる。内外面に白泥を塗っている。347は丸形で胎土は乳白色、長石は認められない。348は蓋受け有で、逆U字形



第46図 調査区20出土遺物実測図(3)

の耳貼付。内面黒変。353は鉄軸を部分掛けし、帯状に残った無軸の部分に飛び鉋で裝飾する。丸平摘み。

310～318は土瓶蓋である。精製七面焼か粗製七面焼かは不明。菊花摘み(310・313・315・318)、丸摘み(311)、丸平摘み(316)のほか、茸摘み(314)もある。314・315が押圧・刺突、316～318が飛び鉋による裝飾が施される。

359～361は蓋物蓋である。いずれも胎土は乳褐色で、縁に沈線が入る。359は上面が丸みを帯びない特徴的な器形である。孔有り。360・361は落し蓋で、回転糸切痕(右回転、360)や、鉄絵による絵付(361)の痕跡が認められる。

201・202は花生であり、201が胴部、202が底部である。恐らく同一個体になるものと思われる。胎土は乳白色で、借楽園の銘款が押された44と同様に上質な素地である。精製七面焼の中でも高級品の部類に入り、磁器又は焼締陶器になるものと思われる。

374は瓶である。胎土は赤味がかり、密で比較的綺麗さを感じる一方、底部孔のバリを削り取っていないなど、精製七面焼の瓶(20・165)に比べ雑な印象も受ける。精製七面焼か粗製七面焼かは不明。

375・376は卸皿である。375の胎土は赤味のある乳褐色を呈し、キメは細かい。精製七面焼か粗製七面焼かは不明。376は胎土が灰色味を帯び、キメは粗い。粗製七面焼か。

385～390は徳利である。385～387は薄手・大型の辣蕪形徳利である。体部に飛び鉋が認められる。内面黒色。精製七面焼か粗製七面焼かは不明。388は精製七面焼の徳利である。乳白色の胎土に鉄軸で花文を描く。389・390は爛徳利である。385～387と同様の素地。389は内面黒色で胎土に若干の長石が混じる。390は鉄文字で「□や」という屋号を入れる。長石の混じりが多い。

399は香炉の破片か。篋描きで花文を書く。胎土に若干の長石が混じる。粗製七面焼か。

404・405は壺の破片である。404は突帯が巡り、篋描きで鋸歯文を書く。405は櫛目で波状文を引く。いずれも胎土は赤味を帯びる。粗製七面焼か。

406は飯飯具の脚部である。胎土に若干の長石が混じる。粗製七面焼か。

409は動物(魚)製品である。何らかの陶磁器類に貼り付けたものの一部とみられる。乳白色を呈する。精製七面焼か。

## 土器・土製品

2点を掲載した。253は手捏の平碗である。全体に指頭疔痕が認められ、口縁から同部にかけてのヒビを白泥で補修している。煤が付着するなど全体的に使用感があり、製品ではなく窯業に用いられたものと考えられる。

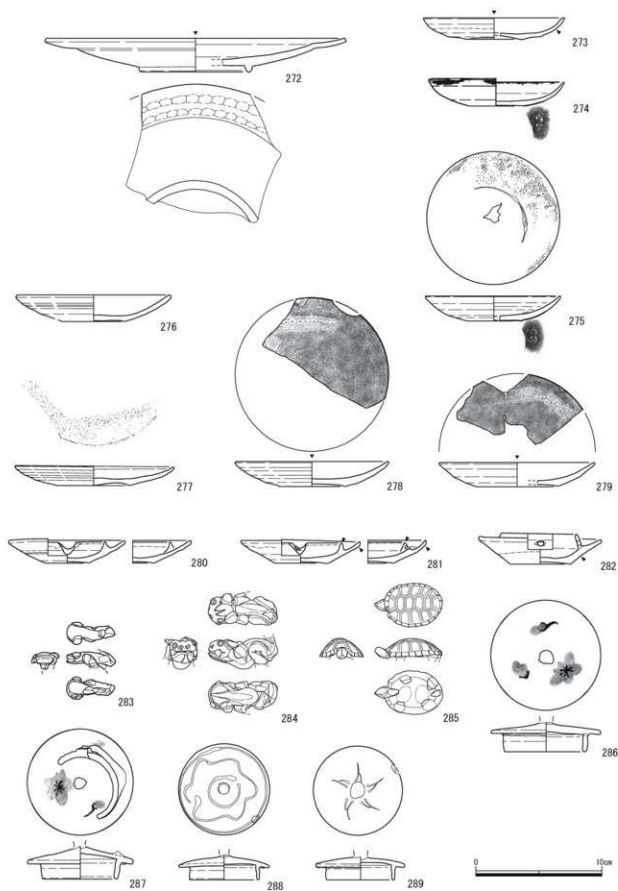
420は土錘状の土製品である。棗形を呈する。用途は不明。胎土は暗めの橙色で、長石が入る。

## 窯道具

68点を掲載した。内訳は焼台19点、トチン10点、輪トチン2点、握りトチン1点、ハマ9点、三足付きハマ7点、タコハマ2点、キキョウ台16点、棚板2点である。

206・207・424～430・456～465は焼台である。430はハの字状を呈する円筒形、465は円筒形、それ以外は立鼓形である。特大型、大型、中型、小型、極小型の5種類に概ね分類できる。





第47図 調査区20出土遺物実測図(4)

430は高さ19cmを測る特大タイプ。427・428・463・464は高さが10～11cm台の大型タイプ。206・207・424～427・429は高さが7～9cm台の中型タイプで、回転糸切痕(右回転)が認められるものが多い。456～462は高さが3～6cm台の小型タイプで、回転糸切痕(右回転)が認められるものが多い。なお461のみ中空ではなく、小型トチンの可能性もある。465は高さ2cm未満の極小タイプである。成形技法は手捏ね成形・ロクロ成形の両方があるが、概してロクロ成形が多い。

431・466～474はトチンである。431は器高11.3cm、上面径9cmの寸胴タイプで、上面に直径77mmの高台痕が残る。466～468は高さが約4～6cm測る小型のものである。466が手捏成形、467・468がロクロ成形で底部に凹みがある。469・470は高さが約10cmを測る中型のものである。いずれも手捏成形で、底部に凹みがある。471～473は高さ14～15cmを測る大型のものである。手捏成形で、底部に凹みがある。小型タイプは高さが6cm。474は高さ17cm以上(上部を欠損するが、20cm以上になるものと思われる)、底部径13cmの特大タイプである。胎土は白味がかった黄白色を呈する。ロクロ成形で、回転糸切痕(右回転)あり。他の資料より整形がしっかりしている。

208・432は輪トチン(ワドチ)である。208の径は16cmと大きい。鉢等に使用したものと思われる。432は径が3.7cmを測る小型の資料である。

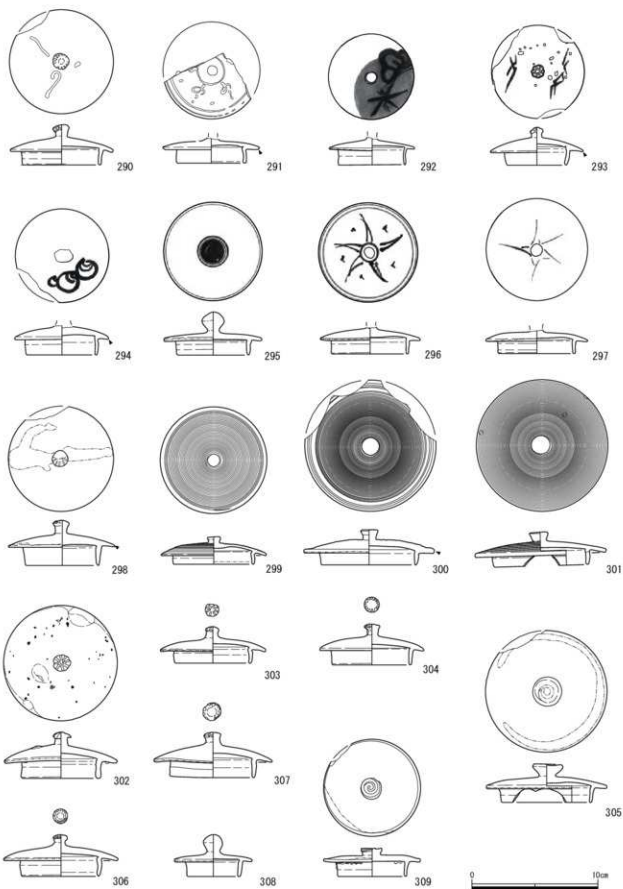
475は握りトチン(ニギリドチ)である。赤味を帯びた胎土。手捏で指先で押しながら帯状に伸ばして整形している。指圧痕には指紋が明瞭に残る。

209～211・433～436・476・477はハマである。209・436は逆台形タイプの小型のハマ、210は肉厚のハマ、211・433～435・476・477は有孔タイプのハマである。調査区1で出土したハマは指頭圧痕が残る即席タイプのものが多かったが、本調査区ではロクロ整形タイプが多い。210は手捏であるが、よく成形されている。このように調査区ごとに偏差が認められる点は注視すべきである。476は径21cm、477は径28cmと大きく、U字切が認められる。大型のハマの特色と思われる。

212～215・437～439は三足付きハマである。214は型押成形、他はロクロ成形で、回転糸切痕が認められる。212・213・215は右回転、437・439は左回転。径は4～7cm台である。437のみ有孔。

216・440はタコハマである。平面形は十字で断面は逆台形を呈する、一般的なタイプである。型押成形で、同部布目が認められる。

421～423・443～455は粗製七面焼のキキョウ台である。5箇所のV字切り込みの形状といい、サイズといい、精製七面焼のキキョウ台(75～78)とほぼ同一で、器形的には円孔がやや概して小さい程度の違いしかない。大きく異なるのは胎土である。精製七面焼のキキョウ台の胎土は土瓶で見られるような混入物の少ない綺麗な胎土で、焼成も焼締陶器であるのに対し、421～423・447～452は長石や黒色粒子(雲母か)が多量に入る陶器製である。443～446は素焼製品であるが、胎土の状況は447～452と同一である。453～454は焼きが甘いため土器質に近い焼成になっており、円孔の位置や大きさも不統一である。このように粗製七面焼は、精製七面焼の系譜を引きつつも、上質な製品から、より利益率を重視した品質の製品(必ずしも低品質ということではなく、粗製七面焼は概して標準的な品質であったと見られる)の焼成を目



第48図 調査区20出土遺物実測図(5)

途に生産されたことが、窯道具の偏差からも窺えるのである。

441・442は棚板である。長石を多量に含む。法量(幅約17cm、厚約4.5cm)も同一である。

### 窯体

3点掲載した。478～480は窯の壁材である。478は橙色の胎土で、長石を含む。粘土塊の上面に厚さ約5mmの板状粘土を貼付け、外壁としている。479は3面が平滑であり、煉瓦の可能性もある。480は長石が多量に混じる橙色の胎土である。粘土塊の外周を厚さ10mm程度の板状粘土で包んでいる。4面が平滑であり、幅の実寸(19.4cm)が判明する資料である。

### 窯関連資料

7点を掲載した。

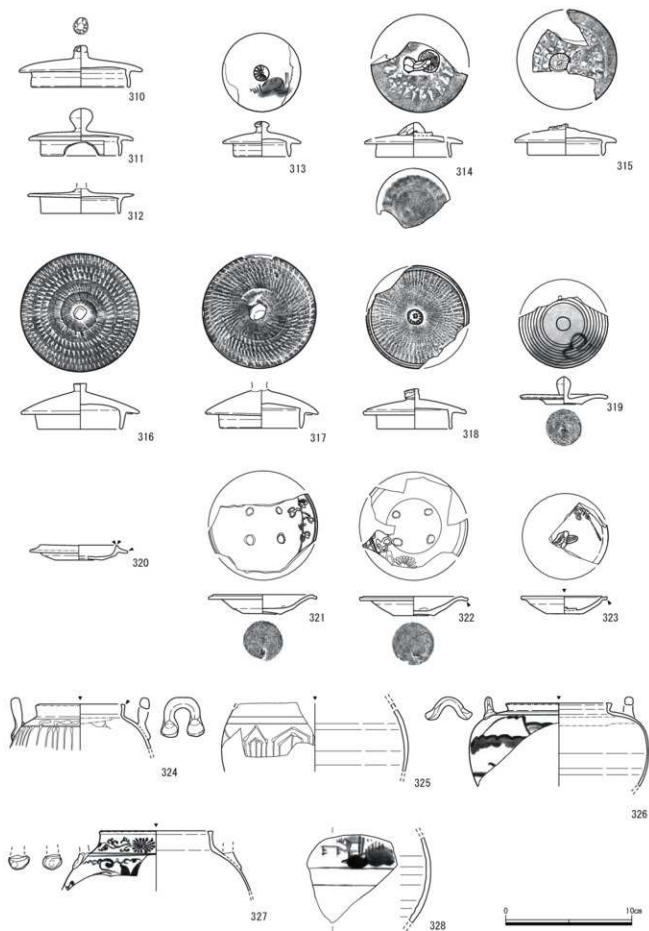
205・414～419は型である。205・416・417は土瓶蓋に使用される摘みの型で、菊花形(205・416)と、五弁花形(417)がある。こうした型により量産されていたことが窺える。414はどのような製品の型なのか不明。415は行平把手の型である。418は魚の鱗のように見える。419は窯道具に使用する円錐ピン又は三足付きハマの足の型である。陶器製。焼成後は底面は1.5cm程度になると見られ、ピンのサイズとしては大型の部類に入る(堀内秀樹氏のご教示による)。裏面中央に「伊州／丸柱／宮田口／捺之」、左上隅に「天保／己亥／十二月／かた」という籠描きが陰刻される。天保己亥は天保10(1839)年に当たり、七面製陶所の開設の翌年である。伊州丸柱とは、伊賀焼で著名な伊賀国丸柱窯のことである(現在の三重県伊賀市丸柱町)。前述のように七面製陶所の土瓶は、伊賀焼で普遍的に見られる算盤玉形の薄手土瓶に相似した器形が特色の一つであり、伊賀焼の系譜は出土資料から窺えるところであった。本資料は七面製陶所開設間もない時期に、伊賀丸柱窯の工人・宮田某氏が自ら製作した型を携えて、水戸藩の製陶に関わっていたことを示す文字資料として位置づけられ、考古学的な所見と矛盾しない。一体に七面製陶所の出土資料には、肥前陶磁、京・信楽焼、伊賀焼、大塚相馬焼、飯能焼といった様々な焼物の特徴が認められる。19世紀は諸藩で製陶が試みられ、諸窯の工人が全国展開するとともに、技術的交流を重ねた陶磁史上のエポックであり、本資料は近世後期における工人の交流を示す好資料と言えよう。

### 七面焼以外の製品

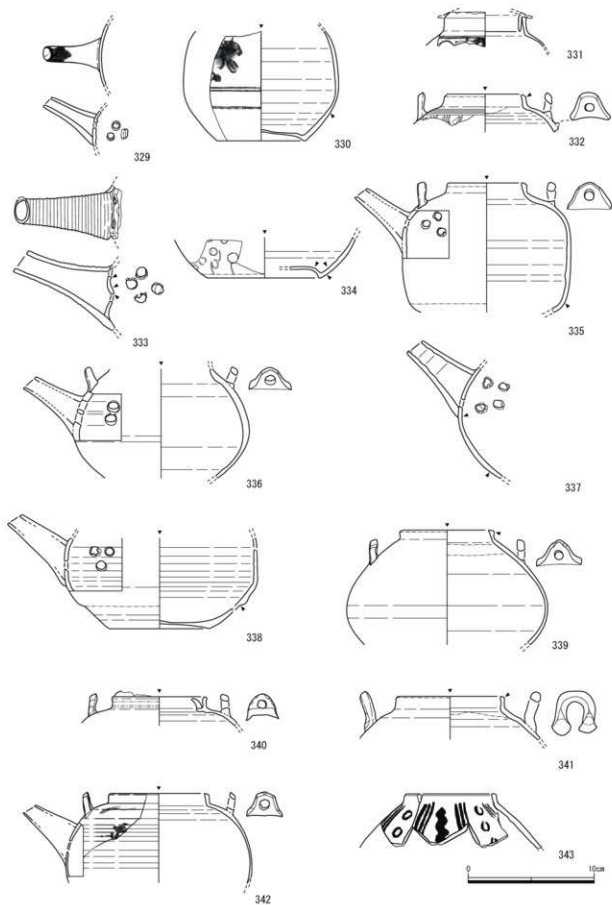
20点を掲載した。218・247は陶器碗である。218は瀬戸・美濃産の近代の小坏である。鉄軸が橙色に発色している。247は瀬戸・美濃産の腰銹小服Cである。生産年代は1730～1770年代。

484～486・491は磁器碗である。484は猪口である。呉須で花卉文を描く。胎土が灰色味を帯びる。漆継痕があることから、七面焼ではないと判断した。在地産か。19世紀。485は平形碗である。卵殻手のように薄手で、コバルト染付で飛龍雲文を描く。線は細いが、筆致は粗い。胎土は瀬戸・美濃産磁器に相似するものの、発色が暗めであり、在地産の可能性はある。486は瀬戸・美濃産の端反碗Bである。19世紀前半。491は瀬戸・美濃産の端反碗である。19世紀中葉か。

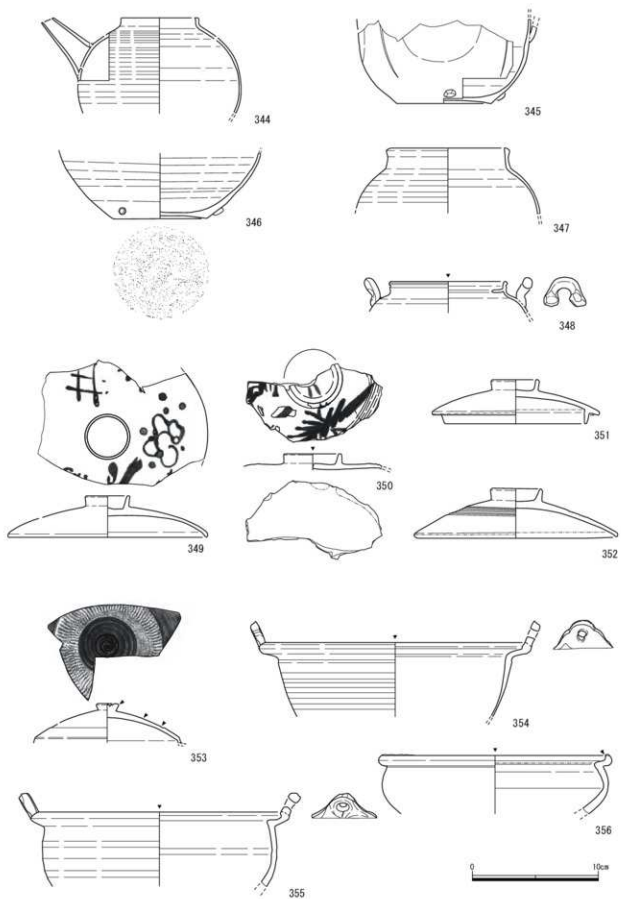
178・268は皿である。やや大振りの素焼皿で削り高台。内外面に墨書がある。欠損のため判読ができないものの、一文字が比較的大きく明瞭な筆致である。胎土は暗灰色で七面焼の胎土と明かに異なる。素焼ということも踏まえると、何らかの祭祀儀礼に用いられた道具の一つであると考えられる。



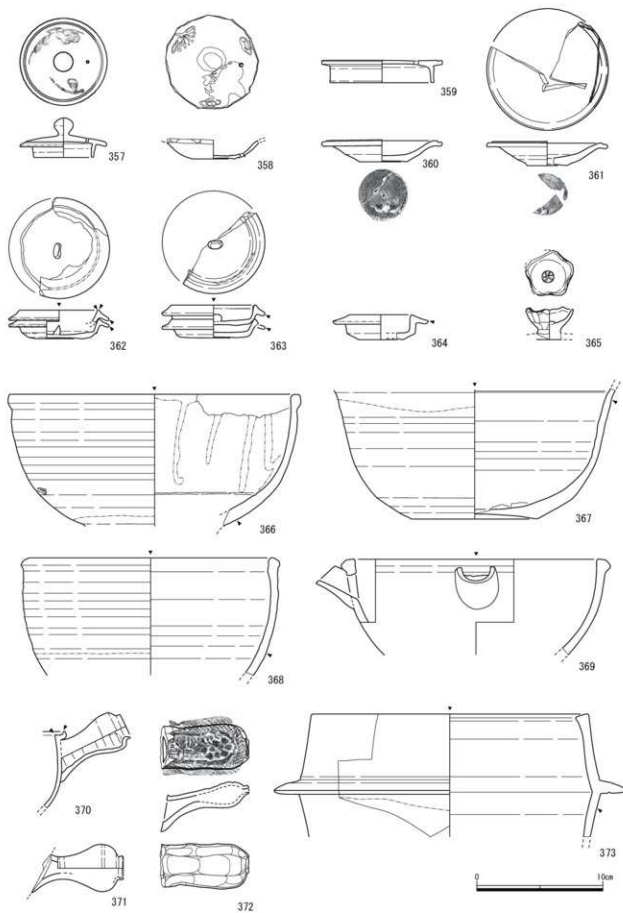
第49図 調査区20出土遺物実測図(6)



第50図 調査区20出土遺物実測図（7）

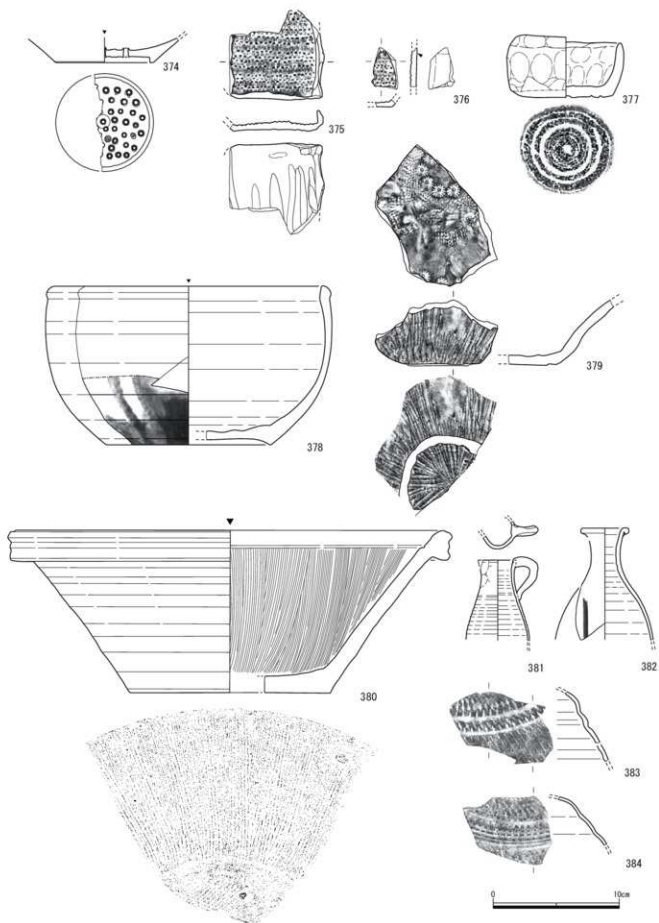


第51図 調査区20出土遺物実測図(8)

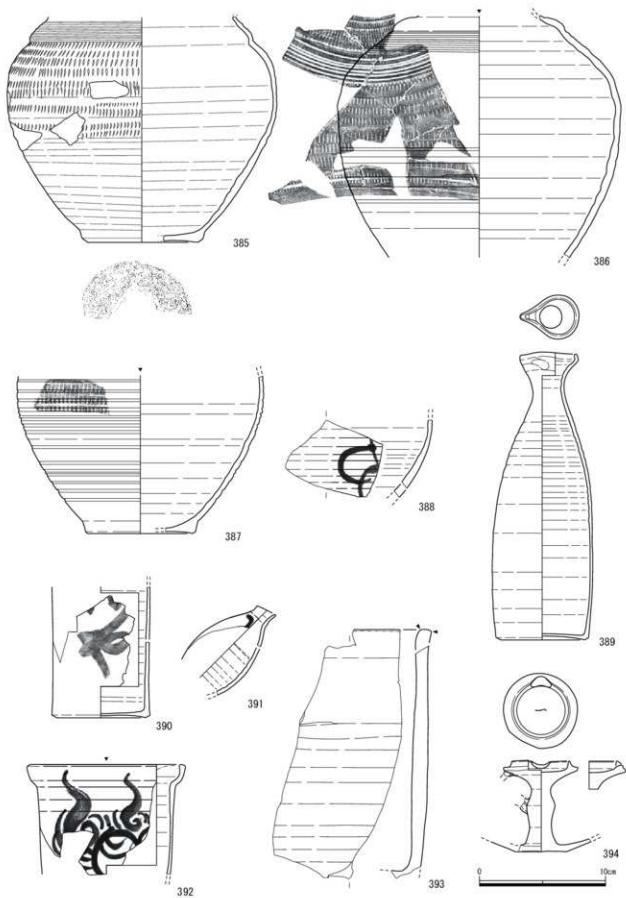


第52図 調査区20出土遺物実測図（9）

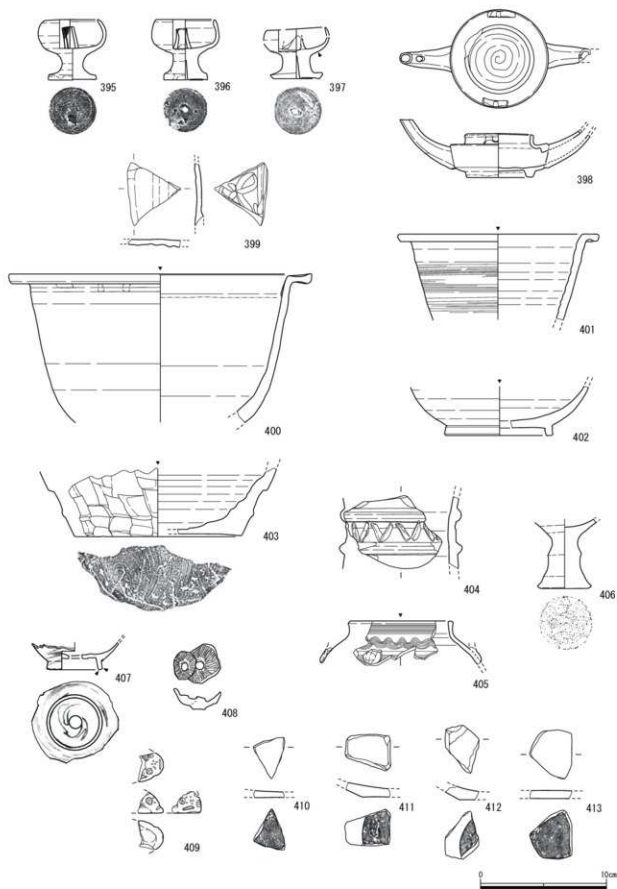




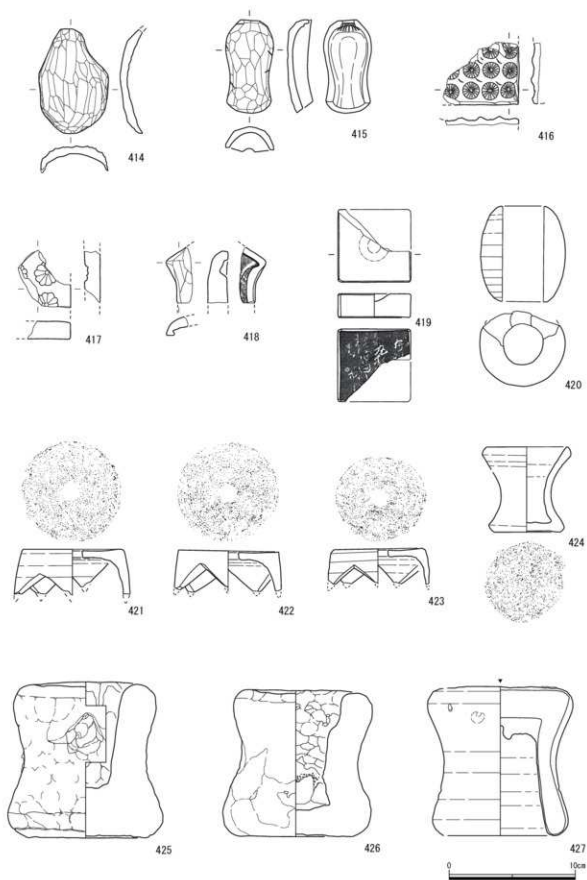
第 53 図 調査区 20 出土遺物実測図 (10)



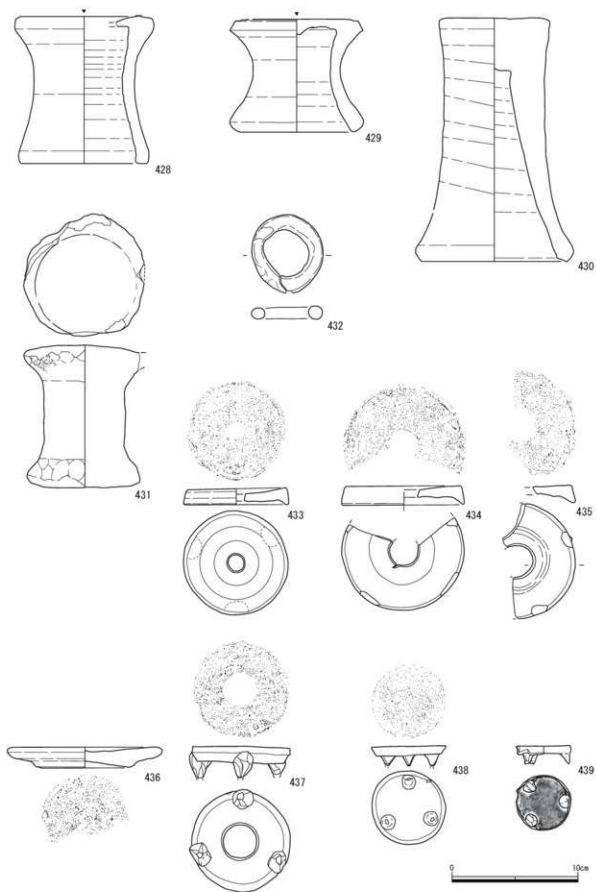
第54図 調査区20出土遺物実測図(11)



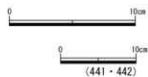
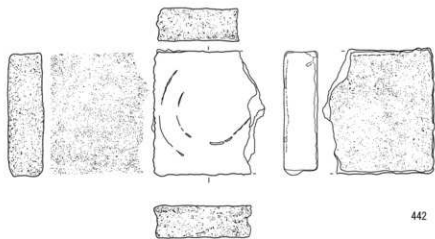
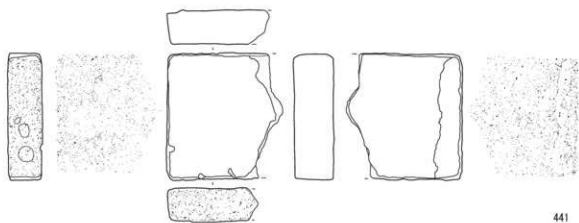
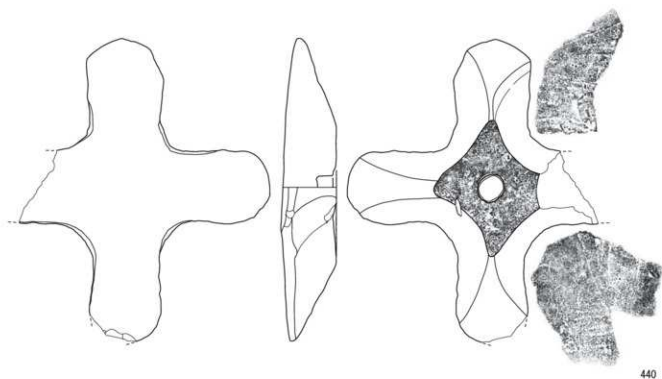
第 55 図 調査区 20 出土遺物実測図 (12)



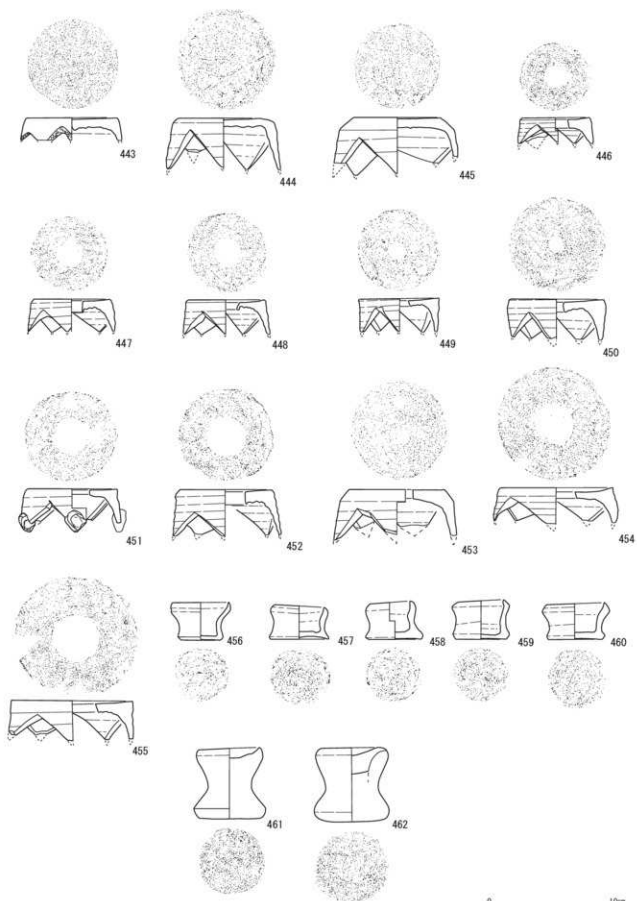
第56図 調査区20出土遺物実測図(13)



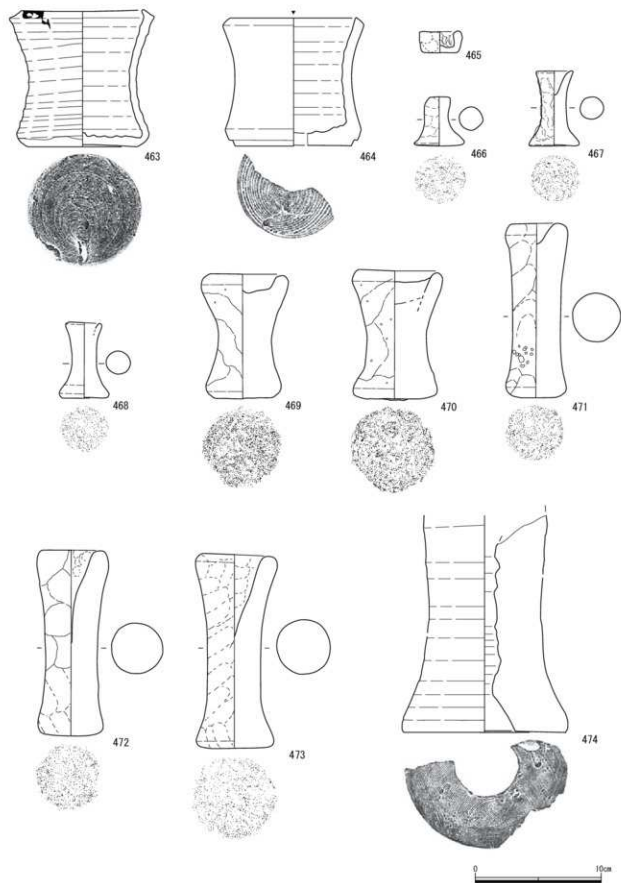
第 57 図 調査区 20 出土遺物実測図 (14)



第58図 調査区20出土遺物実測図(15)

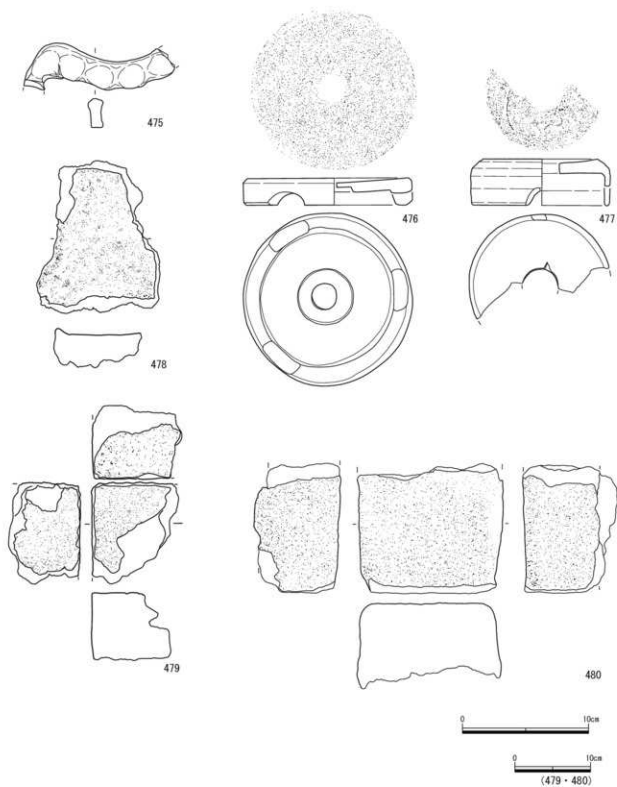


第 59 図 調査区 20 出土遺物実測図 (16)

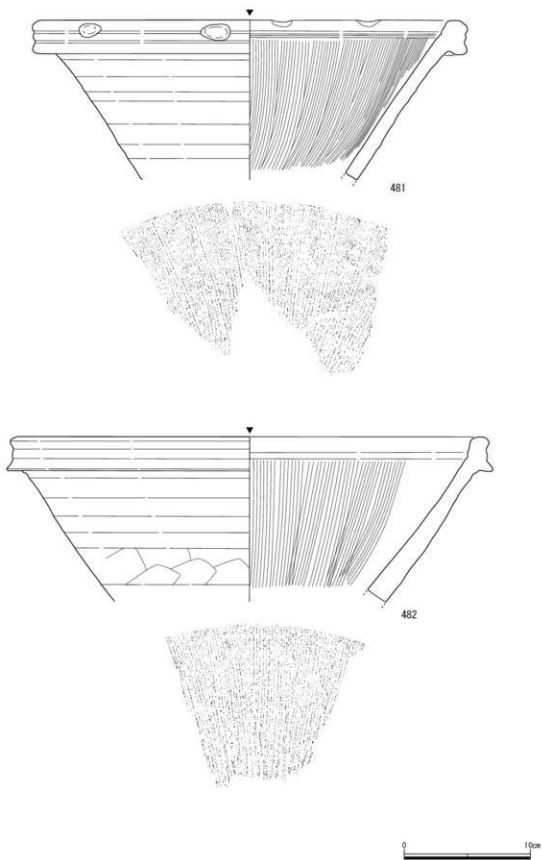


第60図 調査区20出土遺物実測図(17)

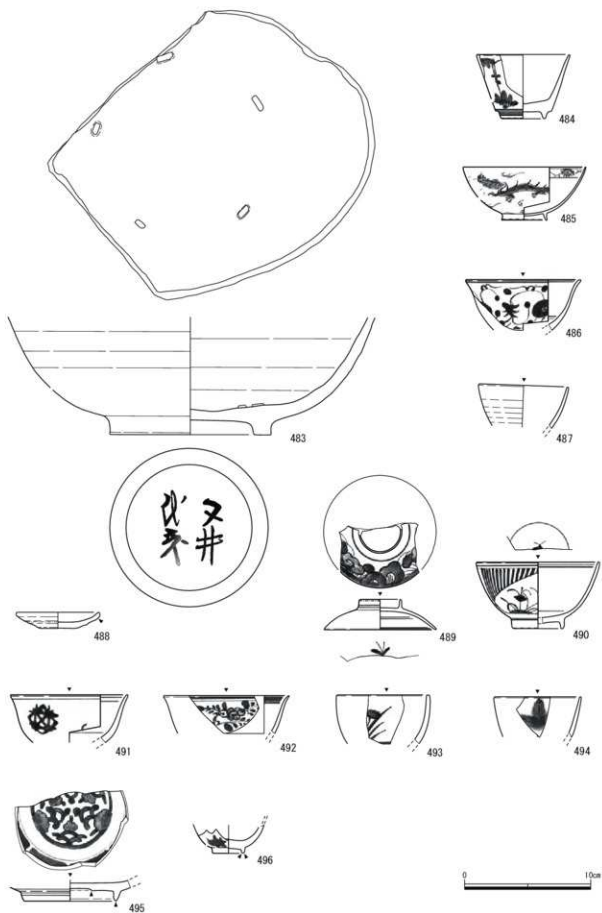




第61図 調査区20出土遺物実測図(18)



第 62 図 調査区 20 出土遺物実測図（19）



第 63 図 調査区 20 出土遺物実測図 (20)

495は磁器皿である。肥前産の蛇ノ目凹形高台皿Bで、見込に環塔文を描く。1800～1860年代。219・220は鉢である。いずれも統制磁器で、九谷風の上絵付を施した井鉢(219)とその蓋(220)である。統制磁器の種類や、上絵の文様は調査区14で出土した149と全く同じである。揃いの資料とみて間違いない。

380・481・482は挿鉢である。380の口縁外帯は3段。胎土は灰褐色を呈し、φ1.5cmの長石も混入する。在地産と思われる。481は堺・明石系挿鉢(焼締陶器)である。口縁外帯は3段。482(陶器)は黄褐色の粗く軟質な胎土に銹釉を施しており、瀬戸・美濃産に類似するが、器形が異なる。口縁外帯は3段。在地産か。挿目には使用痕が残る。

483は陶器捏鉢である。内外面に海鼠釉を施す。胎土は黄味がかった灰黄色。見込にキキョウ台の軸着痕が5箇所残る。高台底裏に墨書「又井/□□」が認められる。松岡焼か。

217は土瓶である。大堀相馬焼の青土瓶で、底部に煤が付着しており、使用痕が認められる。

487は陶器製の坏である。丸形で、胎土は黄白色で、瀬戸・美濃産と判断したが、粗製七面焼の可能性もある。

496は磁器製の紅猪口である。波佐見焼で、コンニャク印判で紅葉文が描かれる。1690～1740年代。

497は施釉陶器製の鳩形土製品。鳥笛の可能性もある。江戸近郊産か。18世紀後葉以降。

501は耐火煉瓦である。「□-11E/□-2」の刻印がある。近代以降に当該地区に設けられた遊興施設のものと思われる。

## 金属製品

3点掲載した。498～500は寛永通宝である。いずれも銅一文銭で、498は古寛永、499・500は新寛永。

## 第2項 調査区21 出土の遺物 (第65～72図、第5・6表、写真図版55～59)

### 磁器(本焼)

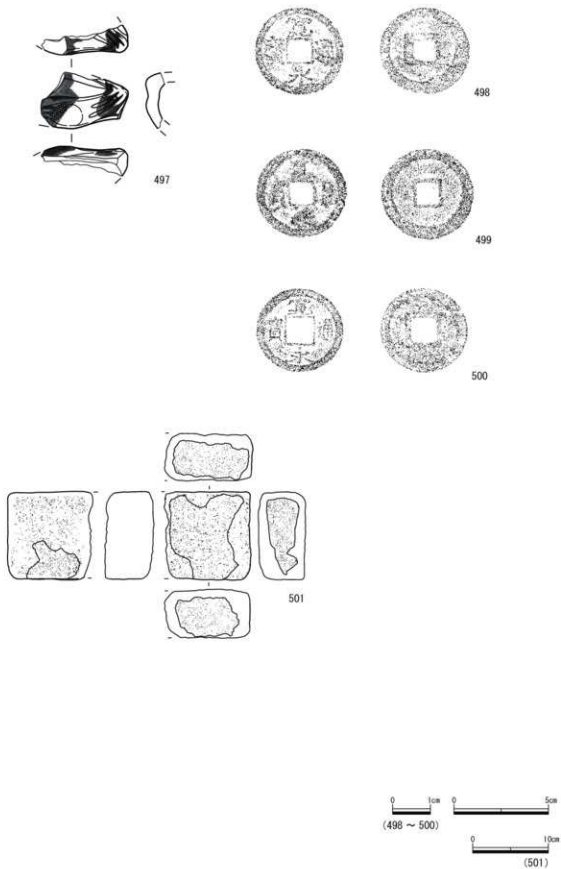
4点を掲載した。502は小坏である。高台がやや高く、口縁が外反する。胎土は灰色味を帯びた白色。539・540は磁器丸碗である。539は体部に唐草文、540は山水文を描く。胎土は肥前磁器のように緻密であるが、やや暗めの白色である。452は筒丸碗である。胎土は539と相似する。沢潟文を描く。

### 陶器(本焼)

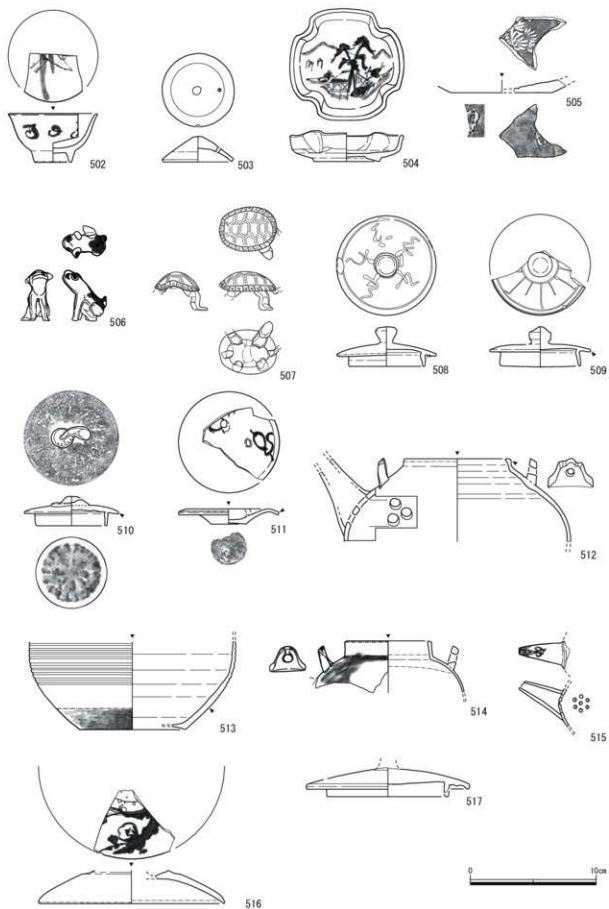
2点を掲載した。504は太白手の変形角皿である。鼠色の胎土に分厚く白泥掛けし、呉須で山水文を描く。本資料のような胎土は精製七面焼に類例がなく、粗製七面焼の可能性もある。508は粗製七面焼の土瓶蓋である。丸摘みでイチチンで文様を描く。胎土は赤味の強い橙色である。

### 陶器(素焼)

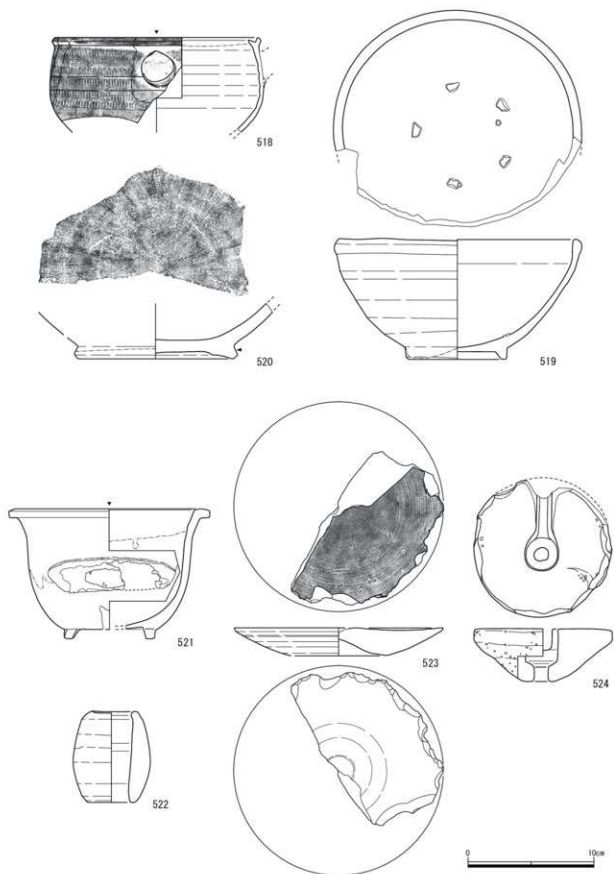
10点を掲載した。512～513は粗製七面焼の土瓶蓋である。512は灰黄褐色土の胎土に薬灰釉を掛けたもので、長石が多く混入する。注口内部は3穴。513は明褐色の胎土の内外面に釉釉を掛けた糸目土瓶である。底面は無釉だが、黒色処理が施されている。



第 64 図 調査区 20 出土遺物実測図 (21)



第65図 調査区21出土遺物実測図（1）



第 66 図 調査区 21 出土遺物実測図 (2)

510・511は粗製七面焼の土瓶蓋である。510の摘みは葎形である。褐色の胎土で、上面は白泥が塗られる。511は落し蓋で、摘みは欠損するが、欠損部分が中央ではなく中央周辺に複数認められることから、亀形のような意匠を凝らした摘みであった可能性がある。胎土は灰黄色で、比較的綺麗である。

514・515は粗製七面焼の急須である。いずれも灰黄褐色の胎土に白泥を塗り、その上から呉須で絵付を施す。514の絵付の筆致は粗く、滲みが著しいため文様の判別は不能である。515は注口部分で7穴。蓮弁花文を描く。

516は粗製七面焼の土鍋蓋である。灰黄褐色土の胎土に灰釉掛けし、鉄絵と白泥で梅樹文を描く。梅樹文の線は太い。

519は鉢である。胎土は灰黄褐色で、長石を多く含むざらついた胎土である。内外面に土灰釉を施す。見込み中央にキキョウ台の痕が5箇所認められる。

520は挿鉢である。丸鉢状の器形に細い挿目が放射状に入る。外面は土灰釉で、胎土は赤褐色を帯びる。

521は植木鉢である。高さ10cm台の小型で、鰐縁腰張形を呈す。うのふ釉の上から銅緑釉を重ね掛けする。胎土は灰黄褐色で、長石が多く入りざらつく。

#### 焼締陶器(本焼)

3点を掲載した。506は土瓶蓋の摘みである。犬形を呈する。灰褐色の胎土に白泥を掛け、呉須でブチを表現している。貫入が入る。509は土瓶蓋である。宝珠形摘みで、イッチンで花卉文を描く。胎土はやや暗めだが、硬質である。518は行平鍋である。内外面に鉄釉を掛け、外面に帯状に飛び鉋を施す。飛び鉋は丁寧にかけている。胎土は綺麗な灰黄褐色。

#### 焼締陶器(素焼)

2点を掲載した。505は菊花文の陰刻のある皿である。焼締陶器か。裏面に「瓢箪に借葉」の銘款が押される。

507は亀形の土瓶蓋の摘みである。類例に調査区20出土の285がある。

#### 土器・土製品

1点を掲載した。522は土錘状の土製品である。橢球形を呈する。用途は不明。胎土は乳褐色で、長石が入る。類例に調査区20出土の420がある。

#### 素焼製品

3点を掲載した。503は急須蓋である。胎土は橙色で、長石をわずかに含む。粗製七面焼か。517は蓋物蓋である。胎土は橙色で、上面に鉄絵の痕が見られる。535は瓶である。374と同様、穿孔のバリの処理が甘い。胎土は緻密で、焼締陶器製品と思われる。

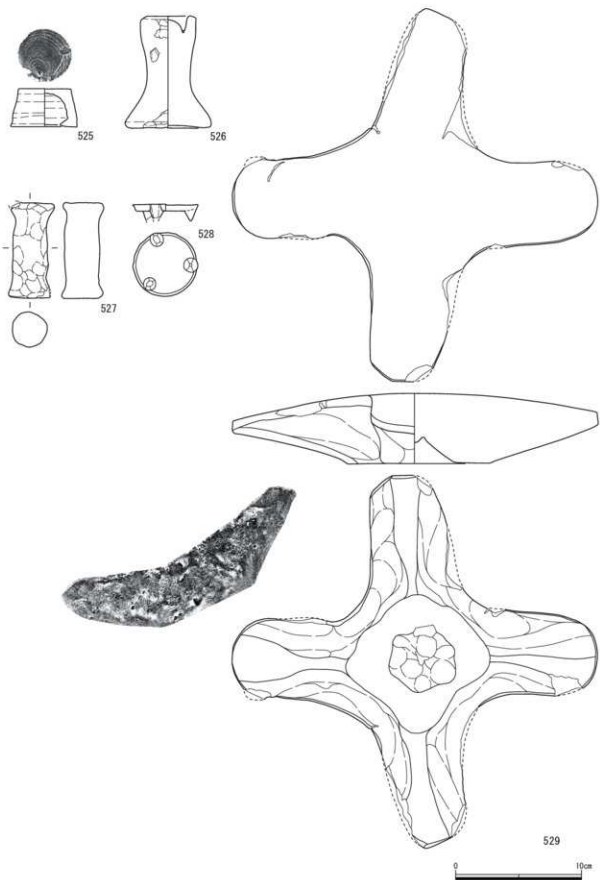
#### 窯道具

6点を掲載した。523はハマと思われる。大型で断面逆台形を呈す。胎土は灰白色を呈し、磁器質。極めて緻密で高質な資料である。

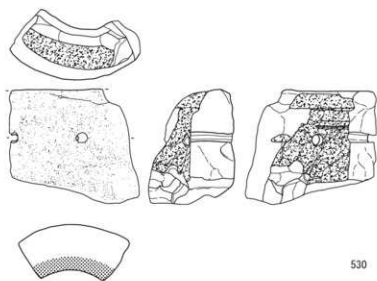
528は三足付きハマである。型押成形で、三足が手捏ではなく型作りである。419にあるようなピンの型は、こうした三足に用いられた可能性がある。上面径39mmの高台痕が残る。

529はタコハマである。平面十字状で、断面は逆台形を呈する。類例に216・440があるが、

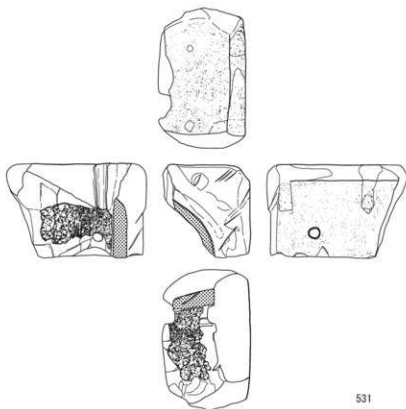




第 67 図 調査区 21 出土遺物実測図 ( 3 )



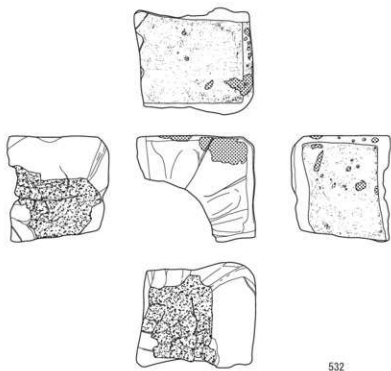
530



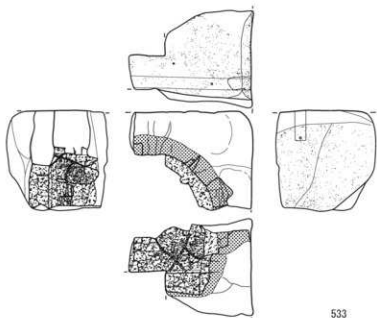
531



第 68 図 調査区 21 出土遺物実測図（4）



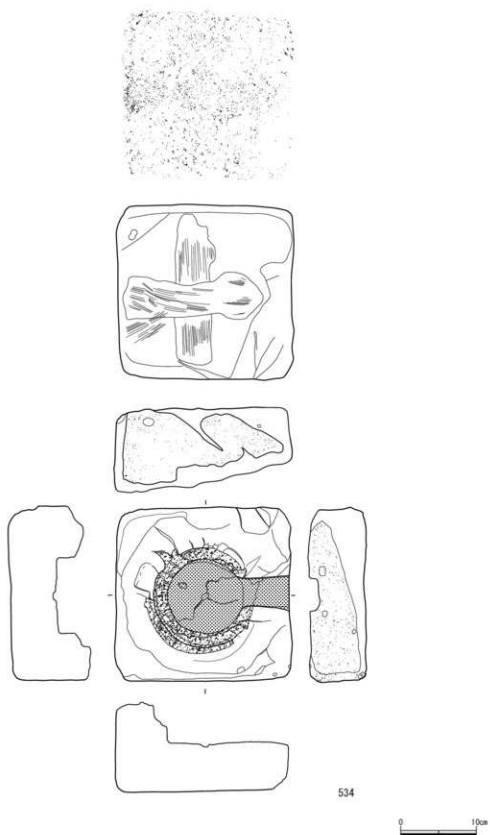
532



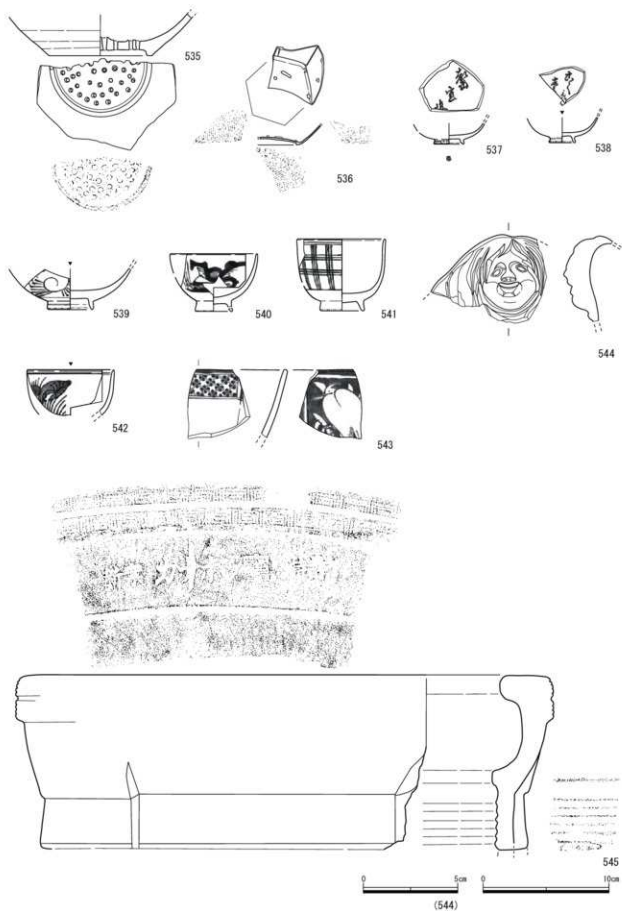
533



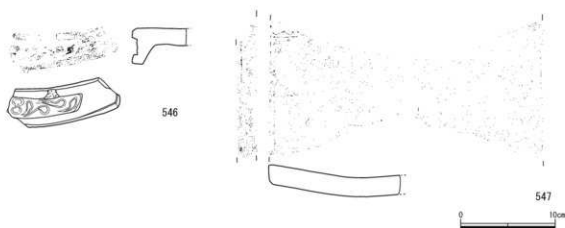
第 69 図 調査区 21 出土遺物実測図 (5)



第70図 調査区21出土遺物実測図（6）



第71図 調査区21出土遺物実測図(7)



第72図 調査区21出土遺物実測図（8）

本資料には下面中央部の平面形が正方形であること、円錐状の凹みがあること等、類例にはない特徴がある。

525は焼台である。高さ3cmの小型タイプであるが、調査区20出土の456～460といった小型タイプとは明かに整形が異なる。調査区20出土資料が薄手であるのに対し、本資料は厚手で、胎土も乳褐色とより磁器質に近く、整形が丁寧である。

526・527はトチンである。ともに手捏成形で、526は高さ8.9cmでT字形、527は高さ7.6cmでI字形を呈する。

#### 窯関連資料

6点を掲載した。524は轆轤の軸受部分である。石製で断面台形、中央に有孔で溝が1本入る。

530～534は炉である。いずれも乳褐色の土器製で非常に軽い。530は円形、他は方形。外面に縁金具の痕跡が残る。534は完形資料で、風口が明瞭に残る。また、下面に十字状の凹みが認められる。窯で使用される工具等の修繕に使用されたものと思われる。

#### 七面焼以外の製品

9点を掲載した。536は小砂焼の急須底部である。薄手で外面は布目。内面に鉄軸が掛かる。

537・538は瀬戸・美濃製磁器の薄手酒杯で、生産年代は1820年代である。537の内面には上絵（コバルト染付）で「藝宜楼」と書かれ、538は「このも口／し口」と書かれている。前者は近代以降に建てられた遊興施設の名称であり、近世の製品を近代に転用したものと思われる。

541は肥前筒丸碗である。格子文を描く。

543は肥前の変形鉢である。外面に鷲文を描く。

544は土人形。前後型合わせである。産地不明。

545は置きカマドである。胴上部に「新案 カナボシ竈 特許」とある。現代の所産と思われる、戦後、親梅の季節に設置される店で使用された物と思われる。

546・547は瓦である。546は軒棧瓦で、547は平瓦である。いずれも近代の所産であり、近代以後に当地に建てられた遊興施設に葺かれていたものと思われる。

（関口）

第5表 C・D地点出土遺物観察表(陶磁器・土器・窯道具類)

( )は復元値、&lt; &gt;は残存値

№	出土 DC	材質	焼成/ 窯誌	器種/ 種類	形状/ 特徴	法量 (cm)			重量 (g)	成形/ 調整	器 飾		胎土色	製作地	備 考		
						口径/ 長さ	底径/ 幅	器高/ 厚さ			最大径/ 径	胎付/ 胎裏				文様	裝飾特徴
151	調査 DC14	磁器	本焼	碗	丸形 腰 部丸形	(16.9)	3.7	5.3	-	49	口フケ成形 削り高台	内縁内二重線 溝、器底二重線 溝内段状文 外山本文	華唐式	白色	七面製陶所	白磁彫刻春樹 口縁一帯部の 雲み彫き	
152	調査 DC16	陶器	本焼	瓶口	腰瓶形	(8.2)	-	(5.1)	-	19	口フケ成形	胎付 白磁 透明 内- 外-彫・意文	華唐式	灰白色	七面製陶所	-	
153	調査 DC16	磁器	本焼	杯	丸形	(7.8)	-	(4.4)	-	25	口フケ成形	胎付 白磁 透明 胎	内- 外-彫文	華唐式	灰白色	七面製陶所	-
154	調査 DC18	磁器	本焼	皿	丸形 深 め	-	(8.2)	(4.1)	-	61	口フケ成形 蛇ノ目筋高 台	胎付 透明 胎	内-不彫 (欠損) 外-華草文	華唐式 削り製	灰白色	七面製陶所	-
155	調査 DC16	磁器	本焼	皿	玉縁形	-	-	(2.4)	-	8	口フケ成形	胎付 白磁 透明 胎	内-不彫 外- 胎	華唐式	灰白色	七面製陶所	蓋合わせ板
156	調査 DC16 +20	磁器	本焼	椀木鉢	腰縁縁形 輪高台 底部有孔	(11.0)	6.1	7.5	-	152	口フケ成形 削り高台	- 陶磁	内- 外- 胎	内底、底 部無胎	白色	七面製陶所	底部有孔
157	調査 DC16	磁器	本焼	碗	端反形?	-	-	(2.9)	-	5	口フケ成形	胎付 白磁 透明 胎	内-縁内二重線 溝外)よけ幅文	華唐式	灰黄色	七面製陶所	-
158	調査 DC16	不明	素焼 (生焼)	杯	無彫刻形	5.4	2.5	4.5	-	33	口フケ成形 削り高台	胎付 陶磁 灰胎	内- 外-彫文	華唐式 底部無胎	灰黄色	七面製陶所	外底彫刻輪 葉彫
159	調査 DC16	陶器	本焼	杯	丸形	(10.4)	-	(3.4)	-	7	口フケ成形	胎付 白磁 透明胎	内- 外-草花文	華唐式	灰白色	七面製陶所	-
160	調査 DC16	不明	素焼	皿	丸形 輪 花	(9.8)	2.8	2.9	-	35	口フケ成形 削り高 台	-	内- 外- 胎	-	乳白色	七面製陶所	-
161	調査 DC18	後結陶器	本焼	灯明皿	平形	10.0	5.3	1.9	-	82	口フケ成形 -<5>底	- 陶磁	内- 外- 胎	-	灰黄色	七面製陶所	口縁部に十字 状の削り溝 (保存者) 外底彫刻蓮 葉文
162	調査 DC16	後結陶器	本焼	灯明受皿	油漬半月 状高脚	6.8	2.5	2.3	10.7	102	口フケ成形 -<5>底	- 陶磁	内- 外- 胎	胴下~底 部無胎	灰白色	七面製陶所	口縁部に砂粒 (小凸) 胎着 底部彫刻蓮 葉文
163	調査 DC16	後結陶器	本焼	灯明受皿	油漬切込 状	(11.0)	(6.0)	2.6	(14.0)	60	口フケ成形 -<5>底	- 陶磁	内- 外- 胎	胴下~底 部無胎	灰白色	七面製陶所	受皿、底面 彫刻蓮葉
164	調査 DC18	後結陶器	本焼	蓋	山高 輪 縁外口 受有	3.7	9.7	2.8	11.8	109	口フケ成形 削り高台	胎付 陶磁	内- 外-彫・富士 山文	華唐式 口受無胎	灰白色	七面製陶所	-
165	調査 DC16 +20	後結陶器	本焼	瓶	筒形	(12.4)	(8.0)	9.3	-	117	口フケ成形 削り高台 底 部放射状に孔 (3)	- 陶磁	内- 外- 胎	口縁、底 部無胎	灰白色	七面製陶所	-
166	調査 DC16	後結陶器	本焼	不明	円筒形	0.0	(8.0)	11.8	-	146	口フケ成形	- 陶磁	内- 外- 胎	下縁部無 胎	灰黄色	七面製陶所	-
167	調査 DC16	陶器	本焼	瓶	筒丸形	7.3	3.7	6.7	-	144	口フケ成形 削り高台	胎付 陶磁	内- 外- 胎	内外縁部 分 底面 無胎	灰黄色	七面製陶所	蓋付に磨き面
168	調査 DC16	陶器	本焼	瓶	丸形	-	4.2	(4.9)	-	96	口フケ成形 削り高台	胎付 陶磁 灰胎	内- 外-縁お馬文	華唐式	灰黄色	七面製陶所	-
169	調査 DC16	不明	素焼	瓶	筒丸形	7.3	3.5	5.8	-	89	口フケ成形 削り高台	-	内- 外- 胎	-	乳白色	七面製陶所	外底削下平部 に重ね焼き
170	調査 DC16	不明	素焼	瓶	端反形	(6.4)	(4.2)	5.6	-	24	手掘り	-	内- 外-器口 本文	型押文様	赤褐色	七面製陶所	刀吉宗
171	調査 DC16 +20	不明	素焼	瓶	輪縁帯形 胴部 押圧 痕	(10.8)	6.4	9.3	-	213	口フケ成形 (-<5>底成 形) 削り高 台 胴部押圧	-	内- 外- 胎	-	褐色	七面製陶所	-
172	調査 DC16 +20	不明	素焼	瓶	輪縁帯形 胴部 押圧 痕	(11.4)	6.0	9.4	-	148	口フケ成形 (-<5>底成 形) 削り高 台 胴部押圧	-	内- 外- 胎	-	褐色	七面製陶所	-
173	調査 DC16 +20	不明	素焼	瓶	輪縁帯形 胴部 押圧 痕	(10.4)	5.8	8.9	-	154	口フケ成形 削り高台 胴 部押圧	-	内- 外- 胎	-	灰黄色 色	七面製陶所	-
174	調査 DC16 +20	陶器	素焼	杯	-	6.7	3.0	4.9	-	-	口フケ成形 削り高台	胎付 陶磁	内- 外-彫文	華唐式	-	七面製陶所	-
175	調査 DC16	陶器	本焼	杯	無彫刻形	(5.1)	(2.0)	4.0	-	13	口フケ成形 削り高台	胎付 陶磁 灰胎	内- 外-縁お馬文	華唐式	灰黄色	七面製陶所	-
176	調査 DC16 +30	陶器	本焼	皿	端反形	(18.4)	-	(1.8)	-	21	口フケ成形	胎付 白土 胎付 陶磁 白底 陶磁	内-華草文 外- 胎	華唐式	灰黄色	七面製陶所	-
177	調査 DC16	陶器	本焼	皿	丸形	(11.4)	-	(3.0)	-	27	口フケ成形	- 陶磁	内- 外- 胎	-	白色	七面製陶所	-

No.	出土位置	材質	形状/用途	器種/種類	形状特徴	寸法 (cm)			重量 (g)	形状・調整	装飾			胎土色	製作地	備考	
						口径/長さ	口径/幅	最大径/高さ			施付/輪数	文様	裝飾特徴				
178	調査区16	土器	-	皿	平底	17.0	10.2	2.5	-	81	ロウロ成形 削り高台	-	内: 外:-	-	褐色・ 棕色	-	新着あり見込 ・外面込 ・裏白磁
179	調査区16	焼締陶器	本底	灯明皿	平底	16.0	5.2	1.9	-	52	ロウロ成形	鉄輪	内: 外:-	削り～透 面無施	灰黄色 色	七面製陶所	削れ口に輪 付着
180	調査区16	陶器	蓋体	土瓶蓋	山蓋 口受有 編み穴無	-	6.4	2.2	8.7	68	ロウロ成形	鉄輪 白土 胎付 鉄輪 白泥	内: 外:・梅花文	華靡き 内面無施	灰黄色 色	七面製陶所 (既製)	上面重ね焼き 痕 (径5cm)
181	調査区16	陶器	蓋体	土瓶蓋	山蓋 口受有 編み穴無	-	6.4	2.2	8.7	79	ロウロ成形	鉄輪 白土 胎付 鉄輪 白泥	内: 外:・梅花文	華靡き 内面無施	灰黄色 色	七面製陶所 (既製)	上面重ね焼き 痕 (径5cm)
182	調査区16	陶器	蓋体	土瓶蓋	山蓋 口受有 編み穴無	-	5.6	2.3	8.4	64	ロウロ成形	鉄輪 白土 胎付 鉄輪 白泥	内: 外:・梅花文	華靡き 内面無施	灰色	七面製陶所 (既製)	-
183	調査区16	陶器	蓋体	土瓶蓋	山蓋 口受有 編み穴無	-	5.6	2.2	8.2	71	ロウロ成形	鉄輪 鉄輪	内: 外:・枝文	華靡き	灰黄色 色	七面製陶所 (既製)	裏面焼き痕・ 上面 (径4 cm)・内面口 縁部 (径74 mm)
184	調査区16	陶器	蓋体	土瓶蓋	山蓋 口受有 編み穴無	-	5.6	2.4	8.2	81	ロウロ成形	鉄輪 白土 胎付 鉄輪 白泥 ? (裏 面)	内: 外:・枝文	華靡き	明褐色 色	七面製陶所 (既製)	裏面焼き痕・ 上面 (径4 cm)・内面口 縁部 (径40 mm)・口受部 に受込した 土磁布
185	調査区16	陶器	蓋体	土瓶蓋	山蓋 口受有 編み穴無	-	5.5	2.4	8.0	75	ロウロ成形	鉄輪 白土 胎付 鉄輪 白泥 ? (裏 面)	内: 外:・枝文	華靡き	灰黄色 色	七面製陶所 (既製)	上面重ね焼き 痕 (径4cm) ・口受部に 受込した 土磁布
186	調査区16	陶器	蓋体	土瓶蓋	山蓋 口受有 編み穴無	-	5.5	2.3	7.5	45	ロウロ成形	鉄輪 白土 胎付 鉄輪 白泥 底無	内: 外:・流水文?	華靡き 内面無施	明褐色 色	七面製陶所 (既製)	-
187	調査区16	陶器	本底	土瓶蓋	山蓋 口受有 花縁口受有	1.2	7.1	3.4	9.7	95	ロウロ成形 器種不明 編み穴付	-	内: 外:-	内面無施	灰黄色 色	七面製陶所 (既製)	「背土上」
188	調査区16 +調査区17 +調査区18	陶器	本底	土瓶	丸形 蓋受 無	8.0	-	11.7	16.0	<134	ロウロ成形 注口・耳輪付	-	内: 外:-	-	灰白色	七面製陶所	注口孔3 外面下部保存
189	調査区16	陶器	本底	土瓶	変形	-	-	7.9	-	37	透作り成形 注口貼付	-	内: 外:-	-	灰黄色	七面製陶所	注口孔3
190	調査区16	陶器	本底	土瓶	丸形?	-	-	8.0	-	11	ロウロ成形	鉄輪 鉄輪 白泥 透明け	内: 外:・蓮文 風草	華靡き	明褐色 色	七面製陶所	-
191	調査区16	陶器	本底	土瓶	丸形	16.0	-	8.7	-	14	ロウロ成形	鉄輪 白土 胎付 白泥 鉄輪 透明け	内: 外:・梅花文	華靡き	灰黄色 色	七面製陶所	-
192	調査区16 10/20	不明	蓋体	土瓶	丸形 蓋受無 耳少 底	6.0	6.5	8.9	11.7	151	ロウロ成形 注口・耳輪付	-	内: 外:-	-	褐色	七面製陶所	注口孔3 (耳 一部欠損)
193	調査区16 10/20	不明	蓋体	土瓶	変形 耳少 底	-	7.8	10.6	16.9	228	ロウロ成形	-	内: 外:-	-	赤目	七面製陶所	内面全面黒変
194	調査区16	不明	蓋体+貼付	土瓶	丸形	-	-	7.0	-	18	ロウロ成形	鉄輪 鉄輪	内: 外:・市着文	華靡き	灰黄色 色	七面製陶所	-
195	調査区16	陶器	本底	急須蓋	山蓋 丸形 口受無 編み穴 有	-	6.5	2.6	-	33	ロウロ成形 削り高台	-	内: 外:-	内面無施	灰黄色 色	七面製陶所	相同様品
196	調査区16	陶器	本底	行平蓋	編み穴 口受有	3.7	15.9	4.5	-	64	ロウロ成形 削り高台	白土胎付 白泥 鉄輪 鉄輪	内: 外:・蓮文?・飛 鳥 口受無	華靡き 内面口受無 施	灰黄色 色	七面製陶所	-
197	調査区16	陶器	蓋体	茶蓋	円筒形 有孔	7.1	-	9.4	-	32	ロウロ成形	-	内: 外:-	-	灰黄色	七面製陶所	-
198	調査区16	陶器	本底	水注	円筒形	-	-	9.6	-	29	ロウロ成形	鉄輪 白泥 鉄輪	内: 外:・蓮文	華靡き 口縁部無 施	灰黄色 色	七面製陶所	-
199	調査区16 10/20	陶器	本底	鉢	円筒形 輪付	14.2	3.6	6.4	-	<107	ロウロ成形 削り高台	鉄輪 鉄輪 変形輪	内: 外:-	内面無施	灰黄色 色	七面製陶所	-
200	調査区16	陶器	蓋体+貼付	鉢	変形	16.0	-	8.2	-	53	ロウロ成形 削り高台 口受有 削り高台	鉄輪 鉄輪	内: 外:・市文	華靡き	明褐色 色	七面製陶所	口縁部貼付 約1cmの切込 み欠け。磁 布付着。台 部外面に細 く「留め具」を 埋した。土瓶 を貼付。
201	調査区16	不明	蓋体	花生	楕形	-	-	16.9	-	366	ロウロ成形	-	内: 外:-	-	灰白色	七面製陶所	-
202	調査区16	不明	蓋体	花生	楕形	-	-	18.0	2.1	175	ロウロ成形 削り高台	-	内: 外:-	-	灰白色	七面製陶所	-
203	調査区16	陶器	蓋体	楕円鉢	楕円鉢	22.0	-	26.9	-	677	ロウロ成形	-	内: 外:-	-	灰黄色	七面製陶所	-



No.	出土位置	材質	構成/裏地	器種/種類	形状特徴	寸法 (cm)				質量 (g)	成形・調整	装飾			胎土色	製作地	備考
						口径/長さ	底径/幅	高さ/厚さ	最大径/最大幅			肩付/胎文	文様	装飾特徴			
204	調査区16	陶器	素焼	楕円鉢	丸形 切込縁高台	-	(12.0)	(11.7)	-	474	ロタロ成形 削り高台	-	内:- 外:-	-	増尻・乳白色	七面製陶所	-
206	調査区16	陶器	-	常遣品	立方形	6.9	6.4	7.2	7.3	221	ロタロ成形 右折縁高台切離し	-	内:- 外:-	-	黄白色	七面製陶所	全体にアルミナ散布
207	調査区16	陶器	-	常遣品(後付)	立方形	6.9	9.3	9.7	9.7	326	ロタロ成形	-	内:- 外:-	-	灰黄色	七面製陶所	上面高台側 内面に散れ 全体にアルミナ散布
208	調査区16	陶器	-	常遣品(輪子付)	楕円鉢	(9.0)	(15.0)	2.7	-	237	手捏ね	-	内:- 外:-	-	乳白色	七面製陶所	上面に楕円状印痕(輪子印痕?)
209	調査区16	後編陶器	-	常遣品(マウ)	遊台形	5.0	3.1	1.1	-	30	ロタロ成形 削り調整	-	内:- 外:-	-	灰白色	七面製陶所	-
210	調査区16	後編陶器	-	常遣品(マウ)	円板形	5.3	5.3	2.2	6.1	129	手捏ね	-	内:- 外:-	-	灰白色	七面製陶所	上面径3mm・下部径7mmの溝付。下部側面アルミナ散布
211	調査区16	後編陶器	-	常遣品(マウ)	円形器(穴の径12mm)	(9.1)	(9.2)	1.4	(9.4)	70	ロタロ成形 左折縁高台切離し	-	内:- 外:-	-	灰白色	七面製陶所	上面に高台痕
212	調査区16	後編陶器	-	常遣品(三足付)	円板形 三足付	4.6	4.5	(1.0)	-	26	ロタロ成形 上面右折縁高台切離し 下面左折縁高台切離し 足部手捏ね 貼付	-	内:- 外:-	-	灰黄色	七面製陶所	三足先端部磨き痕
213	調査区16	後編陶器	-	常遣品(三足付)	円板形 三足付	4.1	4.6	(1.0)	-	19	ロタロ 上面右折縁高台切離し 足部手捏ね 貼付	-	内:- 外:-	-	灰白色	七面製陶所	上面径3mmの溝付。三足先端部磨き痕
214	調査区16	後編陶器	-	常遣品(三足付)	-	-	5.1	5.2	(1.4)	26	型押成形	-	内:- 外:-	-	-	-	-
215	調査区16	後編陶器	-	常遣品(三足付)	円板形 三足付	5.7	5.8	(1.0)	-	38	上下面に切離し 足部手捏ね 貼付	-	内:- 外:-	-	灰黄色	七面製陶所	上面を塗きアルミナ散布 三足先端部磨き痕 上面径3mmの溝付
216	調査区16	陶器	-	常遣品(マウ)	十字状	24.0	25.5	6.2	-	1,600	型押成形 胴部有目	-	内:- 外:-	-	灰白色	七面製陶所	上面アルミナ散布 上面中央・周囲にトナシ磨き痕 下面中央トナシ磨き痕
217	調査区16	陶器	-	土瓶	丸形 三足 双耳 口3孔(製作時に掌孔部欠損) 肩部有段	5.8	6.4	(2.2)	(15.3)	340	ロタロ成形 貼付	-	内:- 外:-	横びねり	灰白色	大塚製陶所	胴下→底部磨き痕
218	調査区16	陶器	-	芥	楕円	(6.3)	(4.0)	4.9	-	23	型押	-	内:- 外:-	-	黄白色	瀬戸・美濃系	-
219	調査区16	磁器	-	耳鉢蓋	輪郭口交差	(13.4)	4.0	-	-	67	型押	-	内:- 外:-	縦線	白色	美濃	-
220	調査区16	磁器	-	丹絵	丸形 折蓋	(15.5)	6.0	7.4	-	244	型押	-	内:- 外:-	縦線	白色	美濃	蓋台「蓋内」にM10(「輪下」)に身内「丸陶器」(丸陶器) (丸陶器) (丸陶器) 蓋内の一部に白色粉質付着
221	調査区20	磁器	本焼	瓶	丸形 厚底部	10.8	4.1	5.6	-	136	ロタロ成形 削り高台	染付 透明釉	内:- 外:-	内:- 外:-	灰白色	七面製陶所	高台一部缺れ(穴痕?) 内面に付着物(穴痕?)
222	調査区20	陶器	本焼	瓶	広底部	-	4.7	(3.0)	-	71	ロタロ成形 削り高台 見込転り自輪削ぎ	染付 白泥 透明釉	内:- 外:-	黄白色	七面製陶所	見込転り自輪削ぎ・肩付にアルミナ散布	
223	調査区20	磁器	本焼	瓶	細尻形	(10.0)	-	(3.0)	-	19	ロタロ成形	染付 白泥 透明釉	内:- 外:-	白色	七面製陶所	-	
224	調査区20	磁器	本焼	瓶	細尻形	-	-	(4.0)	-	6	ロタロ成形	染付 白泥 透明釉	内:- 外:-	灰白色	七面製陶所	-	
225	調査区20	磁器	本焼	蓋	玉縁形	(15.0)	-	(2.0)	-	22	ロタロ成形	染付 白泥 透明釉	内:- 外:-	灰白色	七面製陶所	-	

No.	出土位置	材質	構成/形状/種類	形状/種類	寸法 (cm)				質量 (g)	成形/調整	装飾			胎土色	製作地	備考	
					口径/長さ	口径/高さ	最大径/最大径	最大径/高さ			底付/胎土	文様	装飾特徴				
228	調査区C20	磁器	本底	皿	方形	-	-	2.1	-	21	赤鉛筆工部型 透明釉	内・横花文 外・-	黒目文様 透明釉	白色	七面製陶所?	-	
227	調査区C20	陶器	蓋鉢	碗	丸形	7.1	3.1	5.3	-	<97	ロウロ成形成 削り高台	内・ 外・-	底無装飾	灰色	七面製陶所	内面部分付着 赤土層部一部 粘着状跡	
226	調査区C20	磁器	本底	碗	-	(16.0)	-	(4.0)	-	8	ロウロ成形成	内・内 内・内	黒目文 朱文	黒緑色	七面製陶所	-	
229	調査区C20	後継陶器	蓋鉢	碗	腰形	8.5	4.2	7.4	-	107	ロウロ成形成 削り高台	内・ 外・-	-	乳白色	七面製陶所	-	
230	調査区C20	後継陶器	蓋鉢	碗	筒丸形	7.1	3.7	5.7	-	<40	ロウロ成形成 削り高台	内・ 外・-	-	乳白色	七面製陶所	-	
231	調査区C20	後継陶器	蓋鉢	碗	筒丸形	7.2	3.6	5.9	-	44	ロウロ成形成 削り高台	内・ 外・-	-	灰色	七面製陶所	外面腹下平部 に黒ねばき質 底面に穿孔	
232	調査区C20	磁器	蓋鉢	碗	腰形 底径小	(11.4)	3.5	6.2	-	<45	ロウロ成形成 削り高台	内・ 外・-	-	乳白色	七面製陶所	-	
233	調査区C20	後継陶器	本底	皿	丸形 へそ底	14.0	4.9	3.1	-	209	ロウロ成形成	内・ 外・-	胴下～底 面無装飾	灰白色	七面製陶所	-	
234	調査区C20	後継陶器	本底	皿	丸形 へそ底	13.7	5.2	3.2	-	215	ロウロ成形成	内・ 外・-	胴下～底 面無装飾	灰色	七面製陶所	-	
235	調査区C20	不明	蓋鉢	皿	丸形 縁定(4)	9.6	3.9	2.7	-	63	ロウロ成形成 削り高台	内・ 外・-	-	褐色	七面製陶所 (複製)	-	
236	調査区C20	後継陶器	蓋鉢	皿	丸形 へそ底	13.8	7.8	2.2	-	61	ロウロ成形成	内・ 外・-	-	乳白色	七面製陶所	縁部「亀裂」 に付着した赤土 中央部付着した 黒土	
237	調査区C20	後継陶器	本底	灯明皿	平底	9.6	2.8	2.1	-	61	ロウロ成形成 へそ底	内・ 外・-	-	灰白色	七面製陶所	外面腹面赤土 層付着	
238	調査区C20	後継陶器	本底	灯明受皿	赤土平片 状底面	6.6	4.1	2.2	10.2	113	ロウロ成形成 へそ底	内・ 外・-	胴下～底 面無装飾	灰色	七面製陶所	-	
239	調査区C20	後継陶器	本底	灯明受皿	赤土平片 状底面	6.6	3.5	2.1	10.2	101	ロウロ成形成 へそ底	内・ 外・-	胴下～底 面無装飾	灰色	七面製陶所	-	
240	調査区C20	陶器	本底	土瓶	丸形 蓋受無 双耳	6.2	-	9.0	18.0	<266	ロウロ成形成 注口・耳部付	内・ 外・-	-	灰白色	七面製陶所 (複製)	「青土瓶」 注口口	
241	調査区C20	後継陶器	本底	土瓶蓋	山鹿 梅花文 口受付	1.3	5.8	3.6	8.5	77	ロウロ成形成 削り高台	内・ 外・-	内・横花文 外・	黒緑色 内面無装飾	灰色	七面製陶所	-
242	調査区C20	後継陶器	本底	土瓶蓋	山鹿 梅花文 口受付	1.6	3.9	3.0	5.7	35	ロウロ成形成 削り高台	内・ 外・-	内面無装飾	灰白色	七面製陶所	「青土瓶」	
243	調査区C20	後継陶器	本底	鈴堂	腰形 底付有	11.3	6.3	3.2	-	153	ロウロ成形成 削り高台	内・ 外・-	口縁・底 面無装飾	乳白色	七面製陶所	口縁部・腹付 にルミチ塗布 部裏面付着土	
244	調査区C20	陶器	本底	花生	立脚形?	-	-	(8.6)	14.2	546	ロウロ成形成 削り高台	内・ 外・-	底付内装 飾	乳白色	七面製陶所 (複製)	口縁部・高台 欠損	
245	調査区C20	後継陶器	本底	碗	平底	10.4	3.2	6.3	-	-	-	内・ 外・-	-	-	七面製陶所	-	
246	調査区C20	陶器	本底	碗	丸形 口縁内溝	7.1~7.5	4.5	5.2	-	112	手捏成形 削り高台	内・ 外・-	内・横花文 外・刺文	黒緑色	七面製陶所	-	
247	調査区C20	陶器	本底	碗	腰形 胴部反流	(11.2)	(6.0)	6.4	-	31	ロウロ成形成 削り高台	内・ 外・-	上下縁部 付着した赤土 層付着	黒緑色	七面製陶所	「腰鉢」	
248	調査区C20	陶器	本底	碗	腰形	06.2)	2.8	2.4	-	18	ロウロ成形成 削り高台	内・ 外・-	-	灰白色	七面製陶所 (複製)	見込へそ縁	
249	調査区C20	後継陶器	本底	碗	筒丸形	-	3.5	(4.4)	-	35	ロウロ成形成 削り高台	内・ 外・-	底無装飾	乳白色	七面製陶所	-	
250	調査区C20	陶器	本底	碗	平形 雙耳	(14.0)	-	5.1	-	26	ロウロ成形成	内・ 外・-	-	灰白色	七面製陶所 (複製)	-	
251	調査区C20	陶器	本底	碗	腰形	08.2)	-	(3.0)	-	12	ロウロ調整	内・ 外・-	内・横花文 外・刺文	黒緑色	七面製陶所 (複製)	松岡体系	
252	調査区C20	陶器	本底	碗	腰形	-	-	(3.4)	-	17	ロウロ調整	内・ 外・-	内・横花文 外・刺文	黒緑色	七面製陶所 (複製)	大塚体系	
253	調査区C20	土器	蓋鉢	平形 高台 見込底付有	(白 泥)	14.8	5.4	6.1	-	257	手捏成形	内・ 外・-	-	淡褐色	七面製陶所	全体に赤褐色 白縁～胴部に 黒紋	
254	調査区C20	後継陶器	蓋鉢	碗	筒丸形	6.0	4.3	7.8	-	<120	ロウロ成形成 削り高台	内・ 外・-	内・横花文	乳白色	七面製陶所	大塚体系	
255	調査区C20	後継陶器	蓋鉢	碗	筒丸形	7.8~8.7	4.3	7.4	-	<148	ロウロ成形成 削り高台	内・ 外・-	内・横花文	乳白色	七面製陶所	大塚体系	
256	調査区C20	後継陶器	蓋鉢	碗	腰形	(7.0)	-	(3.7)	-	19	ロウロ成形成	内・ 外・-	内・横花文	黒緑色	七面製陶所	大塚体系	
257	調査区C20	後継陶器	蓋鉢	碗	-	(11.9)	-	(6.1)	-	44	ロウロ成形成	内・ 外・-	内・横花文	乳白色	七面製陶所	-	
258	調査区C20	後継陶器	蓋鉢	碗	腰形	(9.3)	-	(6.0)	-	38	ロウロ成形成	内・ 外・-	内・横花文	乳白色	七面製陶所	-	
259	調査区C20	不明	蓋鉢	碗	腰形 胴部付着 底面	-	6.5	(3.4)	-	118	ロウロ成形成 削り高台	内・ 外・-	-	褐色	七面製陶所	-	

No.	出土位置	材質	構成/属性	群種/種類	形状特徴	量 量 (cm)				質量 (g)	成形・調整	装 飾			出土色	製作地	備 考	
						口径 / 長さ	底径 / 高さ	最大径 / 高さ	底径 / 高さ			横付 / 輪足	文様	装飾特徴				
260	調査区20	不明	高埴	華作画	輪縁帯付形 胴部押圧 (出)	(10.8)	6.2	9.1	-	138	ロク口成形 削り高台 形 胴部押圧 形 胴部押圧	-	内・ 外-	-	褐色	七面製陶所	-	
261	調査区20	陶器	本埴	杯	変形 ベテ底	(5.0)	2.7	(2.6)	-	18	手捏ね	白土粘付 白泥 灰輪	内・ 外-	-	灰白色	七面製陶所 (複製)	外面胴部・底面に灰泥付	
262	調査区20	不明	高埴	杯	柱形	4.8	2.1	4.6	-	25	ロク口成形 削り高台	-	内・ 外-	-	灰白色	七面製陶所	-	
263	調査区20	陶器	本埴	鉄線杯	丸形	5.1	2.8	2.9	-	23	ロク口成形 ベテ底 粘付	-	内・ 外-	胴下～底 部無輪	灰黄色	七面製陶所 (複製)	幅み残存。 粘付	
264	調査区20	陶器	本埴	杯	傾斜口	(6.2)	3.0	3.7	-	42	ロク口成形 右の輪縁帯付 削り高台 (欠 損)	-	内・ 外-	底無輪	灰黄色	七面製陶所 (複製)	-	
265	調査区20	陶器	本埴	盃	丸形	20.3	8.6	(4.0)	-	763	ロク口成形 削り高台 量 込転り目輪割 ぎ	-	内・ 外-	-	灰黄色	七面製陶所 (複製)	右側地系 2枚 輪縁帯 量込転 り目輪割ぎ部 に「ルミ子器 用 量込高台 用 粘付ねね 焼き痕」	
266	調査区20	陶器	本埴	盃	底部短 輪縁帯	8.5	3.8	2.7	-	78	ロク口成形 型打 削り高 台	-	内・ 外-	底内無輪	褐色	七面製陶所 (複製)	-	
267	調査区20	陶器	本埴	把手	板状	(5.4)	(2.5)	6.7	-	22	板作り (把手)	高輪縁 白泥 白泥 透明輪	内・ 外- 外- 外- 外-	無輪	褐色	七面製陶所 (複製)	把手残存 陶 器片粘着	
268	調査区20	陶器	本埴	盃	平底	-	(10.2)	(1.3)	-	33	ロク口成形 削り高台	-	内・ 外-	-	無輪	褐色	七面製陶所	器蓋あり (量 込・外面底 部・高台輪)
269	調査区20	陶器	高埴	盃	変形 六角 形	8.8-10.0	-	2.9	-	30	板作り 型押 内面粘付	-	内・ 外-	-	褐色	七面製陶所	-	
270	調査区20	陶器	高埴	盃	変形 六角 形	8.8-10.0	-	(2.3)	-	24	板作り 型押 内面粘付	-	内・ 外-	-	褐色	七面製陶所	-	
271	調査区20	後編陶器	高埴	盃	-	-	(6.0)	(1.3)	-	10	ロク口成形 ベテ底	-	内・ 外-	-	灰白色	七面製陶所	破砕 (瓶蓋に 付)	
272	調査区20	後編陶器	高埴	盃	西縁形	(24.0)	(8.5)	2.7	-	86	ロク口成形 削り高台	-	内・ 外-	-	灰白色	七面製陶所	-	
273	調査区20	陶器	本埴	灯明皿	平底	11.2	(4.4)	1.7	-	33	ロク口成形	-	内・ 外-	胴下～底 部無輪	灰黄色	七面製陶所	口縁部・胴～ 底部にねね焼 き痕	
274	調査区20	後編陶器	-	灯明皿	-	10.8	4.3	2.2	-	-	-	内・ 外-	-	-	-	-	口縁部保存 破砕 (瓶蓋に 付)	
275	調査区20	後編陶器	-	灯明皿	-	10.7	4.3	2.0	-	-	-	内・ 外-	-	-	-	-	破砕 (瓶蓋に 付)	
276	調査区20	後編陶器	高埴	灯明皿	平底 量 込平底 削り高台 ベテ底	(12.4)	4.9	2.1	-	32	ロク口成形	-	内・ 外-	-	灰白色	七面製陶所	-	
277	調査区20	後編陶器	高埴	灯明皿	平底 量 込平底 削り高台 ベテ底	12.5	5.6	1.6	-	67	ロク口成形	-	内・ 外-	-	無輪	七面製陶所	-	
278	調査区20	後編陶器	高埴	灯明皿	平底 量 込平底 削り高台 ベテ底	(12.2)	5.2	2.2	-	41	ロク口成形	-	内・ 外-	-	無輪	七面製陶所	-	
279	調査区20	後編陶器	高埴	灯明皿	平底 量 込平底 削り高台 ベテ底	(12.4)	(6.4)	2.1	-	26	ロク口成形	-	内・ 外-	-	無輪	七面製陶所	-	
280	調査区20	陶器	本埴	灯明瓦皿	曲線型 平伏	6.1	3.7	2.0	9.3	63	ロク口成形 ベテ底	-	内・ 外-	胴下～底 部無輪	灰黄色	七面製陶所	-	
281	調査区20	陶器	本埴	灯明瓦皿	曲線平伏 状	6.4	4.1	1.9	9.5	57	ロク口成形 ベテ底	-	内・ 外-	胴下～底 部無輪	褐色	七面製陶所 (複製)	外面胴下灰泥 おねね付	
282	調査区20	後編陶器	本埴	灯明瓦皿	曲線平伏 状	(6.6)	4.8	2.2	9.8	64	ロク口成形 ベテ底	-	内・ 外-	胴下～底 部無輪	灰白色	七面製陶所	底面にねね焼 き痕	
283	調査区20	後編陶器	高埴	土瓶蓋	蹄子形 筒み	3.8	1.8	(1.5)	-	5	手捏ね	-	内・ 外-	-	明褐色	七面製陶所	幅み残存	
284	調査区20	後編陶器	高埴	土瓶蓋	蹄子形 筒み	(5.3)	(2.6)	(2.4)	-	25	手捏ね	-	内・ 外-	-	褐色	七面製陶所	幅み残存	
285	調査区20	後編陶器	高埴	土瓶蓋	龜形筒 み	(5.4)	(3.5)	(1.4)	-	14	型押 手捏ね 粘付	-	内・ 外-	-	褐色	七面製陶所	幅み残存	
286	調査区20	陶器	本埴	土瓶蓋	山蓋 口 受有 傾 み欠損	-	6.2	(2.4)	8.7	69	ロク口成形	粘付 白土 粘付 白泥	内・ 外- 外- 外-	無輪	褐色	七面製陶所 (複製)	-	
287	調査区20	陶器	本埴	土瓶蓋	山蓋 口 受有 傾 み欠損	-	5.7	(2.6)	8.4	71	ロク口成形	粘付 白土 粘付 白泥	内・ 外- 外- 外-	無輪	褐色	七面製陶所 (複製)	上面胴下灰泥 付 (器蓋・ 蓋縁部)	
288	調査区20	陶器	本埴	土瓶蓋	山蓋 口 受有 傾 み欠損	-	5.4	(2.6)	7.2	44	ロク口成形	白土粘付 白泥 灰輪	内・ 外- 外- 外-	無輪	灰黄色	七面製陶所 (複製)	-	
289	調査区20	陶器	本埴	土瓶蓋	山蓋 口 受有 傾 み欠損	-	5.3	(1.8)	7.1	41	ロク口成形	白土粘付 白泥 灰輪	内・ 外- 外- 外-	無輪	灰黄色	七面製陶所 (複製)	-	

No	出土位置	材質	造形/用途	器種/種類	特徴	寸法 (cm)			重量 (g)	成形・調整	装飾			胎土色	製作地	備考	
						口径/長さ	底径/高さ	最大径/高さ			線付/軸文	文様	装飾特徴				
290	調査区20	陶器	本底	土煎裏	山麓菊 花織み 口受有	1.3	6.1	3.2	8.2	20	ロゾロ成形 管押 織み貼 付	白土起付 白泥 灰緑	内:- 外:-縦文?	イッタン 掛き 内 面無飾	明褐色 色	七高製陶所 (複製)	-
291	調査区20	陶器	本底	土煎裏	山麓菊 花織み 口受有	(1.7)	(5.5)	(2.0)	-	20	ロゾロ成形	白土起付 白泥 灰緑	内:- 外:-縦文?	イッタン 掛き 内 面無飾	灰褐色 色	七高製陶所 (複製)	-
292	調査区20	陶器	本底	土煎裏	山麓菊 花織み 口受有	-	5.3	6.8	(2.2)	35	ロゾロ成形	鉄絵 鉄線 白泥 透明釉	内:- 外:-縦文?	鉄絵掛 内面無飾	灰褐色 色	七高製陶所 (複製)	-
293	調査区20	陶器	本底	土煎裏	山麓菊 花織み 口受有	1.0	4.7	3.0	7.4	41	ロゾロ成形 管押 織み貼 付	鉄絵 白土 起付 鉄線 白泥 灰緑	内:- 外:-雲文?	鉄絵掛 内面無飾 白泥敷し	灰褐色 色	七高製陶所 (複製)	-
294	調査区20	磁器陶器	本底	土煎裏	山麓口 受有 織 み欠損	-	3.6	(2.4)	7.5	54	ロゾロ成形	鉄絵 鉄線 灰緑	内:- 外:-宝珠文	鉄絵掛 内面無飾	灰白色	七高製陶所 (複製)	-
295	調査区20	陶器	本底	土煎裏	山麓口 受有	1.8	3.6	3.4	7.8	60	ロゾロ成形	鉄絵 鉄線 白泥 透明釉	内:- 外:-縦線文 沈 澱	鉄絵掛 内面無飾	褐色	七高製陶所 (複製)	-
296	調査区20	陶器	本底	土煎裏	山麓口 受有 織 み欠損	-	6.0	(2.1)	8.0	48	ロゾロ成形	貝葉絵 鉄線 玉 玉草花状文 透明釉	内:- 外:-玉草花状文	鉄絵掛 内面無飾	灰色	七高製陶所 (複製)	-
297	調査区20	陶器	本底	土煎裏	山麓口 受有 織 み欠損	-	6.0	(1.9)	8.1	47	ロゾロ成形	貝葉絵 鉄線 灰緑	内:- 外:-玉草花状文	鉄絵掛 内面無飾	灰色	七高製陶所 (複製)	-
298	調査区20	陶器	本底	土煎裏	山麓菊 花織み 口受有	1.3	5.9	3.6	8.4	83	ロゾロ成形 管押 織 み貼付	銅絵 鉄線 藍 灰緑	内:- 外:-	銅絵掛 内面無飾 沈澱	灰白色	七高製陶所 (複製)	松岡様系
299	調査区20	陶器	本底	土煎裏	山麓九 字織み 口受有	1.0	6.3	3.2	8.4	43	ロゾロ成形	-	内:- 外:-赤日文	赤日 内 面無飾	乳褐色 色	七高製陶所 (複製)	-
300	調査区20	陶器	本底	土煎裏	山麓九 字織み 口受有	10.4	7.5	3.8	10.4	74	ロゾロ成形 管押 織 み貼付	-	内:- 外:-赤日文	赤日 内 面無飾	乳褐色 色	七高製陶所 (複製)	-
301	調査区20	陶器	本底	土煎裏	山麓九 字織み 口受有	1.5	7.4	2.7	10.4	79	ロゾロ成形	-	内:- 外:-赤日文	赤日 内 面無飾	褐色 色	七高製陶所 (複製)	-
302	調査区20	陶器	本底	土煎裏	山麓菊 花織み 口受有	1.4	6.0	3.7	9.0	85	ロゾロ成形 管押 織 み貼付	-	内:- 外:-	内面無飾	灰褐色 色	七高製陶所 (複製)	口受部歪み 破片 (図26 参照)
303	調査区20	陶器	本底	土煎裏	山麓菊 花織み 口受有	1.1	5.9	2.9	8.4	82	ロゾロ成形 管押 織 み貼付	-	内:- 外:-	内面無飾	灰褐色 色	七高製陶所 (複製)	-
304	調査区20	陶器	本底	土煎裏	山麓菊 花織み 口受有	1.2	6.1	3.3	8.3	67	ロゾロ成形 管押 織 み貼付	-	内:- 外:-	内面無飾	褐色 色	七高製陶所 (複製)	-
305	調査区20	陶器	本底	土煎裏	山麓九 字織み 口受有	2.3	7.0	3.1	9.0	72	ロゾロ成形 管押 織 み貼付 (渦 形有)	-	内:- 外:-	内面無飾	黄褐色 色	七高製陶所 (複製)	-
306	調査区20	陶器	本底	土煎裏	山麓菊 花織み 口受有	1.2	6.0	3.3	9.1	77	ロゾロ成形 管押 貼 付	-	内:- 外:-	内面無飾	褐色 色	七高製陶所 (複製)	松岡様系
307	調査区20	陶器	本底	土煎裏	山麓菊 花織み 口受有	1.4	6.0+6.8	3.6	9.4	86	ロゾロ成形 管押 織 み貼付	-	内:- 外:-	内面無飾	灰褐色 色	七高製陶所 (複製)	-
308	調査区20	陶器	本底	土煎裏	山麓九 字織み 口受有	1.5	4.0	3.4	6.2	40	ロゾロ成形	-	内:- 外:-	内面無飾	灰褐色 色	七高製陶所 (複製)	-
309	調査区20	陶器	本底	土煎裏	山麓九 字織み 口受有	1.7	5.3	2.9	7.7	49	ロゾロ成形 管押 織 み貼付 (渦 形有)	-	内:- 外:-	内面無飾	灰色 色	七高製陶所 (複製)	内面欠損有
310	調査区20	不明	素焼	土煎裏	山麓菊 花織み 口受有	1.3	7.6	3.3	9.8	75	ロゾロ成形 管押 貼 付	-	内:- 外:-	-	乳褐色 色	七高製陶所 (複製)	-
311	調査区20	不明	素焼	土煎裏	山麓九 字織み 口受有	1.9	6.2	3.8	8.3	46	ロゾロ成形	-	内:- 外:-沈澱文	-	乳褐色 色	七高製陶所 (複製)	-
312	調査区20	不明	素焼	土煎裏	山麓口 受有 織 み欠損	-	6.2	(2.0)	8.4	36	ロゾロ成形 管押	-	内:- 外:-沈澱文	-	灰褐色 色	七高製陶所 (複製)	-
313	調査区20	不明	素焼+ 給付	土煎裏	山麓菊 花織み 口受有	1.2	4.4	2.8	6.2	36	ロゾロ成形 管押 織 み貼付	鉄絵 白土 起付 鉄線 白泥	内:- 外:-赤文	鉄絵掛 乳褐色 色	七高製陶所 (複製)	-	
314	調査区20	不明	素焼	土煎裏	山麓菊 花織み 口受有	-	(6.0)	2.8	(7.3)	24	ロゾロ成形 織み貼 付	-	内:- 外:-押印文	-	乳褐色 色	七高製陶所 (複製)	万古系
315	調査区20	不明	素焼	土煎裏	山麓菊 花織み 口受有	-	(6.0)	2.6	(8.0)	23	ロゾロ成形 織み貼 付 織 み管押	-	内:- 外:-刺印文	-	褐色 色	七高製陶所 (複製)	-
316	調査区20	不明	素焼	土煎裏	山麓九 字織み 口受有	1.0	6.6	3.6	9.4	86	ロゾロ成形	-	内:- 外:-横口筋	横口筋	乳褐色 色	七高製陶所 (複製)	-
317	調査区20	不明	素焼	土煎裏	山麓口 受有	-	6.3	(3.1)	9.0	97	ロゾロ成形	-	内:- 外:-横口筋	横口筋	灰褐色 色	七高製陶所 (複製)	外面歪み破片 有
318	調査区20	不明	素焼	土煎裏	山麓菊 花織み 口受有	1.2	5.9	3.2	8.2	48	ロゾロ成形 管押	-	内:- 外:-織み管押 文 横口筋 沈 澱	横口筋 乳褐色 色	七高製陶所 (複製)	-	

No.	出土位置	材質	形状・用途・種類	形状特徴	寸法 (mm)			重量 (g)	成形・調整	装飾			胎土色	製作地	備考		
					口径/長さ	底径/幅	高さ/底高さ			施付/刻施	文様	装飾特徴					
319	調査区20	陶器	本底	土瓶蓋	落し蓋 口縁有 底欠	1.1	2.8	2.2	7.0	25	ロク口成形 左回転糸印痕	鉄絵 鉄絵 白泥 透明釉	内:- 外:- 内:- 外:- 内:- 外:-	華唐彩 赤目 内面無釉	灰褐色	七宝製陶所 (複製)	-
320	調査区20	陶器	本底	土瓶蓋	落し蓋 口縁有 底欠	6.0	5.7	1.5	7.8	26	ロク口成形 縞み足付	- 鉄絵	内:- 外:-	内面無釉	灰褐色	七宝製陶所 (複製)	-
321	調査区20	陶器	本底	土瓶蓋	落し蓋 口縁有 底欠	-	8.6	2.0	1.6	27	ロク口成形 右回転糸印痕 縞み足付	鉄絵 白泥 鉄絵 白泥	内:- 外:- 内:- 外:-	華唐彩 赤目 内面無釉	灰褐色	七宝製陶所 (複製)	-
322	調査区20	陶器	本底	土瓶蓋	落し蓋 口縁有 底欠	-	3.2	1.5	05.40	30	ロク口成形 右回転糸印痕 縞み足付	鉄絵 白泥 鉄絵 白泥	内:- 外:- 内:- 外:-	華唐彩 赤目 内面無釉	灰褐色	七宝製陶所 (複製)	-
323	調査区20	陶器	本底	土瓶蓋	落し蓋 口縁有 口受有	-	(6.9)	(2.8)	1.4	31	ロク口成形 縞み足付	鉄絵 白泥 鉄絵 白泥	内:- 外:- 内:- 外:-	華唐彩 赤目 内面無釉	乳白色	七宝製陶所 (複製)	-
324	調査区20	陶器	本底	土瓶	茶室用ケ 楕円形	7.40	-	(3.6)	-	25	ロク口成形 茶室用ケ 耳取付	白土絵付 白泥 透明釉	内:- 外:-	内面無釉	黄灰色	七宝製陶所 (複製)	225+1個 1個
325	調査区20	陶器	本底	土瓶	丸形	-	-	(5.4)	(14.8)	<22	ロク口成形	白泥 透明釉	内:- 外:-	内面無釉	黄灰色	七宝製陶所 (複製)	224+1個 1個
326	調査区20	陶器	本底	土瓶	蓋受無 耳有	7.6	-	(7.1)	(14.2)	43	ロク口成形 耳取付	鉄絵 鉄絵 鉄絵 鉄絵	内:- 外:- 内:- 外:-	華唐彩	灰褐色	七宝製陶所 (複製)	-
327	調査区20	陶器	本底	土瓶	蓋受無 耳有	6.8	-	(4.8)	-	50	ロク口成形 耳取付	鉄絵 白泥 透明釉	内:- 外:-	華唐彩	灰褐色	七宝製陶所 (複製)	-
328	調査区20	陶器	本底	土瓶	丸形	-	-	(7.4)	-	22	ロク口成形	鉄絵 絵付 鉄絵 絵付 白泥 透明釉	内:- 外:- 内:- 外:-	華唐彩	黄灰色	七宝製陶所 (複製)	-
329	調査区20	陶器	本底	土瓶	注口のふ	-	-	(2.9)	-	13	ロク口成形 注口足付	白土絵付 白泥 透明釉	内:- 外:-	華唐彩	黄灰色	七宝製陶所 (複製)	注口3(うら 1個)が ある
330	調査区20	陶器	本底	土瓶	茶室用ケ アリ蓋	-	(7.4)	(6.7)	(12.4)	<34	ロク口成形	白土絵付 白泥 透明釉	内:- 外:-	華唐彩	灰褐色	七宝製陶所 (複製)	-
331	調査区20	上:陶器 下:土瓶蓋	上:土瓶蓋 下:土瓶	上:土瓶蓋 口縁有 下:丸形	-	上: (5.6) 下:-	上: (4.0) 下:(2.3)	-	15	上:ロク口成形 白泥 透明釉 下:ロク口成形 上:白土絵付 白泥 透明釉	内:- 外:- 内:- 外:-	上:華唐彩 赤目 下:華唐彩	上:灰褐色 下:灰褐色	七宝製陶所 (複製)	蓋(上)と身 (下)が 一緒		
332	調査区20	陶器	本底	土瓶	丸形ケ 楕円形	9.40	-	(2.0)	-	26	ロク口成形 茶室用ケ 耳取付	- 華唐彩	内:- 外:-	内面無釉	灰白色	七宝製陶所 (複製)	-
333	調査区20	陶器	本底	土瓶	注口のふ	-	-	(6.3)	-	52	ロク口成形 注口足付	鉄絵	内:- 外:-	赤目	灰褐色	七宝製陶所 (複製)	注口丸4
334	調査区20	陶器	本底	土瓶	丸形	-	9.0	(3.2)	-	<26	白泥 鉄絵	内:- 外:-	-	黄灰色	七宝製陶所 (複製)	-	
335	調査区20	陶器	本底	土瓶	丸形 蓋 受無	6.0	-	(9.3)	(17.2)	<111	ロク口成形 注口・耳取付	華唐彩	内:- 外:-	-	灰白色	七宝製陶所 (複製)	注口丸3
336	調査区20	陶器	本底	土瓶	丸形 蓋 受無	-	-	(8.7)	(17.9)	91	ロク口成形 注口・耳取付	華唐彩	内:- 外:-	-	灰白色	七宝製陶所 (複製)	注口丸2
337	調査区20	陶器	本底	土瓶	丸形 注 口のふ	-	-	(9.9)	-	70	ロク口成形 注口足付	華唐彩	内:- 外:-	-	灰褐色	七宝製陶所 (複製)	注口丸4
338	調査区20	陶器	本底	土瓶	茶室用ケ 蓋受無	-	8.9	(8.1)	-	184	ロク口成形 注口足付	鉄絵	内:- 外:-	-	乳白色	七宝製陶所 (複製)	-
339	調査区20	陶器	本底	土瓶	茶室用ケ 蓋受無	7.0	-	(9.1)	(16.4)	62	ロク口成形 耳取付	縞飾 縞飾	内:- 外:-	内面無釉	乳白色	七宝製陶所 (複製)	-
340	調査区20	陶器	本底	土瓶	丸形ケ	7.5	-	(2.8)	-	40	ロク口成形 耳取付	白泥 縞飾 縞飾	内:- 外:-	-	黄灰色	七宝製陶所 (複製)	蓋と身 一緒
341	調査区20	陶器	本底	土瓶	丸形ケ 楕円形	8.40	-	(3.4)	-	26	ロク口成形 茶室用ケ 耳取付	縞飾	内:- 外:-	-	黄灰色	七宝製陶所 (複製)	-
342	調査区20	不明	蓋受無 白泥一 絵付	土瓶	丸形 蓋 受無	7.0	-	(7.2)	(14.7)	43	ロク口成形 注口・耳取付	鉄絵 鉄絵	内:- 外:-	-	乳白色	七宝製陶所 (複製)	注口丸3 (内 口一欠)
343	調査区20	不明	蓋受無 白泥一 絵付	土瓶	-	6.0	-	(4.3)	-	34	ロク口成形	鉄絵 鉄絵 白泥	内:- 外:-	-	乳白色	七宝製陶所 (複製)	-
344	調査区20	不明	蓋受無 白泥一 絵付	土瓶	蓋受無	6.0	-	(7.6)	(13.4)	<49	ロク口成形 注口足付	-	内:- 外:-	-	乳白色	七宝製陶所 (複製)	-
345	調査区20	不明	蓋受無 白泥一 絵付	土瓶	木瓜形 三足	-	7.4	(6.7)	-	<141	ロク口成形 茶室用ケ 耳取付 口・足取付	-	内:- 外:-	-	乳白色	七宝製陶所 (複製)	-
346	調査区20	不明	蓋受無 白泥一 絵付	土瓶	丸形ケ ベタ蓋 二足	-	7.4	(5.2)	(16.9)	123	ロク口成形 足取付	白泥	内:- 外:-	-	黄褐色	七宝製陶所 (複製)	-
347	調査区20	不明	蓋受無 白泥一 絵付	土瓶	丸形 蓋 受無	9.8	-	(5.3)	(14.6)	53	ロク口成形 耳取付	-	内:- 外:-	-	乳白色	七宝製陶所 (複製)	-
348	調査区20	不明	蓋受無 白泥一 絵付	土瓶	蓋受無	9.4	-	(2.7)	-	22	ロク口成形	-	内:- 外:-	-	乳白色	七宝製陶所 (複製)	内面無釉

No.	出土位置	材質	構成/形状	群別/種類	形状特徴	寸法 (mm)				重量 (g)	成形・成形特徴	装飾			加工色	製作地	備考
						口径/長さ	断面/幅	断面/厚さ	最大径/径			磨付/施文	文様	装飾特徴			
349	調査区D20	陶器	本埴	土師器	輪扁形	3.5	(15.8)	3.3	-	96	ロク口成形 削り込み	西脇 鉄軸	内- 外-機軸・井桁文	紫褐色 緑内無軸	灰青色	七面製陶所 (複製)	口縁部直み棒 着
350	調査区D20	陶器	本埴	土師器	輪扁形	4.8	(16.7)	(1.3)	-	35	ロク口成形 削り込み	内側 高脚 白灰 透明釉	内- 外-竹文 辻羅文	紫褐色	褐色	七面製陶所 (複製)	割れ口に黒 漆付着
351	調査区D20	陶器	本埴	土師器	山蓋 輪扁口 受有	3.3	11.2	3.3	13.3	178	ロク口成形 削り込み	- 灰軸	内- 外-	白受無軸	明褐色	七面製陶所 (複製)	-
352	調査区D20	陶器	本埴	土師器	山蓋 輪扁口 受無	3.8	15.8	4.6	16.2	199	ロク口成形 削り込み	- 灰軸	内- 外-辻羅文	口縁部無 軸	明褐色	七面製陶所 (複製)	-
353	調査区D20	陶器	唐塗一 層釉	土師器	丸平輪 み	-	-	-	(3.2)	37	ロク口成形 削り込み (溝 削り)	内- 外-機ひ軸	機ひ軸	乳白色	七面製陶所 (複製)	-	
354	調査区D20	陶器	本埴	土師	丸形 板 状双耳 受有	(21.0)	-	(7.4)	-	82	ロク口成形 耳取付	内- 外-	-	灰青色	七面製陶所 (複製)	-	
355	調査区D20	陶器	本埴	土師	丸形 板 状双耳 受有	(30.0)	-	(7.5)	-	101	ロク口成形 耳取付	内- 外-	削下無 軸	灰褐色	七面製陶所 (複製)	-	
356	調査区D20	陶器	本埴	土師	丸形 板 状双耳 受有	(18.4)	-	(4.7)	-	48	ロク口成形	内- 外-	灰軸	灰青色	七面製陶所 (複製)	色調様式	
357	調査区D20	陶器	本埴	急須	山蓋 丸 形口 受有 乳 有	1.5	4.6	3.2	6.8	86	ロク口成形	白土 貼付 鉄軸 白灰 透明釉	内- 外-折枝梅文 辻 羅文	紫褐色 緑内無 軸	灰青色	七面製陶所 (複製)	-
358	調査区D20	陶器	本埴	急須	蓋 山蓋 丸形口 受有	-	3.4	(3.4)	-	27	ロク口成形	白土貼付 白灰 灰軸	内- 外-折枝文	インツ ン植込 内 無軸	灰青色	七面製陶所 (複製)	-
359	調査区D20	不明	唐塗	蓋	口受有 乳有	-	8.2	1.9	9.6	39	ロク口成形	内- 外-辻羅文	-	乳白色	七面製陶所 (複製)	-	
360	調査区D20	不明	唐塗	蓋	蓋 山蓋 丸形口 受有	-	9.6	3.8	1.7	61	ロク口成形 左折軸表面切込	内- 外-辻羅文	-	乳白色	七面製陶所 (複製)	-	
361	調査区D20	不明	唐塗一 層釉	蓋	蓋 丸形 口受有	9.4	3.2	1.9	-	36	ロク口成形 回転軸切込	西脇 鉄軸	内- 外-機回字文 辻 羅文	紫褐色 乳白色	七面製陶所 (複製)	-	
362	調査区D20	陶器	上:本 埴 下: 本埴	上:土師 器 下: 土師器	上:蓋丸 形口受 有 欠 陥 下: 蓋丸形 口受有	(8.3)	5.9	2.3	8.0	32	上:ロク口成 形 削り 込み時 下:ロク口 成形 削 り込み時	内- 外-	上:灰 黄色 下:灰 黄色	七面製陶所 (複製)	色調様式 上 下2部異色		
363	調査区D20	陶器	上:本 埴 下: 本埴	土師器	上:蓋丸 形口受 有 欠 陥 下: 蓋丸形 口受有	(6.8)	5.4	1.5	8.2	86	上:ロク口成 形 削り 込み時 下:ロク口 成形	内- 外-	上:内 面無 軸 下: 内面 無軸	上:灰 黄色 下:灰 黄色	七面製陶所 (複製)	上下2部体部 の上下部 に色むらあり	
364	調査区D20	陶器	本埴	土師器	蓋丸形 口受有 欠陥	4.9	5.4	2.9	7.5	36	ロク口成形	内- 外-	内面無 軸	褐色	七面製陶所 (複製)	-	
365	調査区D20	陶器	唐塗	不明	梅花形 み	-	(3.8)	(2.4)	-	13	手捏 胎付	内- 外-	-	乳白色	七面製陶所 (複製)	痛み残存	
366	調査区D20	陶器	本埴	瓦口	丸形	(23.3)	-	(18.0)	-	375	ロク口成形	内- 外-	-	灰青色	七面製陶所 (複製)	-	
367	調査区D20	陶器	本埴	瓦口	螺紋丸形 み	-	(16.0)	(16.4)	-	370	ロク口成形	内- 外-	削下無 軸	灰青色	七面製陶所 (複製)	-	
368	調査区D20	陶器	本埴	瓦口	丸形	(20.4)	-	(9.3)	-	187	ロク口成形	内- 外-	削下無 軸	灰青色	七面製陶所 (複製)	口部欠損	
369	調査区D20	陶器	本埴	瓦口	平 形	(21.0)	-	(7.4)	(23.5)	186	ロク口成形 口貼付	内- 外-	鉄軸	灰青色	七面製陶所 (複製)	-	
370	調査区D20	陶器	本埴	行平	把手・鍔 状 中央	6.7	3.2	(7.4)	-	42	ロク口成形 胎付	内- 外-	無受無 軸	灰青色	七面製陶所 (複製)	把手残存	
371	調査区D20	陶器	唐塗	行平	把手・鍔 状 中央	-	-	(3.4)	(7.3)	37	ロク口成形 胎付	内- 外-	-	乳白色	七面製陶所 (複製)	把手残存	
372	調査区D20	陶器	唐塗	行平	把手付	7.6	3.6	(4.4)	-	38	手捏	内- 外-斜格子・山水	隔周文様	乳白色	七面製陶所 (複製)	把手残存	
373	調査区D20	陶器	本埴	茶	筒形	(22.0)	-	(9.8)	(26.6)	136	ロク口成形	内- 外-	削下無 軸	灰青色	七面製陶所 (複製)	-	
374	調査区D20	不明	唐塗一 層釉	瓶	タリ型	-	7.8	(2.4)	-	74	ロク口成形 削り込み 底面丸 (34)	内- 外-	-	乳白色	七面製陶所 (複製)	-	
375	調査区D20	不明	唐塗	御盥	笠形 長 方形	7.2	7.5	1.6	-	39	板作りヘ ナナ ナナ 削 り削 削	内- 外-	-	乳白色	七面製陶所 (複製)	器付129号 係加二方面 から剥ぎ取 れている。	
376	調査区D20	陶器	唐塗	御盥	笠形	(3.3)	(2.4)	(6.5)	-	3	板作り	内- 外-	刺突目 付	灰青色	七面製陶所 (複製)	-	
377	調査区D20	陶器	本埴	鉢	円形	7.9~8.4	7.5	5.9	-	225	手捏	内- 外-	鉄軸	灰青色	七面製陶所 (複製)	器付129号 の内縁部	
378	調査区D20	陶器	本埴	鉢	三角 タリ型	(21.4)	(13.9)	(2.4)	-	<252	ロク口成形	内- 外-	削下無 軸	灰青色	七面製陶所 (複製)	器下一定部 漆付着	

No.	出土位置	材質	構成/用途	形状特徴	寸法 (cm)				質量 (g)	成形・装飾	装飾			出土色	製作地	備考	
					口径/長さ	幅/高さ	底径/厚さ	最大径/他			素材/胎土	文様	装飾特徴				
279	調査区20	陶器	本埴	笠形 胴部押圧凸高付文様	-	-	13.3	-	102	手押ねヘラナデ	-	内: 衝文文様 外: -	信託押入文様 衝文上に基となる刺突	灰褐色	七面製陶所(陶製)	万古式 内面装飾	
280	調査区20	陶器	本埴	短鉢 口縁外帯3段溝口	34.0	(16.0)	12.9	-	910	ロタロ成形 外帯押圧	-	内: - 外: -	縦目	灰褐色	不明	横目11cm/20mm	
281	調査区20	陶器	本埴	水注 寛形 把手有	(3.6)	-	(6.7)	-	12	ロタロ成形 把手貼付	-	内: - 外: -	-	明褐色	七面製陶所(陶製)	-	
282	調査区20	陶器	本埴	德利 玉縁形	3.8	-	(8.9)	(7.8)	32	ロタロ成形	内: 白滑 反輪 外: 鉄輪 反輪	内: 不詳 外: 不詳	縦線	灰褐色	七面製陶所(陶製)	-	
283	調査区20	陶器	本埴	德利 扇形	-	-	(3.5)	-	21	ロタロ成形	-	内: - 外: 横ひね	縦ひね	灰褐色	七面製陶所(陶製)	-	
284	調査区20	陶器	本埴	德利 碗形	-	-	(3.9)	-	15	ロタロ成形	-	内: - 外: 流線文 横ひ	縦ひね	灰白色	七面製陶所(陶製)	-	
285	調査区20	不明	素焼	德利 碗形	-	8.8	(17.6)	21.4	243	ロタロ成形 へ字底	-	内: 外: 流線文 横ひ	縦ひね	褐色・灰褐色	七面製陶所	内証全面装束	
286	調査区20	不明	素焼	德利 碗形	-	-	(18.2)	(22.5)	<333	ロタロ成形	-	内: 外: 流線文 横ひ	縦ひね	褐色・灰褐色	七面製陶所	内証全面装束	
287	調査区20	不明	素焼	德利 碗形	-	18.33	(32.5)	-	113	ロタロ成形 へ字底	-	内: 外: 流線文 横ひ	縦ひね	褐色・灰褐色	七面製陶所	内証全面装束	
288	調査区20	不明	素焼	横溝へ付付 德利	-	-	(6.1)	-	26	ロタロ成形 鉄輪	-	内: 外: 流線文	縦線	灰白色	七面製陶所	-	
289	調査区20	不明	素焼	横溝へ付付 横溝	3.0~4.4	6.5	22.9	-	<302	ロタロ成形 へ字底	-	内: 外: -	-	褐色	七面製陶所	内証装束	
290	調査区20	不明	素焼	横溝へ付付 横溝	-	-	7.6	(10.4)	<302	ロタロ成形 へ字底	鉄輪	内: 外: 文字文	縦線	褐色	七面製陶所	外面装束に鉄文字「1」(内)	
291	調査区20	陶器	本埴	種子 瓶形	1.6	-	(7.8)	-	20	ロタロ成形	鉄輪 鉄輪 反輪	内: 外: 不詳(文様)	縦線	灰白色	七面製陶所	-	
292	調査区20	陶器	本埴	種子 瓶形 蓋受有 耳欠	(12.6)	-	(8.7)	-	<64	ロタロ成形	鉄輪 鉄輪 反輪	内: 外: 大塚宝珠文	縦線	灰褐色	七面製陶所	-	
293	調査区20	陶器	本埴	水筒 内筒形	-	-	(19.8)	-	251	ロタロ成形	-	内: 外: -	-	灰褐色	七面製陶所(陶製)	-	
294	調査区20	陶器	本埴	灯明受皿 把手・付蓋付	4.5	(4.0)	7.3	(8.0)	85	ロタロ成形 へ字底 把手貼付	-	内: 外: -	底面無輪	灰褐色	七面製陶所(陶製)	-	
295	調査区20	陶器	本埴	葉陶 付付たんころ形 底面輪孔有	4.1	3.7	4.8	3.4	66	ロタロ成形 左側面凸切底	-	内: 外: -	底面無輪	灰褐色	七面製陶所(陶製)	志立に保存	
296	調査区20	陶器	本埴	葉陶 付付たんころ形 底面輪孔有	4.6	3.5	4.8	3.4	37	ロタロ成形 左側面凸切底	-	内: 外: -	底面無輪	灰褐色	七面製陶所	-	
297	調査区20	陶器	本埴	葉陶 付付たんころ形 蓋底面凸切底 底面輪孔有	(4.7)	3.6	4.1	-	40	ロタロ成形 右側面凸切底 蓋底面輪孔有	-	内: 外: -	底面無輪	灰色	七面製陶所(陶製)	-	
298	調査区20	陶器	-	コシヤク	-	5.1	5.3	4.4	(15.6)	-	-	内: 外: -	-	-	七面製陶所(陶製)	-	
299	調査区20	陶器	素焼	香炉 方形	(5.0)	(4.2)	(6.7)	-	8	板作り	-	内: 外: 流線文	へ字横目	褐色	七面製陶所(陶製)	-	
300	調査区20	陶器	本埴	椀鉢形 横溝	(14.6)	-	(11.9)	-	<296	ロタロ成形	海鼠輪	内: 外: -	内面無輪	淡褐色	七面製陶所(陶製)	-	
301	調査区20	陶器	素焼	椀鉢形 横溝	(10.6)	-	(6.8)	-	112	ロタロ成形	-	内: 外: -	-	褐色・灰褐色	七面製陶所(陶製)	-	
302	調査区20	陶器	素焼	椀鉢形 横溝	-	8.5	(3.9)	-	78	ロタロ成形 削り盛付	-	内: 外: -	-	灰褐色	七面製陶所(陶製)	底面有孔	
303	調査区20	不明	素焼	蓋	-	(13.3)	(3.2)	-	239	ロタロ成形 右側面凸切底 へ字底	-	内: 外: -	へ字横目	灰褐色	七面製陶所(陶製)	七面製陶所(陶製)	
304	調査区20	不明	素焼	蓋	-	-	(5.0)	-	36	ロタロ成形 貼付	-	内: 外: 内面衝文	へ字横目	褐色・灰褐色	七面製陶所(陶製)	-	
305	調査区20	不明	素焼	蓋	-	18.4	-	(3.4)	-	12	ロタロ成形 耳貼付	-	内: 外: 横溝・流線文	縦目	灰褐色	七面製陶所(陶製)	-
306	調査区20	不明	素焼	仏具 台座中実口縁 へ字底	-	4.2	(3.5)	(4.5)	64	ロタロ成形 凸部へ字削り調整	-	内: 外: -	-	灰褐色	七面製陶所(陶製)	-	
307	調査区20	不明	本埴	椀鉢形	-	4.4	(2.2)	-	37	ロタロ成形 削り盛付	長石輪	内: 外: -	横溝・横目	明褐色	不明	底面穿孔	
308	調査区20	陶器	本埴	不明 蓋形	(3.7)	(3.1)	(1.7)	-	9	切押 貼付	反輪	内: 外: 押入	-	灰色	不明	-	
310	調査区20	不明	素焼	蓋	-	(2.5)	(2.5)	(6.6)	-	3	ロタロ成形	内: 外: -	-	褐色	七面製陶所(陶製)	鉄釘(「飯草」に使用)	
411	調査区20	不明	素焼	蓋	-	(2.8)	(2.4)	(1.2)	-	10	ロタロ成形 へ字底	内: 外: -	-	淡褐色	七面製陶所(陶製)	鉄釘(「飯草」に使用)	
412	調査区20	不明	素焼	蓋	-	(3.8)	(2.7)	(1.1)	-	8	ロタロ成形 へ字底	内: 外: -	-	淡褐色	七面製陶所(陶製)	鉄釘(「飯草」に使用)	
413	調査区20	不明	素焼	蓋	-	(3.9)	(2.4)	(0.7)	-	9	ロタロ成形 へ字底	内: 外: -	-	淡褐色	七面製陶所(陶製)	鉄釘(「飯草」に使用)	
419	調査区20	陶器	本埴	ビンノ型	-	5.8	5.8	1.9	-	-	-	内: 外: -	-	-	伊賀入柱	裏面陰刻あり	

No	出土位置	材質	構成/形状	器種/用途	形状特徴	寸法 (mm)				重量 (g)	成形・調整	装飾			胎土色	製作地	備考
						口径/長さ	底径/高さ	最大径/高さ	最大径/高さ			輪付/動差	文様	装飾特徴			
420	調査DC20	土器	煎飯	土埴	壺形	3.4	3.3	7.6	6.7	230	ロタリ成形 削り調整	-	内・外	-	褐色	七面製陶所	中央に穿孔(径3mm)
421	調査DC20	陶器	-	甕道具(横台・キキョウ台)	円筒形 孔台 五足	7.8	9.3	(3.6)	-	163	ロタリ成形 上面右側糸切磨し	-	内・外	-	灰白色	七面製陶所(複製)	三足先端部磨蝕着痕・中央穿孔(径14mm)
422	調査DC20	陶器	-	甕道具(横台・キキョウ台)	円筒形 孔台 五足	7.9	8.5	(3.4)	-	145	ロタリ成形 上面右側糸切磨し	-	内・外	-	灰褐色	七面製陶所(複製)	三足先端部磨蝕着痕・中央穿孔(径14mm) 上面径71mmの高低痕
423	調査DC20	陶器	-	甕道具(横台・キキョウ台)	円筒形 孔台 五足	6.9	8.0	(2.9)	-	96	ロタリ成形 上面右側糸切磨し	-	内・外	-	灰白色	七面製陶所(複製)	三足先端部磨蝕着痕・中央穿孔(径14mm)
424	調査DC20	陶器	-	甕道具(横台)	立盤形	6.3	5.2	6.8	7.0	167	ロタリ成形 右側糸切磨し	-	内・外	-	灰白色	七面製陶所	上面高低痕 全体にアルミナ散布
425	調査DC20	陶器	-	甕道具(横台)	立盤形	-	8.0	9.7	12.4	1,739	手捏ね	-	内・外	-	灰褐色	七面製陶所	-
426	調査DC20	陶器	-	甕道具(横台)	立盤形	-	8.8	9.0	11.7	1,206	手捏ね	-	内・外	-	灰褐色	七面製陶所	上面に輪リナシ 下底 側面粘土着
427	調査DC20	陶器	-	甕道具(横台)	立盤形	10.5	9.0	11.9	-	716	ロタリ成形	-	内・外	-	黄褐色	七面製陶所	全体にアルミナ散布 内底穴磨た
428	調査DC20	陶器	-	甕道具(横台)	立盤形	10.0	10.0	11.7	-	207	ロタリ成形	-	内・外	-	灰褐色	七面製陶所	下端面外面(斜めの胎土色)が黄褐色に変化(斜位の破損) 上面に高低痕(径不明)
429	調査DC20	陶器	-	甕道具(横台)	立盤形	0.80	0.61	0.9	-	228	ロタリ成形	-	内・外	-	灰褐色	七面製陶所	全体にアルミナ散布 下端面外面(斜めの胎土色)が乳褐色に変化(斜位の破損)
430	調査DC20	陶器	-	甕道具(横台)	円筒形(ハツの字取)	8.8	(11.5)	19.4	-	1,409	ロタリ成形	-	内・外	-	灰褐色	七面製陶所	上面に高低痕(径不明)
431	調査DC20	陶器	-	甕道具(ハツの字取)	円筒形 断面円形	9.20	9.0	11.2	-	855	手捏ね	-	内・外	-	黄・乳褐色	七面製陶所	下端面外面(斜めの胎土色)が乳褐色に変化(斜位の破損) 上面径77mmの高低痕
432	調査DC20	陶器	-	甕道具(輪リナシ)	碗状	3.7	6.2	1.0	-	26	手捏ね	-	内・外	-	灰黄色	七面製陶所	-
433	調査DC20	焼結陶器	-	甕道具(ハツの字取)	円筒形(成の)有孔(径12mm)	7.7	8.1	1.4	-	87	ロタリ成形 右側糸切磨し	-	内・外	-	灰白色	七面製陶所	下面に胎土目
434	調査DC20	焼結陶器	-	甕道具(ハツの字取)	円筒形(成の)有孔(径20mm)	9.1	9.5	1.5	9.8	89	ロタリ成形 右側糸切磨し	-	内・外	-	灰黄色	七面製陶所	-
435	調査DC20	焼結陶器	-	甕道具(ハツの字取)	-	0.60	0.61	1.4	-	74	-	-	内・外	-	-	-	-
436	調査DC20	焼結陶器	-	甕道具(ハツの字取)	碗状形	11.0	7.0	1.7	12.3	176	ロタリ成形 削り調整	-	内・外	-	灰白色	七面製陶所	側面に砂粒着・アルミナ散布
437	調査DC20	焼結陶器	-	甕道具(三足付ハツの字取)	円筒形 有孔(径20mm) 三足付	7.7	8.0	(2.5)	-	100	ロタリ成形 上面右側糸切磨し・下面削り調整 足部手捏ね 胎付	-	内・外	-	灰白色	七面製陶所	三足先端部磨蝕着痕
438	調査DC20	焼結陶器	-	甕道具(三足付ハツの字取)	円筒形 三足付	5.9	5.6	(1.7)	-	80	上面糸切磨し・足部手捏ね 胎付	-	内・外	-	灰白色	七面製陶所	上面糸切磨し 三足先端部磨蝕着痕
439	調査DC20	焼結陶器	-	甕道具(三足付ハツの字取)	円筒形 三足付	4.3	4.3	1.5	-	24	ロタリ成形 上面右側糸切磨し・下面右側糸切磨し 足部手捏ね 胎付	-	内・外	-	灰白色	七面製陶所	三足先端部磨蝕着痕
440	調査DC20	陶器	-	甕道具(タコノ字取)	十字状 下面中央四角の窪み	(20.6)	(23.9)	4.4	-	912	型押成形 側面成形	-	内・外	-	褐色	七面製陶所	上面アルミナ散布
441	調査DC20	陶器	-	甕道具(楕瓶)	瓶状	(13.4)	16.8	4.6	-	1,730	型作りナシ調整	-	内・外	-	黄褐色	七面製陶所	被熱著しい
442	調査DC20	陶器	-	甕道具(楕瓶)	瓶状	(15.6)	16.7	4.5	-	1,500	型作りナシ調整	-	内・外	-	黄褐色	七面製陶所	-



No.	出土位置	材質	構成/属性	群像/種類	形状/特徴	寸法 (cm)				質量 (g)	成形・調整	装飾			出土色	製作地	備考
						口縁/長さ	底径/幅	高さ/厚さ	最大径/他			縦付/輪基	文様	装飾特徴			
443	調査区20	陶器	-	常連具 (横白: キキョウ台)	-	7.1	8.0	(1.8)	-	76	-	内・外-	-	-	七面製陶所 (横製)	-	-
444	調査区20	陶器	-	常連具 (横白: キキョウ台)	Y字切有 五足	6.5	9.1	(4.1)	-	90	ロウロ成形 上面右側削 切跡し。	内・外-	-	灰黄色	七面製陶所 (横製)	五足先端部磨 着痕	-
445	調査区20	陶器	-	常連具 (横白: キキョウ台)	Y字切有 乳白(花 土貫通) 五足	6.4	9.8	(4.0)	-	123	ロウロ成形 上面右側削 切跡し。	内・外-	-	乳白色	七面製陶所 (横製)	中央穿孔(未 貫通・径2 mm)	-
446	調査区20	陶器	-	常連具 (横白: キキョウ台)	Y字切有 乳白 五 足	5.3	6.0	(2.0)	-	42	ロウロ成形 上面右側削 切跡し。	内・外-	-	灰褐色	七面製陶所 (横製)	五足先端部磨 着痕 中央穿 孔(径3mm)	-
447	調査区20	陶器	-	常連具 (横白: キキョウ台)	Y字切有 乳白 五 足	6.0	7.0	2.6	-	63	ロウロ成形 上面右側削 切跡し。	内・外-	-	灰褐色	七面製陶所 (横製)	五足先端部磨 着痕 中央穿 孔(径2mm)	-
448	調査区20	陶器	-	常連具 (横白: キキョウ台)	Y字切有 乳白 五 足	6.0	6.9	(2.0)	-	67	ロウロ成形 上面右側削 切跡し。	内・外-	-	灰褐色	七面製陶所 (横製)	五足先端部磨 着痕 中央穿 孔(径3mm)	-
449	調査区20	陶器	-	常連具 (横白: キキョウ台)	Y字切有 乳白 五 足	4.3	6.0	(2.7)	-	39	ロウロ成形 上面右側削 切跡し。	内・外-	-	灰黄色	七面製陶所 (横製)	五足先端部磨 着痕 中央穿 孔(径3mm)	-
450	調査区20	陶器	-	常連具 (横白: キキョウ台)	Y字切有 乳白 五 足	7.4	7.1	(3.3)	-	104	ロウロ成形 上面右側削 切跡し。	内・外-	-	灰黄色	七面製陶所 (横製)	五足先端部磨 着痕 中央穿 孔(径3mm) 上面に亀裂	-
451	調査区20	陶器	-	常連具 (横白: キキョウ台)	Y字切有 乳白 五 足	7.0	7.9	3.4	8.5	97	-	内・外-	-	-	七面製陶所 (横製)	-	-
452	調査区20	陶器	-	常連具 (横白: キキョウ台)	Y字切有 乳白 五 足	7.3	8.1	(3.2)	-	132	ロウロ成形 上面右側削 切跡し。	内・外-	-	灰褐色	七面製陶所 (横製)	五足先端部磨 着痕 中央穿 孔(径3mm)	-
453	調査区20	陶器	-	常連具 (横白: キキョウ台)	Y字切有 乳白 五 足	7.5	9.8	(4.0)	-	159	ロウロ成形 上面右側削 切跡し。	内・外-	-	灰褐色	七面製陶所 (横製)	中央穿孔(径 1mm)	-
454	調査区20	陶器	-	常連具 (横白: キキョウ台)	Y字切有 乳白 五 足	8.8	9.9	(2.0)	-	118	ロウロ成形 上面右側削 切跡し。	内・外-	-	灰褐色	七面製陶所 (横製)	五足先端部磨 着痕 中央穿 孔(径3mm) 上面に亀裂	-
455	調査区20	陶器	-	常連具 (横白: キキョウ台)	Y字切有 乳白 五 足	9.6	9.9	(3.2)	-	148	ロウロ成形 上面右側削 切跡し。	内・外-	-	乳白色	七面製陶所 (横製)	五足先端部磨 着痕 中央穿 孔(径3mm)	-
456	調査区20	陶器	-	常連具 (横白: キキョウ台)	立盤形	4.4	3.1	3.0	-	46	ロウロ成形 右側削切跡 し。	内・外-	-	灰褐色	七面製陶所	アルミナ塗布	-
457	調査区20	陶器	-	常連具 (横白: キキョウ台)	立盤形	3.9	4.6	2.8	-	45	ロウロ成形 右側削切跡 し。	内・外-	-	灰褐色	七面製陶所	-	-
458	調査区20	陶器	-	常連具 (横白: キキョウ台)	立盤形	3.2	4.1	3.1	-	47	ロウロ成形 右側削切跡 し。	内・外-	-	灰褐色	七面製陶所	-	-
459	調査区20	陶器	-	常連具 (横白: キキョウ台)	立盤形	3.6	4.0	3.2	-	46	ロウロ成形 右側削切跡 し。	内・外-	-	灰褐色	七面製陶所	-	-
460	調査区20	陶器	-	常連具 (横白: キキョウ台)	-	4.6	4.3	2.9	-	54	-	内・外-	-	-	-	-	-
461	調査区20	陶器	-	常連具 (横白: キキョウ台)	立盤形	4.8	4.9	5.7	5.7	156	ロウロ成形	内・外-	-	灰褐色	七面製陶所	下端内部に土 砂着	-
462	調査区20	陶器	-	常連具 (横白: キキョウ台)	-	4.3	4.9	6.0	5.9	155	-	内・外-	-	-	-	-	-
463	調査区20	陶器	-	常連具 (横白: キキョウ台)	立盤形	-	9.7	8.9	10.9	411	ロウロ成形 右側削切跡 し。	内・外-	-	乳白色	七面製陶所	下端の一部 に保行着	-
464	調査区20	陶器	-	常連具 (横白: キキョウ台)	立盤形 (10.0)	(9.2)	10.2	10.2	-	236	ロウロ成形 右側削切跡 し。	内・外-	-	灰白色	七面製陶所	-	-
465	調査区20	陶器	-	常連具 (横白: キキョウ台)	円筒形 (浅め)	3.0	2.6	1.8	-	28	手捏土	内・外-	-	褐色	七面製陶所	上端から内部 に保行着	-
466	調査区20	陶器	-	常連具 (横白: キキョウ台)	円筒形 断面可 見	1.5	3.7	3.9	4.0	39	手捏土	内・外-	-	乳白色	七面製陶所	アルミナ塗布	-
467	調査区20	陶器	-	常連具 (横白: キキョウ台)	円筒形 断面可 見	2.7	3.8	6.0	4.0	54	ロウロ成形	内・外-	-	乳白色	七面製陶所	アルミナ塗布	-
468	調査区20	陶器	-	常連具 (横白: キキョウ台)	円筒形 断面可 見	2.4	3.5	6.0	3.9	53	ロウロ成形	内・外-	-	乳白色	七面製陶所	下端内部に土 砂着 アルミ ナ塗布	-

No.	出土位置	材質	構成/窯法	器種/種類	形状特徴	寸法 (cm)				質量 (g)	成形・調整	装飾			胎土色	製作地	備考
						口径/長さ	底径/幅	高さ/厚さ	最大径/他			施付/胎土	文様	装飾特徴			
469	調査区20	陶器	-	常道瓦 (トナシ)	立軸形 断面四角 下面内溝 状の部分	6.7	5.2	9.9	-	365	手捏ね	-	内・外-	-	黄褐色	七面製陶所	下部内面に土粉着色「アルミナ着色」
470	調査区20	陶器	-	常道瓦 (トナシ)	立軸形 断面四角 下面内溝 状の部分	6.2	3.9	10.1	-	411	手捏ね	-	内・外-	-	黄褐色	七面製陶所	下部内面に土粉着色「アルミナ着色」
471	調査区20	陶器	-	常道瓦 (トナシ)	1字形 断面四角 下面内溝 状の部分	3.6	3.7	13.9	5.0	356	手捏ね	-	内・外-	-	黄褐色	七面製陶所	-
472	調査区20	陶器	-	常道瓦 (トナシ)	1字形 断面四角 下面内溝 状の部分	4.7	4.1	14.8	5.7	418	手捏ね	-	内・外-	-	黄褐色	七面製陶所	下部内面に土粉着色(砂床の痕跡)
473	調査区20	陶器	-	常道瓦 (トナシ)	1字形 断面四角 下面内溝 状の部分	5.4	4.7	13.4	6.5	542	手捏ね	-	内・外-	-	黄褐色	七面製陶所	上面着色後 下部内面に土粉着色(砂床の痕跡)
474	調査区20	陶器	-	常道瓦 (トナシ)	断面四角 下面内溝 状の部分	-	12.8	17.3	-	973	ロタロ成形	石目彫糸切離し	内・外-	-	黄白色	七面製陶所	-
475	調査区20	陶器	-	常道瓦 (筒形トナシ)	-	(12.6)	(3.7)	(1.2)	-	41	手捏ね	-	内・外-	-	乳白色	七面製陶所	側面の一部に着色痕
476	調査区20	陶器	-	常道瓦 (ハツ)	円筒形 (浅め) 土字切有孔 台(径約 6cm) 切込	12.8	12.8	2.2	13.4	270	ロタロ成形 削り高さ(下面中央に円形の凹込)	-	内・外-	-	黄白色	七面製陶所	基本軸の側面に土字切を削り用
477	調査区20	陶器	-	常道瓦 (ハツ)	円筒形 有孔(径 27mm)	10.6	9.1	2.7	11.1	95	ロタロ成形 凹込糸切離し	-	内・外-	-	黄白色	七面製陶所	-
481	調査区20	漆器陶器	-	漆鉢	口縁外縁 二重 片口	33.3	-	(32.1)	-	560	ロタロ成形 外縁彫花	-	内・外-	縞目	赤褐色	明石・瀬古	観音11月本/29cm
482	調査区20	陶器	-	漆鉢	口縁外縁 二重	37.6	-	(33.6)	-	490	ロタロ成形	-	内・外-	縞目	黄褐色	不明	観音17月本/29cm
483	調査区20	陶器	-	漆鉢	丸形	(29.0)	12.4	(9.3)	-	930	ロタロ成形 削り高さ	内・外- 海流輪	内・外-	遠近無輪	灰褐色	松尾製	-
484	調査区20	磁器	-	磁鉢	口縁外縁 口縁無輪	17.3	3.3	5.1	-	30	ロタロ成形 削り高さ	内・外- 花井文	内・外- 透明釉	無輪	灰白色	在地産	漆灰皿
485	調査区20	磁器	-	磁	口縁外縁 削り高さ	18.0	3.5	4.2	<34	ロタロ成形 削り高さ	内・外- コバルト透明釉	内・外- 菊半葉型文	内・外- 無輪	無輪	白色	在地産	ガラス皿
486	調査区20	磁器	-	磁	磁反形	8.9	-	(6.0)	-	30	ロタロ成形	内・外- 花井文	内・外- 透明釉	無輪	白色	瀬戸・美濃系	ガラス皿
487	調査区20	陶器	-	灰	丸形	(7.0)	-	(3.3)	-	15	ロタロ成形	内・外-	内・外-	-	黄白色	先産物	-
488	調査区20	漆器陶器	-	灯籠皿	平形	6.7	2.8	1.3	-	36	ロタロ成形	内・外- 底輪	内・外-	-	乳白色	七面製陶所	外面縁部に削り 底面着色
489	調査区20	磁器	-	磁蓋	輪縁口	(6.8)	(3.1)	2.4	-	19	ロタロ成形	内・外- 底輪	内・外- 透明釉	無輪	白色	七面製陶所	-
490	調査区20	磁器	-	磁	丸形	(9.7)	(3.0)	5.1	-	30	ロタロ成形 削り高さ	内・外- 見込花井文	内・外- 透明釉	無輪	白色	七面製陶所	漆鉢
491	調査区20	磁器	-	磁	磁反形	9.3	-	(3.0)	-	15	ロタロ成形	内・外- 見込花井文	内・外- 透明釉	無輪	白色	瀬戸・美濃系	-
492	調査区20	磁器	-	磁	磁反形	(10.0)	-	(3.0)	-	7	ロタロ成形	内・外- 見込花井文	内・外- 透明釉	無輪	白色	七面製陶所	-
493	調査区20	磁器	-	灰	丸形	(7.5)	-	(3.0)	-	9	ロタロ成形	内・外- 底輪	内・外- 透明釉	無輪	白色	七面製陶所	-
494	調査区20	磁器	-	灰	丸形	(7.0)	-	(3.2)	-	4	ロタロ成形	内・外- 底輪	内・外- 透明釉	無輪	白色	七面製陶所	-
495	調査区20	磁器	-	磁	-	-	7.3	(1.0)	-	73	ロタロ成形 削り高さ	内・外- 見込花井文	内・外- 透明釉	無輪	白色	肥前系	-
496	調査区20	磁器	-	紅緑口	丸形	-	2.5	(2.2)	-	28	ロタロ成形 削り高さ	内・外- 見込花井文	内・外- 透明釉	無輪	灰白色	七面製陶所	-
500	調査区21	磁器	本焼	灰	磁反形	(7.0)	3.0	3.6	-	20	ロタロ成形 削り高さ	内・外- 見込花井文	内・外- 透明釉	無輪	灰白色	七面製陶所	-
500	調査区21	不明	黒漆→白漆	急須蓋	口受輪 乳有 縁なし文飾	6.7	5.4	2.0	5.7	19	ロタロ成形	内・外-	内・外-	-	黄白色	七面製陶所(複製)	-
504	調査区21	陶器	本焼	皿	変形	8.7	5.2	2.3	-	76	ロタロ成形 削り高さ	内・外- 見込花井文	内・外- 透明釉	無輪	灰褐色	七面製陶所(複製)	器付アルミナ着色

No.	出土位置	材質	構成/形状	群種	形状/種類	寸法 (cm)				質量 (g)	成形・調整	装飾			出土色	製作地	備考
						口径/長さ	高さ/幅	底径/厚さ	最大径/他			裏付/胎土	文様	装飾特徴			
505	調査区21	後編陶器	蓋後	蓋	-	-	08.0	11.0	-	13	ロタロ成形 ベタ造	-	内:衝文文 外:-	扇刻文様	褐色・ 乳白色	七面製陶所	胡甲(陰 刻)・底面 (彫刻型に似 る)
506	調査区21	後編陶器	本埴	土瓶蓋	獅子野形 み	3.5	3.0	0.0	-	15	手捏ね 胎付	白黒胎 付 白灰 灰胎	内:- 外:-	無装飾	灰褐色	七面製陶所	痛み残存
507	調査区21	後編陶器	蓋後	土瓶蓋	亀形野形 み	4.7	4.2	3.1	-	15	型押 手捏ね	-	内:- 外:-	-	乳白色	七面製陶所	痛み残存
508	調査区21	陶器	本埴	土瓶蓋	山瀬丸 形口受有	1.7	5.9	3.2	7.9	51	ロタロ成形	白土胎付 白灰 灰胎	内:- 外:文字文?	-	緑色	七面製陶所 (焼製)	-
509	調査区21	後編陶器	本埴	土瓶蓋	山瀬宝 形野形口 受有	1.7	6.4	3.2	08.0	27	ロタロ成形 編み胎付	白土胎付 白灰 灰胎	内:- 外:花弁文	イッチン 焼き 内 面無装飾	灰黄色 色	七面製陶所	-
510	調査区21	陶器	蓋後	土瓶蓋	山瀬 寶 形口受 有	-	5.6	2.4	7.5	40	ロタロ成形 編み胎付	不明(焼成 不良)	内:- 外:押文 洗 刷	内面無装 飾	褐色	七面製陶所 (焼製)	万古赤
511	調査区21	陶器	本埴	土瓶蓋	高上蓋 形口受有	-	2.8	1.2	08.0	16	ロタロ成形 左回転糸切 編み胎付	熟胎 熟胎 灰胎	内:- 内:不詳	無装飾 内面無装 飾	灰黄色 色	七面製陶所 (焼製)	-
512	調査区21	陶器	本埴	土瓶	丸形 蓋 受有	08.0	-	06.0	-	67	ロタロ成形 肩・口付胎 付	-	内:- 外:-	内面無装 飾	灰黄色 色	七面製陶所	注口孔?
513	調査区21	陶器	本埴	土瓶	丸形	-	08.0	7.0	-	73	ロタロ成形	-	内:- 外:洗刷文	肩下部無 装飾	灰黄色 色	七面製陶所 (焼製)	頸下部底付着
514	調査区21	陶器	本埴	土瓶	蓋受無 足有	6.4	-	4.1	-	35	ロタロ成形 肩胎付	信樂胎 白灰 石 灰胎 透明胎	内:- 外:不明	無装飾	灰黄色 色	七面製陶所 (焼製)	-
515	調査区21	陶器	本埴	急須	注口のみ	-	-	3.0	-	9	ロタロ成形 注口胎付	信樂胎 白灰 石 灰胎 透明胎	内:- 外:蓮華花文	無装飾	灰黄色 色	七面製陶所 (焼製)	注口孔?
516	調査区21	陶器	本埴	土瓶蓋	-	-	14.8	-	2.7	25	ロタロ成形	熟胎 白土 胎付 熟胎 白灰 灰胎	内:- 外:折殺文	無装飾 白土敷し 緑内無装 飾	灰黄色 色	七面製陶所 (焼製)	-
517	調査区21	不明	首接一 胎付	不明	山瀬 口 受有 横 み文様	-	2.3	0.6	13.0	126	ロタロ成形	熟胎 熟胎	内:- 外:不詳	無装飾	褐色	七面製陶所	-
518	調査区21	後編陶器	蓋後	行平	丸形 蓋 受有	16.0	-	7.5	-	73	ロタロ成形 型手・片口胎 付	熟胎 熟胎	内:- 外:飛び肌	飛び肌 受・側 下無装飾	灰黄色 色	七面製陶所	型手・片口欠 損
519	調査区21	陶器	本埴	鉢	五稜形	08.6	7.6	9.0	-	<510	ロタロ成形 削り高台	-	内:- 外:-	-	灰黄色 色	七面製陶所	右側縁に 見 込・裏付に 焼成痕各1 見込には焼 付(オキヨウ 付)の痕が 残存
520	調査区21	陶器	本埴	椀鉢	-	-	12.2	14.0	-	208	ロタロ成形 削り高台	-	内:- 外:-	縁目	赤褐色	七面製陶所	-
521	調査区21	陶器	本埴	椀鉢	椀鉢形 削り高台	14.0	06.0	10.4	16.0	<233	ロタロ成形 削り高台	細線刻 うのこ 土胎 灰 胎	内:- 外:-	細線刻 し 内 面無装 飾・底部 無装飾	灰黄色 色	七面製陶所	右側縁 外 面割部に 敷着
522	調査区21	陶器	蓋後	土瓶	蓋形	3.5	3.7	7.2	6.1	221	ロタロ成形 削り調整	-	内:- 外:-	-	乳白色	七面製陶所	-
523	調査区21	磁器	-	常連具 (ハツ)	右形 中 流片曲状 の部片	07.0	16.6	2.2	-	276	ロタロ成形	-	内:- 外:-	-	灰白色	七面製陶所	-
524	調査区21	磁器	-	常連具 (ハツ)	遊台形	4.2	5.3	3.1	2.5	77	ロタロ成形 右回転糸切 磨し	-	内:- 外:-	-	乳白色	七面製陶所	-
526	調査区21	陶器	-	常連具 (トナ シ)	T字形 断 面円形 下部部片	4.4	6.8	8.9	-	39	手捏ね	-	内:- 外:-	-	灰褐色	七面製陶所	下部内部に土 粉粘着
527	調査区21	陶器	-	常連具 (トナ シ)	T字形 断 面円形	3.3	3.3	7.6	-	68	手捏ね	-	内:- 外:-	-	灰褐色	七面製陶所	側面に数回圧 痕
528	調査区21	陶器	-	常連具 (三皮付 ハツ)	円板形 三皮付	5.2	4.6	1.4	-	24	型押成形 上面糸切 磨し	-	内:- 外:-	-	灰褐色	七面製陶所	上面径約6cmの 高台痕 足見 先端部破着
529	調査区21	陶器	-	常連具 (オコハ マ)	小字状 下面中央 内面曲状の 部片	29.6	28.1	5.6	-	1,782	型押成形 側 面有孔	-	内:- 外:-	-	褐色	七面製陶所	上面にオコハ 遺存
530	調査区21	土器	-	伊 部	四角 七 稜形 側 面有孔 (伊)	09.0	17.3	18.1	-	616	手捏ね 型押 り	-	内:- 外:-	-	乳白色	不明	内面・上面無 装飾
531	調査区21	土器	-	伊 部	方形 七 稜形 五 稜形 側 面有孔 (伊)	12.0	31.7	18.3	-	680	手捏ね 型押 り	-	内:- 外:-	-	乳白色	不明	側面縁金具 (鉄製)一部 内面・上面 無装飾
532	調査区21	土器	-	伊 部	方形 七 稜形 五 稜形 側 面有孔 (伊)	15.6	33.0	13.5	-	970	手捏ね 型押 り	-	内:- 外:-	-	乳白色	不明	側面縁金具 (鉄製)一部 内面・上面 無装飾

No.	出土位置	材質	構成/窯跡	形状特徴	法量 (cm)				重量 (g)	成形・調整	絵付/刷墨	装飾			胎土色	製作地	備考
					口径/長さ	底径/幅	高さ/厚さ	最大径/径				文様	装飾特徴				
533	調査区21	土器	-	伊 方形七福形	13.0	16.3	13.0	-	910	手捏ね 型作り	-	内口外-	-	-	乳白色	不明	朝日館金具(赤銅)一部内蔵 内面黒釉 朝日・雲母の切込あり(用途不明)
534	調査区21	土器	-	伊 方形七福形(横口付) 下面十字状の印み	23.6	25.0	7.7	-	2,300	手捏ね 型作り	-	内口外-	-	-	乳白色	不明	朝日館金具(赤銅)一部内蔵 朝日・雲母の切込あり
535	調査区21	不明	遺構?	瓶 ヲケリ	-	8.1	3.4	11.0	86	ロケリ成形 削り高台 底部丸 (5分)	-	内口外-	-	-	灰・乳白色	七面割陶所(陶製)	-
536	調査区21	陶器	-	急須	-	13.0	1.4	-	6	板作り 外面削り	-	内口外-	-	-	灰白色	小砂焼	万古赤
537	調査区21	磁器	-	薄手酒杯 腰瓶形	-	2.3	1.7	-	12	ロケリ成形 削り高台	染付 色絵(青) 向裏 透明釉	内口外-	内・文字文 外・高台輪飾し 江戸起付	白色	瀬戸・美濃	ガラス質	
538	調査区21	磁器	-	薄手酒杯 腰瓶形	-	2.6	2.0	-	5	ロケリ成形 削り高台	染付 色絵(青) 向裏 透明釉	内口外-	内・文字文 外・高台輪飾し 江戸起付	白色	瀬戸・美濃	ガラス質	
539	調査区21	磁器	-	瓶 丸形	-	13.3	3.3	-	36	ロケリ成形 削り高台	染付 色絵(青) 向裏 透明釉	内口外-	内・唐草文	黒緑色	白色	七面割陶所	-
540	調査区21	磁器	-	瓶 丸形	16.9	12.9	4.6	-	27	ロケリ成形 削り高台	染付 透明釉	内口外-	内・山水文	黒緑色	灰白色	七面割陶所	-
541	調査区21	磁器	-	瓶 瓶丸形	16.9	3.3	5.7	-	60	ロケリ成形 削り高台	染付 透明釉	内口外-	内・唐草文	黒緑色	白色	肥前赤	-
542	調査区21	磁器	-	瓶 瓶丸形	17.0	-	3.4	-	14	ロケリ成形 削り高台	染付 色絵(青) 向裏 透明釉	内口外-	内・内二重蓮 外・蓮文 武具	黒緑色	白色	七面割陶所	-
543	調査区21	磁器	-	鉢 変形	-	13.0	-	-	21	ロケリ成形 削り高台	染付 色絵(青) 向裏 透明釉	内口外-	内・四方輪 外・蓮文	黒緑色	白色	肥前赤	外面黒釉
545	調査区21	土器	-	置きカマド 胴部窓口形	41.3	37.8	13.4	-	2,050	ロケリ成形 土穿	-	内口外-	内口縁部窓文型	型押文様	灰白色	不明	朝日館別印「新龍 立才 ぶし 藤 物 許」白線一色 外面黒釉(底付着 五瓦)

第6表 C・D地点出土遺物観察表(土製品・型・窯体・煉瓦・石製品・金属製品・瓦)

( ) は復元値。&lt; &gt; は残存値。

No.	出土位置	材質	構成/窯跡	形状特徴	法量 (cm)			重量 (g)	備考	
					長さ	幅	厚さ			
205	調査区16	土製品	遺構	型 菊花型 板状	7.9	9.7	1.6	130	手捏ね 型押 菊花型 (19) 胎土色: 乳白色 製作地: 七面割陶所	
409	調査区20	不明	遺構	動物像 鳥	12.0	12.3	1.7	3	手捏ね 製品の一部分 胎土色: 乳白色 製作地: 七面割陶所	
414	調査区20	土器	遺構	型 不整形	8.3	5.5	0.9	44	手捏ね へら削り 胎土色: 乳白色 製作地: 七面割陶所	
415	調査区20	土器	遺構	型 行平絶手型	7.4	3.8	2.6	32	型押 へら削り 胎土色: 乳白色 製作地: 七面割陶所	
416	調査区20	土器	遺構	型 菊花型 板状	15.0	16.0	10.4	25	手捏ね 型押 菊花型 (16) 胎土色: 乳白色 製作地: 七面割陶所	
417	調査区20	土器	遺構	型 五弁花型 板状	14.0	14.2	1.4	20	手捏ね 型押 胎土色: 乳白色 製作地: 七面割陶所	
418	調査区20	土器	遺構	型 典型不整形	4.4	12.1	1.4	12	手捏ね 型押 胎土色: 乳白色 製作地: 七面割陶所	
478	調査区20	粘土	-	窯体 (窯壁材)	-	26.0	16.2	1,300	粘土塊の上面に厚さ約6mmの板状粘土を貼付 上面が熱しい(窯内面?) 胎土色: 褐色	
479	調査区20	粘土	-	窯体 (窯壁材)	-	13.4	11.5	1,230	型作り 前面(上面)が熱しい(窯内面?) 胎土色: 褐色	
480	調査区20	粘土	-	窯体 (窯壁材 (式遺跡))	-	17.1	19.4	1,120	粘土塊の外周を厚さ約10mmの板状粘土で包む 胎土色: 褐色	
497	調査区20	土製品	-	鏝 埴	-	14.3	10.9	9	手捏ね 結合 色絵(緑・白) 白底 高台形輪 胎土色: 褐色 製作地: 不明(江戸近郊?)	
498	調査区20	金属製品 (銅)	-	銭貨	-	外径 2.35	穿孔 0.7	1.1	3	寛永通宝 (古寛永) 初鋳年代: 寛永13年 (1636)
499	調査区20	金属製品 (銅)	-	銭貨	-	外径 2.45	穿孔 0.26	1.1	3	寛永通宝 (新寛永) 初鋳年代: 元禄10年 (1697)
500	調査区20	金属製品 (銅)	-	銭貨	-	外径 2.28	穿孔 0.65	1.9	3	寛永通宝 (新寛永) 初鋳年代: 元禄10年 (1697)
501	調査区20	粘土	-	耐火煉瓦	-	11.4	11.6	6.5	450	型作り 上面に刷印(捺印)「丁」-「11」? 「丁」-「2」 胎土色: 乳白色 製作地: 不明
524	調査区21	石製品	-	磨石製品 (軸受)	台形 中央有孔 (上面径約12mm, 下面径約7mm)	11.0	2.6	4.2	465	砂削 台形 中央有孔(上面径約12mm, 下面径約7mm) 風化著しい
544	調査区21	土製品	-	人形	-	4.7	16.1	1.4	32	中形 型押 (前後型合せ) 白粉 胎土色: 褐色色 製作地: 真砂焼?
546	調査区21	瓦	-	軒瓦瓦	-	15.7	12.1	1.8	164	瓦当厚: 3.8mm 瓦当文様: 均整唐文 瓦当部に黒母付着(遺跡材?) 胎土色: 灰褐色 近代瓦
547	調査区21	瓦	-	平瓦	-	14.9	13.8	2.0	471	凸面に黒線文 3辺打 面戸瓦転用 胎土色: 灰褐色 近代瓦

## おわりに

本書は七面製陶所跡第1次～第3次調査成果のうち、検出した遺構及び主な出土遺物の様相の成果、すなわち事実記載部分についての成果を纏めたものである。遺跡理解の根幹ともいべき遺構・遺物編をここに刊行したことにより、七面製陶所及び七面焼の意義を窺うための根拠資料は概ね出揃った。これからは本書の情報をもとに、読者の方々が様々な切り口により分析を行い、遺跡の評価を検証していく段階となる。もとより、調査主体である本市でも、今後、幾つかの論点を設定し調査成果を総括していく予定である。

そこでここでは、本書で報告してきた調査の経過や遺構・遺物の様相について、調査主体者の視点（問題意識）が奈辺にあったのかを意識しながら、改めて振り返るとともに、現段階で想定される論点を提示し、今後の作業につなげることにしたい。

\*

戸田市が初めて七面製陶所に発掘調査のメスを入れたのは、今から12年前の平成17年である。発掘調査は平成19年度まで断続的に行われ、その成果はメディアを通じ大きく報道されるとともに、主な出土遺物は国・県・市・民間が主催する数多くの展示会等で公開された。折からスタートした、七面焼の復興に向けた民間有志による情熱的な取組も相まって「七面製陶所」「七面焼」の名は市内外に広まり、いま、その存在及び名称は一定の認知を得ていると言って良いだろう。

一方、発掘調査で出土した遺物は、質・量ともに当初の想定を超えるボリュームであった。特に、A～D地点で出土した遺物群に認められる偏差は、七面製陶所の性格及び展開はもとより、七面焼の特性を示す重要な示標になり得ることが予測された。

そのため、私たちは現場で次々と検出されていく膨大な遺物を前にして、七面製陶所・七面焼の特質や歴史的意義を確実に次の世代に伝えるため、いかにして一点一点を歴史資料として活かし、地域の歴史を語る物証として昇華させていくかという、重大かつ魅力的な課題に直面することになったのである。

\* \*

そこで私たちはまず、出土遺物の中から、七面製陶所の土地利用の変遷や七面焼の特性をよく示す資料を抽出することとした。第IV章において図示・報告した547点の遺物は、こうした問題意識のもとに抽出した資料群である。

これらの遺物は、一点一点が遺跡の特色を示す重要な物証であると認識しているが、特に物原層を広範囲に掘削した調査区1と調査区16・20出土の遺物は、他調査区を凌駕する出土量であり、遺跡評価の中軸となる遺物群として位置づけられる。

出土遺物は磁器・陶器・焼締陶器等の本焼製品と素焼製品、焼台・トチン・ハマ・サヤ鉢等の窯道具、さらには窯体・窯間連資料等、実に多種多様である。そしてこれらの遺物の器種粗製や胎土は、調査区ごとに様相が異なっていることが、調査段階で明らかとなってきた。

第IV章においては、この偏差を「精製七面焼」「粗製七面焼」と仮称し、それぞれの特色を述べた。詳細は個々の遺物説明を参照いただきたいが、精製七面焼が白色～乳白色の素地で、水脈を重ねて不純物を極力取り払った綺麗な胎土であるのに対し、後者は橙色がかかった素地で、胎土も

精製七面焼に比べて混入物が多く、特に長石が混入する資料が多い。本焼後は精製七面焼が明るめの灰色を呈し、灰釉又は透明釉掛けが多く、焼締陶器質であるのに対し、粗製七面焼はやや暗めの灰色を呈し、釉薬は葦灰釉・透明釉・青磁釉・鉄釉等多様で、陶器質であるという違いが認められる。

こうした偏差について、現場段階では精製七面焼が近世(官窯)の所産で、粗製七面焼が近代(民窯)の所産ではないかという推測を立て、現地説明会やその後の幾つかの学会発表等において同様の見解を披瀝した。しかし、整理が進むにつれ、明らかに近世とみられる製品にも粗製七面焼の特質が認められ、且つ同一層位で両者が混在していることから、この偏差の原因を単なる時期差に求めることはできないことが判明した。

問題は、この注視すべき事実の意味するところを正確に把握するためには、検出された遺構について、できる限り正確且つ積極的に把握し、整理していく作業が必要であったが、これについては所与の事情により予想外の時間を費やすこととなってしまった。

遺構の検討においては、物原の分布範囲がやや広範囲に過ぎていたことから、整理作業ではこれを5つの単位に分け、それぞれ遺構番号を付して(第1・6・7・8・9号遺構)、各出土遺物の偏差を明確化する方法を試みた。

さらに、C・D地点においては、調査担当者が相応の本数のセクションラインを設定し、土層堆積図として記録していた。縦横に走るセクションラインは一見すると複雑であるが、一連の土層堆積図は、窯跡はもとより遺跡の土地利用の変遷を窺う重要な物証となり得るものと思われたことから、これを5つの盛土層(盛土層①～④・近代盛土層)に分類・整理して、遺跡の来歴を明確化する方法を試みた。こうした目的意識のもと、18の調査区において検出した遺構や土層を記述したのが第III章である。第IV章もまた、器種ごとではなく調査区ごとに出土遺物を記述し、第III章と照合しやすいよう配慮した。

以上のような分析の結果、前述した精製七面焼・粗製七面焼の偏差が時期差とともに、窯の性格の違い(使い分け)に概ねの原因が求められることが分かってきた。一方、5基の物原及び2基の窯(砂床)それぞれの詳細な性格を考究するには、調査区や遺構ごとの遺物計数表(いわゆるカウント表)を掲載し、遺物の総体的把握する必要があるが、カウント表は総括編に掲載する予定のため、精製七面焼・粗製七面焼と窯の来歴との連関についても、総括編で詳述していくこととする。

\* \* \*

こうした遺構・遺物の調査・整理の各段階で、多くの新知見が得られた一方、浮かび上がった課題も少なくない。そこで課題解決に向けていくつかの論点を提示しておきたい。

はじめに、七面製陶所跡の土地利用の変遷についての問題である。一体に発掘調査において、土地利用の変遷を提示していくことは調査主体者の基礎的責務であることは論を待たない。本遺跡の場合、斜面上に立地していることから、窯開設以前の土地利用は相対的に薄く、主な土地利用は七面製陶所を開設した幕末期以降になることが予想されるが、特に近代以降の土地利用は注視すべきポイントと思われる。幕末期には借楽園の領域の一隅に過ぎなかった本遺跡周辺は、近代以後、常盤神社の創設及び鉄道の開通により借楽園のメインアクセス口となり、遊興地として一躍脚光を浴びるようになった。これは独り七面製陶所のみならず、教育施設の一

環として斉昭が創設した借楽園が、近代以降遊興地化し、いわゆる日本三名園として全国化していく過程と密接に結びついている。こうした転換点を示す遺物は相当数出土しており、本遺跡の土地利用の変遷は、水戸市城の近世～近代への変貌を物語るモデル事例になり得るだろう。

次に、七面焼の性格についての問題である。この点は前述したとおりであるが、精製七面焼と粗製七面焼の偏差が奈辺にあるかを遡求していく過程で明らかになる。加えて、銘款が押されるもの・押されないものの別を考察することも重要なポイントである。

次に、絵画資料・写真資料の評価についてである。七面製陶所の来歴を窺う上で、考古資料のみならず絵画資料や写真資料が有力な物証となってきたことは周知のとおりであるが、こうした物証となる資料の評価、すなわち資料批判を適切に行ったうえで参照した例は管見の限り見当たらない。特に挿図写真で示した『大日本全国名所一覽』については、七面製陶所の存在を証する無二の写真資料であり、撮影年を含め、今少し踏み込んだ分析が必要となろう。

次に、伝世品の評価についてである。モース・コレクションや本書の表紙に使用した花生をはじめ、七面焼にはいくつか伝世品が存在する。その多くは「借楽園」又は「借楽」の銘款が押されたものであるが、実は今般の調査で出土した窯資料とは質が異なる資料が一定量認められるのである。すなわち、伝世品で七面焼とされるものの全てが、七面製陶所で焼成された製品なのかどうかについて、今少し慎重な分析が必要であると考えている。

次に、他の水戸藩の窯との関連についての問題である。水戸藩にはいわゆる松岡焼系の焼物や、町田焼・小砂焼等があり、その延長線上に七面製陶所が開設された。すなわち斉昭が構想した陶磁器生産は、七面製陶所のみで成り立つものではなく、藩領全域の陶磁器生産を志向している。今般の調査成果は、こうした斉昭の陶磁器生産構想はもとより、殖産興業政策にアプローチする格好の素材となるため、当然に藩領の窯製品全体との比較検討のうえで、その変遷を叙述していく必要があるものと考えている。

次に、消費地遺跡における七面焼の位置づけについての問題である。これは、七面製陶所開設が殖産興業に目的がある以上、果たしてどの程度「稼げる製品」を広範囲に流通させ、藩財政を活性化させたのかを検証する作業に他ならない。管見の限り、水戸城下町では相当数の七面焼が流通しており、さらには領内村落や江戸遺跡でも出土例がみられるが、具体的な流通範囲は明らかではない。藩内外の消費地遺跡における七面焼の出土例を集成し、斉昭が志向した殖産興業の実態を把握することは、七面製陶所の歴史的意義に関わる重要な検証と考えられる。

\* \* \* \*

幕末は各地で殖産興業のための陶器生産が活性化するが、七面製陶所ほど藩主自らが主体的に関わった例は珍しい。自身が考案した紫錦梅と呼ばれる漬物について認めた書状中には「神崎などに極小けき壺出来、そこへ入れ候ともいたし然るべく候」という記述がある（小坪のり子氏の御教示による）。藩独自ブランドである紫錦梅と七面焼とのセット販売といった、逞しい戦略が志向されていたことが窺えるが、出土した七面焼は、どことなく自己主張は控えめで、そしてどこまでも上品な製品であった。さぞや紫錦梅が映えたとはいえない。

斉昭が愛した七面焼 ——七面製陶所が開設されてから約180年の星霜を経て、本書に掲載した遺構・遺物が、七面焼の魅力を解明する一助となれば幸いである。

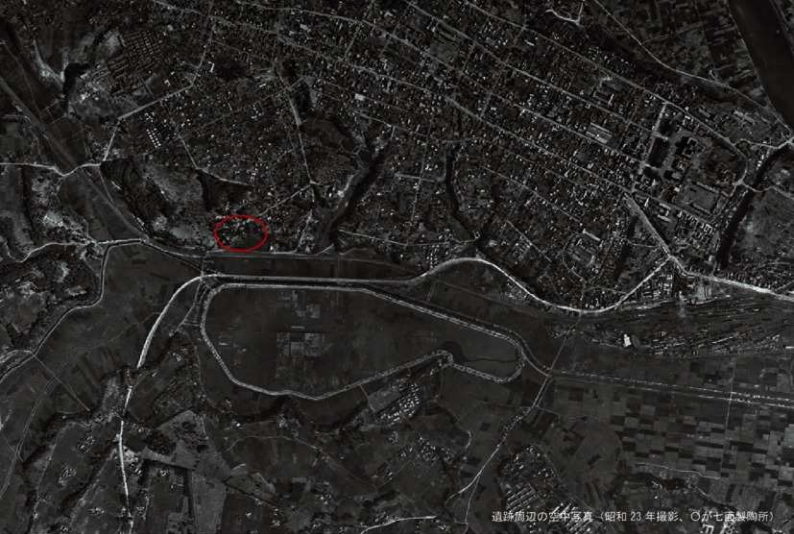
(関口)

## 引用・参考文献一覧

- 井 博幸・小宮山達雄 1999「内原町周辺の主要古墳と出土遺物」『牛伏4号墳の調査』国土館大学・牛伏4号墳調査団
- 石黒敬章 2001「バルボラーニ・アルバム探検記」『大日本全国名所一覧』平凡社
- 伊藤瓢堂 2003「斉昭公の『陶の道』についての試論」『水戸史学』第59号 水戸史学会
- 伊藤瓢堂 2006「幕末における水戸藩の窯業から」『水戸史学』第65号 水戸史学会
- 茨城県陶芸美術館 2010『The Kasama—ルーツと展開—』
- 茨城県立歴史館 1997『笠間焼 200年のあゆみ』
- 大川 清 1985『小砂焼』日本窯業史研究所
- 大西林五郎・藤井理白編 1920「十三 関東の諸窯(イ) 水戸後楽園焼」『陶器全書』続編(日本陶工傳) 松山堂書店
- 大森信英 1952「渡里村大字渡里字アラヤ遺蹟予備調査に於ける報告」『茨城高等学校史学部紀要』第1号 茨城高等学校史学部
- 川口武彦・関口慶久 2006「水戸城下における近世生産遺跡の調査と課題—七面製陶所跡の調査を中心—」『江戸遺跡研究会会報』No.166 江戸遺跡研究会
- 川口武彦・関口慶久 2007「七面製陶所跡」『発掘された日本列島2007 新発見考古速報』朝日新聞社
- 川口武彦・関口慶久ほか 2006「水戸市常磐町所在『七面製陶所跡』の調査と課題」『第72回総会・研究発表要旨』日本考古学協会
- 瓦吹 堅 1986「北茨城市の陶器窯跡と窯道具について」『北茨城史壇』第6号 北茨城市史編さん委員会
- 瓦吹 堅 1991「松岡焼と名古屋焼」『いわき地方史研究』第28号 いわき地方史研究会
- 瓦吹 堅 1992「北茨城市大塚窯跡出土の近世陶器」『いわき地方史研究』第29号 いわき地方史研究会
- 瓦吹 堅 1993「北茨城市木皿窯跡出土の近世陶器」『いわき地方史研究』第30号 いわき地方史研究会
- 瓦吹 堅 1994「北茨城市石岡窯跡出土の近世陶器」『いわき地方史研究』第31号 いわき地方史研究会
- 瓦吹 堅 1995a「北茨城市内の近世窯跡—木皿窯跡—について」『王朝の考古学』(大川清博士古稀記念論文集) 雄山閣
- 瓦吹 堅 1995b「松岡焼について」『松岡城B地点遺跡発掘調査報告書』松岡城発掘調査会
- 瓦吹 堅 1997「日棚窯跡の灯火器」『いわき地方史研究』第34号 いわき地方史研究会
- 瓦吹 堅 2003「窯はどこにあったの」『國學院大學考古学資料館紀要』第19号 國學院大學考古学資料館
- 瓦吹 堅 2006「北茨城市大塚角内窯跡」『いわき地方史研究』第43号 いわき地方史研究会
- 瓦吹 堅 2007「大塚・日棚・木皿とも二焼立—大塚角内近世陶器窯覚書—」『菟玖波』川井・齋藤・佐藤先生還暦記念事業実行委員会
- 瓦吹 堅 2010「松岡焼と窯跡」『松岡城跡C地点』高萩市教育委員会
- 瓦吹 堅 2013「福田窯跡の製品と窯道具」『いわき地方史研究』第50号 いわき地方史研究会
- 瓦吹 堅 2014「松岡焼と窯跡」『江戸遺跡研究の視点と展開』江戸遺跡研究会



- 瓦吹 堅 2015 「日立市向井町窯跡採集資料」『いわき地方史研究』第 52 号 いわき地方史研究会
- 鬼頭明子 2006 「SPOT 七面製陶所跡の発掘」『常陽藝文』第 278 号 財団法人常陽藝文センター
- 木戸田四郎 1976 「第三節 諸産業の動態と新政策 陶器」『水戸市史』中巻(三) 水戸市役所
- 近藤京嗣 1988 「茨城のやきもの(16)」『陶説』427 日本陶磁協会
- 佐々木憲一・鶴見諒平ほか 2011 「茨城県水戸市西原古墳群測量調査報告」『考古学集刊』第 7 号
- 住谷光一 2004 『水戸藩町焼窯跡発掘調査記』(私家版)
- 田原康司 2005a 「空間系陶器の時期設定」『茨城県考古学協会』第 17 号 茨城県考古学協会
- 田原康司 2005b 「空間系陶器の時期設定」『第 27 回研究発表会資料』茨城県考古学協会
- 田原康司 2007 「空間系陶器の時期設定Ⅱ」『考古学の深層—瓦吹堅先生選層記念論文集—』瓦吹堅先生選層記念論文集刊行会
- 陶器全集刊行会編 1940 『日本古陶銘款集』(近畿編) 平安堂書店
- ディルッソ, マリサ・石黒敬章(監修) 2001 『大日本全国名所一覽—イタリア公使秘蔵の明治写真帖—』平凡社
- 豊島区遺跡調査会 1998 『陶磁器・土器 分類・計測基準』(豊島区教育委員会『伝中・上富士前Ⅱ』別冊) 日本窯業史研究所 2004 『町田焼窯跡』
- 飯能市郷土館 2001 『<特別展>黎明のとき—飯能焼・原焼からの発信—』
- 吹野富美夫 2005a 「記年銘を有する笠間焼」『婆良岐考古』第 28 号 婆良岐考古同人会
- 吹野富美夫 2005b 「文久三年」銘が墨書された笠間焼黒釉壺」『歴史智の構想—歴史哲学者鯨岡勝成先生追悼論文集—』第 28 号 鯨岡勝成先生追悼論文集刊行会
- 松崎睦生 1978 「VI. 鉄幹 十二・一月 斉昭, 陶器の窯を築く」『借楽園歳時記』暁印書館
- 水戸市アラヤ遺跡発掘調査会 1992 『水戸市アラヤ遺跡—北部地区老人福祉センター・デイサービスセンター建設に伴う文化財の調査報告書—』
- 水戸市大鋸町遺跡発掘調査会 1988 『水戸市大鋸町遺跡—(仮称) 元吉田第三住宅団地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』
- 水戸市教育委員会 2005 『大鋸町遺跡—グランディヒルズ元吉田造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』(水戸市埋蔵文化財調査報告第 3 集)
- 水戸市教育委員会 2008 『渡里町遺跡(第 6 地点)—市道常磐 34, 205 号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』(水戸市埋蔵文化財発掘調査報告第 17 集)
- 水戸市教育委員会 2011a 『台湾里 3—平成 19～21 年度長者山地区範囲確認調査概報—』(水戸市埋蔵文化財調査報告第 37 集)
- 水戸市教育委員会 2011b 『平成 20 年度水戸市内遺跡発掘調査報告書』(水戸市埋蔵文化財調査報告第 43 集)
- 水戸市教育委員会 2013 『吉田神社遺跡(第 1 地点)—大型物販店舗建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告書—』(水戸市埋蔵文化財調査報告書 59 集)
- 水戸市立博物館 1984 『特別展—郷土の伝統産業—水戸藩のやきもの』(昭和 59 年度特別展示図録)
- 窯業史博物館 1998 『水戸の烈公と小砂焼』
- Morse, E.S., Catalogue of the Morse Collection of Japanese Pottery (Charles E. Tuttle Company Rutland, Vermont & Tokyo Japan, 1901)



遺跡周辺の空中写真（昭和23年撮影、○が七面製陶所）

## 写真図版



遺跡周辺の空中写真（平成26年撮影、○が七面製陶所）



1. 遺跡遠景 千波湖対岸（南）から（○内が七面製陶所跡）



2. 遺跡近景 南東から

写真図版 1 遺跡の現況



1. 調査区1北区 検出状況 北から



3. 第1号遺構（調査区1北区部分）検出状況 南から



2. 調査区1南区 検出状況 南から

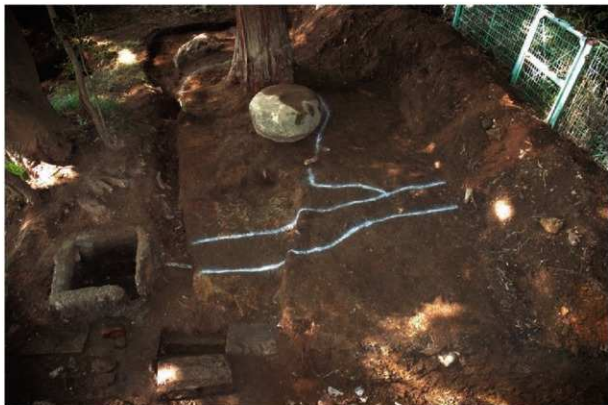


4. 調査区1西側拡張区（東半分）検出状況 西から



5. 第1号遺構（調査区1南区部分）検出状況 南から

写真図版2 調査区及び遺構写真(1)



1. 第2号遺構（調査区1西側拡張区西半分） 検出状況 東から



2. 第3号遺構 サブトレ検出状況 東から



3. 第4号遺構 検出状況 南から



4. 調査区2 検出状況 西から

写真図版3 調査区及び遺構写真(2)



1. 第5号遺構 岩礎検出状況 北から



2. 第6号遺構 検出状況 東から



3. 調査区5 検出状況 南西から



4. 調査区6 検出状況 東から



5. 調査区7 検出状況 西から



6. 第7号遺構 検出状況 南東から



7. 調査区8 検出状況 東から

写真図版4 調査区及び遺構写真(3)



1. 調査区 9 検出状況 東から



3. 調査区 11 検出状況 東から



5. 調査区 13 サブソレンチ  
完掘状況 東から



2. 調査区 9 検出状況 西から



4. 調査区 12 掘削状況 東から



7. 第 8 号遺構 検出状況 東から



6. 調査区 13 検出状況 南東から



8. 第 8 号遺構 調査風景 南から

写真図版 5 調査区及び遺構写真(4)



1. 調査区 14  
検出状況 西から



2. 調査区 14  
検出状況 東から



6. 調査区 16 検出状況 東から



3. 調査区 2 調査風景 西から



4. 調査区 13 調査風景 南東から



5. 第 1 次調査現地説明会風景



7. 調査区 16 検出状況 南から

写真図版 6 調査区及び遺構写真(5)





1. 調査区 16 検出状況 西から



2. 調査区 20 掘削前状況 南から



3. 調査区 20 全景 南西から



4. 調査区 20 掘削風景 南西から



5. 調査区 20 調査風景 南から

写真図版 7 調査区及び遺構写真(6)



1. 調査区 20 全景 南から



3. 調査区 20 東西トレンチ 検出状況 西から



3. 調査区 20 南北トレンチ 検出状況 南から



4. 調査区 20 東西トレンチ深掘り部分 南から



5. 調査区 20 南北トレンチ土層堆積状況 北東から

写真図版 8 調査区及び遺構写真(7)



1. 調査区 20 東西トレンチ土層堆積状況 南から



2. 調査区 20 南北トレンチ検出状況 南から

写真図版 9 調査区及び遺構写真(8)



1. 第9号遺構 南西から



2. 第9号遺構 遺物検出状況 西から

写真図版 10 調査区及び遺構写真(9)



1. 調査区 21 全景 西から



2. 調査区 21 東西トレンチ  
検出状況 西から



3. 調査区 21 南北トレンチ (手  
前)・土層堆 積確認トレン  
チ (奥) 南から



4. 調査区 21 南北トレンチ  
検出状況 北から



5. 調査区 21 掘削前状況 南から



6. 調査区 21 南北トレンチ内近代礎石検出状況  
南西から

写真図版 11 調査区及び遺構写真 (10)



1. 調査区21 A-A'ライン南側 土層堆積状況 東から



2. 調査区21 B-B'ライン土層堆積状況 西から



3. 調査区21 B-B'ライン西側 土層堆積状況 南から



4. 調査区21 土層堆積確認トレンチ 検出状況 北から



4. 調査区21 A-A'ライン北側・A'-A''ライン 土層堆積状況 南東から



6. 第3次調査 現地説明会風景1



7. 第3次調査 現地説明会風景2

写真図版 12 調査区及び遺構写真 (11)



写真図版 13 調査区 1 出土遺物写真 (1)



写真図版 14 調査区 1 出土遺物写真 (2)





写真図版 15 調査区 1 出土遺物写真 (3)



写真図版 16 調査区 1 出土遺物写真 (4)



写真図版 17 調査区 1 出土遺物写真 (5)



45



46



47



48



49



50



51



52



53



54

写真図版 18 調査区 1 出土遺物写真 (6)



55



56



57



58



59



60

写真図版19 調査区1出土遺物写真(7)



61



62



63



64



65

写真図版 20 調査区 1 出土遺物写真 (8)



66



67



68

写真図版 21 調査区 1 出土遺物写真 (9)



69



70



71



写真図版 22 調査区 1 出土遺物写真 (10)





72



73



74

写真図版 23 調査区 1 出土遺物写真 (11)



写真図版 24 調査区 1 出土遺物写真 (12)



106



107



108



109



110



111



112



113



114

写真図版 25 調査区 1 出土遺物写真 (13)



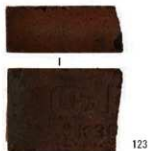
調査区 2



写真図版 26 調査区 2・4 出土遺物写真



調査区 6



写真図版 27 調査区 6・9 出土遺物写真



写真図版 28 調査区 13 出土遺物写真 (1)



137



138



139



140



141



142



143



144



145



146



147

写真図版 29 調査区 13 出土遺物写真 (2)



調査区 14



写真図版 30 調査区 14・15 出土遺物写真





写真図版 31 調査区 16 出土遺物写真 (1)



写真図版 32 調査区 16 出土遺物写真 (2)



写真図版 33 調査区 16 出土遺物写真 (3)



写真図版 34 調査区 16 出土遺物写真 (4)



写真図版 35 調査区 16 出土遺物写真 (5)



写真図版 36 調査区 20 出土遺物写真 (1)



写真図版 37 調査区 20 出土遺物写真 (2)



写真図版 38 調査区 20 出土遺物写真 (3)





写真図版 39 調査区 20 出土遺物写真 (4)



写真図版 40 調査区 20 出土遺物写真 (5)



写真図版 41 調査区 20 出土遺物写真 (6)



写真図版 42 調査区 20 出土遺物写真 (7)



写真図版 43 調査区 20 出土遺物写真 (8)



写真図版 44 調査区 20 出土遺物写真 (9)



写真図版 45 調査区 20 出土遺物写真 (10)



写真図版 46 調査区 20 出土遺物写真 (11)





写真図版 47 調査区 20 出土遺物写真 (12)



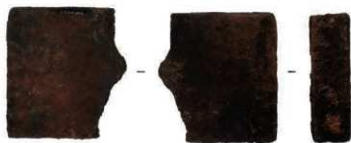
写真図版 48 調査区 20 出土遺物写真 (13)



写真図版 49 調査区 20 出土遺物写真 (14)



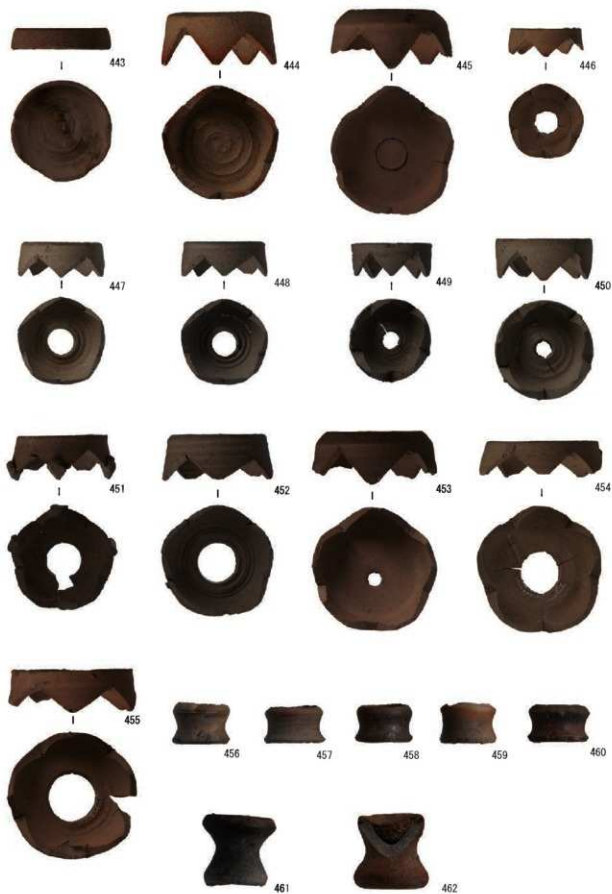
440



441



442



写真図版 51 調査区 20 出土遺物写真 (16)



写真図版 52 調査区 20 出土遺物写真 (17)



481



482



↓



483

↓



写真図版 53 調査区 20 出土遺物写真 (18)



写真図版 54 調査区 20 出土遺物写真 (19)





写真図版 55 調査区 21 出土遺物写真 (1)



写真図版 56 調査区 21 出土遺物写真 (2)



写真図版 57 調査区 21 出土遺物写真 (3)



写真図版 58 調査区 22 出土遺物写真 (4)



写真図版 59 調査区 21 出土遺物写真 (5)

## 報告書抄録

ふりがな	しちめんせいとうじょあと いこう・いぶつへん							
書名	七面製陶所跡 遺構・遺物編							
ふりがな	だいいちへさんじはつくつちょうさほうこくしょ							
副書名	第1～3次発掘調査報告書							
シリーズ名	水戸市埋蔵文化財調査報告 第100集							
編集者名	関口慶久（統括）・瀧美賢吾・米川暢敬							
著者名	関口慶久・瀧美賢吾・川口武彦・米川暢敬							
編集・発行機関	水戸市教育委員会							
所在地	〒310-0805 茨城県水戸市笠原町978-5 (担当部署) 水戸市教育委員会事務局 教育部 歴史文化財課 埋蔵文化財センター 〒311-1114 茨城県水戸市塩崎町1064-1 電話・FAX：029-269-5090							
発行年月日	2017（平成29）年9月29日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
七面製陶所跡	茨城県水戸市 常磐町1丁目 6015-4・5	08201	287	30° 22′ 26″	140° 27′ 21″	第1次調査 2005.10.03 ～ 2005.11.10	90㎡	所在及び 範囲確認
						第2次調査 2007.02.05 ～ 2007.02.16	9㎡	
						第3次調査 2007.07.09 ～ 2007.08.20	71.5㎡	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
七面製陶所跡	窯跡	近世   近～現代	窯跡（砂床） 2基  物原 4基  石組水路 2基	磁器、陶器、 焼締陶器、 土器・土製品、素 焼製品、 窯道具、窯体、 窯関連資料、瓦、 金属製品、 銭貨、石製品	本遺跡は、水戸藩第9代藩主徳川斉昭が殖産興業を目的として生産した「七面焼」と呼ばれる焼物の製陶所である。 調査の結果、砂床・物原等の窯関連遺構が初めて検出され、窯跡の存在が考古学的に確認された。さらに、物原から磁器・陶器・焼締陶器等の未成品や、窯道具等、七面焼の実態に迫る大量の遺物が出土した。			

※ 北緯・東経は測地系2000（世界測地系）対応



表紙・裏表紙写真：陶胎染付窯場図花生  
(茨城県立歴史館所蔵)

解説：陶器製の花生（伝世品）。胴部下方に七面製陶所製を示す「瓢箪に借楽園」の銘款が押される。器面全面に描かれた窯場（七面製陶所）の図が特色で、七面製陶所を描いた稀少な絵画資料の一つである。

水戸市埋蔵文化財調査報告第100集

## 七面製陶所跡 遺構・遺物編

### —第1～3次発掘調査報告書—

印刷・発行 2017（平成29）年9月29日

編集・発行 水戸市教育委員会

〒310-0805 茨城県水戸市笠原町978-5

(担当部署)

水戸市教育委員会事務局 教育部 歴史文化財課 埋蔵文化財センター

〒311-1114 茨城県水戸市塩崎町1064-1

印刷 株式会社光和印刷

〒310-0836 茨城県水戸市元吉田町1823-22



2017年9月

水戸市教育委員会